

奇譚クラブ

1956年 4月号

新連載「赤い花は泣いている」松井 鎖子



復刊第三号

4月号

昭和三十一年三月三十日印刷
昭和三十一年四月一日発行
(第十卷 通刊第八十三号)

奇譚クラブ

昭和三十一年四月号

4

昭和三十一年三月三十日印刷
昭和三十一年四月一日発行

四月号(第十卷第一号)
(毎月一回一日発行)

定価二百円

(送料十六円)

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

マニアの方は必ず一本をコレクション下さい。縛られた女十六態
定価 一部 五百円 (送料五十円)
美術コロタイプ印刷 各葉解説入
(二度と見られない断然凄惨写真集)
全部未発表特写の女体緊縛写真

内容
景づくわ 紅と口 蠟燭 貴
雁字欄干 観 念 芋 虫
犠牲台 床の置物 鞭 打
目の綾 滑車吊 高小手
組 ぐさり エビ 貴

美しき縛しめ

九人の緊縛モデルを駆使して完成した緊縛フォトの圧巻、未発表の秘作集
代表的な縛りポーズ三十二態
(詳細な説明は切手二十円送付で)

32態
◆責め写真とはいいますが、印刷紙に焼付けたものは高くて困ると、おっしゃる方は、お求め下さい。
◆三十三枚の変わったポーズがぎっしりと並んできつと皆さまの胸をわくわくさせることでしょう。全く素晴らしいです。
美術コロタイプ印刷、アルバム装釘
定価 一部 五百円 (送料三十円)

晴雨「美人乱舞」

伊藤晴雨先生著並画菊版和装
美本 定価 四〇〇円 二四

図版目次

△人体時計△天国の女△美人燈
△島田雷のこわれる迄△丸雷のこわれる迄△美女のなやみ△崩れたる女△鉄砲責にされる女△火葬場異聞△群々に抱かれた美女△死神につかれた女△特別附録、娘風俗年中行事十二月、外特別附録として先人未発表の貴重な春画文庫五章十九項に亘って詳説す。晴雨ファンに薦む。

貴重な文献としてその真価を極めて高く評価される文庫誌

奇譚クラブのバックナンバー

今後この種文庫は、この値段では絶対に入手不可能です。発行部数が比較的多かった為、極めて安価な値段でお願い出来るわけです。未入手の方々はどうぞこの際品切にならぬうちに早くお申込み下さい。
奇譚クラブ 旧号の在庫手持は、極めて僅少です。昭和二十八年以前分につきましては八円切手封入の上、お申込下さい。在庫品の目次一覧をお送り致します。昭和二十九年、昭和三十年分は各月若干在庫しています。から御送金次第急送致します。

時代物責絵巻

一、山法師と静御前 二、女スリと岡引 三、淀君と千姫 四、大公方と侍女 五、八百屋お七の最後 六、新撰組と芸妓 七、十郎左エ門と腰元 八、小紫と悪旗本
御申込みは迅速と確実を誇る天星社代理部へ
御申込次第早速厳重荷造の上急送申上げます
○代金引替は送料が高くなりますので、必ず前金でお願いします
大阪市阿倍野区八五
晴明通一
天星社代理部

アリスの人生学校

一冊 百円 (送料共)
美少女に対する折檻と凌辱の世界を描く堂々五百枚に垂んとする傑作、口絵、挿絵カソト多数挿入
奇譚クラブ臨時増刊号

読者原稿募集 (皆さまの共同広場建設のために)

【研究発表】

アブノーマルに関する研究や発案、小論文等、平易にして本誌の読者に興味を持たせようもの、十枚迄、採用分には本誌三分分を贈呈いたします。

【創作】

異色ある題材を現れて立つ野心ある新人の出現を期待します。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限る。採用分には十枚後相当地料を支払います。

【体験告白手記】

皆さまの傍らで真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度掲載分には一稿につき千円乃至三千円の賞金を呈します。誰でも人権は平等に書くべきものです。生々しい体験や告白を是非お寄せ下さい。

【ボケツト告白】

文体や用紙などは一切問いません。十枚以内の短い告白物を気軽に書き下さい。採用分には本誌三分分を贈呈いたします。

【映画、雑誌通信】

映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項について通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二分分乃至三分分贈呈いたします。

【口絵並に挿絵】

画材はサド、マンは随分御自由です。優秀なる作者には随分的に御依頼いたします。

【編集者或は執筆者への公開状】

編集者執筆者或はモデル嬢等に対しての読者の皆様からの公開状を募ります。適当なものには本誌上に掲載の上、回答を求めるといたします。本誌三分分贈呈。

(開放した版面を御利用下さい)

【私のイメージ】

熱烈奔放なイメージをどしどし放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には本誌半年分贈呈します。

【実写真】

御自身写真されたものに限ります。裏面又は別紙に説明とデータをお忘れなく。採用分には相当謝礼。

【アイデア】

将来本誌にて企画すべきものの全般につき出来るだけ詳細に、掲載の如何に拘らず優秀なものには千円迄の謝礼を呈上いたします。

【私は訴える】

皆さまの胸に持つておられる誰にも云えない諸々の悩みや御意見主眼等を発表して下さい。本誌ならでは取り上げないような内容のもの。採用のものには本誌半年分贈呈。

【レポート】

新聞記事の切り抜き或は見聞等、皆様の興味をお持ちになった事件等につきお知らせ下さい。掲載分には本誌二分分贈呈。

【読者通信】

編集者、執筆者、投稿者等への便り、前号の批評、希望、或は編集や雑誌のあり方等に関して忌憚なきお便りをお寄せ下さい。ハガキにても結構です。つとめて誌上に紹介いたします。

【読者交歓室】

読者相互間の文通呼び掛け応答等の頁を新設いたします。御遠慮なく御活用下さい。文章はなるべく簡単に。明確に御活用下さい。到着順に最近号に掲載します。原稿の第一頁には応募の種目を明記して下さい。

奇譚クラブ編集部

◎本誌月極購読料◎

一月分一冊 (送料十六円) 二百円
三月分三冊 (送料共) 六百円
半年分六冊 (送料共) 二千二百円
一年分十二冊 (送料共) 二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。月分一冊お申込みの方は必ず送料十六円の御加算を願います。半年分御申込みの方は景品として手札型写真三枚、一年分お申込みの方は景品としてヤビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ 第十巻第一号
復刊第三号 定価二百円
四月号 (送料十六円)

昭和三十一年三月三十日印刷
昭和三十一年四月一日発行
編集人 箕田 京二
印刷兼発行人 吉田 隆
大阪市阿倍野区晴明通一丁目八五番地

発行所 天星社
振替口座大阪五〇〇四二番
電話 天下茶屋 三六〇七番

尚、従前の発行所、堺市普原通四ノ三〇
曙書房(振替口座大阪三四九五六番)宛にても郵便物は到着致しますが、なるべく新住所の天星社宛にお願いします。

昭和二十九年（普通号の分）

○九月号

【百円】

私は訴える.....青葉 新一
赤い囚（続・半公刑）.....松井 昭恵
身を灼く女.....真金 銀次郎
被虐者.....才 昭吾
サジスムの女性.....岸 本井
女体美と特に臀部に就て.....岸 本井
女装して賣めの実験.....岸 本井
ゆみおんな（弓女）.....岸 本井
露出願望の少女の告白.....岸 本井
アブノーマル・ドリーム.....岸 本井
嫉妬の操り.....角 浩子
切腹研究夜話（六）.....中 弘通
野外縛りの記録（責め撮影）.....中 弘通
車中汚辱（満洲戦の体験）.....九 鬼馬里
雄化の微笑（我闘われ記）.....幹 関次郎

○八月号

【百円】

魔触（まじよく）.....二 侯志津子
海外サディズム雑誌.....二 侯志津子
女性愛慾面の断層.....林 弓志雄
切腹研究夜話（五）.....法 谷 四郎
私刑（リンチ）.....山 田 正実
サド女性の覆面.....山 田 正実
女性腹の秘密.....山 田 正実
マゾ男の秘密レター.....山 田 正実
腹部自虐の訴え.....山 田 正実
眼帯の魅力.....山 田 正実
同性愛マニアと自縛.....山 田 正実
フェチシストの悲願.....山 田 正実
ベンガル黄昏.....山 田 正実
切腹研究夜話（五）.....山 田 正実
現代文芸に現れた責め.....山 田 正実
告白 美しい五月に.....山 田 正実
青色の蛍光灯.....山 田 正実
国際スパイ団監房.....山 田 正実
コンピネーション隨想に答えて.....山 田 正実

○七月号

【百円】

股裂き散華.....多 山 麗作
眼帯とマスク.....才 昭吾
あるマゾ男の告白.....才 昭吾
美少年の秘密.....才 昭吾
悦虚回想録.....才 昭吾
華々しき凌辱.....才 昭吾
私の切腹遊戯.....才 昭吾
臍窩への首察.....才 昭吾
血染めの舞台.....才 昭吾
若い女の足に狂う.....才 昭吾
義母への追想.....才 昭吾
コルセット・マニア.....才 昭吾
責めに憑かれた秘密日記.....才 昭吾
フレンチ・カンカン.....才 昭吾
灸責愉楽.....才 昭吾
腹部愛好癖.....才 昭吾
ロマンチックなサディズム.....才 昭吾

○六月号

【百円】

つりとえび.....古 川 裕一
わが心の記.....古 川 裕一
私のモデル.....古 川 裕一
美しい暴君（入選作品）.....古 川 裕一
アリスのいじめ（入選作品）.....古 川 裕一
奇術の断層と絞首刑.....古 川 裕一
私の新婚旅行.....古 川 裕一
孤児院の折檻.....古 川 裕一
変性男子の告白.....古 川 裕一
淫腸願望.....古 川 裕一
責めの自画像.....古 川 裕一
女性の鼻の美に就て.....古 川 裕一
稚児兵士幹部候補生.....古 川 裕一
尻夫人.....古 川 裕一
感情教育（八）.....古 川 裕一
あるマゾヒストの手帖から.....古 川 裕一
残虐なる女性達.....古 川 裕一
夫から妻から.....古 川 裕一
私の好きな縛られ方.....古 川 裕一
稀世婚姻の儀.....古 川 裕一

○五月号

【百円】

少年囚獄記.....三 侯志津子
悪の部屋.....三 侯志津子
女性切腹の夢.....三 侯志津子
感情教育（七）.....三 侯志津子
あるマゾヒストの手帳から.....三 侯志津子
奴隷加虐.....三 侯志津子
ある同性愛者の告白.....三 侯志津子
変態美論.....三 侯志津子
二百字讃歌（入選作品）.....三 侯志津子
童貞作家（入選作品）.....三 侯志津子
海外サディズム雑誌（二）.....三 侯志津子
ダイアナ夫人.....三 侯志津子
統一・女性への憧れ.....三 侯志津子
私の求めた男.....三 侯志津子
切腹研究夜話（四）.....三 侯志津子

○四月号

【百円】

悪の部屋.....二 侯志津子
変態美論.....二 侯志津子
ドレイ・ボーイ.....二 侯志津子
収容所脱出.....二 侯志津子
闇博士の回想.....二 侯志津子
非小説性液.....二 侯志津子
蜘蛛と蝶々（完結篇）.....二 侯志津子
残酷なる女性達.....二 侯志津子
切腹研究夜話（三）.....二 侯志津子
感情教育（六）.....二 侯志津子
マゾ心理について語る第五回.....二 侯志津子
責め論は芸術品なり.....二 侯志津子
アブノーマルの記.....二 侯志津子
爛れた花.....二 侯志津子
高橋鉄氏に問う.....二 侯志津子

○三月号

【百円】

蜘蛛と蝶々.....飛 田 良二
変態美論.....飛 田 良二
謎の女と私.....飛 田 良二
解剖物語.....飛 田 良二
魔性の姉妹.....飛 田 良二
女看守と囚人.....飛 田 良二

倒錯の告白と手記

無敵繪マニア.....河内 幸雄
我が少年時代の犯罪.....河内 幸雄
高馬靴への執着.....河内 幸雄
栗馬靴への執着.....河内 幸雄
少年未決囚の告白.....河内 幸雄
捕虜の洗礼.....河内 幸雄
或る同性愛者の告白.....河内 幸雄
女性の鼻（偏執マニア）.....河内 幸雄
真鍋四十六.....河内 幸雄

○二月号

【百円】

悦楽の銀座裏.....高 賀 慶子
（告白）人間燭台.....高 賀 慶子
女腹切八景散紅葉.....高 賀 慶子
裕子とお仕置.....高 賀 慶子
現代文芸に現れた責め.....高 賀 慶子
囚獄記.....高 賀 慶子
人身御供（流浪八年より）.....高 賀 慶子
復讐.....高 賀 慶子
女体自虐図.....高 賀 慶子
蜘蛛とパンティ.....高 賀 慶子
罪ある女.....高 賀 慶子
京子の蛙腹.....高 賀 慶子
抗け縄（悦虚に悶えて）.....高 賀 慶子

○新年号

【百円】

生活の体験.....長 谷 川 洋一
股間縛りについて.....長 谷 川 洋一
コンピネーション.....長 谷 川 洋一
女装への憧れ.....長 谷 川 洋一
悩ましき切腹願望.....長 谷 川 洋一
犯された女.....長 谷 川 洋一
美しき悪魔の微笑.....長 谷 川 洋一
新・倒錯美論.....長 谷 川 洋一
悦虚に悶える.....長 谷 川 洋一
満洲戦の悲化.....長 谷 川 洋一
流浪八年.....長 谷 川 洋一
私刑に泣く未亡人.....長 谷 川 洋一
監禁十日間.....長 谷 川 洋一
猿くつわと私.....長 谷 川 洋一
ダイアナ夫人.....長 谷 川 洋一
檻の中に.....長 谷 川 洋一



腰巻 佩用許可願	完全なる隷属	鼻のプレリユード	映画の緊縛断片	マニア誕生	残虐なる女性達	切腹願望と臍窩	その後緊縛女優列伝	縛られた女優達	映画(近松物語)より	悲恋 栗田口	ああこの恍惚境	賣めのアイデア	浣腸 雑記	洋画に於ける緊縛場面	懸賞入選作品 佳作第一席	蜂の胸四十五センチにこたえて	倒錯の英雄 織田信長	Xの尻	「女」の雑誌「女のお腹談義」	アブノーマル雑談「話の屑籠」	玉稿落穂集	赤い花は泣いている	失恋の告白	読者通信	代理部特選写真集
小暮道也	坂田信治	北谷英二	緑 猛比古	坂野上信彦	須藤律夫	森本愛造	澤 清克	升岡金吉	十字好介	小村二郎	永井昇次郎	狩井麗作	佐巻跋策	加治信一	蜷間洋子	笠置俊郎・作	川瀬一美	緒台あふみ	辻村隆	編集部	松井子	北原純子	城 秀人		
74	73	78	81	86	91	94	96	98	100	104	112	114	117	120	123	130	138	140	144	146	150	160	162	172	



奇譚クラブ	復刊第三号	四月号	目次
痛 苦 の 夢	第二次会の披露宴	戦国夜盗	ナイロンのレインコート
「こんなポーズでお気に召すかしら?」	「手首が痛いから早く解いてエ!」	明治年間の新聞覚え書	おしめ放浪記
黒人少女の飼育	或る切腹マニヤ恋文	楽しい正月映画の縛られ女優達	幽囚十ヶ月
山口式ボディビルの御紹介	キヤルマタの美	魔の味	ドストエフスキイの嗜虐性
女性乗馬考	サジスチンの独白	ボクの責め方	女剣士の切腹について
ラフレター	春日ルミ様へ	少年矯正院体験記	仇討 プレイ
私は訴える アブ放譚			
四馬孝画	宮崎昭平画	畔亭数久画	萩賀美恵子
加賀利江子	吾妻新	畔野当磨	黒岩巖
笠原孫之介	嵯峨美智子	春田一郎	山口幸一
高木伸彦	野中愛三	馬場喬次	原美智子
宝塚三夫	青山芳樹	守口栄吉	高杉正二
水上流太郎			
70	69	67	66



昭和三十年（特大号の分）

○五月特大号

【百四十円】

白面鬼……………竹谷十三
続々、女性切腹断想……………田谷敬生
見世物とサディズム……………土屋淑人
たのしみはサディズム……………藤見郁
アブ追求三十年の回顧……………山田正美
きいたふう……………吾妻新
女サディストの手記……………長瀬子
悪癖……………櫻井利子
責め絵の回想……………依田和子
奈落の欲望……………沢村精二
緊縛モデルの素顔……………沢村隆雄
「呪い塚」縁起……………野村当魔
「死を覚悟する男」……………青葉慎一
我が倒錯の系譜……………児島輝彦
縛り絵について……………山本和洋男
縛り絵について……………鳴海文雄

○四月特大号

【百四十円】

アブホート一年生……………狩井麗作
ギブスとコルセット……………徳山麗作
女性のお灸十態……………岩瀬祥一
牛乳風呂の饗宴……………馬族保
責め絵の回想……………依田精二
孤獨……………古川裕子
悪魔の遊戯……………二俣志津子
緊縛モデルの素顔……………辻村美一郎
調教師……………淡美一郎
アブ追求三十年の回顧……………山田正美
責め衣……………藤山秀緒
飛行服姿の女腹切……………中谷冷一
恥美の果て……………藤山秀緒
「鼻責め」の研究発表……………古田吉郎
「私の切腹」……………赤井茂
「私の切腹」……………不破和子
女性の下着写真マニア……………花房亜夫
マゾへの胎動……………三根耕二

○二月特大号

【百四十円】

アブ追求三十年の回顧……………山田正美
縛り絵の素顔……………二俣志津子
ウイナスの重石……………辻村隆雄
女性願望の青年の手紙……………真砂十四郎
我が半生の記……………中津直
責め絵の回想……………喜多島佳月
縛り絵を描いて……………依田文並
洗腸マニヤの日記……………花村恵子
私の体験……………長瀬昭子
寄宿舎での体験……………緑川純子
導尿される令嬢……………田村仁一
責め絵のアイディア……………八郎
奇妙な便り……………読者通信の摩訶
縛り映画落穂集……………鈴木千

○新年特大号

【百四十円】

「腹部に依る脱虐」……………兵頭庫一
畸型への愛着……………津久井毅
A感覚の秘密……………羽村京子
悪の広場……………角浩子
人工女性会見……………滋賀雄二
ソドミーの祭壇……………三根耕二

昭和二十九年（特大号の分）

○十二月特大号

【百四十円】

縛られた女優……………井上一雄
切腹願望と臍いじめ……………辻村清隆
春日ルミに関する十二章……………春日ルミ
女灸点師……………長谷川清
秘蔵……………幾田一
縛り絵マニヤの記録……………諏訪慎一
眼帯マニヤの妻の日記……………菅野俊昭
男色秘話「集る人々」……………菅野俊昭
綿糸の倒錯……………福本千芳
夫婦の倒錯……………山田美智子
動物嗜好者の手記……………麻耶智子
号泣（私の腋窩遍歴）……………佐次浩介

○十一月特大号

【百四十円】

洗腸マニヤの手記……………花村恵子

○十月特大号

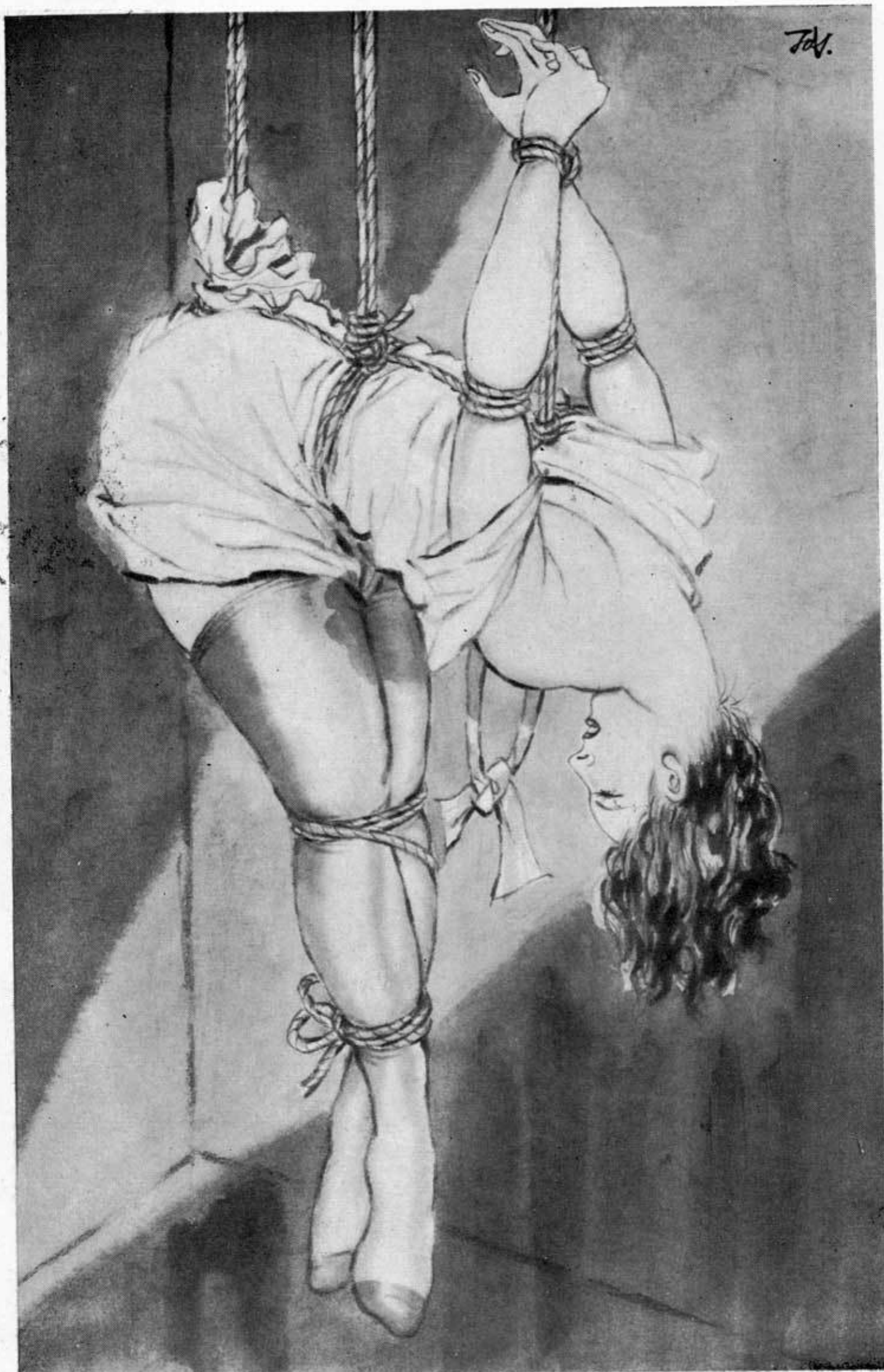
【百四十円】

遺稿 三つのシークレット……………角暗子
新聞に現れた切腹の種々相……………須藤一夫
幽囚十ヶ月……………春日良二
欲義先生性愛相談欄 回答者……………飛田良二
気遣いにされた令嬢（一）……………吾妻新
夜光島（二）……………等々
倒錯の英雄……………中川房夫
皓子抄（妹について）……………川合伊都子
金色七変化（女腹切）……………沼正三
「狂言」内沙汰……………真木不天
愛は秘蔵とともに……………麻生和夫
第七天国の夢想……………須賀織代
病める花びら……………浮家三郎
裏返しのA感覚……………吾妻新
「被虐の果て」後日譚……………細川美也子
切腹と自害への希求……………兵頭庫一
灸点三昧……………長谷川清
縛られた八人の女……………岸本青柳
あぶのたわごと……………幾山唯迷
一フエチンストの見た鼻……………三根耕二
鉄窓の青春……………吉次一平
スロース・マニアの記……………吉次一平

痛苦の夢

一寸、二寸、と縄はぎしむ音を立てながら巻き上げられてゆく。白いふくよかな肌に喰い込む縄目は、そのたびに益々苦痛を加えてくる。「ああ、苦しい、誰かきて」はッとその時、私は夢

から目がさめた。息づまるような重苦しい空気の中で……。



第二次会の披露宴

〔宮崎昭平・画〕

「自分で飲めないのなら、こうしてやる」今夜も悪い癖を出した御前が美貌一を謳われる照葉にからんでいった。取巻連は、この変った披露宴を面白そうに眺めるのであった。



ナイロンのレインコート

頃は六月の中頃、レインコートの中は、忽ち汗ばんでヌルヌルしてきたが、彼女は一向にこの囚衣を脱ごうとは云わなかった。

モデル 萩 千 恵 子 嬢





『こんなポーズで、お氣に召すかしら？』

日曜日の朝、特に頼んできて貰った美智子さんに初めて縛らせて貰った。彼女は素直に云う通りのポーズをとってくれた。

モデル

佐賀美智子嬢

『手首が痛いから、早く解いてェ……』

あれこれとポーズを変えているうち、白い肌に細い綿ロープが喰い込んで、手首が紫色に変わってくるのであったが……

モデル

加賀利江子嬢



盗 夜



天下麻の如く乱れた戦国時代、世は正に血腥い戦乱に明け暮れていた。城主のうら若い姫君も、男装も凛々しく卯の花緞の胴丸に金龍の前立鍬形打ったる兜を猪首に着なし、馬上ゆたかに初陣へと急ぐ。姫の身を案じた父はその本陣より姫を離さないように馬廻りの者に命じてあったが、男勝りの姫は、供の眼をかすめて只一騎、間道づたいに先鋒隊に向って愛馬に鞭うって急がせた。だが不覚にも戦場荒しの野武士の罠にかかって落馬、所詮は女的身、忽ち野盗の虜となってしまうた。



城主の姫君とは夢にも知らぬ野盗たちは、我れ勝ちに姫の着ていた甲冑を奪いはじめた。次には肌のものまで脱がそうとした男たちは、思わず「あっ」と驚きの声を放った。今の今まで青年武者と思っていたのに、豊かな乳房が現れてきたではないか、目の前に捕えられているのがうら若き女だと知って、野盗たちは驚喜した。両手首を揃えて樹の枝に呆り上げた。自由のきかない姫は、高価な肌着一枚又一枚と、荒くれ男たちの手によって剥がされてゆくのを、只じっと見ていなくてはならなかった。

国 戦

★ ★ ★ ★ ★
★ ★ ★ ★ ★

僅かに肌襦袢一枚にされた姫は松の幹に後手に縛り上げられてしまった。鉢巻は即製の猿ぐつわとして口と鼻を掩われてしまったので助けを呼ぶことも出来ない有様であった。

野盗たちは、獲物の分け前でクジを初めた。先ず最初は、この美しく若い女である。次には甲冑、その次には色とりどりの陣羽織、袴、手甲脚絆、肌着の類、いずれも野盗風情には、手も触れたことのない高価な品々だった。然し、誰も欲しがったのは若い女だった。眼は血走りわめき合っ争った。姫はじつとその騒ぎをきいていた。

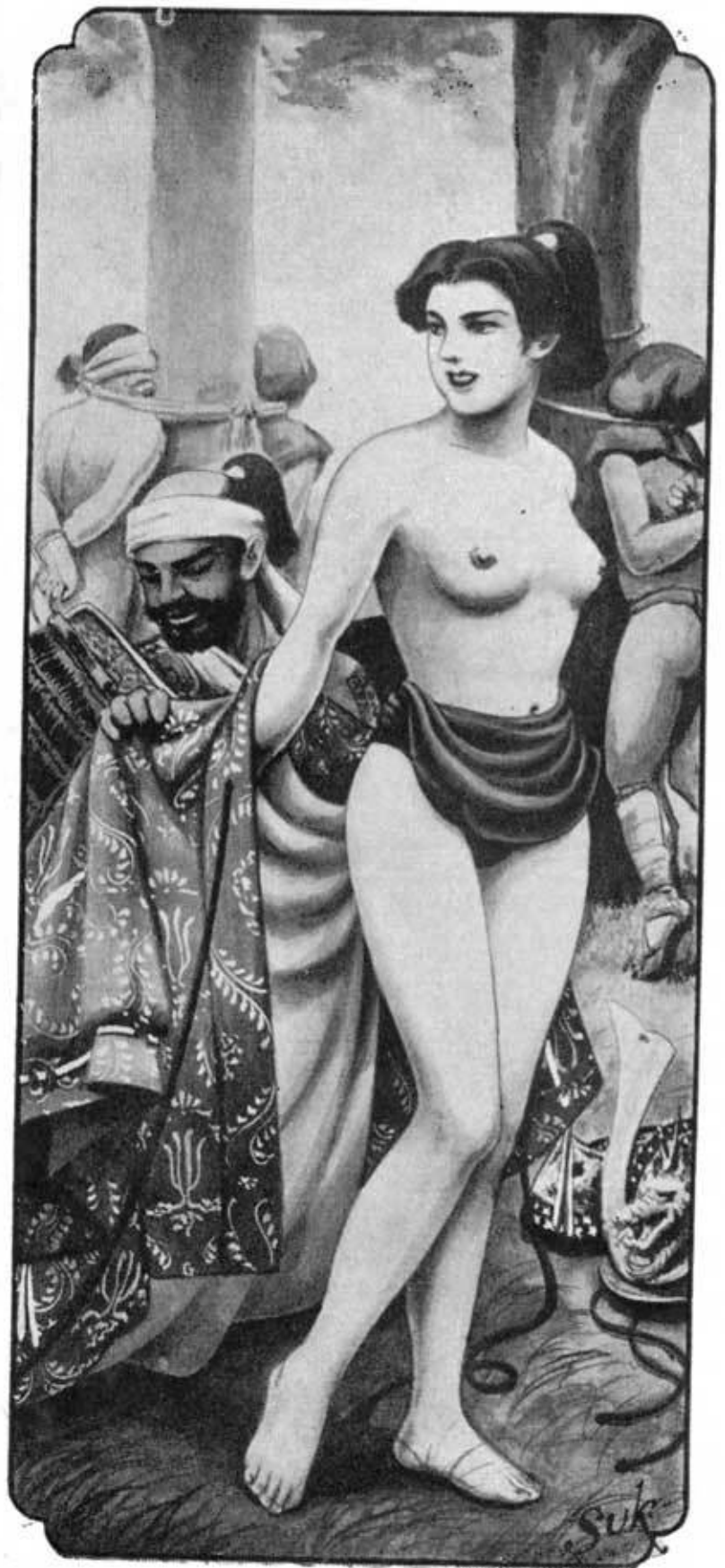
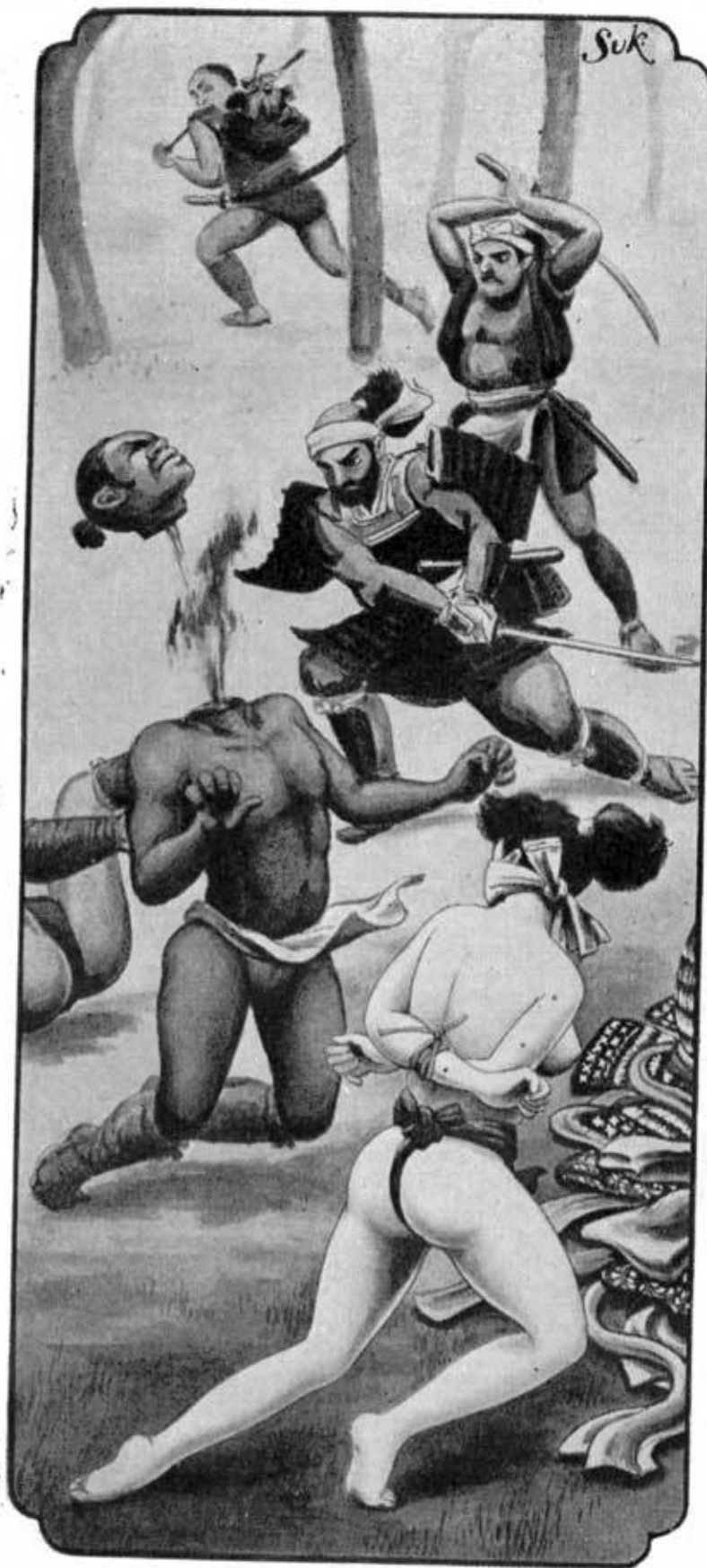


最初のクジに勝ったのは、戦盗の中でも頭領株の逞ましい髭面の男だった。仲間の者があとの獲物の分け前に騒いでいるのを尻目に、つと姫の背後に寄ると松の幹に縛りつけた縄をほどいて、姫を叢の中へ引き据えた。「さあ、この俺さまがお前の身体を貰うことにきまったのだ、十分堪能するほど可愛がってやるから俺と一緒に家へ来るんだ」男は姫の髪を掴んで引き起そうとした。物言えぬ姫は心で「無礼者ッ」と叫びながら、男を睨みつけるばかりだった。この時、馬蹄の響と共に砂塵を上げて殺到する一団の騎馬武者があった。姫探索の命を受けた馬廻りの近従達であった。

悲鳴を上げる余裕もなく、姫の背後にいたク
シ運のいい男の首は、血しぶきを上げて一尺程
も宙にとび上った。「えッ」と驚いて起ち上ろ
うとして右膝を立てた姫の目には、他にも二三
の野盗が或は斬られ、或は捕縛されているのが
一枚絵のように映っていた。野盗の罠に陥った
ときも恐ろしいとは思わなかったが、今近従た
ちに危難を救われても、左して嬉しいとも思わ
なかった。それが当然の帰結である如く。

「姫君、よくこそお無事で」

殆どの野盗を捕えて樹につないだ騎馬武者た
ちは、姫の縄目を切り解くと、その前に両手を
ついて無事を祝しあうのであった。



「姫君、どこかお怪我でも？」

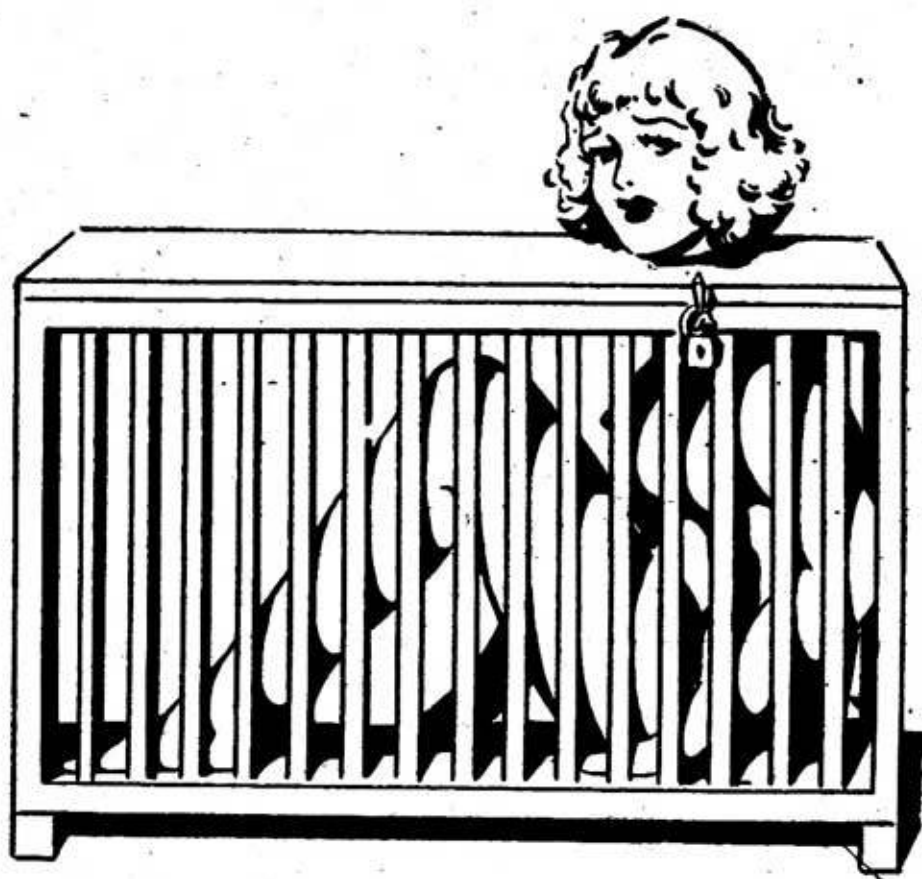
「そんなものはない、それよりも早く、妾に
着せてたもれ」「ハハハハア」探索隊の隊長は
膝まづいて衣服を捧げ持つのであった。

「姫君、あの男たちは如何仕りました？」

「わらわの身体をうかがった不届な輩、この
まま放任すれば、良民に悪事を働くに違いない、
全部打首にいたせ」

「ハア、畏ってございます」馬上ゆたかに甲
冑を正した姫は、処刑される野盗たちの断末魔
の悲鳴を聞きながしながら、本陣へさして砂け
むりを上げていた。

(おわり)



アメリカ雑誌 BIZARR のカットより

(復刊 第 3 号)

新しい文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1956 年 4 月号

(第十卷 第一号 通刊第八十三号)



明治年間の新聞覚え書

吾妻新

求婚広告

(二〇・一・一〇 時事)

これは一月六日の上野新報に出たものを転載したのだが、私の知るかぎりでは日本最初の求婚広告である。それも内容が平凡でない。まずその全文をかかげよう。

「杜員の知友某氏は此程新に細君を迎へんが為め、左の如き広告をなせり、天晴なる女丈夫を得て良縁の歡を結ばれんことは、蓋し遠きにあらざるべし。

求婚の女子は左の性格を有するを要す。

- 一、基督新教を奉ずる者。
- 一、普通の教育を受け、英学を修めし者
- 一、姿容優にして丈高く身体強壯にして動止活潑なる者

一、馬に乗り得る者。但し未だ乗り得ざる者と雖も、結婚後乗馬するの勇氣ある者

一、家格の高下と資産の有無とを問はず年齢十五才以上二十五才以下にして初婚の者

求婚の男子は左の性格を有せり

一、無財産にして負債あり、但し償却の方法確定せり

一、現職は奏任五等にして上級俸を受く

一、仮令現職を止むと雖も独立生計の力あり、若し能はざる時は離婚の請求を許す

一、和漢学の素(養)あり、且つ英学を修め翻譯を為し能ふ

一、身体強壯にして行為活潑なれども、酒と烟草は一切用ゐず

一、男女同権は固より許す所、彼の東洋風待遇の如きは敢て為さざるを誓ふ

一、年齢は二十九才三箇月にして再婚、子あれども他家に養はる」

平凡でないというのは、活動的な女、とくに乗馬を絶対条件の一つとしている点である。

女の乗馬は明治の初年ごろから絶無ではなかった。といつても、平民の乗馬を許したのは明治四年四月十七日の太政官令だから、それ以後のこと、また最初に馬に乗つてゐるのは貴族や武士の妻や娘でなく、平民の娘だった。たとえば「新聞雑誌」

四十五号（明治五年五月）が伝えている、三人の娘などがそうである。ヨーロッパなどところが、日本では女性の乗馬は女権拡張の強い意識のもとに示威的に行はれたので、封建的な教育のつよい貴族や武士の娘よりも平民の娘が実行したのは、いわば自然であつた。だから服装も男の袴、乗るかたも男と同じように跨がった。（江戸時代はそうではない。ずっと昔——奈良朝時代には男女同権だったから、やはり跨った）明治八年になると、老人を馬蹄にかけて罰金一円五十銭を課せられた芳町のおまんのように、芸者がよく乗馬をやったし、その後の女学生なども、ほとんどみな平民だった。だが、とにかくにも、明治二十二年に女が海水浴をしてさえ批難を浴びたぐらいだから、明治二十年に女が馬に乗ることは非常に珍しかったのである。まして男という男は、ほとんど例外なしにその解放ぶりを嫌い、嘲笑していた。それを、結婚の相手の条件にして、いまでなければ家庭を持ってからでも習わせるといふのは、決して常識的とは言えない。

しかし、だから彼がマゾヒストだったと断定するのは、私は好まない。マゾヒストでなくとも生き生きとした活動的な女性、開放的な女性を愛する人間もいるし、私

たいに更に服装まで性別を否定したい人間もいるからだ。しかし、或いはマゾヒストであつたかもしれない。それを否定する根拠もないのだから。いづれにしても、興味ある求婚広告である。

女学校の裸体検査

（三七・四・二一・東京二六）

「高等女学校に於ける生徒裸体検査なる事件は一時諸地方に起りたる問題にして、其後暫らく後を絶ち居たるに今又岡山、福島二県下に此事件を生ず、婦人に裸体検査を行ふ事の是非は今更云う迄もなき事にして売春の徒ならば或は己むを得ざる理由あるべきけれど、苟にも女学校に於て斯る単純なる物議を再三惹起するに至つては、所謂教育家なるものゝ道義心の如何に欠乏し居れるかを窺ふに足らん」

まず岡山県の例。

さる十三日、岡山県立高等女学校の三年い組の生徒、岡山県知事松垣直吉の三女某は、月謝として持ってきた五円札を教室の机の上においたところ、ちよつとの間に紛失したと舎監に届け出た。

すると校長の星菊太は、教員たちと協議の上、い組の女生徒全部の身体検査を強行することにした。それも、懐中物を調べるとか、帯を解いてみせろ（当時の女生徒は

みな巾の広い帯をしめていた）というのではない。すつ裸になれというのである。しかも、それを女の教員だけで検査するのはなく、女教諭と舎監二名、男の教師三名と校長がずらりと居並んだ前でしらべようというのだ。当然のことながら女生徒たちは反対した。というのは、当時はみんな和服で、ズロースなどはなく腰巻だったからそんなところに隠すことのできる筈はないのである。反抗がきき入れられないので、こんどは哀願したがダメだった。

「……肌に一片の布を纏うすら許さず、中には月経期なればと拒むをも顧みず、叱咤して赤裸々の恥かしさを多数の目前に忍ばざるを得ざるに至らしむ」

裸体検査の結果、五円札は出てこなかった。出てこない筈だ。松垣某はその金を学校へ持たなかつたのである。それがわかつて、さすがに彼女は退校届を出した。ところが校長は、そんな必要はないと言って却下したので、こんどは辱しめを受けた娘たちの父兄が承知しない。いかに県知事の令嬢でも、みえすいた過失のために他の生徒に死ぬような思いにさせた以上、責任をとるのはあたりまえである。それをなぜ慰留するのか、と、いまや県下の大問題になりつつある。

次は福島県高等女学校だが、これは校長のサディズムがもつと露骨にあらわれている。今年の春の定期身体検査に、中川校長は裸体で検査をしようという案を出した。もちろん違法なので、大立目と山田という二人の教師は反対したが、校長は頑として聞き入れない。というのも、他の教師は公然と反対する勇氣がないか、または校長の動議に便乗して黙認の態度をとり、ひそかに欲情を楽しみたがっていることが分っていたからである。結局、多数決で裸体検査ということになった。

そこで生徒には事前に知らさず、抜打ちに申し渡すことになったが、校長のえらんだ検査場はなんと学校の風呂場である。

(明治の女学校の多くは寮をもっていたから、これもその一つらしい)そして正面に鏡を据えつけ、その前に体重計をおき、さらに鏡に面して教員たちの席をつくった。それから学級別に生徒を整列させ、一組ずつ風呂場に連れこんだ。

女生徒たちのおどろきはどんなだったろうか。岡山県の場合はまだしも、紛失物をさがすという口実がある。だが、毎年の身体検査は着衣が習慣で、裸体になる理由がない。まして、風呂場で鏡の前に立ついわれは毛頭ないのだ。彼女たちにとっては教

師の命令は絶対である。涙にむせながら裸体となったという。そして、前面に鏡があり、うしろに教師達の席がある以上、どこをむこうと、前もうしろも衆目に曝される恥辱に身も世もあらぬ思いをしたと記されている。

そのなかで、大立目教諭の受持の四年生だけは、退校を覚悟で拒みつづけた。さすがに暴力をふるうわけにもゆかず、最後に彼女たちは腰巻だけになる条件で検査をうけた。これは年令が思春期に達しているため特に羞恥心が強かったものによるが、校長に反対した大立目という教師の良識に勇氣づけられたからであらう。そして当時のことだから、大立目教諭のようなフェミニストはのちになんらかの口実でクビになるか、転職の憂目をみたにそういない。

だがこの事件が新聞種になっても校長はクビにならないだろう。まかりまちがえはお叱りを受ける位のものだ。明治の人権思想はそんなものである。新聞は次のように結んでいるが――。

「体重を秤るは裸体たるを要せず、一定の検査衣を用いれば一分の差も生ずる筈なきに、校長等が恣に裸体たらしめ、斯る辱を女子に与えたるは何等の醜態ぞや言語道断とは斯ることならずや。さはれ同県、眼あ

る人あるべければ、此物議の結果を得て気の毒なる女子諸君の爲更に云う所あらん」

二十七年間の虐待

(四一・一七・東京朝日)

「(名古屋)海東郡津島町字新開の垣見源四郎(七十一)は邪慳なる性質にて、奥の娘のぶ(四十四)が十八才の折、町の少年と私通したりとて大に怒り、のぶを三疊の室に押しこめ錠一枚、煎餅布団一枚を与えたるまゝ、折々握飯二つ三つ投げやる許にて、四十四才の今日まで惨酷なる扱を爲し廿七年間を過したる椿事、漸く此頃に至り発覚し、源四郎一家は去る十三日精神病者看護法違犯として所轄警察署より告発せられたり」(全文)

これがただ「邪慳なる性質」だったかどうか、すこぶる怪しい。いかに厳格な性格でも、有夫の妻でないただの娘が恋人をつくってからだを許したというだけで、これだけの虐待を四半世紀以上もつづけるといふ父親は、絶無ではないかもしれないがまず考えられない。むしろ、キズものゝ娘をいかにして縁づけるかに苦心すべき筈である。また虐待の程度が異常である。このような家畜以下の扱いを永年つづけられれば、精神に異常を来たすことは十分に考えられる。新聞記者はアブノーマルな世界に

鈍感だから。ただ邪怪な性格で片付けるが、もしも推測を許すならば、この親子は父子相姦の關係にあつたのではあるまいか。そうだとすれば、若い恋人への嫉妬、あくまで手離さまいとする偏執的な欲望から、檻禁の謎が解けそうである。彼女が十八才のとき、父親は四十三才だった。おそらく妻を亡くし、二人きりの生活だったと思われる。だからこそ檻禁という勝手なことができたので、それものがまだうら若い数年間、そのような環境の下で暴力的に關係をつづけたであろう。一度他の男を知ってしまったえば父親を拒むことは想像されるから、もはや、合意の關係は成り立たない。その嫉妬と怒りが異常な残虐にみちびくようになった。そして娘が絶望と苦惱で発狂してから、關係にも興味を失うとともに、罪跡を曝かれる心配もなくなったため「厄介な気狂い娘をもった不幸な父親」として、後妻をもらい、その後妻はむしろ彼に同情しその檻禁を、当然のように思っていたのであろう。

人間の膏を売る

(四一・三・一四・東京日日)

三重県四日市の火葬場につとめている隠亡で、同県志摩郡国府村大字国府二五六一番屋敷の小林助五郎(六十九)と、その弟

庄松(六十二)の二人は、七年ほど前から何百人とも数知れぬ死人の衣服を剥ぎとつたばかりか、脳漿をえぐりだして膏をとりまたは骨を粉にして袋に詰め、万病に効く靈藥だと称して、四日市の河原町万古職長谷川くま(五十一)の手をえて売りさばいていた。その膏の値段は一合五十銭だが、迷信を信ずるものの多い世の中だから販路もしだいに広まり、津市あたりまで出廻るようになった。しぜんと評判も高まり、ついに四日市署の耳に入つて二人は検挙されたが、その際踏み込んだ刑事が家宅搜索して、人油入りの瓶二箇、骨粉五袋を発見した。

「是を突つけて糺問したるに、流石の人も包み切れず、逐一前記の罪状を自白せしが、驚くべし彼等は他人に是を密売するのみならず自分等も甚しく之を嗜み、右人油を飲まざれば其日一日工合悪しとて常に小瓶を離さず、時々之を取出して嚙り居るとは聞くさえ身の毛の棘立つ話なり……」イヤハヤ、グロテスクな話である。

三菱ヶ原の強姦殺人

(四二・一一・一二・中外商業)

これはたしか迷宮入りになった事件の一つである。が、ここにのせるのは、それだけの理由ではないことはお分りと思う。

麴町区八重洲町一ノ一というところ、現在は繁華な東京の中心地だが、このころは岩崎がベラ棒な安値で買い占めた原野で、ボツボツ建ちはじめているものの、まだ三菱ヶ原と呼ばれて昼でも人通りの淋しいところだった。その「三菱合資会社敷地」と記した木標のそばに、十一日午前五時四十分頃二十才前後の女が、右頸部に長さ二寸余の傷を負つて殺されているのを発見された。

女は大柄の豊かな美人で、瓦斯大島の紺羽織に黄紺茶格子の袴を着、綿繻子に紅葉と川蝶模様の帯をしめていた。屍体は後手に縛られ、強姦されていた。帯と下締は鋭利な兇器で切られ、羽織の右の鉤は引き裂かれ、頸部の傷が致命傷である。だが傷を受ける前にはげしく抵抗したらしく足駄のほかに九文三分の足袋が脱ぎすててある。検視によれば傍のハンカチは狼ぐつわに使用されたものだから、それ以外の布がないとすれば、足袋を口に押し込んだものではなからうか。

翌日の中外商業新聞では、被害者の身元は早くも判明している。彼女は神田区旭町八、アルミニウム商木下忠正(二十二)の妻お艶で、夫が不正横の事件で警察にあげられたので一家をたたみ、養父の同区旭町五、渡辺宗七方に同居していた。十日夜

七時ごろ廿四、五才の丸顔色白の男が訪ねてきてお艶をつれだしたが、そのとき男は警視庁から御用だと言ったそうである。したがってその夜から曉方にかけて、三菱ヶ原で強姦され、殺されたのである。

ところが奇怪なのは、その後まもなく養母のお為(四十四)が訊問された上、留置されたとのことだ。それから一ヶ月後、十二月廿五日の東京日日新聞によれば、この事件の記事は差止めとなった。夫の忠正は警察にあげられているのだから関係なく、警察のものと称してつれだした男が下手人であることは明瞭なのに、なぜ自宅にいた養母が訊問の上留置されたのだろうか。またなぜこの事件を今後発表禁止にしたのだろうか。

これについては一篇の探偵小説が書けようである。問題のキイは、お艶が養女であつて、お為は継母だということ、お為の留置はこの強姦殺人事件に明白に直接の関係があることだ。私の想像はかなり陰惨な、アブノーマルなものになる。だが推測は各人の自由に任せたい。

朝鮮の答刑執行心得

(四五・四・一九官報)

明治時代も終りにつげようというとき、そして国内での答刑はとくに影を消して

いるとき、名目は合併だが明らかに占領した朝鮮において、日本政府は公然と答刑を復活させた。しかしただの公布ではない。どうして鞭つかの方法を、微に入り細を穿って説明し、それを公文書で朝鮮全道の警察に配布している。それこそ朝鮮統治の本質を物語るものであつて、その指導が細目にわたっていることと科学的なことは、いっそう冷やかな残忍さをかんじさせる。ふたりの個人が合意の上で、愛情のテクニクとして行うサディズムすら批難の眼でみる人々に、強権をふりかざして行う社会的暴力がどう映るか、どちらが有害ではあるかないか、また両者をおなじサディズムという言葉で呼ぶことが正しいか正しくないか、心から問いたい。

そのためにも、少し長いが主な点をのべた十二条までを転載する。

朝鮮総督府訓令第四十一号(警察官署へ)

答刑執行心得左ノ通定ム

明治四十五年三月三十日

朝鮮総督府伯爵 寺内正毅

答刑執行心得

第一条 答刑ハ受刑者ノ両手ヲ左右ニ被伸

シ、刑盤上ニ錠ヲ敷キテ伏臥セシメ、両腕関節及両脚ニ窄帯ヲ施シ袴ヲ脱シ

腎部ヲ露出セシメテ執行スルモノトス

第二条 答刑執行者ハ右手ニ答ヲ携へ、之ヲ垂下シテ受刑者ノ左側ニ進ミ、其ノ腕ヲ延長シテ答刑ノ受刑者右腎ニ接触スルコト約三寸ノ距離ニ於テ位置ヲ定メ同時ニ左足ヲ約一步後口ヘ引キ其ノ足尖ヲ外側ニ向ケ、左手ハ肱ヲ輕ク張り、拇指ヲ背口ニシテ、(執行者帯剣ノ場合ハ左手ニ劍柄ヲ握リ)之ヲ腕骨ノ側方ニ当テ、体ノ重ミヲ右膝ニ托シ稍々前方ニ傾クノ姿勢ヲ為スベシ

第三条 答ノ鞭下ハ、答刑執行者自ラ答ノ裏面ヲ頭上ニ接スルノ度ニ於テ、上方ヨリ答ノ表面ニテ受刑者ノ右腎ニ対シ一鞭毎ニ自ラ発声シテ答数ヲ算シツツ之ヲ連行スベシ

第四条 受刑者ノ左腎ニ対シ鞭ヲ加フルトキハ、第二条及第三条ノ方法ニ依リ受刑者ハ右側ヨリ之ヲ行フベシ

第五条 答刑執行二回以上ニ亘ルモノニ対シテハ、毎回左腎右腎ノ一方ヲ交互ニ執行スベシ

第六条 答刑執行一回限りノ者ニ対シテハ其ノ答数ヲ折半シテ左右ノ腎ニ執行スベシ

答数ヲ整数ニ折半シ能ハザルトキハ、最初ニ奇数を執行スベシ

第七条 受刑者一方ノ臂ニ異状アリテ執行

ニ差支アルトキハ、他ノ一方ノミヲ執行スルコトヲ得

第八条 答刑ハ食後一時間以上ヲ経過シテ

執行シ、執行前成ルベク大小便ヲ為サシムベシ

第九条 打方ハ終始寛嚴ノ差ナク且受刑者

ノ皮膚ヲ損傷セザル様注意シ、引キ打又ハ横打ヲ為スベカラズ

第十条 執行回数ニ亘ル場合ニ在リテハ、

必要ニヨリ執行後臀部ニ冷却方法ヲ施スコトヲ得

第十一条 答場ニ飲水ヲ供ヘ、隨時受刑者

ニ与フルコトヲ得

第十二条 執行中受刑者号叫スル虞アルト

キハ、湿润シタル布片ヲ之ニ嚙マシムルコトヲ得 (以下略)

ない。

ただ、私が多数の社会的暴力の記事を抹殺して、他と対照の目的で意識的に最後の一項だけをあげた気持だけは理解して頂きたい。それは、どんな個人の残酷さよりも権力の残酷さのほうが罪悪だと信ずるし、両者を混同するのは性質の上からも誤りだと思ふからだ。もちろん趣味の上ではどんな現象をとりあげてもかまわないが、それをジャスチファイすることだけは慎しみたいというのが私の考えである。

(完)

【読者通信】(投稿歓迎)

待望の復刊第一号昨日着本し大変嬉しく存じます。研究資料誌としての体裁も申し分なく、用紙に上質のものを使った事は殊に好感を持ちます。限定誌として二百円の代価は十分あると思います、次に感想と希望を無遠慮に申し上げます。口絵は四馬、畔亭、都築と最も好きだった三画伯の特色を十分に描き出された傑作で満足です。写真の方は本文とも関係づけてニ

ユーモデルを紹介して呉れアブオト購入の際のよい参考資料としては有難いのですが、全裸で猿轡なしのものにしてほしかった、最初の登場ですからの方が一層よくモデル嬢を知ることが出来るわけです、本文はマゾ的傾向が濃厚なのでやや落胆させられました。サジズムは合意による悦虐遊戯を主に取扱っているとのことだが、こんなのはマゾに属するのではな

いでしょうか、数から云って一番希望者の多いサジズム的作品がこんな扱いを受けるのは精なく思います。学園を取扱ったものは映画「暴力教室」の問題もあるので遠慮したようなお話ですが、私達はこのような映画を問題にすることがどうかと思っている時なので御誌などは進んでその蒙を啓くべきで、同調するような態度はけしからんと思います。健全な発展を遂げて一般書店にて販売できる日の一日も早からん事を熱望していま

すが、余りに自粛する結果平凡に陥らぬよう御奮斗をお願いします。尚先に予告のあった吾妻、松井両先生の長篇連載物早く発表して頂き度く存じます。最近購入したアブオートでは杉嬢の尻打ポーズが最傑作でした、あのようなものを今後もお願いします。読者の希望を満して、楽しい集いの娯楽兼研究誌として益々発展されんことをお祈り申し上げます。(暴言多謝)

(T・M生)



おしめ放浪記

畔 野 当 磨

物干竿に風に吹かれてひるがえっている色とりどりの模様をした浴衣地のおしめや、まだ新妻といった初々しい感じのする女性が、赤ちやんを背に洗い立てのおしめを絞って干している姿や、両乳房もあらわな乱れ姿で赤ん坊におしめやゴム地のおむつカバーをさせている姿をみる度に、いつも私は奇妙な興奮と空想にかり立てられる。

だいたい電車に乗っていて退屈すると、車窓から到着地までの沿線の物干におしめが干してある家の数を算えて一人で楽しむ程の私だ。

誰でもおしめに対しては奇妙な愛着を感じているに違いない。

去年の夏のことだったが、ある喫茶店で浴衣を着た未だ二十ばかりの娘が連れの女友達と私の後隣りのボックスで話し合っていたが、浴衣の娘が相手の女の子に

「あたし今年の夏になってから浴衣作ったのこれで三つ目よ」

と着ている浴衣を示しながら話しかけると相手が、

「なぜそんなに余計作くるの」と尋ねると、「あたし浴衣着るの大好きなのよ、夏の気分をうんと味わえるじゃない。それに余分に作っていてもお嫁さんにとって赤ちやんでもできた時おしめに使えるでしょ」と答たので、話をこっそり聞いていた私はおしめという言葉に思わず二人の方を振り返ったが、云われ女の子が、

「まあいやだわ、おしめなんて」と笑って云いながらも顔を恥しきでぼっと赤らめ、私の盗み聞きに気づかぬらしく

「そうだったってあたし達だって赤ちやんの時にはおしめやおむつカバーをしていたんですものね」

「そうそう、おむつカバーで思いだしたけど貴女メンス・バンドにはどこの使っていて、私の跳ね廻ったりするとお臀からずれ落ちちゃうのよ、もっと肌にぴったりしたのいいかしら？」

と話を続けるのを隣で聞いていたことがある。なにしろその晩は浴衣を着た女の子の美しい横顔や、店を出て行く時の浴衣地を通してうかがわれる豊かな腰つき等を思い出し、様々な情景を連想して寝つかれなかったものだ。

おしめに対して愛着を感じるのは、おしめをしなくなった幼児が母親にもう一度おしめをして貰って甘えてみようと、わざとお寝小をして母親を手こずらす様な、やってはいけない行為を無理にやって、精神的に自己満足しようとするのと、衣類（この場合はおしめだが）をつけたまま、その場に粗相をして仕舞

う場合に味う、肉体的な心良い排泄感等がおしめを通じて昇華されるものだと思う。

また女性とおしめとを結びつけた場合等はフェチやサド興味も加わり、その刺激の度合が強烈になる。だいいち若い女性の大きなヒップの白い肌に、おしめやおむつカバーのゴム地がびったりとくっつき、それがじつくり汚れて歩きにくそうにしている姿等を想像しただけでも、加虐的な気分が全身がぼろりと熱くなってゆく様な感じがする。

私のおしめに対する感覚が人一倍異常な原因として、たしかに子供の頃、お祖母さんに連れられて叔母の家に泊りがけで行った時、私一人で長びく叔母と祖母の話を待っている内に、便所の在る場所が判らずその場に我慢していたおしっこをしようとしたことがあったが、私の泣声にやってきた叔母が私の姿を見て生れたばかりの長女のおしめを持ってきて、私のお臀や足を拭き、濡れていて気持ちが悪いでしようとおしめをしてくれた上、寝る時にまたお寝小をするといけないからとて、おしめの上におむつカバーをしてくれた時の経験が潜在意識となって残り、私のセクスにアブ的な形となって現われ、おしめに対して異様な愛着を感じしめる様になったのだと思う。

何しろその晩は、もうお寝小なんかしなくなっていたのにわざとおしめの中にしてしま

った。翌朝目を覚すと叔母がやってきて、赤ちゃんと同じねと云いながらおしめを替えてくれ、泊っている間毎晩寝る時になるとおしめとおむつカバーをしてくれた。

またこんなこともあった。小学校に入ってから母の女友達に連れられて宝塚に遊びに行った帰り、温泉に入って一浴びしようとしたが、あいにく手拭がないので一緒に連れていった赤ちゃんのおしめを手拭がわりに使ったのだが、そのおばさんが縞模様の浴衣地のおしめで前を覆いながら歩いている姿を湯舟の中から眺めた事がある。そしてその人に「健ちゃん背中洗ってよ」と云われ、おしめに石鹸をつけて肉づきのいゝ背中を洗いながら、お臀の辺りをこするとき、大きなお臀とその肌にびったり触れたおしめとを眺めている内に、ぼっとなつて思わず洗う手を止めて見惚れてしまった事がある。

子供の頃からの潜在意識が私をしておしめに対して異常な感覚を持たす様にさせたのだと思うが、それ以来おしめに関する話や事実記事等を探し廻って奇妙な快楽にふけっている。

たまたま私と一緒に連れ立っていた知人の米人が日本に来て三月程経つが町を歩いている見かける物の内判らないものの一つだが、あれは何だと物干に干してあるおしめを指さして私に尋ねた事がある。私が早速、あれは

ディーパー（おしめの意）だと云ってやるとへえつと云った顔をしてアメリカやヨーロッパ等のおしめの話をしてくれたが、それによるとあちらでは、おしめを四角な白い布を三角に折り、一方の端でお臀から内股へと前を覆い腹に廻した他の二つの端と一緒に安全ピンでお臍の上でとめるのだそうである。

米人のハウス地帯を歩いていると、よく真四角な白布が沢山紐に結びつけて干されているのを見かけたものだが、それがあちら製おしめであつたわけだ。

この頃の婦人雑誌の広告に出ているが、旅行用に紙製のおしめがあり、一回使う度に捨て、仕舞うのだが、アメリカ等では盛んに使用されているらしい。この点日本の浴衣地のおしめの方が、フェチの上から見ても較べものにならない程勝れている。だが各民族によって異なるだろうが、おしめぐらい古今を通じて不変な原始的形態を保っているものはないであろう。またあちらでは、おしめ自体を早目に外すため、おむつカバーはあまり使わぬそう。

大体おむつカバーの種類をしらべたところ五、六種類程あるらしく、その製造所に働いている人に、娘が大部分というのも面白い。それに米画「花嫁の父」（エリザベス・テイラー、スペンサー・トレシー主演）にも出て来る様、アメリカではおしめの専門の洗

濯店があるそうで、毎朝その店のネーム入りのおしめ袋に濡れたおしめを入れておくと、自動車を取りに来て、夕方迄にはきちんと洗って届けてくれるそうだ。

たしか本誌のおしめに関する記事に海水浴場で女性におむつカバーをさせてみたいという様な事が書いてあったが、アメリカでは海水着にディアパー・スタイルと云う赤ちゃんのおしめの様な恰好の海水パンティがあり、仲々愛嬌たっぷりな点が流行を呼んでいるらしく、私も米誌のフォトで見た事があるが、偶々昨夏七里ガ浜で海水浴中二人の米人の娘がやってきて私の目の前で泳ぎ初めたが、一人は流行のピンク色、他の一人は青い横縞のおしめ型の海水着をしており、大柄の体のすき透る様に白いヒップにまるでバタ・フライの様な三角形をしたおむつ型パンティをしている姿を見ながむ、あたかも彼女達が実際おしめやおむつカバーをしている様な連想をして一人で楽しんだ事がある。

終戦後列車が物凄く混雑した頃、郷里に用があつて旅行をしたが、長距離の急行列車にも拘らず御多聞にもれず立錫の余地なしという、腰掛は三人掛け通路は人で一ぱい、便所の中まで人や荷物で埋まっている様な有様だった。頂度私の前は赤ちゃん連れの映画スターの三浦光子を思わせる様な色っぽい若奥さんがいたが、なにしろ座席が車輛の頂度中央

にあるので便所にも行けず、私達男の連中は列車が停る度に窓から出て行って用を足したが、その奥さんは女だけに窓から出入りも出来ず一昼夜に亘る長旅の間、座席を一つも動かずにじっとしており、よく我慢できるものだと思っていたが、その内列車が終点近くなり空き初めたので便所にも行かれる様になると、赤ん坊も席に置いたまま便所に立って行ったので、私もやれやれと思って窓から首を横に出して外を眺めていると、進行方向の頂度便所附近にあたる車窓から、くしょくしょに濡れ切ったおしめが数枚窓外に投げ棄てられるのを目撃した。やがて若奥さんは便所から戻ったが、私がじろじろ顔を見ると恥しそうに下を向いていた。

郷里について叔母に列車の混雑ぶりを話したとくに便所に行けない辛さを話したところ、あにはからんや叔母の方から「今どき赤ちゃん持ちの奥さんなんかは、おしめをして汽車に乗るそうだよ」と云って笑いながら話しかけたが、私も何気なく聞きながら列車の若奥さんの事を思い出し、たしかにあの人もおしめをして乗っていたのだなと、ヒップに幾重にもおしめをまとった不恰好な姿を想像したものだが、あの当時の殺人的列車で旅行した赤ちゃん持ちの女の人はきつと大概こっそりおしめをしていたに違いない。多分あの奥さんはおしめがあまりくしょくしょになったの

で持ち帰るわけに行かず汽車の窓から投げ棄てたのであろう。

終戦後まだ衣類が豊富に出廻っていなかった時、私の近所に婦人科の若い医者がおり、私の中学校の先輩なので、いろいろ話を聞かずに度々遊びに行ったが、ある日、中世紀ヨーロッパの貞操帯の話に関連して月経帯の話が出たが、女の人の中には月経帯、とくにあのゴムの触感が好きで、別にメンスでも何でもないので脱脂綿を入れないでゴムのまま肌に直接はいている人があるという話をしてくれした。その当時は今多くの女性がしている様な月経帯はまだ売り出されておらず、自分で赤ちゃんのおむつカバーを真似て作ったものを使っていたそうだが、中には赤ちゃんのおしめに越中褌の様に紐をつけ汚れの激しい所にはおしめ四つ折にして当てて使っている女性が多かったそうで、その頃はそれがごくあたりまえのことだったらしい。しかもこれ等の患者が検診台に乗り医者におしめ型の月経帯を着脱して貰う時は婦人におしめをさせている様で滑稽だったと話したことがあるが、僕なら滑稽どころか身体の置き所がなくなってしまうのではないかと思ひ、その医者を随分羨ましく思ったことがあった。

またアメリカの女の兵隊用月経帯がOSS等で一時売っていたが、日本のものよりずっと、サイズが大きく彼女等のヒップの偉大さ

を想像させたが、箱に同封している製品案内に、デИАパー・カバー（おむつカバー）とデИАパー・カバー・ホアー・レデイ（御婦人用おむつカバー）の広告がのっており、後者は月経帯をもじったものでパンティ型月経帯でも裏地が総ゴム地で、いかにあちらの婦人がゴム地の月経帯、ひいて言えばおむつカバーを触感的に好んでいるかが判り、おしめといえぱすぐ恥かしがる日本の女性に較べてマゾ的傾向の強さと豊かなビタリテイーとがひしひしと感ぜられた。

奇クに載っていた赤井茂君が病院で女の人がおしめをさせられているのを見たという様な記事を拝見したが、事実この様なことは多いらしく私の知っている隔離病院の医者の話によると赤痢等にかゝった女患者が病気が重くなつて下痢がひどく看護婦に便意を訴える暇もなく粗相をして仕舞う事が多くなると、敷布団にゴムのシートをしき、おしめをお臀の下に三、四枚あて、更に四、五枚程のおしめの真中にビニールの布をはさんで当ててやるのだそうだ。

とくに若い婦人患者が看護婦におしめをして貰う様なときはカーテンか何かで囲いを作り同室の患者や附添の人には見せない様にし、医者もその時は病室から退るようにするそうだが、私の友人は前に在る建物の二階の廊下からこっそり目撃したらしく、その話による

と赤痢で入院した二十二、三のまるぼちやの可愛らしい娘さんの附添の人がよく洗濯したおしめを干しているの、これはと思ひこつそり前記の場所に行つて暫く様子を見ていた所、その女患者は危篤寸前の昏睡状態だった看護婦や附添の人にピンクのビニール製の大きな防水腰巻をしてもらっている姿がガラス窓を通して上から覗かれたが、真白なお臀や両股と浴衣地のおしめやビニールのピンク等の色合いのコントラストが当分の間、焼きつく様に眼底に残っていたそうだ。一般に胃腸病患者に限らず重病で意識不明の患者や婦人病からきたとくに三十前後の初妊の女性に多い泌尿器障害で年がら年中知らず知らずの内に少量つつ粗相をしてしまふ病気の人の病舎には、別に赤ん坊が入院しているわけでもないのに何時もおしめの満艦飾が埋められているのだ。

なかでも一番悲惨なのは事故等で手足を失つたり、排泄器の神経系統を破壊された人々は、あつと思ふに一度に粗相をしてしまふので大小便の始末をおしめに頼る外なく、現に交通事故で両足を切断した某女優も約半年間排泄器の神経機能が回復せずおむつカバーをしていたそうだ。

しかし年増の女や若い娘がおしめをする姿は病人とはいへ、奇妙な色気があるに違いない。

いまではそんなに流行なくなつてしまつたが戦後ラジオの人気番組として「二十の扉」が一時流行つたことがあつた。私も愛聴者の一人だったのでその頃はどれ一つ逃さずに聞いていたが、ある日の問題に植物としておめが出たことがあつた。勿論場内からはどつと笑い声が湧いたが、最初の質問で某医博が「それは食べられますか」と聞いたのは傑作だった。その内に衣類であることはわかつたが仲々当らず鐘近くになつてゲストの某女優が「身体を腰から上と下とにわけて、下の方に着けるものですか」と云つた時には、そのスターが頂度肉体女優として売出している人だけにいささか嬉しかった。その時はたしかに鐘が鳴つてしまひアナウンサーからその答を聞いて、さすがにもの好きの解答者のレギュラー連中も失笑していた。

その後一年程たつて、やはり同じ「二十の扉」に植物という題で、但し今日では鉾物のものもあるとして「おむつカバー」が出たことがあつた。これなどはなかなかひねつた出題で植物の場合はゴム製おむつカバー、鉾物の際にはビニール製おむつカバーを指しており、頂度、妹の友達が一緒に放送を聞いていたがラジオの陰の声でその答は「おむつカバー」と云われるとあまり悪そうに私の顔をじろじろ見ながら笑つていた。その時はほとんど質問が進み十問近くでその答が下着と判つたが

やがて柴田早苗女史が「いま私自身にそのものを着けていますか」とアナウンサーに質問したので会場は大笑いしたが、頂度妹がこの質問を聞いてなかったので友達に「なんだって」と聞いたところ「つまり柴田さんがね、

いま自分がおむつカバーしているかしらって質問したのよ」と妹に笑いながら答えていたが、私には妙に女の子達のその時のムードがエロっぽく感じられた。一方扉の方は柴田女史の一人舞台で遂に答を当てたが、おしめや

おむつカバーのことを口にすると若い女の人から受ける感じは、おしめファンの私にとってなんともいえないものである。

(この項終り)

ファンタジック、ストーリー

「黒人少女の飼育」

△南国の一人無人島にくりひろげられるサドプレイ▽

黒

岩

巖

スタンダードは自分が醜男のため欲望の理想型として、「赤と黒」を書いたのと同じく現代社会の下層階級である私は、その理想型を十六世紀初頭の新しい△世界時代▽の美しい白人青年に求めたい。

その白人青年は鬱勃たる青雲の野心を抑えかねて、母国を出て発ち新世界の植民地を訪ねた。新しい貿易が興り、現地住民を酷使することによって得た莫大な富が面白いように集まる。彼は大いに働き、瞬く間に巨富を築いてしまう。

そういつた或る日、彼は港の近くの奴隷市場へ労務奴隷を買いに行った。ところが今迄

金儲けにばかり血眼になっていた、この白人青年に、初めて恋の神がさやくことになった。奴隷市場につながれている数ある黒人達の中で、ひととき大柄な美しい黒人少女が恥かしげにうつむいているのであった。

小麦色の肌は油を塗ったように光沢があり赤道直下の光線の中で輝やかしいばかりに光っていた。彼女はその身体の美しさに比例して、他の奴隷たちと比較にならぬほど高価で

あったが、その白人青年は、他に予定していた買物をすべて諦めて、とうとう彼女を手に入れてしまった。

白人青年は彼女の手足に枷をはめて錠を下ろすと、早速馬車に乗せて、郊外の高台に建築したばかりの邸へ戻るのであった。馬の尻を鞭うちながら、彼の頭には、或るプラトニックな、またサディスティックな恋の形式が浮んでくるのであった。

柔かくカールした縮毛、つやつやした黒い肌、カモシカのように強靱な四肢、すらりとひきしまった全身、彼女こそ彼の理想型の肉体の持主だった。しかし、彼が如何にこの黒人少女が気に入ったからといって、白人専制の当時として二人の結婚等は思いもよらなかった。白人こそ、この世の王者だったからである。白人青年は、この苛酷な圧政に馴らされて至極従順な一人黒人少女を一匹のマゾとして育てようと思いついた。

彼は印度洋に面した一つの小さな島を捨て、価値同様に買取り、そこに一軒のパンガロを建てた。彼の邸からは港へ出て舟でその

小島まで三十分とかからなかった。彼は余暇をみて、そのパンガローに最小限度生活に必要な用品を運んだ。そして、その庭に一つの犬小屋を作った。

彼がこの島へ移ったとき、一緒に連れてきたのは、黒人少女と他に一人の黒人ボーイだけであった。動物としては一匹の馬と二匹の牛、空地は黒人少年に耕やさせて野菜を作った。犬小屋へは犬のかわりに、あの美しい黒人少女が鎖でつながられた。従順で生れながらに奴隷として馴らされていた少女は、彼の与える食物と鞭の味で、全く彼の意のままになるよう馴されていった。そして、この周囲三里にも満たない南国の無人島に、白人のサド青年と黒人のマゾ少女との間に、数々のプレイが始まるのであった。

朝、目覚めると、散歩が始まる。白人青年は少女の首に鎖をつけて庭から椰子の木立を歩かせます。彼女の豊かな胸のふくらみが歩くたびにゆらゆらとゆれる。浜へ出ると、黒人の鎖を解いて、ボールを海へ向って力一ぱい投げつける。少女は出来るだけ早くそのボールを口で拾って、御主人の前に届けなければならぬ。波の間に投げられたボールを見失ったりすると、白人の鞭がいやおうなしに少女の豊かな尻にうち下される。

この朝の運動が、少女がくたくたになるま

で続けられると、少女は小屋へ入れられ、やと朝の食事が与えられる。こうして、野性的な彼女の姿体はますます美しく成育してゆくのであった。

黒人少女は、肉体が美しく生育するのに比較して、知的な教育を受けないので、白人の喋る言葉といえ、立て、走れ、来い等という簡単な単語しか知らない。全く一匹のマゾの動物と化してゆく。

白人青年がこの島に滞在している間の身の廻りは主として、黒人ボーイの役目である。昼は、黒人少女はボーイの指揮で、いろいろの家事をやらされる。ボーイは自分を尊大にするため毎に少女をいじめめる。パンツ一枚の肌へ幾度となく鞭がうち下される。彼女は早く夜がきて、犬小屋へ帰って寝ることを欲するようになる。

しかし、その犬小屋での生活もあまり快適なものではない。夜のとぼりが下りると、彼女の長身は狭い犬小屋に押し込まれて、入口には蓋がされる。

静かな島の夜——彼女は小便をするにも、外へ出して貰えない。尻のあたりへあてがわれた金属製の便器の中へたれ流しである。彼女はこうして朝の散歩と、そのあと食事と待ちこがれながら寝につく。

少年時代に読んだ冒険小説が、時々夢の中で、以上のような幻想を作りあげることがある。余りにも荒唐無稽で、読者の中には笑われる方があられるかもしれない。本誌で、サジスチンが、犬や獣になぞらえて男性を苛めることに喜びを感ずるという話と同じだと思えばよい。近來、「女奴隷」の口絵や文章が掲載されているが、私にとって大いに面白く、今後もしどし採用して頂きたいと思う。

殊に黒人女奴隷の育の高くすらりとしたのが、白人青年に鞭打ち仕込まれているといった構図が望ましい。ここに、「女奴隷の柔かい馬」と「追い立てられる奴隷女」の二題の絵を同封します。いずれも、盛装して上拍車のついた乗馬靴に身を固めた白人青年が、腰にはピストルと短剣を提げ、右手には乗馬鞭左手には、黒人の奴隷少女の首環につないだ鎖を握り、馬にしたり、或は後手にした手枷に鎖をつなぎ、鞭で少女の尻を叩きながら追い立て、ゆく趣向である。

【編集部より】

原稿に同封された絵は、そのまゝ製版に回すことが出来ませんでしたので、残念ながら割愛しました。

「或る切腹マニヤの戀文」

笠原孫之介

一筆啓上仕り候。秋更けてそぞろ人肌恋しき候と相成り候いて、あちこちの樹々の葉紅葉など、ひらひらと一片三片舞い落つる落葉のえも知らぬ物悲しき風情。人の命のうたかたにも似たる趣にも候。

其許様如何に在し給い候也。あの過ぎにしの甘く切なき一夜の契、我が心底に今尚彷彿と浮びおり候。君が麗わしき笑顔、澄みたる瞳、しなやかな姿体、今や悉く我が所有にて候。会見えぬ今日此頃の狂はしき悶々の情只々一日も速かに其許様に会見え、恨み辛みの数々告げたき思いにて候。最早君なくして何んぞや此の世に生き永らうべきに候也。げに君こそ我が求め来たりし理想の乙女にて候而して永き月日潜めし我が忌わしき悪癖、其許様との一夜の仇枕に蘇りて候、君が真白き柔肌、形よく隆起せし御腹、此れこそ我が憧れ、恋い焦れ来たりし得難き至宝にて候。嗚呼、君が悩ましくも可憐なる御腹、何卒我が

愛撫の掌に委ね給わらん事を。若し許しあらば、我が悦楽これに過ぐるもの無之候。はたまた、其許様の可愛ゆき玉の御腹を倦くことなく賞で候いて、其れが肌を刃物もて切り裂き給わば、君が苦痛の情我にこよなき悦虐を給うものにて候。たゞたゞかゝる思いは妄想に過ぎ申さず。何んぞや、恋しき人の御肌に刃うち振うことの出来候也。熱き接吻もて、愛しき君が御腹に愛の証を刻み奉ることにて満足に存じおり候わば夢々御心傷下さる勿れと願ひ上候。只々我が愁うるは、かゝる呪わしき性癖を備えし我を嫌悪し給ひ、そが果、我を捨て給うも測り知らぬ思いにて候。何卒かゝる我を憐れなる輩と思召し、優しき御胸の中洩し給わば我、感泣三斗の思いに御座候えども、もしや其許様の情無き言の葉給ひ、お姿お隠しあらば我草々の根を分け、君が消息とらえ参らせ冥土の道伴、愛憎の刃もて君が御腹を掻き裂きお命頂戴仕り候後、我も亦

己が腹を無念の刃もて掻き切り、不浄の諸々の臓腑引き出し君が冷き御顔に役げつくる覚悟にて候。さまでに君が御腹の肌に恋い焦れし我に何卒、何卒、色良き言の葉給わらんことを伏して願ひ上げ候と共に、此の世の行く末々までも共々君が愛の草枕に寝ね申し度く存じおり候。

さて過ぎにし其許様との一夜の愛の契りのみぎり、我が腹の生々しき創跡、其許様お目に止め給候いて、そは如何なされ給しやと宜えども我只々恥しくも忌わしき思いにて黙として真実告げ申さず候えども、君が執拗なる催促、はたまたま好奇の眼、御顔に朱さし来たり給ひし其許様の妖しき美しさ、ことの以外に思ひ候共に我愈以て困惑の極に達し候。我未だ曾って何人にも告げ申さぬ身の秘密、何んぞや易々諸々と語り参らせ得べけんや。しかして今此の機を利し断腸の辛き思いにて恋しき君に、我が異常の性癖、自虐、加虐、被虐の悦楽、切腹憧憬の悲しくも亦切なき願を件の文に託し告げ申さんと欲し候えは何卒幾何なりとも御理解下され候わば我が悩みたちどころに消え失せ明日よりの君が逢う瀬に限りなき悦び湧き出す思いに候とてとくに優しき理解もて御読覧の程希うものにて候。

今を去る三年前の事にて候。当時我失業致し、行く先の糊にも困窮致しおり候えども、うち続く激しき就職難の時勢とて容易に職を

得ること出来申さず、徒らに己が身の今更乍らの不甲斐なさに独り枕を濡しおり候。果報は寝て待ち給えと誰が言い申したか知らねども、己が眼前に牙々と聳ゆる就職難の牙城思わば我身暗黒の涯なき奈落へと墜ち行く思いに候。

かゝるみぎわ、我が件の性癖出て来り候いて、流血の願望、切腹の妄想とめどなき激しき勢もて己が体内を駆け巡り候。はたまた自決の誘惑に身も心も摩り減る思い致しきものに候。かかる世智辛き世に生き永らえて何んの意義有之候也。一思いに我がと我腹を刃もてかき切り相果て申さば。男子の本懐之に過ぐるものなきに候わず也。しからずんば恋しき乙女が腹の柔肌さして、刃もて切り裂き、我身共々浄土の彼岸へ旅立ち申さば、さぞや快くもまた楽しかるべきことに候。しかし最早我が身浄楽の権化と化し果て候。誇り高き理性もてかゝる不浄の思い静めんと欲し候えども、血に飢えし悪魔の雄叫び如何んともなし難く所詮無駄のことにて候。研ぎ澄したる鋭利なるかみそりの刃の放つ無気味なる光己が腹を、真一文字にかき切る自虐の快さ、留どなく流れ出する真紅の血潮ぞくぞくと我が身に疼きを覚え候。

頃は盛夏とてうだるが如き暑さ、人目忍ぶ我が身は、限り無き生命力をもてところ狭しと我がもの顔に蔓る、名も知り申さぬ丈なす

草木、そが輩の放つ一種異様な臭気、恰も人が血の腐敗せしにも似たる嘔吐を催すが如き忌わしき香りにて候。かゝる道なき道を我身独り悲しき願いを抱き漂い候。喉は干からび、玉なす汗は我が衣辺に滴り落ち候いてたゞひたすらに死出の旅路へと急ぎ候。風そよろとも吹き来らず。辺りに立ち罨むる蒸せたる熱気、かかる最中に申す我が心半ば狂い果て候いて傍なる松が根かたに坐し候。しかしておもむろに下に着けし衣服下方へ降り、隅なく己が腹露出せしめ、しばし我が生涯を共にせし愛しき我が腹に愛撫の手さしのべれば、汝がまた恋しき乙女の愛らしき玉の腹にも思い候いて、えも申さぬ快き感溢れ出すぬ思い致し候。

我が刃物持ちし手激しく打ち顛え、とも致さば躊躇い勝ちなる我が弱き心根に鞭加え、満感の思いにて右下腹へ切先を圧し当て、摩るが如くに右へ真一文字にふりふりと切り裂き候えば、激しき痛み襲い来たりて目の眩む思いに候えども渾心の力もて伏し倒れんとする我身支え、創口如何にと見候わば、嗚呼美しくもまた無惨なる様に候。ぱくと口開きて上下に巻き返りし真白き肉のぞく創口、時移さず吹き出す鮮血、そは生温き感触皮膚を伝いてどくどく地上に滴り落ち候。

嗚呼快哉、切腹の醍醐味、自虐の悦び、己が生を享けしより此の方、夢に描き続けし腹

切りし無惨なる姿今此処に現に展き候いて、我身の念願遂に達し申し候。嗚呼快なる哉、こんこんと湧き出する夢幻の泉に漂う心地にて候。父母より受けし此の身体、敢えて毀傷せざるは孝の輩也と誰が曰い候やも存じ知らね候えども、我もともと罪深き不孝の輩、何んの今更悔み参らせ候也。世の諸々の人、かゝる我身をこよなく見下げ果てし輩と罵らば如何程までも罵り給え。最早致し方無き我が身の運命、切り裂かれ赤き不浄不潔の血もて染め出されたる我が国魂共々地獄の涯にと落ちたき思てに候わば、神々におかせ奉りてはかゝる罪深き我が身を許し給うものをと存じおり候。しかれどもあくまで罪深き我身、幸か不幸か知らねど、創口意外に浅く数日余の治療にて創癒え申し候いて、のめのめ今日迄生き永らえ来たりし候ところ、其許様との縁の訪れ、恵深き女神の御愛、何卒我身再びかゝる浅間しき行い犯すこと無き様、君が御胸に抱き給い愛し下さらん事を八重が膝を九重にも折り申し願ひ奉り候。

愛しき其許様へ

迷える罪深き羊より

返信

御文拝見仕り殿御の愛の深さに今更乍ら、有難く、嬉しく存じ奉り候えども、殿御一人胸の中に秘めたる悶々の情、愛しくも亦羨し

きものにて候。今日こそは明日こそは殿御に打ち明けんものと思ひ感来たりし、我が思ひのたけ、恥しく身も世も無き思ひにて告げ申さんと思ひ候。秋の夜長の一人寝の枕、虫の鳴つる声すら君が御声かと思ひ候いて、只々殿御御恋しきの情催し、仮寝の枕辺にはらはと涙うち流し候、思ひは過ぎにし一夜の殿御の我が身に給ひし情、なつかしくも亦悩しき思ひなりきものにて候。はたまた、殿御とのそのきわのみぎり、我が目にとめし傷ましき御腹の創跡、只事ならずと思ひ聞き参らせ候えども、巧みにそが事より避け給ひ候。しかれども我が靈感見事的中致し候。お腹召すを無上の悦楽と思召しの殿御の心中何んぞ夢々見逃し奉り候ぞ、そは同類の病癖持つもののみの鋭き感にて候。嗚呼かゝる殿御下し給ひし神々に感謝の思ひを奉らんものに候、誠に縁はいなもの味なものにて候。今更何をか隠し申さん。我も亦殿御のその如く、己が腹をこよなく愛し候ものにて、願わくば、

正月は何といつても、時代劇のチャンバラ映画が大もてである。それだけに商魂のたくましい映画会社は、ハランパンジョウの時代劇映画をつくりあげ大いに稼いでいる。ハランパンジョウにするためには、危機に襲われた美女を、美剣士が救援におもむかなければならない。ここに可憐な縛られ女優の存在が

我と我が腹を思う存分かき切り虐げ、かかる忌わしき浅間しき我が命を絶ちたき誘惑を覚えものに候えども、あまりにも恐ろしきこと故、刃無きものにて、我が腹切り裂く遊戯に浮身をやつし来たりしものに候。あゝ女性の身乍ら何んぞ穢しき病に候ぞ。かゝるおこまがしき我身、前世の宿命と半ば諦め時来たりなば、潔よく腹かき裂きて失せ申さん覚悟抱き候えども、かくの如き妄想を描くみぎりの悦楽何に譬うべきや。げに自虐の悦びと申し候いて誤りなきものにて候。かゝる節、恋しき殿御の御情給ひ我身の果報これに優るもの無きに候えども、只々恐るゝは男心の頼りなさ、はたまた殿御の変心のみに候。さらば我身地獄に召さるともいさゝかも厭わねど、我が身捨て給わば、我殿御の御前にて恨みの泪はらはらうち流し、憎しみの言の葉思ふ様吐き出し、君が御たねを宿せし憎き男の血もて穢れし我腹縦真一文字にかき裂きて、腹の赤子共々腹綿引き出し尚あきも足らず、赤子腹

時代劇にはなくてはならぬものになる。

時代劇は何といつても東映である。東映の映画には、必ずといってよいほど縛られシーンが出てくる。まず第一に、市川右太衛門主演の「御存知旗本退屈男・謎の決斗版」がある。

これは腰元姿の美空ひばりの猿くつわに後

をも切り裂きたき覚悟に候わば夢々お捨てのて無きよう、しかと御約束下され度候。而して殿御共々仲睦しく幾久々までも添ひ奉らん思ひに候わば何卒熱き御寵愛の程願上げ候。心行くまでも我が身に愛の虐げ給わば我最も幸福ものにて候。そが為、たとえ命捨つるとも後悔無之候。されどかゝる恥しき事ども打ち明けし今更、殿御との逢う瀬の波枕、只もう恥しうて姿消し申さんものと思ひ候えどもいや募る逢いたさ見たさの情ひしひと身に泌み候いて、はやる心、ただひたすら押えおり候わば、一時も速かに鳥の化身と相成りて天翔け来り給わんことをひとえに願上候。

かしこ

恋しき殿御へ

果報なる乙女

拝

手しぱりという正月ならではの縛られ姿が出てくる。近頃色気のましてきたひばりが、退屈男の邸へスパイで入込み、退屈男邸を襲った味方に縛られるのだ。事情を知っているらしい右太衛門に縛られながら見上げる姿に何ともいえない哀愁がある。もう少しぎつちり縛られていたら余計によいのだが、この映画

では、最近田代百合子に代り、よく縛られている三笠博子が、退屈男の妹の浜路で縛られる。退屈男では、いつも浜路はかどわかされ縛られる。これは定石である。三笠の場合は

相当ひどく扱われ、強く縛られつき倒され気の毒である。ニューフェイスのかなしさか。

次は東千代之介、伏見扇太郎主演の「忍術左源太」で、これも城のお姫様、手まり姫になって、三笠博子がかどわかされ縛られる。黒い布の広い巾で猿ぐつわをはめられ、荒縄でしばりあげられ、山中の小屋で、原健策らにいじめられる、そこへ千代之介の左源太が救いにくるのは筋書き通りである。

松竹では、高田浩吉主演の「黒門町伝七捕物帳」の「花嫁小判」がある。宝塚歌劇にいた伊吹友木子が両替屋の娘おいくで、きつつき組にさらわれ、地下室で縛られる。それを改心した浩吉の霞の清次が救いに行く。昔の仲間から「送ってやれ」といやがるおいくを手下達が押えつけ、猿ぐつわをはめ、荒縄でしばり上げる。それをカゴに乗せて清次は送って行く、淋しい所で昔の仲間は去り、清次がほどこいてやる。恋人に助けられ、「清さんよく助けにきてくれたわね」とすがりつく所

楽しい正月映画の

縛られ女優達

嵯峨美也子

で、清次は「昔はあの仲間だった」と告白する。地下室でおいしくが身もたえする所を押さえ、縛りつけるシーンは迫力があつた。最後に女賊の浅茅しのぶのてんがいお町が、仲間と縛られて引かれて行くシーンが写る。後手縛りがよく撮れていた。

もう一つ、中村賀津雄の「晴れ姿稚児の剣法」で旅芸人座長の宮城千賀子と、小山明子が縛られ、賀津雄の少年宮本武蔵が、その恋人の小山明子らを斬れと命じられる。「武蔵さんはそんな悪い人」とすがりついてくる後手縛りの小山明子の縄をバラリと切るのだがハッとさせる。宮城千賀子の縛られ姿も定評のあるものである。

年末には東映の「水戸黄門漫遊記」の「幽霊城の佯僂男」で、月形の水戸黄門、千原しのぶの緋牡丹お蝶、園ゆき子の芙蓉姫が、立ち縛りに柱にしばりつけられる。千原も縛られ女優のさいたるもので、売出しのこの「水戸黄門」では毎度のごとく縛られ、身もたえ

する所も上手である。

次ぎに時代劇の縛りをチョッピリ書こう。

東映の正月作品の片岡千恵蔵の「戦慄の七仮面」では、千石規子が文字通り、天井高く手首で吊し上げられ、吊し責めにあう。千石規子はよく残酷に責められる、縛られ女優である。「奴隷街」でも、長縄絆一枚で、柱に強く縛られたが、この吊し責めは大変苦しかったと思う。迫力もありすぎた。「お母さんお母さん」と叫ぶ捕えられた田代百合子が縛られなかったのは残念である。

松竹の岡田英次の「顔のない男」で、浅茅しのぶが、婦人記者で、椅子にがんじがらめに縛りつけられ、ムチでなぐられた。岡田英次のルパンに白状させるためには、女をいじめるに限るという敵のために責められるのである。この撮影のために浅茅は三時間以上縛られっぱなしでフウフウいったそうである。さぞつらかっただろうと思う。

物足りなかったのは大友柳太朗の「御存知怪傑黒頭巾」の「危機一髪」で縛りのなかったのは残念だった。このような映画には必らず縛りがあるだろうと期待して見に行く観客のことを企画者はよく考えておいてほしい。

(おわり)

× × × × ×

幽 囚 十 ケ 月

戦後の刑務所内の囚人の生活を、これほど迄リアルに描き出した文章をまだ他に知らない。誇張も作偽も、いささかも含まないこの一文は、文献としても極めて高い価値を持つて信じて疑わない。

春 田 一 郎

再 び 新 入

十房の窓は中庭に面していた。可成り沢山の植込があり、その樹間には瓢箪型の池がある。池の傍には終夜燈が白い光を立木の梢や池の面に投げ掛けていた。何か公園の一角を見ている様で、とても刑務所の中とは思えぬ美しい眺めであった。

早野君に聞くと、病舎は毎朝の清掃検査から除外されているのだそうである、誠に楽なことである。医務課に於ける第一夜は明けて朝となった。起床してざっと箒ではき出す。他の舎房と違って清掃検査がないのだから、布団を切り立てた様に真直ぐ積み重ねたり、洗面器や雑布の置場所に気を使う必要はな

い。況んやあん巻と取組む必要などは全くない。朝の点検が終ると看守が扉を開けてくれる。他の房と違って、十房と十一房は房の中に水道がないのであるから、外へ出て洗面しなければならぬ。はぶらしとタオルとをぶら下げて浴場へ行って顔を洗う、用便をしたりにしているうちに朝食が来る。味噌汁の桶は二本来るのであるが、一本から他の一本へ注ぎ足して患者用にする。配食の方法は中夕食と同じであるが、副食物の盛り分けがないだけに朝食は簡単である。唯味噌汁の注ぎ方には注意しないと古い受刑者を怒らせる結果になる。と云うのは、味噌汁を注ぐのに右手で杓を持って汁をすくい上げ之を左へ傾けて食器に注ぐのが本当であるが、之を逆に右手で

持った杓を右へ傾けて注ぐのは縁起が悪いと云って受刑者は非常に忌みきらうのである。配食を終ると私達の朝食である、病舎のことであるから粥食の患者は沢山ある。併しその中には食事を断る者もあるので、お粥は常に二、三人前は余る。お粥には梅干が一ケ浮してあるが、この梅干を食べる順序が不文律で決っていて一ケの場合は首席の看病夫、二ケの場合はその次の看病夫と二人と云う工合に分配する。だから新人の時は梅干はめったに口に入らないのである。看病夫の食事の準備をし、味噌汁を注ぐのは勿論新人の役目である。味噌汁に就ては私は看病夫になった早々失敗したことがある。前に述べた様に味噌汁の桶が二本来る中、一本に注ぎ足して患者

用して配食するのであるが、全部に配ってもその桶には味噌汁が相当残っている。患者は殆んど全部が増汁を欲しがらないから、これだけ残ってしまうのであるが、私はこの残った味噌汁を勿体ないと考え、看病夫用にとつてある他の一本の桶にあけてしまったのである。この時はひどく叱られた。隔離病舎の配食を済ませて残った味噌汁はあぶなくて食べられないから、捨て、しまふのだと云うことであつた。看病夫は原則としては三等飯で、工場回診や防疫に行く者のために二等飯が毎食二人前宛来る。併し、何や彼やで患者の不食があつたりするので、看病夫の食事は豊富なものである。食器のあと始末をするのは勿論新入の仕事であつた。

食事が済むと、八時の出役（シユツエキ）迄、病舎の廊下を掃除する。病舎付きの看病夫は患者の房を掃除する。私達事務所の者は先ず長い廊下をざつと掃き、そのあとへしめらした鋸屑を撤いてデッキブラシでこする。そのあとから鋸屑を掃き集め、更にそのあとから仕上の掃き掃除をする。廊下は之で塵一つ止めない迄に綺麗になり、しめった鋸屑でしつとりと艶が出るのであつた。掃除が終わつてもまだ時間のある時は青粉で本錠を磨いてピカ／＼光らせる。

八時になると佐藤部長が出勤して、「事務所集合」の号令がかかる。病舎付の看病夫を

残して私達事務所で働く者は整列し番号を取つて事務所へ出役する、事務所へ出ると夫々の持場の掃除をする。私の持場は調剤室であるが、廊下を掃くことゝ、医務課入口の石段を洗うことは新入の仕事と決められているので、病舎を掃除した残りの鋸屑を事務所の廊下にまいて掃き清め、次で石段を水に濡らしてデッキブラシでこする。之が終つた時分に丁度小林先生が出勤するので、調剤室の戸を開けて貰い、部屋を掃除をする。之が終つてその日の特場の仕事に取りかかるのである。

医務課へ来た当初は気が付かなかつたが、少し日が経つにつれて、私の掃除の仕方が拙いとか、食器の洗い方がぞんざいだとか色々噂が看病夫の一部の間で起つてゐるのをちらほら耳にする様になつた。私としては下手ながらも一生懸命掃除をしたり食器洗いをやつたりしてゐる積りなので心外に堪えなかつたが、間もなく之は私自身に向けられてゐる非難でなくして敵本主義のものであることが次第に分つて来た。一つは小村薬剤士に対する反感であつた。小村先生は善良で小心な人であるが、刑務所へ赴任して日が浅く、受刑者の取扱いが下手があつたと共に、人に対する好悪の念が激しい人であつた。それに小村先生には誰にぶつ／＼け様もない大きな不満が一つあつた。先生は終戦迄は外地の衛生技官をして居り、植民地の官吏として物心両面に

大に羽振りがよかつたらしいのであるが、刑務所に於ける待遇は平の看守であり、インターンを終つた許りの若い医者が法務府技官として官舎も貰つてゐるのに、先生は官舎が貰えず妻子を国に残して、合宿所の一室で自炊をしてゐると云う状態であつた。先生のこの不満が事毎に先生の言動に現れ、先生を融和性の乏しい人にして居り、之が看病夫にも反映して、看病夫達は小村先生を毛ぎらいしてゐるのであつた。併し職員である先生に受刑者である看病夫が正面からたてつく訳には行かないので、調剤室係りの看病夫の手を他の方面に向けしめ、間接のいやがらせをやつた訳なのであつた。第二の事情としては、従来看病夫の新入が来ると、第一番に隔離病舎の係りをやり、次に平病舎を受持ち、然る後に欠員の出来次第、事務所へ出して貰うと云う順序を踏んでいたのである。従つて事務所に

出役する看病夫は病舎に働く看病夫に較べて一枚上位だと云う考えが看病夫にあつたのである。然るに私は隔離病舎や平病舎の患者のいやな世話をすることなく、而も事務所付の看病夫の中でも、物資が最も豊富にあり、之を反則を起すことなく取扱わねばならぬので最もむづかしい職場とされてゐる調剤室へいきなり配属せられたのであるから、他の看病夫、特に病舎付の看病夫の間に、この先例のない人事に対する不平が果然湧いたので、之

が私に対するあて付けとなつて現れたのであつた。看病夫は一般の受刑者の中にあつては有力な存在であるから、薬とか、ガーゼや繃帯を他の受刑者からせがまれる。看病夫としても要求を聞き入れて置けば何かと便利なこともある。併し受刑者のほしい物はすべて調剤室でなくては手に入らぬのである。そこで調剤室勤務の看病夫は自然、看病夫の元締のような立場になるもので、調剤室の看病夫の機嫌を損じたら他の看病夫は手の出し様がなくなるのである。従来は一級の森田さんが調剤室を握つて居り、他の看病夫達も森田さんには納得して頭を下げ居つたのであるが、之が新入の私に代ると、私に頼まねばアスピリン一包、手に入らず、さりとて新入の私に頭を下げるのが業腹だと云う心理と、私の立場に対する嫉妬が色々の反目として現れて来たのであつた。併し、私としては何のことがその当時はわらず、呆然と傍観しているより他なかつたのであつた。

調 剤 室

調剤室の仕事は相当なものであつた。小村先生や森田さんに徐々に教えて貰つたが、薬の名前を一通り覚えるだけでも大変な仕事であつた。事務的な仕事としては四、五冊の帖簿の記帳があつたが、之は私も慣れている仕事のことゝて何でもなかつた。併し薬品の取

扱いや注射薬の出し入れには全く困つたものであつた。薬品は一般受刑者用のものと、職員用の団体用のものと二種類あり、別の薬棚に入れてあるのだがこの区別も最初は仲々むづかしく、通常薬と劇薬とを同じ戸棚にごちゃごちゃに並べてしまったことも度々あつた。

新入としての気兼ねや勝手の分らないことばかりで、医務談へ来た当初は全く忙しく、且つつらい目もしたが、その代り「起床、点検、シヤリ三本」の単調どころではなく、日の経つのが全く早く感じる様になつた。

七月末になると、近く仮釈放を予定せられている森田、吉田、金王の三人に対して司法保護委員の面接があつた。この面接が済むと十中八九迄は一週間乃至一ヶ月程の間に仮釈放があるので、面接が済むと、どんな受刑者でもそわ／＼して落付かなくなつてしまう。

私の経験に依れば受刑生活に於て最も苦しいのは無聊に苦しむ新入の二舎時代でもなく、工場、の時代でもなく、刑期の三分の一が経過して、司法保護委員の面接を待つ間と、面接があつてから実際に仮釈放になる迄の期間である。仮釈放は受刑生活に於ける唯一の目的である、仮釈放に対する期待が身を刻まれる程切実なだけに、万一仮釈放から除外される様なことがあれば、期待に対する反動として嬉しさより不安が先に立つて、そわ／＼と落付かず苦しむのである。三人の看病夫もこの

例に洩れなかつた。先ず食事のどを通らなくなる、呼び出しの看守の姿が見える度に若しやと思つて胸が高鳴る、仕事は勿論手につかない、夜は仮釈放になつた直後の夢を描いて仲々寝付かれない。刑務所の門を出たら先ず煙草をぐつと胸一杯に吸い込んでみたい。

次は、何でよい甘い物を手当り次第食べてみたい、之があらゆる受刑者に共通の心理である。酒と女を考えるのは煙草と甘い物で一応気持が落付いてからである。之は受刑者にとつては煙草と甘い物が酒や女よりも重要性を持っていると云う意味でなく、先づ刑務所の門を出ると直に充足の出来る慾望に飛び付くのである。之等の事が夢でなく、略確實に何日かの後に実現するのであるから、仮釈放を間近に控えた受刑者は夜床に入つてからの等のことをかみしめ味うので目が益々冴えて行くのである。面接が済んでから期待と焦慮の十数日が過ぎて、吉田、金王の両君は八月上旬の終りに、森田さんは中旬に夫々挨拶さえ忘れる程の興奮で張り切つて刑務所から去つて行つた。

斯くして私は薬の扱い方も知らぬ間に、単独で調剤室に働くことになつたのであつた。三人が仮釈放になる少し前、山本さんと云う老人が新しく看病夫になつた。前から八房付でいる山本さんと同姓で、名前は古い方が「久美太郎」、新しい方は「末太郎」と云つた

ので、私達は「久美さん」「末さん」と呼んでいた。二人共既に六十路の坂を越した老人で、刑務所にいる方が長かったか、娑婆にいる方が長かったが分らない典型的の老囚であった。二人ほどのヴェテランになると、幽囚の悲哀もなければ獄窓の感傷もなかった、刑務所に入っているのが苦しくもなければ、釈放になるのが嬉しいのでもなく、唯その日その日を無事に暮して行けば思い残すことがないのであった。刑務所から出た所で、二人共妻も子もない身の上であった。刑務所は彼等にとっては浮世よりも温い場所であった。釈放のことなどは念頭になく、面白ければ笑い、腹が立てば喧嘩をする、そして乏しくなった歯で私達以上によく食べる二人を見て却って私の方が老囚の悲哀と云うことを泌々と感じたのであった。「末さん」より一週間程遅れて待望の内山君が愈々医務課へ入って来た。彼は何しろ六年の刑なので、入所以来僅か二三ヶ月で比較的自由のきく看病夫にすることは戒護上面白くないと云う理由で、刑務課が渋っていたのであるが、漸く許可が出て、内山君は落付くべき所へ落付いたのであった。内山君の仕事は一口に云えば看護婦の仕事であって、検温、検脈、定期的の注射、診察の助手など仲々に忙しいものであった、仮釈放で出た森田さんは本来が調剤の係りであったが、看護方面をやっていた看病夫の適当な後

任がない儘に一時、森田さんが調剤と看護と両方を受持っていたのであるが、森田さんが出て、あのあとを私と内山君とが前の如く分担して持つと云うことになった訳である。

調剤室の仕事は段々秩序立って来た、森田さんの時は戸棚の中の雑品や薬棚の注射薬の整理が全然出来ていなかった。森田さんの悪口を云う者は森田さん自身自身や特に馴染の患者に打つ注射薬を誤間化するためには整理が出来ていては都合が悪いので、わざと乱雑にして置いて、いくらアンブルを取出しても分らないようにしていたのだと云っていた、私は之を整理した。

調剤室に於ける日常の仕事は相当盛沢山であった。朝の掃除を済ます頃には、病舎からクレゾール石けん液や石炭酸等や含嗽料の請求が来て居り、診療の方からはネオ・アルゼノベンゾール、ペニシリン、ロチノン、ピタミン等の定期注射薬や、ミグレン、ペロナール、アスピリン、ロート×散など常備薬の請求が来ている。之等の引渡しや、結核患者に対して支給する砂糖の計量を済ませると、隔日に保健助手に依って行われる工場回診用の備薬を補充したり、各拘置所、作業場或は刑務課等の常備薬を準備せねばならない。

休養患者、即ち仕事を休んで病舎に收容されている患者及び非休養患者、即ち作業に従事した儘で服薬している患者に対する定期投

薬は火曜日に三日分、金曜日に四日分を調剤するのであるが、投薬瓶を回収して之を洗ひ新しいレツテルをはり診療の方から廻付されるカルテに依って薬袋を準備するのである。

定期調剤日には延数にして数百剤を作らねばならぬのであるから、小村先生がカルテに従って薬を計量すると、私が之を乳鉢で混ぜ合せて、薬包紙に分ける、薬包紙を包む、それを薬袋に入れるという様に目の廻る様な忙しさに追われるのである。散薬が済むと、次には水薬の調剤である。やっと全部終るのは午後二時過ぎである。之と共に臨時投薬、即ちその日その日診察を受けた患者に臨時に投薬するのであるが、そのカルテの廻って来るのが二時から三時の間である。カルテの廻付を受けるのを待つて薬袋と投薬瓶の準備をなし、大急ぎで調剤をしてその日の内に配薬せねばならない。この様な仕事の合間々々に職員用の調剤や衛生材料の受払い、アスピリン、健胃剤、整腸散などの常備薬をいざと云う時のため出来る限り多数作って置かねばならぬので全く時間の余裕がなく、記帖の如き事務的の仕事は自然、夜が日曜日にせざるを得なかった。

受刑者がすべての点に敏感なのは当然であるが、私もその敏感さに驚かされたことがあった。小村先生は刑務所の経験が浅く、そのため長所も短所もあったが、私達受刑者を取

扱う上に於ても自由な人間と同じ様に考えていることが間々あった。刑務所に於て受刑者が官から支給される食物以多のものを貰って食へることは勿論反則であるが、小村先生はこの点に於ても割合に無頓着で、森田さんが仮釈放になる直前、先生は瓜とパンとを買ってきて森田さんと私にすゝめられた。私達は勿論辞退した。併し刑務所に慣れない先生は職員が食物を与えた場合は構わないという理由で強つて奨められるのであった。成程職員が食物を与えた場合は仮にそれが見付かつて、受刑者だけを罰するという訳には行かないので処罰を受けることはないのだが、他の受刑者の目が煩さいのであった。私達は頂戴することにして、調剤室の扉を全部閉め切つてしまい、調剤台の蔭にしゃがんでパンと瓜とを食へた。久し振の珍味で実においしかった。之でおしまいであれば別段問題はないのであるが、私達二人があれ程警戒を嚴重にして、絶対誰にも覗かれぬ様に万全の策を尽して飲べたにも拘らず、その日に早野君は之を知つてしまつていたのであった。之は全く驚くべきことであつた。最初は所謂「かまをかけた」のかと思つたが、相当具体的に知つていたので「かまをかけた」のではないことが分つた。併しどうして早野君がこの事を知つたのか、今でも分らない。半ばは事実を偶然にしり、半ばは受刑者特有の、特に早野君

の妖氣じみた第六感であらうと思う。医務課、特に調剤室は下手をするとならぬ火元になり兼ねない危険のある所である。薬品は勿論、ガーゼ、繃帯、脱脂綿、砂糖、アルコールなど、それこそ全受刑者が垂涎措く能わざる物資が揃つてゐるからである。大工に内緒で将棋の駒を作つて貰うのに、その交換物資として僅にアスピリン五、六服で足りるという様な実情であるから、ガーゼの一米あれば大変な交換価値があるのである。それだけに誘惑やだまされる危険が多い。手をかえ品をかえ、私から何かをせしめ様としてやつて来る受刑者が多いのである。こんなのにうっかり乗つたら身の破滅であるから、調剤の看病夫は特に注意深くなければならぬのである。老練な受刑者になると、刑務所にまだ慣れない若い医官をうまく口説いて、カルテに処方を書いて貰う、カルテに「ペーロナール〇・五、三包」とか「脱脂綿五〇G」とか医官の手で書かれてあると、それは最早、公の支給で、仮令それが明らかに物交の材料に使われると分つていても、渡さない訳には行かないのである。老練な受刑者はこの合法的な手を用ゐるのである。又、外科室などでは一寸油断していると、治療に來た受刑者が血膿のついたガーゼでさえも盗み去つてしまうのである。これ程、医務課は刑務所に於て反則を生む危険の多い所なのである。

八月初めの或夕方、もうそろそろ房へ引上げ様と思つてゐる時、特警の一人が慌しく調剤室へ入つて來た。手に透明な液体が二〇CC程入つた小瓶を持つてゐる。私は又何かあつたかと直感した。特警はその小瓶を小村先生に示して、中味の検査を依頼した。早速、小村先生が試験した所、内容はサルチル酸酒精であることが分つた。後に聞いた所に依ると圖書係の畑中君が何かのはずみにアルコールの匂をさせたことから、圖書係の房が特警のガサ(検房とこと)を受け、この小瓶が発見されたのであつた。サルチル酸酒精は五%のサルチル酸アルコール溶液で、いんきんの薬として使用してゐたものである。ザリ精(サルチル酸酒精の略称である)が液体の儘受刑者の手許にあることは考えられない。治療に使用する場合は看病夫が塗つてやるか、又は綿球にしめして、その場で局部につけさすのである。然も、現実にザリ精が受刑者の手許にあつたとすれば、それは看病夫の誰かがこつそりと手渡したとより考えられない。医務課内部に於てはレントゲン室も外科室も少量のザリ精を備え付けてゐるが、之等はすべて調剤室で作つたものを小分けしたものである。結局、根本は調剤室より出なければザリ精が受刑者の手に渡る筈はないのである。従つて疑いは当然私にかゝる訳である。課長佐藤部長及び小村先生が心配して、私に手渡

したことはないかと尋ねたが、私は正規の手續を踏んだもの以外は絶対に渡したことがないので、自信を以て取調べに否定することが出来た。他の看病夫達も一応取調べを受けたが誰も知らないという。看病夫達の間には暗い空気が漲った。お互の疑い合いであり、腹のさぐり合いである。看病夫の中の誰かがやったのに、卒直にいわないから全部が疑られていやな目にあうという憤懣である。畑中君は特警のきびしい取調べを受けて、ザリ精を薄めて飲んだことは自白したが、入手の経路に付いては頑として口を割らなかつたから何日たつてもザリ精の出所は判明しなかつた。而もザリ精は医務課から流れる以外に絶対に他から出ることはあり得ないのであるから、この儘推移すると、看病夫全体が連帯責任に問われる虞さえ生じ、看病夫の間の空気は益々險惡となつて行つた。併しこの問題も偶然のことからあつて解決を見たのである。畑中君の房からザリ精の小瓶が発見されてから十日程経つて、何かの機会に二舎の数房が一齊にガサを受けたことがあつた。その折、或房でコップの底に極めて少量の液体が残つているのを看守が何気なく匂を嗅いだ所、強いアルコールの匂いがしたのである。いう迄もなく、その房の者は嚴重な追及を受け、一人の受刑者が終に口を割つた。それに依るとこの受刑者はいんきんという仮病で、工場廻

診の都度、ザリ精を綿にしましたのを貰い、之をもつて部屋の間へ行き、局部に塗る様に見せかけて、予て手に入れて置いた小瓶にそつとザリ精を絞り出して貯え置き、アルコール分がほしくなると之を五倍位にうすめて飲んでいたというのである。更に追及されて、彼は特別の本を貸して貰う代償として、畑中君にこの小瓶を一つ渡したことも自白したのであつた。即ち之で看病夫にかゝつていた疑は完全には氷解した訳で、私も実にほつと安心した。ザリ精に含まれたサリチル酸は腐蝕作用があるから、之を飲めば胃腸に悪影響があり、サリチル酸を溶かしたアルコールは塗り薬のこととて必ずしも局方を使つてあるとは限らないので、全く危険なことをしたものである。この受刑者がいんきんでもないのにいんきんだと仮病を使つて、何故保健助手や看病夫の目を誤間化することが出来たかというとその受刑者はその房の壁が一部崩れて赤煉瓦がむき出しになつてゐるのを利用し、ガラス片で煉瓦をけづつて赤い粉を貯え、工場廻診の朝、自分の罌丸にこの煉瓦の粉をすり込んだのであつた。こんな小細工は明るい所でよく見れば直に看破することが出来るのであるが、二舎の廊下は薄暗く、それに患部が患部であるため、よく見ることをしないで一寸見て赤くなつて居ればいんきんだとしたのでこの受刑者は長い間仮病を使い終せて、せつせ

とザリ精をためることが出来たのであつた。受刑者の仮病を刑務所では「トンスケ」病というが、「トンスケ」病は非常に多いのである。或る受刑者が私にひつこく催眠薬をねだつた。併し私は彼の不眠症が「トンスケ」でプロバリンか、ペロナールを手に入れたら之を物交に使うのだということをよく知つてゐた。そこで私はいたずら半分試験半分に、催眠薬の代りにアスピリンにカンフル末を少量混ぜて、之を催眠薬と称してその受刑者に渡してやつた。その男は喜んで帰つて行つたが翌日けろりとして又調剤室の窓からのぞき込んだ。昨日の催眠薬の効き目はどうだったかと私が尋ねると、その受刑者は「お蔭様で、余程よく効く催眠薬と見えて一週間振でよく寝さして貰いました。」と答えた。私は腹の中で思わず吹き出したが、之で彼が自分で飲んだのではなく、物交で人にやつたのだと云うことがはつきり分つた。その代り、その薬を催眠薬として物交で手に入れた受刑者は催眠どころか、目が益々冴えて困つたことであらう。又、刑務所で疥癬になると伝染を防ぐため別の房に移し、作業を休ませ、毎日六一〇バツプの入浴をさせる。之も受刑者が目につける所である。ではどうして人工疥癬を作るかと云うと、縫針の先で指の股から甲にかけて、手を無数につつ突くのである。多少痛い、刺青にくらべた

らずつと楽し、作業を休んで、ブラブラして、毎日入浴が出来ることを思えば、多少の痛いぐらいは何のそののである。この様に針でついて一兩日経つと、手の甲から指の股へかけて無数の小さい水泡が出来る。之は一寸見た位では本物の疥癬と区別つかないので、悠々と「トンスケ」が罷り通ってしまうのである。毎日毎日平熱の続く健康な結核患者が夕方方の検温に七度四、五分の熱を作ることなどは朝めし前である。検温の看病夫は患者に体温計を渡して、すぐ他の房に入ってしまうから、次に集めに来る迄の十分程の間に細工は

ゆっくりと出来るのである。それは体温計を手にとって、片手の拇指の爪で体温計の底をトントンと軽く叩くのである。体温計の水銀は一旦上ってしまえば、それより熱度の低いものに挟んだ所で、下らないから、七度四、五分に上げた体温計を神妙にわきの下にはさんで、看病夫が集めに来た時「どうも相変らず身体がだるくて」とか何とかいつて返せばよい訳である。検痰が行われる直前には真正の肺結核患者の痰は値段がつくといったら一般の人々は驚くかもしれないが、仮病の結核患の痰に菌がいる筈はない。併し、それでは

「療養上」に困るので、真正の患者の痰をこっそり貰って自分の分として検痰に差出すのである。痰といっても、効用の多い痰を唯貰う訳には行かないので、病葉を一回分なり二回分なり、その代償として、支払うという次第である。

右のザリ精事件があつてから、調剤室では之にこりて、それ以後はザリ精には局方アルコールのみ用いると共に、フクシンで薄赤く色をつけたのであつた。

(未完)

『山口式ボディビルの御紹介』

山口 幸一

最近のボディビル流行の波に乗って今度私も過去の体験を生かして、山口式ボディビル研究所を開設致しましたので読者の方々に御紹介させて頂き度いと思います。

私のボディビルは鉄亜鈴などは用いません。鉄輪運動によって腹の筋肉を強化し以つて胃腸の働きを順調にし、血液循環を整調する方法でありまして、成年期に入つた人には

効果は顕著でありませんが、未だ身体の軟い、十七、八才迄の少年で体格が稍々虚弱か、或いは華奢な子供に対しては驚く程効果があり、半年位私の研究所に通う事によって見えるばかりの均勢の取れた健康体になります。

以下私のボディビル研究所の模様を簡単にお知らせ致しまして皆様の御批判も仰ぎたい

と思います。

私はもうずっと帝都沿線のF駅から程遠からぬ郊外の親譲りの広い草原みたいな空地の中に建てられた古い木造洋館にペンキ塗りの木造洋館に住んで居ります。

私は独身でありまして同居人は私の所有する土地や持家やアパート等を管理させている老人が一人階下の端の部屋に住んで居るばかりです。

生活に困らない私は毎日読書したり知人を訪問したり又適当に友人の事業に出資したりして毎日を退屈もせず生活致して居ります。

以上で私の生活様式は大体お分りだろうと思います。

ボディビルを思い立ちましてからは私はも

う居ても立っても居られず、早速裏庭の三百坪ばかりの土地を整地させて四囲に十尺高さの黒板塀を廻らせました。それで幼稚園の運動場位の広さの演習場が出来ました。

私がボディビルの為に使用します運動具は、よく体操学校の生徒なども使います車輪の様にぐる／＼廻る双輪の鉄の輪で、その輪の中に人が入りまして両手と両足を大きく広げて、その四ヶ所を革ベルトでしっかりと縛ります。そうしてしっかりと四肢を動かなくして置いて輪を廻しますと、中の人は輪が廻るにつれて倒立したり頭ふり後ろの方に逆落しに廻転したりするのです。

成程あれかと皆様もお分りの事でしよう。只私の考案した輪は、縛る所がもう一ヶ所ありまして五ヶ所で身体を止める様になって居ります。

その一ヶ所は大の字に広げた身体の後腰のあたりに十文字に鉄棒が入って居り、その十文字の所にもう一本革ベルトが取付けてありまして、そのベルトは後向になった少年の六尺襠の後の結び目を通して、じつかりと輪に固定する為のものです。

之で良くお分りの事でしよう。つまりこの鉄輪に入った少年は大の字になり両手首両足首及び襠の後の結び目の五ヶ所でしっかりと鉄輪に緊縛された儘輪の回転するにつれて様々の体位を取って反転するものであります。

その腹筋強化の効果を御説明しますと体が回転する時に、下腹部の筋肉に強い収縮運動を要求しますが、少年の軟い腹筋は到底耐えられないので身体がくの字型やへの字型に曲り勝になります。その為この運動を行う時には、必ず、晒木綿の下帯の十五六尺の長さのものを四巻か五巻位巾を広めに締め込ませて、しっかりと後の結び目を結んで置く事が必要であります。

この巾広い下帯は仰天又は伏転する時に下腹部の筋肉の緊張をしっかりと受け止める効果があるのです。

又、後の結び目を鉄輪の腕木に緊縛固定することは少年がうつ伏せ又は逆落しの姿勢になった時、後襠を引く様にして少年の体重を支える為のものであります。

この場合、下帯は下腹部、肛門、股間に対する唯一の保護を果すと同時に、其等の器官に対して刺激を与え連鎖反応として四肢の緊張強化を促す効果があるのであります。かくして虚弱な少年は数ヶ月の訓練を受ける事により見違える程、丈夫な身体となるのであります。

さて前置はそれ位にして演習場は未だ土俵や水浴場は未完成でしたが、鉄輪の用意だけ出来したので早速看板を出しました。

「山口式腹筋強化ボディビル研究会」

会員は十八才未満の少年に限る。一週間ば

かり何の音沙汰もありませんでしたが、或る日、上品な四十才位の婦人が訪ねて参りました。

その御婦人の長男が、中学三年生になったのですが身体は虚弱と云う程ではないですが、内気で女性的で激しい運動など嫌いで、この儘では高校生活に耐えられないかと心配になって相談に来たと云う訳です。運動会の競走などにも出たがらないし、水泳や相撲などやらせて見ようと思つて色々すゝめても、はずかしいと云つて逃げ廻つていたとの事です。

「どうでしょうか、こんな子供でもボディビルをやれば元気な活潑な子供になるでしょうか」

と云われて、私は即座に

「奥様、大丈夫だと思います。」

私は自分の体験を皆様にすゝめたいのでこの会を初めたのでして別に商売でやって居る訳ではありません。

だから私と一緒に研究すると云う気持ちでしばらく通わせて見てもし坊ちゃんに興味がある様だったら引続きやられたら良いしつまらないと思つたらお止めになつても構いません」と答えました。

二、三日後、婦人は長男の少年と一緒に訪ねて参りました。その中学の制服を着た十

五、六才の少年はいかにも内気そうな美しい顔を伏目勝にしてうつむいている姿が非常に可愛らしく見えました。

私は、少年に向い

「それでは今日から早速ボディビルの着装をして二、三回軽くトレーニングやってみましょう」

「此方の部屋に来て仕度をし給え」と云って少年を隣室につれて行きました。

「服をぬいで裸になり給え」

「……」

私ははばかりしようにためらっている少年を静かにうながしました。

私の態度は如何にも応揚ですが丁度御医者様が患者に対する様な威厳を持って居て静かな口調で冒すべからざる權威が感ぜられるのです。

やがて白いショートパンツ一枚になった少年を向うむきに立たせてパンツを取ると同時に十六尺の新しい晒の下帯を股にはきみ込んで下腹に四、五回廻しまして、巾広く被い一端は股から下げて尻に廻しぐーっと強く締め上げまして背後できつく結びました。

ドアを開けますと少年はぬいだ服を手に持ったはずかしそうに母親の前に現れ服を手渡しました。

母親も少年の今までと変った凛々しい禪姿にびっくりした様な頼母しい様なショックを

感じたのでしよう。

「まあこの子は、とても男らしく立派になったわね」と云いました。

私はやがて禪一つの少年を戸外につれ出しまして鉄輪に入れ、大の字に手足をひろげさせて両手、両足をバンドでもって固定しました。それから後に廻って禪の結目に太い革ベルトを斜に通しまして腰の所を固定しました。「さあ初めは静かに廻すから下腹に力を入れるんだよ」

と云いながら鉄輪を廻しますと、少年は仰向に或はうつ伏せに様々の姿体で廻転致します。股間に廻した白禪は或は一本の豎の棒の様になり、或時はV字型に或時はT字型又Y字型にと少年の体位につれて種々の形を現わします。少年の柔いお尻の肉に喰い込んだ禪は強い緊張を全身に与え殊に後禪をバンドで固定されて居るので丁度相撲で吊出される時の様な力が絶えず股間に加わるので少年は苦痛と快感のミックスに表情を私に訴えるのです。

大きな苦痛の波は、二重波となってアーッと声を立てる事も屢々ありました。

最初の日には疲労がはげしいので三十分位で中止しました。

運動が済むと少年は直ぐ禪を外そうとしましたので私はその手を押えて制止しました。「折角強化訓練をしても順化運動をやらなければ何もならない。つまり腹部筋肉に対する

腹圧調整の為に禪は、四六時中締めていなければ折角の運動の効果がなくなる。此からは夜寝る時も、外さない様にしなければならぬ。君は禪は初めて締めたのだからね。どうりで氣持悪そうな顔をしているが、毎日肌を離さず締めていると外すと却って氣持悪くなるよ。それ迄の間だから、我慢しなさい」と云って訓練の為にやゝゆるんだ禪を解いて更に固く締め上げしっかりと三つの所を結びました。

やがて母親にズボン下をはかせられ服を着せられた少年はお尻の割目に喰込む禪の感触が気になるのでしうか片手を時々お尻の方に戻して禪の位置を直して居ましたが、やがてお母さんと一緒に帰って行きました。帰る時に私は少年に向い「君この運動をつづけてやってみて、身体が丈夫になると思うわね」と尋ねますと少年はかすかにうなずきました。

「では又、又明日来る？」と私は静かに確めますと、少年は、女の子の様な美しい顔をぼつと紅潮させて、うなずくと、はばかりしように私の視線をそらせてうつむきました。

その次の日から本格的なトレーニングが初まるのですが少年は次第にこの運動を反覆するにつれて深い執着を感じる様になりました。丁度アルコールやモルフィンが次第に適量の度を増加する様に少年も次第に強い刺激を欲求する様に迄発展するのですが、その事については次に詳しく御話し致したいと思ひます。

当然のことかは知りませんが、マゾヒズムと露出慾とは不可分ではないでしょうか。學術的にどう分析されるか判りませんが、僕の場合は勿論なのですが、大方の文章によっても此の事が証明されました。被虐の対象は鞭であり、鉄鎖であることは勿論ですが、同時に、自己の肉体のすべてを相手に、いや時に依っては多数の人の前に投げ出すことも自虐の一つと解釈されて良いでしょう。

キヤルマタの美

(横浜) 櫻村 睦彦

ところで、この自己をさらけ出す形態についてですが、一系もまとわぬ完全裸体、褌一本、或はパンツ又は猿又を着用したもの等。

それぞれの好みに従いエンジョイしている様です。僕の場合、近頃盛んに台頭しつつある褌着用も良く理解できるのですが、何と云ってもキヤルマタの美を礼讃し度いのです。キリツと締めた褌に依る股部の圧迫感はその自体内面的な快感を誘発して呉れますが、皮膚に与える触感はずしも上乘とは云いきれません。また外観的にも、腰

部の緊縛から直角に股間を締め上げる直線は、少くとも僕の眼に美とは映らないのです。

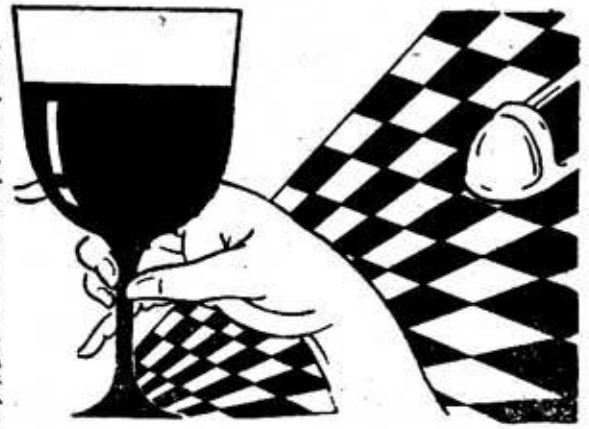
キヤルマタは、元来西洋から来たものですが、あの飽くまでも流動美を重視した西欧人の審美眼は、戦後特に一般化しつつある筈です。少年時代から観てきたサーカスで軽業師達が衣裳として着用する肉体の曲

位のもので、ショートパンツとして市販のあれなど少しも肉体に密着感がなく、銭湯などで見る度に失望しています。

本誌昭和二十九年十二月号に森太一氏が脱腸帯の回想で書いていられた中に、太一少年が人知れず脱腸帯をつける時、彼が腰、臀部、そけい部に圧迫を感じ、快い気持ちになる事を覚えた。とありますが、ピタリしたキヤルマタをはいていると、丁度あの場合と全く同一の緊縛感があるのを知る人は僕だけででしょうか。

大体キヤルマタというものは腰の継ぎ目から下、臀部約半分ばかり半円を描いて前に廻り、そけい部の線の上を強く締めて股下に廻り込むもので、快適な緊縛感を出す為には腰部も両股のふちも相当張りのあるゴム紐を入れて無くては駄目です。これは静止している時よりも、歩行したり運動したりしている時の方が遙かに圧迫感があります。肌の触感には勿論極く上質の薄手のメリヤス地を用います。是れを着用していると、自ら密かな夢想が湧いてきて、自分をアクロバットだと思ひ込んで逆立ちして見たり、或は西洋の絵画にある様な、女王様の前にかしづく奴隷だと信じこんで、鞭の洗礼を想像して独り胸をときめかせたりするのです。

線に密着した黒赤、肉色とりどりのタイツその股間にあしらう、キヤルマタの流線美こそ、躍動する四肢を一層強調して、サドにもマゾにも恰好の形態でありましょう。然しながら僕は、日本の雑誌などは勿論一般の人がこの様なキヤルマタを着用しているのを未だ見た事がありません。せいぜい夏の海岸で時々見かける短い海水パンツ

魔^ま

の

味^{あじわ}

い

高 木 伸 夫

昨年の秋のことと記憶するがある動物学会の雑誌で私は興深く小論文を読んだことがある。それはアフリカに住むトカゲの一種に、オスがメスの排泄する体液を物凄く好み、それを取りつこしてオス同志、命がけの闘争をするという報告であった。

メスの排泄物を盲愛するオスたち。こゝに私は私自身の好む性癖を見出した心地がするのである。

そのトカゲのオスは、発情期になると食物を摂らず、ただただメスの排泄物のみを口に入れて命を保ってゆくというのである。

本能というもののナゾの深さには、ただ感じ入るのみである。

×
コプロラグニストと呼ばれるマゾヒストの人々。私もその一人であることをこゝに告白

する。

昭和四年、今から二十六年の昔、少年時代からすでにその性癖を抱いていたことを私は忘れないのであるが、本誌の品格を落さない程度に、そして読者に嫌悪の念を抱かせない程度に私のありのまゝの生活を生体解剖を受けるに似た気持を以て以下に綴ってみよう。

×
よく本誌の研究や告白記のなかで異性のそれを直接口中に受ける、いわゆる人間便器と化す人の話が出てくるが、私の体験から云うと、あれは大部分空想か又はよほど異性の側の理解又は興味がなければ不可能なことを私は体験上から断言する。

特に女の人を主人の側とする場合は、まずまず至難のわざと云わざるを得ない。生理的にも、精神的にも、男性の口を便器

と見立てゝ使うということは、できるものではないようだ。

私は数多い体験中、首尾よく口で受け、曲りなりにも成功したのは僅か三例しか持っていない。

一度は新宿で娼婦と呼ばれる女性に頼んで目的通りやつてもらい、又一度は、好奇心の旺盛な人妻に金を擱ましてこちらの望み通り吞ましてもらった。

×
アトの一度は病院に女友達の入院を見舞ったときのこと、急に尿意を催した彼女に、手近に便器がなく、看護婦の姿もなくセツパつまって（と、彼女には見せかけて）自分の口を使うことをすゝめたことがある。

×
この行為がよいことか悪いことか私は知らない。私の経験ではもちろん戦前はコプロ関

係の記事を下手に扱うとその雑誌なり新聞なりは発売禁止を食うのが定石であった。

又コトがコトだけに、病気の心配もないではないが、私のばあい、永いこと断続的ながら続けてきているのに別に病気にも冒されないうところを見ると、用心深くやってさえおれば、命にかゝわることもなさそうである。

新宿で杉子という変わった女性に会ったのは二十八年の八月のことだった。

私は妻帯者であり三人の子の親である。それなのにときには赤線区域にも足を踏み入れる。但し赤線区域へは一般人と異なり、「変った目的」のもとに出掛けるワケである。キンゼイ報告にもあったが世の奥さんたちは未だ男性の望み求めているところのものを充分に満してやるだけの雅量がないようだ。そのために行かせなくともよい赤線区域などへ夫を取られてしまうのだと私は云いたい。アメリカでもそうだと見えて、「キンゼイ報告男性版」によれば、妻が夫に許さぬため不満を抱いた男性のかなりのパーセンテージが娼婦を買いにゆくということだが、私もこの報告を苦笑して受入れるものである。私の妻も非常に不浄視して病的に拒むので、私の心中にはいつも不満がくすぶるのである。

さて杉子という娼婦の話の少し聞いて頂こう。

私は或る目的のために赤線区域へゆくと云ったが、ゆく時は必ず相当量の酒を呑んで出掛ける。これは酔ったフリをする方が万事得策だからである。

さて私は、酔った。

二人きりになると私は本性を現す。

幸い私は本来の年令より十才もふけて見えようというタイプなので、自分は年寄りのためにふつうの遊びはあきあきで、君のような若い美しい人に、(若い美しいという月並みな言葉が、多くの場合、いとも簡単に女の人を参らせるものである)と私は耳もとでさゝやいた。

「アラ、あなたもそうなの？ このあいだもそんなお客さんがあったのよ」

彼女はそう答える。

手応えは充分、これなら話は早い。

「でも大丈夫かしら、うゝんあたしはかまわないけど、毒じやない？」

彼女は美しいマユをひそめている。これはOKの意志表示であろう。

なんの毒なものかと私は答えてやる。

それが毒だったなら、それを身体の中かで造るきみの方が先に中毒する筈ではないか。

毒どころか、若い女の子のそののなかには男の精力を強めるホルモンが含まれている。

そのことは中国の古い文献にもしばしば出てくるのだ！

私は自分の欲望のテレくさをいさゝかカムフラージュする意味合いで、極力力説するのだった。

こうして私は「アフリカのオストカゲ」となったのである。

人妻に若干の金を与えて、「アフリカのオストカゲ」となったのは昨年の夏、妻が、病父の見舞いに広島へ子供三人連れて帰国したときのことだった。

中里という隣人の細君をたのんで、留守中の食事と洗濯のことは見てもらっていた折のことである。その細君——貞子といった——の夫も土木関係で栃木県へ出張中とかで、いわば危険な間柄の二人だった。夕食を終って二人で夫婦気取りで世間話のあいま、私の心のかにかふと例の慾求がもたげ出したのである。

このときも杉子のばあいと同じように、ふつうのアソビにはあきあきしていること、ニンシンや病気の心配がゼツタイなく、これは今アメリカやフランスでは大流行の遊び方などとは私は出タラ目を吹いたことであつた。

「奥さんのような美しい人なら、僕はせと頼みたいと思つて実は前からネラつて、いたんだ」

こう上手に持かけると、たやすく陥落した。風呂に入り薄化粧した貞子に人妻とはいへ三十才を出たばかりの女盛りで、しかも身

体の線もすてたものではなかった。

婦人雑誌社の編集部にはたらく私には職業上の女友達がわりに多い。

山本喜代子という、私の席をおく文化部に、机を同じくし、作家廻りを担当する女性が胸部疾患に倒れ、麻布のHという私立の小さな病院に入ったのは昨年春のことであった。

喜代子は独身生活で身よりも心細そうな手紙を再々よこすので、私は三日に一ぺんくらいの割で病院へ見舞い、こまごました雑用をしてやったり、ときには小さな洗濯物や入浴できない彼女のために、床の上で手や上半身を拭く手伝いをしてやって、いつしか彼女の方でも私には気を許している様子が見られるまでになっていたのだった。

婦人雑誌の仕事長くしていると、しぜんに女の生理の方まで知識が深くなり。中性化する人もあるということだが、私も多少その傾向はあるらしいのである。

その日も会社の方を一時間ほど早く出て、喜代子の病室を私は訪れたのである。

「アラ、いゝとこへ来て下さったわ」

喜代子は何かホッとした面持でそう云う、聞けば、昨日胸廓の整型手術をし、二三日絶対安静にしていなければならぬと宣告されたとのことだった。

「ネ、ベッドの下にアレあるでしょ」

「なんだいアレって？」

私は知ってるくせにわざとトボケて反問してやった。

「便器よ、私、今トイレまで行ってもいけないうって云われてるの」

尿器を取ってくれというのだった。

然しベッドの下にはそれはなく、廊下には看護婦の姿もない、彼女の手前、私は困った

ような顔を見せながらも刻々到来するチャンスにワクワクしていた。

「困ったわ、さっきからガマンしててもう辛抱できそうにないの」

苦しそうに喜代子は顔をしかめ出した。

「だってベッドの下にはなんにもないよ、看護婦さんは居ないし、困ったネ」

「モウ、ガマンできない、ちよっと何とかしてよ！」

彼女はとうとう顔を青くし、あぶら汗をかいて私に泣声で訴え出した。

ヨシ！ チャンスは今だ。

ちゅうちよせず私は実行したものである。

彼女の驚き！ それはまことに電撃的なものであったらしい。

とにかく、こうして結核菌を受けとる心配はあったにせよ思いがけなくも目的を達した私は幸福だった。

尚、後日談としてこの私の勇敢な行為に感

激した喜代子は全快退院後、私にだけは他人に見せない近づいた態度をとり、私を自宅へ招いたり、何回かチャンスを与えるそぶりを見せはしたが、ふつうの愛情をもちえぬ私は意識して遠ざかっているのである。

ただ私はその頃、もうひとつの夢が心の片すみには育ちかかっていたことを告白せぬわけはゆかぬ。

もうひとつの夢―それは彼女の「KOT」に対する私の欲求なのだ。

液体の方には、もはや―食傷気味の私だったが、「固形物」に対する欲求は、液体への欲求から一歩前進した形で、当時次第に高まりつつあるのだった。

二十六年に及ぶ私の異常性癖生活のなかで直接口中に対する洗礼は、この三例で終るのである。

もちろん、他の器物、たとえば、コップやライカップにとらせてそれを味わった経験なら、私には数限りなく持合せがある。

戦前、といっても大分前の昭和十年頃か、「犯罪公論」という、さしずめ今日というなら本誌と類似点の多分にある内容の雑誌があり、その何月号かに、岡田三郎という人が、読物を書き、文中、茶の代りに、彼女のそれを茶わんにとって愛飲し、

「冷えると、やはりうまくないですね」

云々とその味を評させているが、これも日本酒と同じことで、人肌くらいの温みが丁度よい頃合いであり、冷めたくなると全然感興を催さないものである。

その、点やはり出たてそのままを味わうのが一番である。

×

冷えるといえば、本性のもうひとつのモノつまり「KOT」も、身体から離れて少時たつとすぐくつめたくなってしまう、味わいも全然落ちるものがあることを私も体験しているが、今回はKOTのことにはふれず、専ら「魔の酒」の方に話題を限定してゆこう。

×

さて、器物にとった、あこがれのモノを楽しむには色々の方法がある。

その温かみを手に受け、特有の香気をかき美しく輝く色を陽の光りにあて、しばらく忘我の境地に遊ぶのも又たのしきものである。

そこには彼女のすべてがある。

美しき唇を通じて摂られたいろいろのものは彼女の体内を流れ、途中で、いろいろの分泌物と混ざりつつ、やがて出てくる。

女というものを語るのに、こいつくらい正直なものはないわけである。

しかも、世の常識からすれば、不浄とされヤミからヤミに流され去るべきものを、親し

く眼前にながめることができるのである。

珍らしいものは尊いのである。

そして最後に、静かに唇でふれてみる。

舌端をはしるその味は、まことに天来の美酒と云おうか、しばしは何かも忘れさせるだけの力をもっている。

—とはいえ、モノがモノだけに人によっては、私達の行動は「飛んでもないアブノオマル」と排斥されるかもしれない。

しかし私は思う、この世のマゾヒストくらい他人に迷惑をかけぬ愛すべき人達は他にない筈だ、よいではないか、コブラグニストにはその好む処のものを与えておけば別に害はないのにと。

×

さて、私は自分の足跡を振り返ってみる。なぜ私はコブラグニストなどになったのだろうか。

私の場合、思い当ることは、谷崎潤一郎の名作「少年」のラストシーンである。

美しい少女（男の子の自由を一切うばい去った強い性格の持主に描かれている）が、男の子の手足をしばり、灰吐きにならせたり、鼻の穴の掃除を命じたり、最後には自分の「URINE」を吞ませたりという、恐ろしくサディスティックな面は、当時なぜか、私の心のなかに戦慄的な印象を投げたものだった。

それと今ひとつ、私は小学校二年生の頃手

のつけられぬ暴れん坊で、近所の「お屋敷」に住む美しい少女によくイタツラを仕掛けたものであった。

あるとき、彼女の家に逃げ込んだ少女を追って、つい屋敷内に踏み込んだばかりに、その少女の母親にかまりひどい目に合わされ、拳句に丁度汲取りに来ていた区役所の人夫まで向う側に助勢して

「悪さをする」と、頭からこれをかけてやるゾ」

と肥ヒシヤクを振りあげられた。

その瞬間、（こんな美しい母親のなら、そのヒシヤクの中味を頭からかけられてみたいと考え、その日、その家の肥壺の底に厚いガラス板をおき、その下で生活したらどんなに気持がよいであろうかなどと真剣に考え、それらの空想がけつきよく今日まで頭の中から去らずに居るものようである。

とにかく、私は、自分のコブラグニストとしての性癖に、少年時代の、このふたつの出来事から頭脳に深く植えつけられたものと信じているのである。

×

大てい女性に、私が正面切ったのむと一応は拒絶はするものの、こちらが強く出来さえすれば、十人が十人要求を聞いてくれるものである。

その切り込み方にも色々あるが、多少面倒

ではあっても、自分の性癖をはなし、相手の自尊心につけ込めば、貞操を賣うのよりはズツと簡単に成功するもののようなのだ。

だから私は入手のときは、正攻法でゆく。

×

街を歩くとき私は必ず直径一cm、長さ三〇cmのゴム管を一本用意してゆく。

喫茶店へ入ると、WCの入口が見やすい座席をとり、自分でまずトイレを使って、便器の水を流しておく、いわゆるアミを張るワケだ。

そして気長に待つ。

やがて美しい女性が使用して出て来たら、何気なしにもう一度ドアをあけるのである。

後ろ手にドアの鍵をかけたなら、アトの行動をくわしく語るまでもないであろう。このときゴム管が実に重宝に使えるのである。

はじめから相手が気づいて、私の口へ注いでくれたり、又器物にとつてくれたりするのでは未だ興が薄い、こうして、全然相手の女性の知らぬ間に、それを口にするスリルと独占感に相当なものである。

そして、多く、とりすました、美しいニールックのお嬢さん方でも、トイレのあと始末までは仲々していないもので、多くは出しゃばなしの、黄金色のそれを流しもしないで出てゆく人が大部分なので、私たちのひめられた楽しみの時間も又仲々多いのである。

私は、今こうした夢をもっている。

相手は若く美しい女性。

これに高価な洋酒を、たつぷり呑んでもらう。そのアルコール分が体内をめぐり、やがて排出される頃、これを器にとり、味あわせてもらうこと。

いつかの本誌で、沼さんが、ビールのんだあとの女性のその味覚を書いておられたが私も、ビール直後のそれは好きである。

気のせい、少量ながらアルコールの気味もあり、こちらの方まで酔心地になったことも私は体験している。

又深酔いした彼女が、散々洗面器にもどししまいには吐く物がなくなつて、酒そのままを吐いたのを介抱にことよせて少量ながら試みたこともあるが、その味もわるくなかつた。いくら私でも、吐いた固形物までは御遠慮するが、一たん胃に納つた酒の逆流したものであつたならそれほど不潔感もなく、本当に酔い、吐きつくしたあとに少量の血をまぢえて逆流してくるものは、酒そのもの—しかも体温で立派に温められているものである。

×

ただ注意しておきたいことは、病気に対する用意である。

一度私は、コップのものを楽しんだ翌朝、全身にかゆみを感じ、これはやられたかなと一驚したことがある。しかし相手は堅気の女

性だったので、まさか病気の筈もあるまいと、念のため内科医の門を叩いたが、単なるシンマシと診断され注射一本で全快、これはコプロ症のためでないかわかつて一安心したことがある。その意味ではプロ女性になるべく敬遠した方が安全だ。

それから、これは必ずしも、今の社会常識では健全な趣味と申しかねるので、できることなら、観念上の遊びの範囲に止め、実行までは、容易に近づかないのが、よいのではないかと私は蛇足ながらつけ加えておく。

しかしながら複雑な今の世の中には、こんな趣味に一人たのしむ者も少数ながら存在することだけは記憶しておいて頂きたいものである。(この項おわり)

絵画のアイデア募集

各種趣向の「画帖」並びに「写真帖」を完成の上、同好者の方々に分譲する企画を立案中ですが、右に關してのアイデアを広く読者の皆さまから募ります。採用の分には、完成した、画帖又は写真帖を贈呈いたします。なるべく詳細なる説明並びに略画の添布をお願いします。

編集部

ドスト・エフスキイの嗜虐性



— 吸いこまれる女達について —

野 中 愛 三

〃家系〃父系家族及び性格。

エフスキイは、軍医ミハイル・アンドレイヴィッチの子として、一八二一年十月三十日生をうけた。兄妹七人である。長男のミハイルはアル中毒者だし、末弟のニコライも廃人同様、長女のヴァルヴァラは変質者。凡てこれも、父の癪癪持からバンドを受けたに違ひなからう。それは、エフスキイのテンカンを発見しても、肯定できよう。この発作を克服して、ロシアの三大文豪（トルストイ、ツルゲネフ、エフスキイ）に成ったことは並々ならぬ才能と云わねばならぬ。

〃作品〃処女作及び代表作。

貧しき人々——一八四四年草稿。処女作。
プロハルチン君——二十六才の時。
罪と罰——四十四才。
カラマーゾフ兄弟——五十八才。

ツルゲネフが貴族というレッテルを自由に駆使して、文学界にデビューしたのに対してエフスキイは十才になるまで、父の職場たるモスクヴァのマリンスキイ病院で育成した。彼は感受性が強く、イヤという程貧乏を味わった。こんにちでいうならば、斜陽家族だとも云える。そして、彼が十八才になった時

父のアンドレイヴィッチが逝くと、兄妹たちはいんうつな家庭から解放され、それらの意志にもとずいた道を歩んだのである。

この時代が、エフスキイにとっては、一生の忘れがたい、幸福な時代であつたろう。それは、彼の親友、ストラアホフに、「ぼくのクサリは放棄された。凡てが、これからだよ」

と、語ったことでも推察されよう。そして家庭の解放から一つのヒントを得て、「貧しき人々」

の処女作を草稿した。早速、ストラアホフの家を訪問した。

「おい、ストラアホフ君。これを読んでくれこれだ」

夢中になって突出した原稿を彼は貪るように読んだ。四五日経過してから、ストラアホフがやって来た。

「こりや、傑作だよ。早速友人の出版社へ行こう」

「有難う。祝杯だ。ストラアホフ君」

その処女作は、やがて単行本になって書店に出た。世間の評判はよかった。

「将来とても、これ以上の光栄は、ぼくを見舞うまい」

友人を抱擁して云った。

当時ロシア通報の第一戦級の批評家、ベリ

ンスキイも好評してくれ、彼の文壇的野望を助けてくれた。続いて書かれたのが、

「二重人格」

である。が、処女作ほどの評判はよくなかったが、しかしペテルブルグの新聞、モスクヴァの雑誌評には、エフスキイの出現を評して

「老成せる天才！」

と、喝采を惜しまなかった。

彼はもうその時には、次作へ飛躍しようとかゝっていた。一作は次の一作と平行せず日々が研究と努力、血を吐くような徹夜のもとに、マスメ（原稿用紙）に挑んだ。コーヒーの替りに、灰皿を口へ持っていたことも再三。ハッと気付いて、苦笑することもあった。

悲劇の作家、エフスキイの辿る道は、サロン（貴族達の出入するクラブ）会員の維持と自尊心——のため

「……書く以外に、道はない」

と叫びしめ、肉体の疲労とテンカンにムチうちながら。

「——地獄への直線コース」

をひた走りに走った。

二

「今こそ長篇、長篇だけがぼくの救いだ」

と呟くようになった。そして真実、

「賭博者、白痴、悪霊、作家の日記、未成年

を永遠に残したのである。勿論、この他作

品、講演記録など多数ある。わが国でも人口

に膾炙されているのは、名作中の二大長篇

「罪と罰、カラマーゾフ兄弟」

であろう。

作品紹介はこれ位にして、彼のよき配偶者

関係を覗いてみよう。

大体彼の執筆態度は、部屋に錠を掛け、愛妻と云えども、サロン以外の時間には出入を許さなかった。

第一の女性は、モスクワの大学生、ポオリナである。それは、グレエミヤ誌へ小品を投稿しては没にされ、当時選者だった彼の家庭を訪問してから、二人の関係が始まった。

ちょうどエフスキイが、執筆を一段落つけようとした時、不意に脳神経が重苦しく圧迫され、ムツとする空気に触れたと感じた一瞬、プウッ！と泡を吹きはじめ、ひっくり返った。そのまゝ意識を喪失したのである。

ポオリナが来た時は、ちょうど腰をエビのように曲げて、眼は吊り上り、口のまわりは泡のかたまりで見られた態ではなかった。

「まア……」

彼女は、思わず駆けよった。窓を開け、洋服のバンドを解き、側のベッドへ休ませた。

五分も経過したころ、きよろツとして起きあがり、秘密の仕事部屋に女を発見して、

「あなたは？」

介抱されたことも知らず、ポオリナの出現に愕ろいた。彼女はすべてを語り、突然の侵入をあやまった。この心情に感激して彼は、同棲した。しかし、それは半年とは続かなかった。何故ならば、二人で新家庭らしい食卓についている時、突然彼が双手を空に上げ、

「ウツ、ウウウ」

と腕を振動させ、妻に凭れかゝったり、食膳に、ガタンと頭を打ちつけ意識を失うことが多く、彼女の肝を潰させたからである。それもホンの四五分間だけ。あとはけろっとした顔付きになり、

「おい、テンカンって、仲々いゝものだよ。まるで、こゝだけが天国だよ。お前も一度やってみろ——」

と誘導するようになり、これには忍耐強いポオリナも、家庭を放棄するより他はなかった。

「作家とは、バカと利口の巢喰う肩書き。平凡人の行く場所ではないわ……」

つくづく、彼女を嘆かせた。偉大なる作家の、性格の裏を知り、ついて行けなかった。「エフスキイは、全く、人間の声とは思われない。むしろ狂犬、野鳥を斬り裂くような何んとも云われない咆哮を続けて、執筆するこ

とがある」

彼女の親友へ洩らしている。

次の女性は、マルタ・ブラウン。モスクワを出発して、ドレスデンを旅行中に知りあった、いわばジプシイ的な女でもあった。ブラウンも、彼の名声と黄金に惚れ、金銭的無智の彼を牛耳ったが、借財が重なるにつれ、いつとはなしに遠ざかっていった。アンナは文学少女だった。

エフスキイの主宰する『世紀』へ短篇を寄稿したのが、そも／＼のチャンスを生んだが例の悪病を知り、とう／＼身を退いてしまった。「ぼくの真のイブは？ 心を慰撫してくれる女性はいないだろうか」

彼は禁断の木の実を食べてからは、よきハウス・キーパーを索め歩いた。この時の彼は流行作家でもあり、文壇の人気は頂点に達していた。

エフスキイは、仕事に追われる余り速記者を雇入れた。これが『アンナ・グリゴリエヴナ・スニトキナ』である。彼が四十六。アンナは二十一。

彼女は婦人速記者というばかりでなく、彼の一切の身廻りをしてくれた。時には、彼とそっくりの、テンカンをやったのけた。

「スニトキナ。うまいぞ、うまいぞ。ぼくとそっくりだよ」

「どう。これで……」

ぷっ、ぷっ——と泡を吹き、ところ構わずひっくり返り、ピチピチした肉体をさらけ出す寸劇をやった。

「うあ、ははは」

余りの上手さに、つい血圧が高まり、自ら意識を失うエフスキイ——。

二人は意気投合して結婚した。披露宴は貴族サロン。その席上、昂奮のあまり早速、テンカンを煮したが、スニトキナの看護で、無事終了した。嗜虐性同志が、どうやら一組にかたまつたともいえる。

彼女が、あの発作を発作とは見ず、解消というような稀薄感情に走らず、また打算的性格の持主でなかったことは、彼をどんなに感喜させたことであろう。スニトキナこそ、彼の求めた『女性』であったのだ。

——エフスキイは、一八八一年一月二十八日、六十才で逝く。ペテルブルグのアレクサンドルネフスキイ寺院の墓地に眠る。病名は明瞭でないが、逝く二日前、彼女が、家庭の調度品を整理しようとした時、彼が肺から血を吐いたものを見た。と記している。

遺骨はネフスキイ寺院に葬られたが、その際の模様を眼前にみた友人、ヴォツユエは、驚くべき印象を語っている。

「——おびただしい僧侶、大学生、高中生、

ニヒリスト達、労働者、農民、心理学者……貧富の差を問わず群衆が続くの……」
また教会には政府の頭官達で埋められた。

(了)

〔読者通信〕

(投稿歓迎)

再刊号拝見いたしました。通販のものではどうせチャチなパンフレット位に思っておりましたが、堂々たる雑誌形態のもので、それに第一号は白い上質紙を使用されその良心的なやり方には感じ入りました。現在、書店、店頭をいくら探しても、こういった傾向の雑誌の影一つ見当らない状態で、世間の眼の冷たさ厳しさを思いやられますが、貴誌が率先して、真面目で健全なる特異雑誌の刊行に努力していただけるのには、全く頭が下ります。どうか今後共、我々マニアの為に永続性のある雑誌として、君臨されるよう心から願ひいたします。内容を拝読しても得難いものばかりで小生のような老境に入ろうとする者にとっても大いに人生勉強の資料としてその必要性を痛感しております。こういった中年向の煽情性のない内容が貴誌のためには最も大切だろうと愚考します。その中、老生も今迄の経験談といったものを物して一つ御覧に入りたいと思います。若い読者の方々の参考ともなれば幸甚です。(奈良、応用化学生)

女性乗馬考

(随筆・体験・春日さんへの通信・その他)

馬場喬次



終戦このかた「女性の乗馬」と云う事に対し非常に関心が高まり、特に一昨年は午年であったせいか本誌はもとより、一般の書物に達するまで内容こそ異なれ、記事写真等が掲載され、私の如きマゾヒスト馬化狂にとっては楽しき限りでした。「女性の乗馬」に関しては私自身馬化狂の故もありましたが、人一倍興味を持ち今迄KK誌を始め他の書物から「女性の乗馬」に関する記事、写真、絵等を集めて楽しんで居りますが、これらの書物の記事或いは実際に乗馬をする女性より聞いた話等をこれから述べさせて頂き度く存じます。元来、乗馬それ自体甚だサディスティックなスポーツであり、そのため亦「馬を責める」等とも云われる所以でしょう。殊に若い美しい女性が乗馬姿もりよく、颯爽と駿馬に跨がった姿を想像しますと思わず溜息を吐いてしまう程です。

振り返って考えますと、私がこのような事に興味を持ち出した動機と云うのは思い当りませんが、戦時中に確か某貴族議員の令夫人が会長であった大日本紅騎会と云うのがあり、その夫人の乗馬の写真が婦人雑誌に載って居ましたが、私は馬上の夫人のはいいていた拍車のついた乗馬靴、右手に持った乗馬鞭、及び、側にもう一人の馬に乗った婦人の腰にさげたサーベル等に、特に魅力を感じ、幾日もその事が忘れ得ませんでした。

その時の私は未だ十五、六歳の少年で当時は、軍国日本華かなりし時で女性の男性化(例えばヒットラー・ユーゲントの女子隊員の如きもの)が盛んで、その奥さんも「こんなカッコウで馬を駆けさせていますと何だか戦場を馬で駆けているような気がします」とか調子の良い事を云って居られましたが、私は別の意味で感激してしまいました。

さて現在は健全なレクリエーションとして女性も大っぴらに馬に乗れますし、現に私の住んでいる県にもいくつかの乗馬協会やクラブがあり、私も昨今流行のカメラ熱と共に安物カメラを持って、時々馬場へ女性の乗馬姿を撮りに行きます。そんな関係で実際に乗馬をする女性を四人ばかり知る事が出来、それらの女性と交際している／＼乗馬の話を聞かせて貰いました。今仮にこれらの四人の女性を、A子、B子、C子、D子、として話を進めましょう。先ずA子ですが彼女は十八、九歳、おとなしい娘で乗馬の方も経験は浅く、実際に馬に乗るのを見ていても、恐々乗っているような感じでサド性等は感じられませんし、動機を尋ねても只「友達から誘われたから」とだけしか答えませんでした。次はB子ですが、彼女は官庁に勤めている二十五歳の娘ですが、美容の為に昨年二月頃より乗馬を

始めたそうで、その乗馬ぶりも鮮かなものです。彼女も淑やかな人柄ですが、一旦馬に乗るとまるで人が変わったようで、いつも手綱をひきしぼり、ひんぱんに馬腹へ拍車をけり込み、殊に馬を駆けさせる時等は、馬の尻を相当強く鞭打つらしく、その鞭音を聞いていると馬が大変羨ましく感じられ、自分が実際に馬となり、背中に彼女が跨がり滅茶々に拍車で腹をけられ、亦体中を鞭で思い切り打って貰い、彼女の意のままに広い野原を駆ける事が出来たら何と素晴らしいことだろうか、といつも考えて居ります。尚、余談ですが確かKK誌、昭和二十八年十月号に、或る被虐性愛者の手記(二)として私の欲望とそっくりそのまゝの記事が出て、私の他にもこのような願望を持った方が居られるかと思ひ、我意を得たりと感じました。

次にC子とD子ですが、彼女等は二人とも典型的なアプレで男の友達も相当いるらしく俗に云うズベ公じみた娘なので、私もかえって気易く話が出来亦、時々は一緒に遠くへ遊びに行ったりして居ります。何しろ彼女等はクラブへ入った目的と云うのは乗馬を楽しむ外、男との交際をするためクラブを社交場と考へて入ったらしく、(尤も私もそれで知り合つたのですが)年は二人とも二十二歳なのですが、ずっと老けて見えます。しかし二人とも相当長く乗馬をやっているので馬の責め

方も中々堂に入つたものです。身なり等も、元はみすぼらしい服装で馬に乗っていたのですが、今では派手なセーターや上着にズボンをはき、拍車の附いた乗馬靴をはいて馬に乗っています。長靴をはいた方が馬の胴を締めながら、前へ押し出す力が入って効果があるのだそうです。やはり馬は跨がらねば、馬に乗っている気分がしないそうですし、馬に跨がつて他の人間を見下すのは、とても気分がよいものだそうです。何しろ自分の背丈に近いような、そして大きな生物の背に跨がり、その生物の自由を奪ひ、御しながら他の人間を見下すと云うことは、確かに誰でも支配者の如く感じられて愉快だろうと思います。

話はわき道にそれますが、私は女性の乗馬の服装についてかね／＼考へていた事ですが馬上の女性の姿が、何から何迄男のようではなく、女性の馬を責める残忍さとしての魅力が雙方現われれば、この上ない事と思ひます。例えば、女性特有のやわらかい肩、胸、腰太腿の曲線を表わすために、ピッタリした服、ズボン等、或いはなるだけそれらを露出させた服装、及び残忍さを表わすための手袋乗馬靴(KK誌昭和二十九年十月「長靴愛好癖について」の記事中に述べられた英国乗馬靴や、同じくKK誌昭和二十九年七月残酷なる女性達の中の某馬化狂が集めたる、長靴、拍車等)そして乗馬鞭は欠かせません。です

からブラジャーとパンティだけで乗馬靴をはいた女性の乗馬姿等、尚このような恰好でしたら、体格のよい白人女性等の乗馬姿の方が優れていると思います。殊にこの様な白人女性性が馬上より、日本人奴隷を靴で責めている光景を空想いたしますと、思わず興奮してしまいます。この事に関して思い出しましたが私は時々夢で遠いどこかの島へ奴隷として連れて行かれ、馬に跨がつた美しい白人女性に鞭打たれ酷使されたり、亦別の夢では密輸の本拠、(場所は島の時もあり、街中で表面からは只単なる豪壮なる邸とししか見えぬ、その中の時もあります)で首領の外人女性が、馬上から鞭で荒くれ男を鞭打つ光景を夢見ます。その時の私は、奴隷として夢に現われてくる時もありますし、亦白人女性の乗馬として現われてくる時もあります。そして、その白人女性は大体、私の好きな外国女優であります。エビングの著書の中にもこれに似た例があるようです。

大分話が横道にそれてしまいましたが、私は前々から何んとかして前述の服装の女性の乗馬姿を実現させてみたいと思つていました。折。昨年の夏、C子とD子連れて、富士五湖周りをして山中湖で泊った時、二人共乗馬をやったのですが、私は後で水泳もやるとうことに、かこつけて水着のまゝのD子に長靴をはかせて馬に乗って貰いましたが、どう

もスタイルが余り良い方でないのと、長靴がブカ／＼になってしまったので満足な結果は得られませんでした。今でもその写真はありますが、前記の悪条件の上に私の写真の腕も非常に巧くないので少々ピンボケです。この次は、何とか巧く写したら御送り致したいと思っています。

やはり私が述べたような恰好で乗馬をする女性は、体が美しくなければなりません。この点、松竹映画エデンの海で藤田泰子の水着一枚で馬を駆らせる場面や、いつ頃だか時は忘れましたが、雑誌千一夜に載っていた、フランスアマゾン祭にて「ヌード騎手現わる」と題された写真は私の垂涎の的でした。しかし惜しい事に二人とも長靴をはいていなかったのに興味は非常にそがれました。

では、この乗馬の女性に及ぼす心理的、生現的影響に就き例をあげながら説明しましょう。尚、これから述べる事は本誌を始めとして、他雑誌の記事と重複してしまうので、出来るだけ簡単にとりまとめる事に致します。元来、乗馬は日本に於いては封建時代、軍国時代を通じ、支配者とか金持ちのやるスポーツであり、現在でも非常にブルジョア趣味のスポーツと云うことになって居ます。そして更に、乗馬は男よりも女に向くスポーツであるとする事は、本誌を始め他誌に於いても認めて居る所でありまして、(自由国民社版)趣

味の手帖に於て、遊佐さんの話及び、リベらる昭和二十九年六月、女にかしづく男達の特集中、ある乗馬クラブの馬丁の手記では「乗馬の持つスリルと快感は、女性の本能的に好むものだ」と云う記事)確かに、馬の背に揺られるスリル、亦馬を馬具にて拘束し手綱と拍車と鞭による意志の伝達は、普段淑やかさを強いられている女性にとっては、精神にサド的快感を与えるでしょう。その上、馬上より他の人間を見下す事は征服欲、支配欲を満足させる結果になります。以上に挙げた事柄は全て本誌上に紹介された記事と全く同様です。次に生理的な影響ですが、その為にこの事に関した文例がありますから、御目にかけましょう。先ず若杉慧作、小説「エデンの海」では、次の如く書かれています。

——馬の背のぬくみとうごきが臀肉から腹に伝わってめずらしい感覚だった。己の肉体をかけめぐって野性的な昂奮をかきたてるものがこれか。馬人一体となって荒々しい激動に全身の官能をゆだねる時の快適さが想像できた。(後略)

勿論この小説の筋は一般によく知られた、健康的な物語で、この表現も適格だと思えます。次の例は、雑誌リベらる(昭和二十八年六月)「性より見た女の一生」中の一文で、同性愛の女学生二人が、休日に馬で遠乗りしている時の情景です。「ギャロップ」由

美が振り返って叫ぶ。その声が森中にこだまする、鞭が鋭くなる。栗毛の馬の重い尻がどって、くつわの音が加速度的に間隔をせばめる。「ギャロップ」マリ子も、おうむ返しに叫んで鞭を振る、処女の跨り高くつき出された胸がゆすれる。金色の陽光の条が二組の馬と女騎士に当って、燃えかがよい消える。土の香、草いきれ、高く低く続くひづめの響前を行く由美の馬の尻が汗にぬれて光っている。「あゝ、たまらないわ。なんて気持がいいんでしよう! 私、汗びっしりだわ。豁然たる大空、爽快な自然、そして私達の青春! どうして、こんなに素敵なんでしょう!」叫ぶ由美の声も、不思議に官能的だ。頬が艶々と上気している、マリ子は返事が出来ない程息がはずむ。前方を見ている眼は、燃える黒曜石のようだ。膝頭に力を入れて、しっかりと締めつけている。肢の内側から、はずみのついた馬のたくましい律動が気の遠くなるような感覚で伝わってくる。馬の胴の筋肉の動きが、そのまゝ薄い乗馬ズボン一枚を隔てたなりで、ぴたり密着しているマリ子の処女の股へ伝わってくる。時々前が見えなくなる、何も聞えなくなる。つばをのみ込む、このまゝどこかへ消えて行きたい、ペガサスのように大空へかけ上りたい。野百合の香が、ふっと鼻をかすめる。内股のあたりを無数の虫がはいずりまわっている感じ、マリ子だけ

の秘密な快楽！馬って好き！由美が始めて乗馬をすゝめた時は、あんなにいやがったのだけれど。こんな感じ私だけかしら。——中略——馬が石につまづいて、高いいなゝき、下からマリ子の腰を突き上げる。「あゝ」思わず、馬の首にしがみついて眼をうるぶる。腰から下の知覚を一瞬失う。「ぬれちゃうわ！くく！」心で叫ぶ。軀がなめくじのようにとけそうになる。——（後略）この後には、このマリ子と云う女性が、結婚して良人との夫婦生活が〃女王様はお馬がお好き〃という表題で書かれてありますが、こゝでは余り関係ないので略します。

次に挙げるのは時代小説の例で、これは少々変っています。〃面白俱樂部〃（昭和二十九年十月）「弥九郎の馬鹿」（野村敏雄作）これもやはり主人公の男女二人が、馬で遠来りした時の光景を描いて居ります。前略「弥九郎様！」弥九郎がふりむくと、八重は悪戯っぽく目を細めた。「少し駆けましょか？」「ほ、大丈夫かな？」「えゝ、弥九郎様と競走、昔のように」——中略——「よしっ」弥九郎が云うより早くびしっと皮鞭がなり、八重の馬が前方におどり出た。弥九郎に追いつこうとして八重は馬首にしがみつ、やたらに鞭をならしつづけた、はげしい息づかいに荒々しく血潮がたぎる。盛り上った胸部を馬首に圧迫されて、若い肉体には異常な昂奮が

起り、八重は無我夢中になった。——後略。大体以上の文例を通じて判る事は、確かにK誌、昭和二十九年三月の映画紹介記事や昨年二回に亘って本誌に載った、ダイアナ夫人及び最近の読者通信を寄せられた、大阪Y・S子さん等々も述べて居られる、馬に跨ることよる女性の感覚は共通して居ります。

尚、こゝでちよつと面白い記事を紹介しましょう。一般の方も読んだと思いますが、昭和三十年四月三日号の週刊朝日の問答有用と云う記事があります。本号のゲストは吉原の幫間桜川忠七師でして、これからその対談の一駒を借用致します。忠七「東海楼のだんなってのがかわってましてね、おいらんを馬に乗せるんです」。夢声「客に馬ひかせるだけじゃない」。(笑)忠七「朝、お客を帰しちまってから、おいらんが五人、六人仲の町をパッパカ、パッパカ馬を走らしたもんです。なんだって、あんなことをやらせるんですかっていったら、よく考えてみる。腰を発達させなくっちゃあ……」(笑)。

これは、ほんの小ばなしですが、確かに真の事です。話は前に戻りますが、式場隆三郎博士は相当前の、東京タイムズ紙上健康相談欄で、少女が自転車、乗馬等でいつも股部を摩擦していると早熟になると云って居られますし、亦次の如き例があります。千葉県在住元子爵、現某銀行重役令嬢が、大変乗馬好き

で現在高校二年だそうですが、学校へ行く前と帰ってきてからずっと馬にばかり乗っていて、近所では馬氣狂いのお嬢さんと云われていました。が、終いに下着をつけず乗馬をしたため、医師には自慰による局部の炎症と診断され乗馬を禁止されたとの事です。(私は、この雑誌の切り抜きを持っていきますが、果してこれ程までになるかどうか、嘘か真か判りません)。

さて、女性の乗馬に関連して、人間馬に関連して、人間馬と云う事が問題になりますがこれは今迄数多くの文芸作品や実話等に女性が男性を四つ這いにさせ、その背中へ跨ると云うわけですが、あまり例が多い為、とかくマンネリズムに落ちやすいわけです。私も一度赤線区域へ行つた時、試してみたのですが、その方法は数多い例と同じく、体に直接鞍を感じたい為、裸になつて四つ這いになり口に手拭いを噛んで手綱の代りにして、敵娼に背中の上へ跨つて貰いました。確かに柔かい臀肉と快い重さ、胴の両側から下つた、白い柔かい太腿、美しい足、そして太腿と足で胴を締めて貰つた時は天にも上る気持でしたが、やはり相手は正常な女性なので、私から金を貰つてこんな事をしているのは、悪いと思つてゐるらしく十分もたぬうちやめてしまい、満足感を味う迄にゆきませんでした。それからKK誌の(昭二九、五)の〃ダイア

ナ夫人〃中の男馬のアイデアは良いのですが私がそのようにやると、どうも背中が円くなってしまう私には出来ませんでした。そして人間馬を御す女性の服装は、やはり乗馬の時と同じく、ブラジャーとブリーフに拍車の附いた乗馬靴をはき、乗馬鞭を手にして賣めて貰いたいと思います。

【追記】 私は今迄本文で述べた如く、一人のマゾヒスト馬化狂であります、本文では出来るだけ感情を殺し冷静に、常人に近い気持ちで書いたのですが読み返してみると、誠にがゆくてならぬ気持ちです。

私は、昼は一公共事業体の社員として勤務し、夜は音楽学校を受験する為、勉強している者です。何しろ私の生活も矛盾だらけで、昼は社で技術的な事を研究し、夜は友人達とモーツァルトやベートーベンの事、和声や管弦楽法に就いての議論で時を過しているのですが、一人でいる時等ふと、女性の乗馬、人

奇譚クラブを知って以来既に二年半。バツクナンバーも、その殆どを手許に集めることが出来ました。そして今初めて通信をさせていただきます。以前からお便りしようとは思っていましたが、どうしても、その勇気がなく、遂に今日までになんてしてしまいました。でも、いよいよこうして筆をとると、一体何を書けばよいのか、わからなくなります。私

間馬等々に就いて後から後から、色々な光景が頭に浮んでくるのです、技術者——自称音楽家——馬化狂の男どう考えても連りはありません。これが私の悲しい一面でもあり幸せでもあるのです（この幸福は常人では味えない筈です）御蔭で私の道楽は音楽の研究、カメラ、少々の酒と毎月一冊の本誌だけです。赤線区域は一度で失望し、同僚から誘われても行く気がしません。

春日ルミさんへ一言、昭和二十九年のKK九月号や昭和三十年新年号で、貴女様の事に就いての記事拝見致しました。拝見して卒直に感じた事はサディステインとしての物足らなさと同時に、ホツとした、良かった、と云う少々矛盾した気持ちでした。春日さんの美しい容姿と、普段は他の女性と同様であると云う親近感、我々マゾヒストの女王様としてふさわしいと思います。序でに申し上げますが乗馬を始めて見ませんか？ 健康と美容と

は生来の性癖と申しますか、所謂加虐性の性格を多分に持っております。だから、毎月の発行が待ち遠しくなりません。いつも二十三日が来ると、私はそつと場末の小さな本屋で隠れるようにして買うのです。だって私はこんな事を他の人に知られたくないのです。その月の本を買って帰ると大仕事をやり終えたように、ほっとします。そうしてこれ

〃それから我々の為に。色々と不躰けな事を申し上げ誠に失礼致しました。

他の読者の方に——私は色々と女性乗馬に就いて記事、写真、絵を集めていますが、私と同じ興味を持てる方で記事、写真、絵を御見掛でしたら是非御知らせ下さい。

特に二十九年十月十七日号〃サンケイ・グラフ〃には白馬に跨った、淡島千景さんの写真が出ていましたが、その白馬と対照的な黒い長靴、拍車、手綱を握っている手袋をはじめ、及び鞭はとて素晴らしいと思います、早速買って切り抜き保存してあります（淡島千景さんは大変乗馬が巧みだそうですし、京マチ子さん、井川邦子さん等の映画人もクラブへよく乗馬しにくるそうです）。本年二月二十一日附日刊スポーツ紙〃春は馬に乗って〃と云う記事で、東京の乗馬クラブ巡りが出ていましたが、その中の清風会馬場所見より。

（終）

が又、私の一番楽しいことでもあります。

今迄の作品中、私の好きなのを拾ってみますと、松井籟子さんの「淫火」篠原咲恵さんの「半公刑」又その他にも「二百字讃歌」や「牛乳風呂の饗宴」等です。特に私は松井さんの作品は全部好きです。私も勉強して一度でも、こんな作品を書いてみたいと思います。私、こんな性質なのに人の前で堂々と発

言する勇氣がとてありませんの、だから本だけが慰めになつてゐるのです。私の一生かけての願ひ、それは一度でもよいから、思いきり男をいじめてやりたいの。若し男の方がいなければ同性でも構いません。でも、この願ひはとても成就しそうにもありませんわ。

奇クの中に、私の好きな写真や小説があるところを何回となく読み返しては一人で楽しんでおります。春日さんの演技は好きですが物足りないものがあります。もう少し、手ひどいところをお願いします。「こゝをお舐め」という台詞なんか、私の大好きなものです。小説の中の会話でも、いゝのがあると憶えてしまうのです。「こゝへお坐り」「鞭を持つておいで」「馬におなり」「これをお飲み」というのなんか、たまらなく好きです。誰か私のお相手をして下さる人はいないかしら。読者通信のマゾヒズム欄を見ますと、男の方で女にいじめられたい人が大分おられるらしいですが、私、出来ることなら、とんでゆきたい氣持がいたします。でも、いよくその時になると、私の方が尻込みするかもしれません。私の一番好きな責めは火を用いる責めなのです。お灸は一番よいと思います。近頃の奇クはこれをよく取り上げていますわね、岩瀬さんの絵は素晴らしいと思います。煙草責めも面白いですね、ずっと前の南川和子さんの煙草責めのポーズは切り抜いて別にし

〔通信〕

サジスチンの独白

(神戸市葺合区)

原 美智子

ています。私は出来ることなら、このお灸を弱い男や女にすえてみたいと思います。いくら泣いても喚いても決して許しませんわよ。私の氣のすむまでこらしめてやるわ。それからグラビヤの頁に変化のある写真をお願いします。いつの号でも緊縛と、鞭打、猿ぐつわと足舐めでは飽きがきます。時折は変わった責めをお願いします。例えば、さきの煙草責、灸責めとかいったもの、又、絵でも結構ですから、女同志の私刑、拷問等も載せて下さい。では今日はこの位にして又次には詳しく書きます。読者の皆さま、特にサディズムの女の方より、又私にうんといじめて貰いたい男も通信下さい。二人きりになれたら、いじめ

ていじめて半殺しのめに合わしてやるわ。

最後に、春日ルミさんへ、是非、灸責め、煙草責めをお願いします。男を四つ這いにさせて、背中に腰かけて動けば、手に火のついた煙草を持っていた、それで動いた箇所を焼くのです。又、男の鼻の穴へ火のついた二本の煙草を差し込んで這いまわらせるのです。息をきらせて煙草の煙にむせて苦しむに違いありません。或は男を尻の下に敷いて直径三センチ程の艾でお灸をすえてやって下さい。素晴らしいではありませんか。

「そこらじゆうを這つておいで、云うことをきかないと、この煙草でお灸よ」

「どうか許して下さい。もう駄目です。」
「いけません。お前は私の奴隷じやないの、命令です、やりなさい。」

こういった台詞も必ず入れて下さい。男が哀れな顔でルミさんに煙草責めにされて許しを乞うているところが目に見えるようです。駄作川柳を次に二三書いておきます。

もうやめて、もうかんにんは口ばかり

「お仕置はお灸に限るとやり手云い、
継母の折檻、灸は径一寸、
見えぬよう、すえてやるとは口上手、
仕置灸お乳に二つ尻四つ

「あゝ、もうお許しを、あゝ、あつう、
もう決して致しません、命令に背きませんから許して下さい、ああーッ、ううッ、もうた

くさんです。よく分りました。どうか御勘弁下さい女王様」こんな言葉を一度でもよいから私の手で云わせてやりたいものです。



ボクの責め方

宝塚二三夫

初夏の夕、女の一番美しい時、そして又体臭にまでその醍醐味を発散する女責には絶好のシーズン。君江、照子、正子、このグループだけでは完全に面白いグループ責とはゆかずとも、ボクのオフィスでは余りにも無粋であり晩餐の必要上からも、そして又期待される五人差の裏付からも愈々こゝに問題の多美子の旅館が正式に登場して来るわけである。

ボクのオフィスより平均時速五五Kで五十分位、京洛、東山三十六峰の内円山の麓、祇園八坂神社の南門を南へ直線、そこが俗に云う粋中の粋境シモガワラ（下河原町、鳥居前通り）旅館街、何しろ山麓開拓地帯の事であり、この一本一直線の舗装四間道路も三四町も南広大寺の五重塔あたりまで来ると車一方交通でも道一杯の他、小路小路の織りなす綾

か、そのくせ少し広い館になると屋内に石垣あり、古木立ち泉あり、どこが一階か階上か、裏庭のあたりは、一階が二階の如く地階があり、一階座敷の庭木がはるか階下から立ち居て樹上を眺むの感等ありて又愉快。そして多美子の館が何小路の入口にあるか、余りくわしく述べて未知の誌友に門を叩かれて、アジヤパーとならぬようこの位にしておく。

このあたりは、好色粋人にも天下の勝であり、又女責のメッカ？ 祕境である。と云つてもはゞからぬものであると将に日本一と極言してはいけませんか諸賢！ 知っている仁は「ウウン」と感服し、知らぬ輩は素直に納得すべき処。

「マアーお珍らしいお顔振れ——」
多美子の案内で廊下の奥、中庭の裏、浴場

からの廻廊下を降りる事深く、本庭のぬれえんを通つての離れの八帖、小さい乍ら裏庭の向うに書院風の三帖の茶室もひかえている。この八帖とその三帖がボクの常席である。これ以上のくわしい情況は逐次内容文中で知つて頂きたい。お茶を出し乍ら多美子の開口一番、「お嬢さんたち、お兄様の縄の味もう御存じらしいのネエ、ホントに、腕白なお兄様にかゝつてはネエ」

と白塗り美人の切目高い単皮目で見据えられた三人。さすが姉振りの君江もあたりのフソイキに押されて声なく、三人ニッコリと嬌羞を含んだ会しゃくだけ、多美子のお運び、君江のお給仕という具合に事は運んでいってさて面白く楽しくまとめるにはあと二人の不足である。そこでボクのラブハンターの長い

生活の内最も盛大にして華麗であり、又加虐美味のこの照子の開花一掬を記してこの二日間の事を諒とされたい。君江では甘え過ぎて不可、正子とでは物足らず、ボクと二人きりでは情緒少く、又サジストの味も半減するしその日この席での他愛のない痴戯的で、照子の処女性を確認した瞬間ボクのこの決心と熱望は確定した。そしてあとあとうるさい女の口を考えて君江に諒解さして、そのとりもちでその翌日、照子を早引きさした午後、ボクの車は照子を助手台に乗せて淀川堤防ハイウェイをピピピッとタイヤの音も小気味良く突走る。

「きのうはつらかった？」

最初の一言に言葉なく唯、涼しい目を細く嬌羞を含めてチヨットうなずく照子は確かに可憐である。と云つても昨日は裸に剥いたわけでもなく、ある意味で縛り合いのいたずらゴッコ程度の遊戯であつたのに——と考へていると、

「フフフ……今日こそは、と余りお考えにならずハンドル、ハンドル」

と照子の茶目氣に一本やられる。

「じやかくごしてゐるんだナ」

「チラン」

舌たらずで甘え声の照子の知らんはチランとよく発音するのが、又ボクの好きな一つ。

「カクゴしてゐるんだネ」

「カクゴなんかチテヘン（してない）」

「じや期待してゐるわけか？」

「そんな話もう！」

「もう——どうだと云うんだ」

「チラン！ モウ……」

と既に茶目ッ子らしくボクの手の手を白魚の指先でひねりに来る照子。彼女には彼女なりの殺し文句とセクシュアル・アクションあり。淀の御幸橋を北折してから京都府ハイロード一直線の十数軒。

「どうだ、二人きりで遊ぶのは？」

「……………」

「ホントの二人きりは初めてだろう」

「ハイ」

照子はこの「ハイ」と言う返事を甘え口調の内にもハッキリと歯切れよく可愛いく言うのが特長であり、私への殺し文句になるわけだが、その時のスロー調で又哀憐調、喜悦調がミキサーされた声は今でも忘れ得ぬ。ボクには開花寸前の彼女の切実な吐露とも思えたからであらうと思われる。

「いゝか？」

「……………」

前述の通り嬌羞一杯の微笑で小さくウナツク。照子の頬は紅潮していた。昨日は

「照ちゃんは、社長さんが大スキなんだけどネエ」

等と皆から散々ひやかされた照子、押されば開かん、打てば散らん、叩かれゝばくずれんの風情ありとして可憐なり。サイドボールのいたる所「いねむりは事故のもと」この直線コースは油断しての右の如し。ボクのノットズフト千人責の道も遠いが、ボクの人生行路も未だ短からず。希望と期待の明暮は、この直線コースよりも更に長い。奈良うねびハイロード延々二十数軒のそれよりも、更に未知数否、無窮動。

東寺の塔にブツかる時、既に京都市中、ガイドボーイは止めて。さて多美子の館。離れの離茶室に入った二人、ヤレヤレとくつろぐ間もなく、テキパキとした多美子、照子の方を斜に見据え、

「好きなお方と差向いもよいけどネ、ドライブの後とはとてもほこりっぽいよ。サ、お湯に入って磨きをかけてあげるワ、サ」と引立てる様に照子を連立つ。

「オイ、ボクは？」





「お兄様は一寸は待ってるものよ」

十分たったかたゝぬ間。

「チョットお兄様」

と多美子一人で呼びに来る。浴室ラワンのドアを開け洗面室、そしてガラガラッと岩目ガラスの引戸を開けると、照子が縄を手足にかけられて横転がしにされた顔をマットにすりつけている——と云う責の第一段の常道ポーズに目をやったのと同時であった。緋色のマット敷物にピンクパールヌードの照子被縛のくの字横転がり——一言の声もなく軽く閉じた目の上へ黒く長く、まつ毛が伏せている。如何なボクもその美しい照子に茫然の状態である。

「マア、お兄様、見惚れていないでサア、こちらへお入りなさいネ」

と、隣りに続くボク用の浴室の引戸を開ける。湯気は各色螢光燈に虹の如くこの脱衣室の天井へと流れ出て来る。多美子にせき立てられて黒大理石の湯に入ったものの全く美しい照子——女責——とはこんなに美しいものか？ と我乍ら情なく今更の如し。

「失礼してよろしい？」

多美子はかけ声と同時に入って来る。

「よいもわるいも、もう入ってるじやないか

？」

「ホム、ごめん遊ばせ。お兄様、御部屋の用意が出来てますの、照ちゃんはキレイにしてあとから連れます」

と、ふくみ笑いの多美子はバスタオルをひろげて照子のいる浴室へ行ってしまう。

さて、丹前を着て茶室に戻ったボク、二月堂の卓の前でゴロリと仰向けに湯上りのからだを休める。そしてフト、この稿も出る『キタンクラブ』の事を思い浮べる。そして種々取々の同人的雑誌らしい変態さんの気儘な原稿の事を考え、どれを見てもだれを読んでも文学、絵画、歴史、さては科学、心理スゴイ手合になると学術や医学、精神学、語学的にヘチムツカシイ疑似専門語を並べ立てゝまで要するに自己の変態助平である事をいかにカムフラージュして、あわよくば「ボクは責の心理研究をしているのである」とチヨロマカシながら自瀆病を満足させている御仁で満員であるのに、ボクは一人で腹をかゝえた。ボクは敢えて云う。女責の風俗は殊更新しいものでない事は、千万御承知の諸賢、今更むつかしく研究するには余りに世間が狭すぎます。シニール派、ピカ、マチ、ブラ、の真隨に達せられるなら、もっと他の社会有

用のものを御勉強下さい。そして真実の研究資料として女の責を取扱うなら世界医学界を目指し、世界文学界へ執筆されたい。世界的には、エリス、エビング初め我国にも沢田、羽太等その道の大家もあり、戦前には「性と性慾」「変態心理」を両雄が主幹発行されている(ほしい人は古本大会にあり、全国古書店にあり)鞭撻小説、画帖は丸善書店にも来ています。ボク達は「クラブ」を通じて楽しく或る意味で美しく、お互の胸にわだかまっているものゝ発散キカンであり、又自分の知っている事を同好の士に公開して俱に喜び合うのでよいのでないか。勿論その範囲で各種の変態さんの気儘な発言は大賛成である。夢も亦楽しく、現実へのヒントも得られ、現実は真なり、そして夢へのヒントも得られ、私達がこうして開陳し合つてこそ新風俗は生れるのである。アーメン。百万人の結集！そこでこそ初めて新風俗として世に出られるのであり、堂々と国際的研究資料とされるのである！

「お兄様、何を考えてらっしゃるの？」

「ウムッ！」

ボクの夢幻？ はハッと我に返った。顔の上にバスタオルでくるんだ照子を抱え込むよ

うにして立つ多美子の二人。勿論照子は素肌の上へタオルをかけてあるだけとは、スグわかったものゝ丸出しになっている照子の脛から下を寝転んだボクの目に見た時、今更の如く脚、腓、足先までの美しさに一驚した瞬間「又勝手に着物つけてあとで叱られたあげくお前も——なんか云われたら目もあてられないものネエー」

彼女のネエーはいつも一種の妖気をふくんでいる。そしてボクの目が照子の腓脛へ集中しているのを見て取ると

「ネ、照ちゃん、暫くこうして立たして置け——と、フフフムムム」

とニタリとした多美子。タオルの上から照子の二の腕を掴んでいる恰好は、縛り方は不知、彼女の両手は縛られている事が直感出来た。そんな事はどうでもよい今、ボクは日頃から理想通りの脚に接したることに胸のときめきを自省出来なかった。しわの少いヒザ小僧とその裏の腓エクボ、そしてヒザ下の肉のしまり、スツと直線の向脛、外側張りの横腓脛は、ブリツと張り切って肉盛りよく、うる腓はひらめの腹の如くポツテリと食欲をそゝる白さ。クイツと引締った足首とクルブシの骨格のせん細な表現、そして桃色水蓮の

花卉の如き足の甲とその肉付、キビスはあくまで円く、全くのピンク調で今日まで全身の重みも知らなかったような珠玉そのものであり、ピンクパール生素因はこゝにあり。並びのよい五指の内、おやゆびの爪先は軽く上反つての歌麿調、小指は可愛く辱かしさに隠れるが如く、湯上りの水々しさは百万弗の足！谷崎潤一郎の「富美子の足」とはこんなものであろう。

「たべたいナア」ボクは思わず口走ってしまった。

「じゃ、ゆっくりおたべなさいよう——」

と照子の肩を突いてボクの目の前に横座りに押据えると、パラリツとタオルを脱がすと白地にピンクの縞の入った真新しいコンピネーションの上から唯の後手に縛った胸へも廻さぬ緋の腰紐を、畳の上にたれたまゝ三尺程も離れた赤皮松の床柱の中程へ結びつける。

照子は横座りのまゝ目を細目に開けて俯向く顔とボクの仰向けに寝そべった顔とが斜めに合った瞬間、全く光り輝く如き桃色に顔を赤らめて首をねじって目をそむける。全く嵐の前の静けさのようなシーン。多美子はこまよりの新柄お召の裾さばきも粹に二月堂の前に座ると、

「よう御兩人！と木が一丁入るとこですよ」

と半帖を入れるのとボクの上半身を起すのと同時にあった。照子のこのくゞられ型は全くお手なぐさみ、御自由自在と云うスタイルである。ボクの起上る事によって照子は反応的に少し前かゞみになり、乱れた両膝頭が少し浮立って本能的羞恥態、照子の真下向いた顔でも、その目頭の動きが多美子の方にチラチラッと気を配っているのを見て取ったボクと多美子が、照子の言葉少いその場の気配に感付くのと同時か、

「馬に蹴られぬ内、ごちそう様、お兄様、いつでも応援に来ますからベルをね」

と氣ッ腑よろしく出て行く。待つてましたとばかり照子の五体は居座り直した感あり、全身の硬直さは消えたと見る間に、又反面今度はボクへの羞恥からか、一層俯向き加減となつて続いて横にスツカリはみ出した脚を正座へと締めはじめたのを見たボクは、当然の如くその憧憬の照子の足頸を片手は掴む。そしてサジストの慾情はスタートする。

「お姉様にそばに居られると、かなわんか」照子はかすかにうなづく。涼しい目がくずれるようにほころびて嬌羞の笑顔満面。それでも自由の方の片膝を折曲げて安定座りの構





えで臀の下へ、ボクに掴まれた片足はムタどは云え、ひざ関節をスプリングよろしくシヤクル事三度であきらめる。ボクが強く引き出すようにすると腰縄だけの手を臀のうしろへ突立てゝ倒れるのを支えて

「もうちらん」

お面一本！ とばかりに片脚を宙に真直ぐ蹴上げる如く、ヌード芸術品としての飾りものから脱却して生の肌、それも湯上りの香気を発散しつゝボクに献上して来る。こゝで前述のたか子と同様、脚への愛玩は初まるのであるが、照子の場合にはたか子とは又別である。娘の足を眼前にしてそのまゝなめたいと思うのは、たか子とかこの照子位のもので滅多にあるものでない。一寸見には美味しそうな脚は多いが、爪先まで口に入れたいと思うのはたか子でさえこの照子には及ばぬのである。事実次の瞬間、掴んだ照子の足首を引いて、お多福豆のようなおやゆびをチュッとはかり口にくわえ込んだ。

「イヤアーン」と照子は膝を曲げて足掻くので、スグボクの唇から彼女の爪先は、はずれて出た。然しボクの慾望は一層つのるだけである。

「放ちて、勘忍ッ！」

照子の拒否の度合は不明。しかしボクのサジストはそれほど軟弱ではない。この時分から、この脚が照子か照子がこの足か、脚そのものだけが、ボクの対象になって終った感情で、そして次の瞬間、その足をどこかへ徹底的に縛りつけたい慾望はムクムクと湧き起ち照子のその片足首をつかんだまゝ臀を廻転盤よろしく、クルリと振り廻して今更腰湧を結びつけていた赤皮松の床柱へ引摺って行き、違棚から——紐——と考える瞬間の行動の内にも細かい神経は団十郎織の強い帯締めを一本抜出し、片足首にキリキリッと巻付けると一応巻縛りにして床から二尺ばかり上の所へ照子の足首を吊り持上げ、まるで建築場の足場丸太を結びつけるように照子の足首はその床柱に全くギリギリ巻に縛りつける。ボクの動作は恐らく狂える感情そのものであると次の瞬間自分でも自覚する。その間、照子が泣いたか叫んだか痛がったか思いついたように、柱の下にある腰縄から赤蝮の如く延びた紐をほどくまで無我夢中であつた。五人差の場合でも、こゝの多美子のオブザーバーを入れて六人の性態を個々にハッキリ認識してアクシヨンするボクも、この照子と照子の脚足の美味さにはお手あげになって終う事を笑

わないで頂きたい。今、照子は声がないが恐らく痛かった悲鳴を上げた事であろう。照子に残った自由、左脚は立膝型で爪先は畳を突張り、仰向に転がされた照子の腹部は腰縄の後手で可愛イ小丘状に円い。にじり寄ったボクの片手はスデに自由の左脚の足首を掴んでいて「痛い？」とボクのいたわりは口から出ているが、「ウウーム」とのけぞる照子。すかさず「しんぼうが出来るか？」やはり次の彼女の反応は心配であるボク。気強く、今日こそは気強く決心しているボクもこの照子はホントウに好きなのだ。彼女の反応は「ウン」と小さく軽くなづく事によって、又ボクは嬉しい力を得た。斯くして後手の照子の片足を床柱の中間に搦めつける緊縛による觀賞と、片足の愛撫は始まるわけである。足の爪先から五指の指股から上へ、もとの爪先へそして裏からキビス腓へとボクの手は前の愛撫に始まる。

「フフフッ……こちよばいッ……」

彼女のその言葉も耳に入らぬ思入れで更ににじり寄ったボクは、両手に彼女の片脚を抱え込むようにして膝小僧へのキッスから、チュプッ！ チュプッ！ と到る処への吸付キッス。勿論爪先五指への連続吸付、柔らかな

土ふまずへキッスには不自由乍ら全身的に力を入れて照子のこそばゆがる悲鳴も楽しい伴奏譜、更に次は彼女の足の裏でボクの頬を撫でる。照子の伴奏は「イヤッ」とか「キラィッ」とか「勘忍ちてッ!」とか云うのでなく唯、「アーッアーッ」ともだえる喘ぎ声だけである。ボクの大きい口が唇一杯に照子の爪先から五指全部をくわえ込んで「ウムムッ」とばかり吸込みつゝ舌の活動をさした時「アーッ」とたか子程の歓声ではないが、照子としてはのど一杯の嘆声を挙げるとボクの口をグンッと蹴離す。ボクがウンとのけぞって足を突き延ばした。彼女が初めて出す「ヒィーッ」と云うヒィヒィ声、彼女がこのヒィヒィ声を出すとはボクも予期しなかった、収獲の一つである。ボクは左腕で照子の膝小僧を抱き込んで動かさぬ、と云うよりあばれぬようにし、右手で再び彼女の足頸を握りしめると柔らかい内にふくら脛の横ばり肉に一杯噛みつく。力を大して入れぬが歯当りも快く照子は腹部を一杯に持上げて「イーッ」と云う声とヒィッと云うのと合致した悲鳴一声でのけぞる。そこからナメズリながら足首の側面クリクリとしたくるぶしにチヨット歯当りを快味して丸く、全く円く珠玉のキビスを一飲み

とばかりにかぶりつく「アアーンッ」これは拒否形式でスネテみた嬌声である。一度は口を離したボクは、

「今度跳ねてみい、両足とも縛ってさかさまに吊るすぞ」と自分で云って自分が楽しむセリフよろしく照子のお多福豆の拇指を口の中に吸い入れて噛み合す。照子の足の拇指は小さくふるえる様にボクの口の中で歯に噛まれ乍らうごめいている。

ホントに円い、白い淡桃色に透き通る美しい弾力性のあるスベスベと絹肌、そのくせスポンジ性もある小シンマリとした珠玉の如き娘のキビスを手にした人があったらお知らせ願いたい。ボクはそれを主眼点として撰ったものだが、せいぜいたか子程度で、この照子のそれが恐らく最初であり最後であると考へてはいるが——。成程何かの特長ある美味のものは各人が持合せているが「アバタもエクボ」でない限り、さて照子のその前奏的吐息にボクは熱狂して彼女の足の至る所、小指の付根からツルリとした爪先までなめる、吸付く、噛むと云った具合で半ば逆上して終った。空虚な瞳孔の内にも目前の床柱にガンジガラメの宙縛りの彼女の片足。

カサカサした赤松の床柱中間に真白い照子

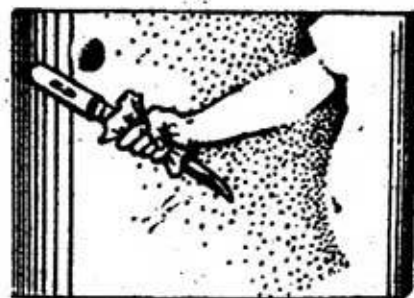
の脛、足首、黄色い団十郎織の宝締は細荒縄の如く紅のフチ取り糸は細い血筋のように、足首より先は充血と血環停止のためか白魚の指先はいさゝか紫味を帯び五指は指股をパツクリ開いて疼痛の無言の表現を——ジッと見入りながらの執念さであった。

こゝで又問題は女達のボクの呼び声である大体ボクを呼ぶのに「社長さん」「御主人」「旦那さん」「お兄様」「ニイさん」「あんたア」「あなた」そして先ず「Iさん」中には「オジサン」ならまだしも「オッサン」に至るまで各人各様でどれがよいとも嬉しとも断定出来ぬが、照子の場合いつも「社長さん社長さん」となっている娘がこのフンイキの中でのかすれ声で「あんた——」はやはり物凄く殺し文句の一つである。多美子のスリッパと裾さばきの音を聞くとスデに多美子はこの離れの離れ庵室まで来ている。ハッとしてあわてる照子。

「ホホホ、照ちゃん、やにあわてるのネエ、今更何なの」

百も承知の助と云わんばかりに酒肴の膳を卓上に置いてドツシリ落付く多美子。ボクの方をチラリッと見るとクスリと笑って首を縮める。「うまい足だよ」ボクが今更の様に舌なめずりするのを見て又一笑い。(この項終)





女剣士の切腹について

青山芳樹

白い稽古着へのノスタルジアと女腹切への憧れを、心ゆくばかり謳い上げて女剣士の切腹を讃美した本誌十一月号の記事は、恐らく同好の皆さまも深い感動を以てお読み下さったことと思います。

女の武道姿というものはまことに凛々しいものです。女の腹切に至っては壮烈その極みというべきでしょう、共に女がその本来の姿を脱して、雄々しい男性的な形態をとる所に異常な美が輝き、それゆえにこそ又益々女性的な哀艶味が漂い、女の性の悲しさが身に迫るばかり発露するのであって、サド、マゾの極致と云われる所以です。現在盛んに論じられている女性の男性化M+Wの心理と一派相通するものがあるではありませんか。女剣戟の隆盛も勿論その現れの一つです。「女剣士」の「腹切」は、男性化の要素で必然に結びつき、一層その効果が昂揚された姿です。

さて、女剣士の用いる白い稽古着がなぜこのように一つのフェチズムの対象となるのか、考えて見ると実に多くの要素がその中に含まれていることが分ります。

第一にその色が「白」であることです。白色の執着、白衣、白装束へのあこがれについては、既に多くの記事が本誌へも寄せられています。白は不思議な性的魅力をもっています。

第二に嗅覚にうったえるその「匂い」です。荒い木綿の香りは、何とも云えぬ懐かしさをもっていますし、激しい練習によって滲み込んだ汗と肌の匂いは直接皮膚にふれている一枚きりの稽古着の生地にしっとり含まれています。

第三にその「触覚」です。厚地の木綿の肌ざわりと、菱形◇にピツシリと縫い込まれた太い黒糸の刺子模様の凸起が肌にふれるゴワゴワした感触のうれしさ、こそばゆ

い刺激が問題です。この刺子によって締められる肌の感覚、その縦横にかけられた糸の形、殊に十一月号の記事にもある通り、ピツタリと肌に喰い込むようなやゝ小さめの稽古着の場合には、それが一層はげしく表われ、切腹して前に上体を曲げる時の背中などには、この刺糸がクツキリと浮き上り、それがそのまま「縛り」の形と感覚に通じてゆくのです。如何でしょう？ この論理は。ご同感下さるのではないのでしょうか。とにかく女性の方は一度、剣道の小型の稽古着を直かに肌に召して見て下さい。殊にこの刺子模様が肉体の起伏の線を見事に表現する素晴らしさは、丁度網目の肌シヤツを着込んだような効果になります。私はこの感じを、刺青の女の持つ魅力と相通ずるように思っています。

洋裁などで愛用されるキルティング（刺子）にも、この感覚を狙った心理的基礎があるのではありますまいか。

第四にその形です。

半袖の稽古着がピツタリ肌に喰い込んだ形は丁度、女の方の白シヤツや白のセーターを着た形になります。これにひだのあるスカートをつけたスタイルが、そのまま稽古着に袴をはいた型になります。半袖セーターが女にも、男にも愛されるのは、その

キリッとした甲斐甲斐しい凛々しさにあるのではありますまいか。それが稽古着の感じそのまゝです。殊にピッタリした半袖の袖口をこぼれる「二の腕」の白さは生々しい露出感を覚え、切腹の場合でも双肌脱ぎとは又ちがった新鮮な感じで、前襟を開き、乳房が露わになるスリルと共に、激しい昂奮を起させます。

この間、あるニュース映画で紹介されましたが、福岡県の田主丸^{たのしめ丸}という町では、剣道が盛んで町民男女がこの稽古着を常用しているそうです。

十一月はじめに東京の「三宅手芸グループ」があるデパートで開いた展覧では、この稽古着の刺子模様、着物やハンドバッグに積極的に応用され、朝日新聞の婦人欄に大きく報道されましたが、私はその女性心理の開眼に一人会心の笑を禁じ得なかった次第です。

次に女剣士の腹切について十一月号の記事を読みながら思いつくまゝを綴って見ましよう。

私は切腹という自殺形式の一つの特徴は、その「支度」の長い時間が醸し出すスリルにあると思います。最も悲痛な苦しみを前にしている「支度」ですからそのスリルにも一層大きいわけです。

切腹の覚悟を前に静かな眠りを取り、遺書を認め、仏前に香をたいて祈る行動も、落付いているだけに一層凄壮です。割腹を控えて、白粥を塩で清く食事をする所は、あの記事の圧巻でした。

自刃の座につき、上半身を脱いで稽古着一枚になって、胸を抱き、盛り上った乳房をいとおしむようにさするときの、刺子の感触はどんなだったでしょう。前を開き、刀に紙を巻きしめ、心気を静めて置いて、左手で下腹の皮膚を押し試み、唇を結んで、「いざ!」となった時に、女腹切の昂奮はクライマックスに達します。

その直後に場景を彩るものは大量の、実に大量の血潮です。この急変はまことに演劇的、あまりにも演劇的な美しさです。腹を抉るように深く掻き出す時の中腰になった女の美しさは、これも十月号の本誌「乗馬ズボン姿の女腹切」に描かれていました。

苦痛のあまり、乳首が勃起する情景は、山田風太郎がその傑作「女死刑囚」に描出した所です。

自ら咽喉を刎ね切り、或いは乳の下を刺し貫いて止めを入れる前に、腹中の臓腑をつかみ出して、前の三宝にのせ、氣力が続けば止めをさした刀をその上に置いて介錯を待つ潔い健気な動作は、女腹切が中康

先生の旧号に書かれた如く象徴的な短刀を以て女性の、最も女性らしい臓器を切り出す行動であるという心理分析から見れば画龍点睛の描写と云えましよう。

以上、十一月号の記事を理論づけ、且補う意味でいろ／＼と思いつくまゝを書いて見ました。とまれ、青い月影を浴びて、桜花散る下に血しぶきをあげる男々しい女剣士の切腹、その稽古着姿の最期のさまは、女腹切の心理学的な深い意味から云っても最高のロマンの素材と申せましようし、「女性的美」の至上の表現であると云ってもよいのではないかと考えます。

おしまいにお願いしたいことは、十一月号巻頭を飾った諸先生の艶麗な筆によって、是非、前に記しましたような要領に従って『稽古着姿の女剣士腹切の場』を一幅の画にして戴きたいと思ひます。十一月号の記事に挿画のなかったことは、まことに残念でした。

もし許されば、それが二人以上の群像であって、具体的には『女白虎隊の最期』を描く凄烈な大画面を期待したいと存じます。更にそれが『女性切腹画帖』として集大成され、出版される氣運ともなれば、恐らく学問的にも貴重な文献資料として残ることでしょう。

春日ルミ様へ

守口 栄吉

初めてお便りします。でも私は昨年の五月奇クを通して女王様を知り、その後は毎夜、女王様の写真を枕許に置いて休ませて頂いています。お優しい、そして威厳ある女王様のお瞳をじっと仰ぎ見ながら、「栄吉唯今から休ませて頂きます。」と口の中でいって、どんな寒い夜でも、殊に会社で宿直の夜など、人目のないのを幸いにして、夜着をすっきり脱いで、冷たいコンクリートの床の上で腹ばいとなり、両手両脚を自分でグッと強く縛り、六〇センチ程隔てたところに置いてある女王様のお写真に就寝のお許しを乞うために蜷虫のようにいざりまり、お写真に口づけしようとする、「馬鹿！」と一かつ、女王様の鞭が、私の背に、イヤというほど打下ろされます。そんな幻想をほしのままにしているときが私には一番楽しい一ときです。でも駄目です。私は未ださぞ美しいだろう女王様の玉音に接したことがあります。いつも女王様のお側で心行くばかりお仕置を受けておられる小沼氏や湖田氏がうらやましゅうございます。もうこのままの辛抱は出来なくなりました。栄吉一生のお願い、私を女王様の奴隷

にお使い下さいませんか。一日でも結構です。若しお許しが出ましたら、栄吉どんなに嬉しいことでしょう。そして毎夜、女王様のお休みになられるお寝台の脚に、鎖を脚に縛られた栄吉は裸体のまま、寝ずの番をさせて頂きます。夜中女王様が御用の場合は、栄吉は口を開けて女王様の御小用を頂きとうございます。定めしそれは栄吉にとって、世界中の何より美味しく栄養になるに違いありません。朝、お眼覚めになればお洗顔の台となり、お食事のときは、謹んで人間食卓のお役を勤めさせて頂きとうございます。若しそのとき、私に少しでも無調法がありましたら、女王様のお気のすむまで、皮鞭のお仕置きを頂戴いたしとうございます。私の食事は、女王様の排泄物と、女王様の皮鞭の外には何も入りません。衣類は、女王様のお古いブローース一着拝領出来ればそれで夏冬を通します。如何ですか、私のお願い、お聞き入れ下さいませんか。どうか。

でも、又海岸へでも滝壺へでも、山の中でも何処へでも、御命令の場所へ出向いて、女王様のお越しを幾日でもお待ち申し上げます。そして其処で、栄吉の老骨が崩れるまで、呼吸が絶えるまで、鞭の洗礼、厳しいお仕置を受けとうございます。

● 栄吉は、四十余才の今日まで独身の寂しさをせめてもの女王様のお写真によって慰められている男です。でも、栄吉とて人並の恋愛をしてみとうございます。それは女王様の奴隷にさせて頂くよりほかに途がありません。

女王様、栄吉がたった一つの光明、春日ルミ女王様、くどいとお怒りを受けるでしようが、重ねてお願い申し上げます。一日だけでもいいのです。一生涯なればこれに越す欲びはありません。女王様の足下に蹲る奴隷にさせて下さい。栄吉、身体に冷水を浴び、いまま雨に濡れながらぬかるみに単座して堺の空にひれ俯して懇願申し上げます。

ラブレターとしては余りにも深刻過ぎたようですがマゾヒストの恋、何卒御寛大なるお思召をもって御聴許下さいませ。

×月×日

奴隷志願の
栄吉 頓首々々

慈愛深き
春日ルミ女王様へ
奉る

少年矯正院体験記

み せ し め



獄 収 一

少年の頃一寸した運命のいたずらから思いもかけない少年監獄にぶち込まれ、またと得難い体験をした事は度々書きましたが、その中から再び一つを選んで書いてみました。

少年監獄の内状は大い書きましたが、今度は重複するかも知れませんが、そのぶち込まれた、所謂、牢屋はどのようなになっているかと言いますと、先ず、少年囚になりますと一ヶ月間は独居拘禁といって、間口一間、奥行一間半の牢屋に入られます。中に便器が置いてあり、一日一回雑役の少年囚が取替えてくれます。

普通の監獄では三ヶ月間が独居だそうです。が、私のぶち込まれた所は植民地であり、又少年囚でもありましたので一ヶ月だけ独居へぶち込まれたのです。そして、昼は苦役でへとへとなり、夜は独居へぶち込まれます。

私はこの独居中に釘拾いをやりましたから四級少年囚にされ、赤のランニングシャツとパソツを着せられ嚴重に服役させられました。やがて一ヶ月経つと雑居房に移されました。

普通の監獄では雑居房と言えば八帖位の部屋へ五人位ぶち込まれるのですが、私のぶち込まれたのは巾五間、奥行一間半の牢格子のはまった部屋で、一間ずつ牢格子の仕切りがあり両面に金網が張ってありまして、この一間の区切りの中へ一人ずつ入れられました。つまり牢格子を通して他の人を見られるとうだけです。他の方等が監獄で体験されたりする男色行為等は思ひもよらないものでした。もっともこれは四級少年囚だけであつたかもしれませんが。私が最後まで不良少年であるとされたので、特にこのように取扱われたのです。然し、格子を通して他の少年囚が

見えるし、又看守の隙を見て話も出来るので独居の時よりも良かった事を覚えています。このような雑居房は内地の監獄でもあつたそうです。

こゝへ入れられてから二ヶ月位経った時の事です。民間の作業中に二級少年囚が脱走してしまいました。二級少年は白のランニングシャツに黒のパンツですから、そのまゝ外へ出ても余り目立ちませんが、胸と背に刑務所独特の番号をつけていますので、夕方までには捕えられ、雁字搦目に縛られて監獄の中の松の木に繋がれていました。その松の木は検身場の側ですので、昼、作業に出たものは夜、監房に帰る時に必ず通わねばならない所にあるのです。すべての者が牢屋へ帰ってしまい、やがて私等四級少年囚が入る順となりました。見たところ、看守が「おい、赤組共一寸待て」と怒鳴りましたので、皆一齊に止りますと「円陣つくれ」と号令がかゝりました。この「円陣つくれ」の号令がある時は、極めてろくな事ありませんが、然し、命令に逆らつたらどんな罰を与えられるかわかりません。約五十名ばかりの赤シャツを着た、そして一様に後手に縛られた四級少年囚が円陣をつくりまわすと、その中央に、先程より松の木につながれていた二級少年囚が引きだされて来ました。大分擲られたらしく、黒パンツ一つにされた身体は所々紫色に腫れ上っていました。

た。よく見るとこの少年囚は二級の五十四号でした。看守が大きい声で、

「この五十四号は本日脱走して今捕えられてきた。こゝで脱走すればどんな事になるか、皆よく知っている筈だ。この五十四号は明日より一週間重屏禁をくらうのだが、その前にお前等赤シャツ共に、脱走した奴ほどのような目にあうかよく拝ましてやる。よいか、よく見ておけ」と怒鳴りました。

五十四号はすっかり諦めていましたが、それを聞くとさつと青白い顔から一層血の気が引いて行きました。

例によって全裸体にされ（罰とか拷問のときは全裸体にしないと嘔吐したり、放尿したりするからで、又看守のサディズムにもよりましょう）、先ず筈で百位、尻をたゝかれました。五十四号はウンウン呻っていました。が、筈が尻に当る度に尻、大腿部、下腹部の筋肉が引きつるのが見えている者にとって何とも言えない痛々しさでした。尻には紫色の跡が幾条もくつきりついていました。遂に五十四号は氣を失ってしまいました。すると看守は、先ず縄をとりて臥かすと手と足を一つに括って台の上にのせ、台の上へ首だけつくようにしてぶら下げました。そして「ザアー」と水をかけました。五十四号はやっと氣がつかしましたがその不細工な自分の姿にはさすがに恥しいらしく「どうかお許し下さい」を連

発していましたが、看守は耳にもかけず我々に向つて、

「いゝか、これからどんな目にあうか、よく見ておけよ」と言いますと、五十四号の乗っている台を蹴飛ばしました。そして吊り下つた五十四号の体をコマのようにキリキリと二十回も廻すと手と足を括って縛つてある縄がよじれて所々燃りの瘤が出来て来ました。すると看守は廻していた手をはなしますと今迄廻されていた反対に五十四号の体はまるで本当のコマの如くキリキリと廻転してよじれた縄はとけてゆきます。全部燃りがとけ終るとその余力でまた縄が反対に燃りが出来て、右へ廻つたり、左へ廻つたりしながらだんだん速度がおそくなると、こん度は筈で尻をたゝきます。それは丁度子供がコマをむちでたゝいて速度をあげるような調子で叩きあげて行きます。

もう五十四号はすっかり参ってしまつて、ウンウンと呻き声をあげ、放尿するやら嘔吐するやらで息も絶えだえです。看守の打下す筈の音を聞くだけで我々四級少年囚は、皆生きた空もありませんでした。或る者は青くなり、或は脂汗をにじませて見ている者があるかと思えば、目をカッと開き、ギラ／＼と光らせて唾をのみ込んで見ている者もあります。しかし、皆一様に汗びっしりでした。私は縛られて自由にならない体をゆさぶりつ

ゝ、異常な感じをうけながら見ていました。やがて五十四号は首をがくと下へたらしめて氣絶してしまいました。すると台を持って来て体を支え、又水をかけて氣をつかせて再び前と同じように行います。この様な罰を約三十分も続けたでしょうか。幾度目かの時、がくと肩の関節が外れ、だらりとなつて何とも言えない変な恰好になつてしまつてから初めて許され、すぐ病室に連れて行かれて肩の脱臼を入れてもらつたらしいですが、やはりその翌日から重屏禁をうけたようです。全くものすごいみせしめでした。

翌日、作業の時での内しよ話は、もつぱらこの話でもちきりでした。このみせしめは私自身責められたのではなく、他人が責められるのを見てすばらしく思った唯一のものでした。同封の写真は當時をしのんでアブノーマル・プレイの時に写したものです。現在、私にはアブ・プレイをやりたいと常々から思っているのですが、相手になつて下さる方もありませんし、かと言って常人から狂人にされても困りますので、その吐け口の意味で、工専時代よりやっていたランニングをやっていますが、あまり目立つので近頃は職場で二十五才迄の若人を集めてバスケットチームをつくりせめてもの慰めとしています。私が一番年長なので他の者はよく言い分を聞いてくれます。それで私は一応キャプテンを務めてお

ります。ユニフォームを作るときに、昔の囚衣に一番近いものとするため、ランニングシャツとパンツは共にオレンジ色としていますし、又ナンバーも昔の二十四を使用しています。最初はオレンジのランニングシャツにパンツを着ると、とても目立つのでみんな嫌がったのですが、不思議にオレンジのユニフォームを着て試合をするに必ず勝つので、今ではみんな何とも言わなくなりました。

バスケットボールでは、どのチームも大抵二色のユニフォームを持っていますが、オレンジのユニフォームの時は私がものすごく張りきるので、と言うより今一色のものを着る時より二倍位活躍するので勝つのですが、他の者はその理由は知って居ないようです。肌をぎゅつと締めつけるようなオレンジのランニングシャツとパンツ、胸と背に大きく二十四のナンバーをつけると、昔の少年監獄にぶち込まれた時を思い出し、何処からか「こら二十四号何をしてるか、伪かんと管刑を忘れたか」と、怒鳴った看守の声が聞えるような気がして、俄然張りきるわけです。

このようにして私は自分の生活の中にマゾヒズムを解決しているわけですが、何とかして近郊の方と心ゆくまでプレイをやってみたいと存じます。私の年来の希望は方円流で縛られてみたいということです。方円流とは伊

予から讃岐地方が発生地です。方円流の達者な方で私を縛ってみたいという方がありまし

たら、すぐにでも飛んで行きたいと思っています。(完)

仇討プレイ

高杉正二

空想マゾの私に、いまでも懐しく思い出されるのは、活動写真時代の仇討物ですが、白装束の美しい娘が、鬼のような武士を討つ、その殺傷の場面がくると、心臓がドキドキして、えも云えぬ快感を覚えるのでした。

懐剣を持って仇に迫るその姿態に息苦しいほどの魅惑をもつのでした。その頃の弁士は男声は男、女声は女でしたので特にその場面は効果をもっていた様です。これは私の小学生時代でしたが、中学に進学するようになつて益々その映画に魅せられ、仇討物は云うに及ばず、毒婦がその情人を殺す場面などに、更にひかれてゆきました。映画のそのシーンをしっかりと想い出するため、同じ映画を五度も六度も見て廻りました。

その中、映画の筋に自分の空想を加えて別な発展をさせるようになりました。例えば山中で殺される情人を風呂場で入浴中に

殺されることに変え、女も手拭の下に匕首を秘し持っていて、身に寸鉄も帯びない男を刺し殺すなどという空想をします。

こういう風にして、殺される男と殺す女に対する執心は強くなるばかりでした。やがて雑誌のさし絵などの「殺し場」を求めて、それをスクラップすることを初めました。現在四十六才の私の最大の悦楽は、そうした絵に接し、それを眺めること、殊に演劇の(歌舞伎芝居)仇討や殺し場が深い興味で、そういうものを観た日は、夜、寝床の中で必ずその殺し場面を心の中で反響しながら楽しむのです。それから、色々の仇討プレイを考えてみたり、自作の仇討殺しの創作を書きそれを持って特飲街へ遊びに行き、娼婦に朗読させたりします。

私と同じマニアが必ずおられると思うのですが、どうでしょう、殊に女性の方でそのようなことに興味をもたれる人があればと日常考えております。

私は訴える

「ア
ブ
放
譚」

水上 流太郎



私は女性の肌着のコレクションマニアである。サディズムとしては観念論的で、そうした画や写真や小説を見たり読んだり書いたりするだけで満足である。

マゾヒストとしては婦人のオコシの洗濯やアンマや身体洗いや靴ミガキ等ならやらせて戴きたいが、鞭でしばかれたり、縛られたり足げにされたりする暴力行為はどうも痛いでしょうから好みません。

こう自己分析して来ると自分も変態と云うほど余り不健康な人間でも無いようです。それのみか私は不思議な事に世にも熱心な誰よりも平和と真実とを愛するクリスチャンの一人です。

私は一年半余り、映画を見たりストリップを見たりレビュウを見たり百貨店へ行ったり夜の天王寺公園を猫奇を求めてうろついたり不思議な妖しい女の誘うまゝに夜のアバンチュールを楽しんでいた、その間の面白い奇譚

はいずれ発表したいと思っているが、私はその期間を私の晦冥期と名付けている。そうしてその反対にずっと家に閉籠って本を読んだりくだらない文章や画を書いている期間を顕現期と称している。この二重生活は、だがそれは私の娯楽の面での話で、日常の仕事の面では頗る勤勉で仕事を欠かす事は無かった。晦冥期中も今も「奇譚クラブ」と「スクリーン」は欠かした事のない私の左右の伴侶であった。しかし私は晦冥期には一切ペンを執らない主義で、一昨年の十月に「奇妙な告白」実にお恥かしい告白を書いてから姿を晦ましてしまった。あの一文が編集部の御厚意で訂正せられ、誌上に掲載せられていたのは四月ほど後の事であった。

もうその頃、晦冥期に這入っていた私は本は積んであったが読まなかった。私は四月ほどして何気なく、あれはどうしただろうかと思つて奇クのページをパラパラと繰って見て

いると、艶臭にむせびて「奇妙な告白」水上流太郎と云う活字が眼底へ飛び込んで来た。私は、それをひろい読み乍ら顔が赤くなつた。そして私と云う男は何と恥も外聞もなくよくもこんな告白が書けたものだ、全く穴でもあれば這入りたい思いだった。まるで私は真裸にされて衆人環視の中へ投げ出された思いだった。私はそれでも何か自分でマゾヒスティックな気分になつて嬉しかった。

それからそのページを繰る度に、あゝ載っている／＼と思ひ、それが奇ク幾十万かの読者の目に留ると思うとゾク／＼したものである。それから古本屋を漁り歩く時も（私は珍書奇書を蒐集しているので）ふと奇クの十月号が目につけると、やがて此の本が誰かに買われ、その人によつて読まれるのかと思うと嬉しいような恥かしい気がするのであつた。私はこうした自伝的な告白「匂いの囚人」とか「ある夫人への手紙」だとか「女郎犯姦録」

とか「腰巻は濡れていた」等々の、体験的筆記を多く書き溜めてはいるが、それらは内容の公開をはばかるものが多くてどうして投稿しても採用されない、いかがわしい物ばかりで続いて発表する気にもなれなかった。それに私は晦冥期に這入っていたから夜の冒険に追われていて、その余裕が無かったのも事実だった。そうして一年半を過した。そうしてその時折書いた短い雑文はフエチ通信として先刻送稿した。それはさて、こうして家に落付いて晴耕雨読の閑日が続くとまた何か書いて見たい気持が油然と湧いて来るものである。そこでまたアプ放譚を書いてみたくなった。放譚であるので何が飛び出すか解らないが私と云う男は私の好きな事しか書けないのであるから他人が読んで面白いかどうか知れたものではない。しかし昔、有名な坊さまが云ったように思うこと満つれば腹ふくるるたえで吐瀉する必要があるからである。私は丁度酒飲みがくだを巻くようにくだらぬ繰言をくどくどと書きのべようと思うのだ（私は本当は酒はだめだが）これを読まれる編集部の方には誠にお気の毒ではあるがこの奇譚クラブの一読者の繰言を是非聞いて戴ける義務があると思うのです。どうぞ因果とあきらめになつて一杯傾け乍らおつき合ひ下さい。そこで今日は私のサディズム考について話してみたいと思うのです。どうやら前置きが余

り長くなりまじた。では早速始める事に致しましょうか。

昔、江戸川乱歩さんが「悪人志願」の中でサディズムとマゾヒズムの発現について貴男は美しい女の泣顔を見て愛慾をそゝられた事はないか、また美しい女にボンと肩を叩かれて嬉しい気持になつた事は無いかと書かれています。勿論それはまだサディズムもマゾヒズムも意識しない普通人の場合の事ですが、その行為が心理的にその人を喜ばせるのだと云われたのを私はうる覚えに覚えています。それから美しい女のふくよかな肉体、また幼児の林檎のような赤味を帯びた艶々した頬を眺めていると喰つてしまいたいほど可愛い、と云う気持になるものです。——接吻がその変形です。その肉体の一部分を吸うこと、嘗めることがすでにその事が食人的名残りであり、フエティシズムへの昇華であつたのでしよう。

その意味で殺人淫樂が最も強い独占意慾の現れでありましょう。たゞサディズムと普通人の見境は一つに意識と云う一点にかゝつていると同時にアプノーマルとノーマルとは一つにその傾向がそのいづれかに偏傾する（意識を中心に）事を意味するのです。しかし意識するしないに関らず、そこに性慾の在る限り発現するものでありましょう。私はその自覚症状を持つてアプノーマルとノーマルとを

心理的に区別しますが、行為的には区別は出来ないと思うのです。

確かに自分のフエチシズムの行為はすでに幼児期に発現したもので、その根底に神秘的な生来の本能がそうした一切の意識を持つて存在しているのを思う時、血と肉の流れに慄然としないではられないのです。そうしてこのノーマルとアプノーマルの区別はたゞもう朦朧としたものになつてしまふのです。そんな探求は人智の及ばない大きな謎でありましょう。

たゞ解っているのは美しい人の泣き顔が、また笑い顔が情感をそゝるのは相手が美しい人だからでありましょう。この美しいものを愛するものの心によつてそれは種々の違いがありましょう。全くサディズムとマゾヒズムとはその人の性質心理状態でそれがその人の生活環境また教育の程度によつてその濃淡も複雑に成つて行つて一つの人間形成（性格）が次第に形成されて行くと思うのです。そして異性を愛したい心（サディズム）となり愛されたい心（マゾヒズム）となるので、行為は要はどのようなにして愛するか、その方法によるのだと思うのです。

こゝにもう一つの形があります。これは愛されたい心と愛したい心の持主がその愛を裏切られた時、彼は復讐者となり異性を虐げる事を喜びとする性的犯罪者が生れます。復讐

から憎悪からサディズム行為をあえてするグループがあります。がそれは復讐心が心理行為と結びついていて純粋なサディズムとは別個のものであるのは犯罪者のサディズムは破壊がその終局です。私の云うサディズムは相手を一時は苦しめますが、それは相手の自分への愛の深さを知ろうとして相手の肉體心理に対する抵抗力の試験で相手の忍従がどの程度の深さかを知ろうとする、まア一種のドランな試みで、その試験のあとにはこちらの心の屈服が伴う愛だと私は定義づけたいと思うので（サド行為のあとに愛撫が伴う）この裏がこれがマゾ心でマゾがあんなに屈服するのも愛したい気持が相手の汚物をなめ、さまじくな屈服にも服従しますが、その根底に愛されたい気持とが交又しているのを明瞭に観取出るからであります。しかし時によると肉體の感覚が痛覚が耐らなく快感を覚えさせ、痛覚そのものがすべてをリョウガする場合があります。そしてその痛覚のみがすべての代償となる時に、はつきり病的症状が現れて来ます。故にサド行為にしろマゾ行為にしろ私は一生に一度の行為で充分だと思っております。またそれとは別に奇クが常に取りあげている精神的なサド行為、まア一種の凌辱感と申しましょうか、吾妻氏などがしきりに提唱しておられる相手の肉體に痛感を与えない凌辱感（氏の小説に随所に出て来るもの）あれ

など二人で夫婦生活でこつそりやるのは申し分ないが、それには広い無人の屋敷の奥か全く孤島でならいゝが——そしてそれなれば凌辱感も出ようが、私のような貧乏人の妻に古ズボンをはかせても大した凌辱感も生れないだろうし、どうかと思うのです。ではその反対にイブニングドレスかブラジャーやコルセットをつけさせマゾヒズムの気分でも味わいますか。（残念乍ら目下私は独身ですが）

まア以上が私のサディズム観ですが次に個人の問題に就いて話してみましよう。私の打開け話なんです。私はどうも生れた時から女のおコシが好きであつたようです。その事は告白にも書きましたが本当に好きなものは好きと云う外はないので、それがフエチズムと云う変態性慾だと知ったのは沢田順次郎氏の「変態性慾の種々相」と云う書物を読んだ時からでした。

それ以前から度々腰巻を嗅ぎ煩うりして身悶えていた私は、どきんとしました。その種々相の中に、妻のある男が——時々妻の腰巻を盗んで隠す実例や腰巻窃盗の実例が豊富に出ていました。しかし不思議なことに腰巻には恐ろしい誘惑の魔力があるのです。女の肉體の最も深部を包んだこの一条の布はその優美な絵模様と共に私の心を激しくゆさぶりました。その時から私は腰巻マニヤになりました。それから今日まで私は密かに無数の腰巻

を愛撫して来ました。それに就いて何の悔も有りません。否それどころかたつぷりと女の体臭をしみ込ませた腰巻の匂いを嗅ぐ時の無上の恍惚を何にたとえましよう。それこそ私が男として生れ、嗅ぎ得た愛する異性（女性）の匂いだからです。ア、これが母の匂いで妻の匂いであり娘の匂いであるのですから。この密かに腰巻を嗅ぐ行為こそ私が異性に対して深い愛が心からなる思慕が有るからにほかなりません。実際に私は愛する異性に抱かれてその人の体臭をうっとり嗅いでいたのが真の念願であるはずで、つまりそれが恥しくて密に腰巻を嗅ぐようになったのでしよう全く女性の体臭ぐらい私を恍惚とさせるものはございません。私は体臭のいゝ方の出現を待っています。私のこうした病癖（？）嗜好を理解して下さる方があればすぐにでも結婚したいと思っています。それからまた腰巻だけを御恵与下さる方がございましたら、私はそれを毎夜夜具の襟に当て深々と貴女さまの艶臭を香がせて戴きたいと存じます。私としてそのおコシがおはき古しのもうお捨てになるものゝ方が結構でございます。それを二十日以上御着用後御恵送下さい。裾などすり切れていても破れていても結構です。たゞ願えれば人絹まがいのものゝ方が直接貴女さまの肌の感触を伝えるものとして愛好出来るかと存じます。私は悲しい夜、淋しい時そつとそ

れに口づけし頬ずりして甘い感傷に浸りたいと存じます。そうして私は貴女さまの御体臭の讃歌を書き綴り御送り致しますよう。どうぞ私の願いに御賛同の方よ、御理解深き未亡人の御方と独身者の諸嬢に切望致します。さすればどんなに私の罪障の救いとなる事でございましょう。

腰巻佩用許可願

小暮道也

私は小さい時から、腰巻が異常に好きで、之は婦人に対する、憧憬、崇拜の念より変じたものと思われまふ。大学一年生の頃より、和服用下着として、常時腰巻を愛用して居りますが、婦人専用の下着を、無断で着用することは、専売特許の品を無断で使用すると同じで、特許法違反に触れるおそれがあるますので、左の様な「腰巻佩用許可願」及び「誓約書」を適当な婦人代表の方に提出して、許可を受けたいと思います。

腰巻佩用許可願

幼時より腰巻に対する思慕の情止み難く、之を着用する事により

あゝ、私はまたとんでもない恥かしい事を長々と書いてしまった。しかしこれが私の今の切なる願いであるから仕方がございませう。若しこゝまで編集部の方がおつきあい下さってこの痴人の繰言をお聞き下さったのなら私は、その方に百万言の感謝の言葉を申すべましよう。それとも途中で御読み捨てな

さいましたものでしょうか。

(おわり)

私は万人に此の文を読まれんよりたった一人の正しき理解者に読まれん事をのぞむ。

若し違反致しました場合は、煙草の火にて私の肌を、お灼き下さるとも異議を申しません。
一、絶対に膝を崩さぬようにします。

之は、腰巻をする以上当然の事です。若し違反しましたときは如何なる処罰も甘んじて受けます。

年月日
婦人代表 ○○殿

誓約書

私儀

腰巻を佩用させて頂きますに就ては、左記事項を厳守致します。

一、禁酒を実行すること。

社交上止むを得ず飲酒する場合、

には、予め願い出て御許可を受けます。

一、禁煙を実行致します。

年月日

小暮道也

婦人代表 ○○殿

若し許可がおりたら、五月下旬の暖かすぎる日、ネルと、毛糸の

何卒愚かな空想をお笑い下さい
しかしながら、之は適当な方を選んで必ず実行したいと思っています。

(終り)

完全なる隷属



坂田信治

年は忙しく去って行きました。大東亜戦争が始り、母を失って二年の月日が、経って行きました。父の仕事は益々多忙を極め、父の欲望も冷めることなく、私達は幸福な毎日が続きました。

私は乱読した読物の中に、マゾヒストとして、益々その欲望を募らせて居りましたが、さすがに父に向って、鞭で殴って呉れとは云い兼ねて、僅かに書物に見出す、サチスチックな描写に、意を満すだけでありました。然し子供の読む本の中にも、何と多くの残酷な場面のあることでしょう。私が今でも記憶しているいくつかを挙げてみましょう。『ピノッキオ』の物語の中では、驢馬にされたピノッキオが、サーカスに売られて、馬秣を拒んだ為に、団長から革鞭で、したゝ殴かられ、

『家なき児』では、惨忍なガロホリ親方が稼ぎの足りない子供達を、鞭で成敗する件り、『黒馬物語』では、数多く登場する馬達が色々な男達に、酷薄な取扱いを受け、『フランダースの犬』では、パトラッシュスが、薄情な金物屋の親爺に、鞭と棍棒で半死半生の眼に合わされて、捨てられる場面、そしてそれ等の中で私を最も惹き付けたのは、『アングルトム的小屋』に登場する、豊園主レグリーでした。

あゝ、その男は何と私に素晴しく見えたこととでしょう。残酷な獣の様なレグリーは、云うことを聞かないトムに、しなやかな水牛革の長い鞭で、トムをぶつ倒れる迄殴り付け、重たい革の長靴で、蹴飛ばす凄じい描写を、私は何べん繰返して、読んだこととでしょう。

そしてレグリーの顔は、牧場の馭者となり、父の顔となつて、限らない思慕の情に、変つて行つたのです。特に父が私を殴り付ける場面を空想しては、たまらない衝動に駆られるのでした。哀れな奴隷トムの様に父から激しい折檻を受け度い、血の流れる程、あのしなやかな鯨芯入りの乗馬鞭で、叩かれて見たいという念願は、募るばかりなのでした。然し乍ら、父は私に対する限り、この上もなく優しく、寛容に満ち、とてもそのような事態の起ることは、望むべくもないことなのでした。私の空想は果もなく拡って行きました。いつか私は、自分を漬することを覚え、その度に、乗馬ズボンと、長靴を、拍車に飾られた父を想起し乍ら、その足元に転る哀れな奴隷に吾身を置いて、激しい革鞭の打擲を頭に

描き続けるのでした。

M大將は、私の小学校出身の最大の有名人でした。そして私達はいつもその偉大さを、教師から聞かされるのでした。私にとってM大將は、別な意味で崇高な人物でした。何故なら学校の図書室に、飾られた彼の写真は、私に激しい感動を与えずには居られなかったからでした。その写真は、大將が陸軍の軍服に身を固めて、黒馬に跨っている雄々しい姿だったからです。無論見事な乗馬長靴と、拍車と、左手には鞭を握られて居った事は、申す迄ありません。そしてその顔貌には、支配者としての、壮重な威厳と、激しい悍性を表して居りました。私はその写真に一眼で、惹き付けられ、遂にそれを盗む決心に迄、到達したのです。

或る日の放課後のことでした。私は落着かない気持で、うろろして居りました。やがて校内はひっそりと静まり、私は秘かに図書室に忍び込みました。無論、人影は見えませんが、私は机の上に椅子を積上げ、高い壁に飾られた額を取り下し、震える手でその写真を外しました。そしてそれをカバンに入れようとして、後を振り向いた時、私は真蒼になりました。何と其処には、体操の教師が立って居たのです。四十に届こうとするその男は、皮肉な微笑を浮かべて居ました。

「お前は、何をしようとしたか、俺は、みんな見たぞ。一人でこっそりこの部屋に這入る所から、知っているんだ。いゝ度胸だな。こんなことをして、どうなるかお前は知っているか、何でお前はM大將の写真を盗もうとしたのか、云えるだろうな。」

私は素直に謝罪を乞い、適当な理由を述べたら問題は、大きくならず済んだかも知れませんが。然し私には何も云えませんでした。驚きと怖れに、声も立てられずに、放心して立ち続けるだけでした。それはその教師に、傲慢と、不敵な印象を与えたのでしょうか。凄じい平手打が私の頬になりました。激しい恐怖に私は涙も出ませんでした。

私の態度の為に、その事件は可成大きな問題に発展しました。偶々その前に、教員室で財布の紛失した事件の疑い迄、私にふりかゝって来たからです。私は夜も眠れぬ程苦しみました。そして父は遂に、学校から呼出を受けたのです。

私は絶望の中に授業を受けて居りました。私の耳には何も這入ることなく、恐しい罪の苛責に責められていました。小使がやって来て教師に何か耳打をする、教師は私に近付いて来ました。

「坂田君、お父さんが、急用で呼びだ。直ぐ帰り給え。」

その言葉は私にとって青天の霹靂でした。真黒な大地が裂けて、その中に落ちて行く様

な、絶望の一瞬でした。冷たい汗が腹の下を流れました。私はぶるぶる震え乍ら、カバンに教科書を、詰めました。生徒達は皆私を眺め、しんとして居りました。既にその事件は拡って居たのです。

力なく引擦る様に廊下を歩く私の彼方に、父が立って居ました。私は眼を上げることは出来ません。私の眼に這入るのは、黒く輝く長靴と、鋭い拍車だけでした。父は無言で校舎を出て行きました。私は屠所に曳かれる羊の様に、とぼくと従うのでした。拍車は歩く度に騒々しく鳴り、長靴は奇妙な軋りを、続けるのでした。怒濤の様な恐怖が、押寄せました。私はそのとき死を念じました。然し父の影に、ついて行くより外はないのでした。

「先生からみんな聞いた。お前は、とんだ事をして、俺に恥をかゝせて呉れたな。えゝ何時の間にか、立派な度胸を付けたもんだ。てめえには、それがどんなことなのか、判っているんだらうな。成程俺は今迄てめえを、甘やかして来た。それはどうも間違いだっらしい。俺がこんなにてめえを可愛がってやつても、まだ人の物に二度も手をかけなきやならねえ、理由を聞かして貰いてえな。云えるだろう。云ってみな。……………」

おい黙って居ちや判らねえじやないか、何と云ったらどうだい。おかしくって、俺にな

んか何も云えないって云うのか。」

私は途切れ途切れに、

「お父さん、ごめんさい。」

と云うのが、精一杯でわなわな震え続けるだけでした。

「何、御免なさい、だって、笑わせるんじやねえ、そう云えば何もかも済むと思うのか、ふざけるんじやねえ、いゝ齡をして、それだけしか云えねえのか、今日はとっくりと、わけを聞かして貰おう、いゝ加減な事じや、済まさねえぞ、おい一体、何の為に人の財布に手をかけた。」

「さ、財布を盗ったのは、僕じやない。僕じやない。知らない。知らないんだよ。」

「何、てめえは、財布は、とらねえ、とらねえって云うのか、嘘をつくな、この後に及んで、そんな事を云うのか。云え、云うんだ。俺をこれ以上怒らせると、唯じや置かねえぞ。云え。」

「し、知らない。僕じやない。僕じやないったら。」

「この野郎、ふざけるな。」

父の顔には、見る見る太い血管が盛上って来ました。父は物凄い見幕で、厚い掌を、私の頬へ叩き付けました。そして父の足元に倒れ懸る私の腕を邪慳に、捻上げると畳の上を引擦り、柱に帯をとって後手に、括り付けたのです。そして玄関よりあの鯨芯入りの乗馬

鞭を手で撓め乍ら、私の前に近付きました。私の脳裏には一瞬鞭で虐げられた馬の姿が浮かび矢の様に消えて行き、果しない恐怖に、戦きました。

「どうだ、大人しく云うか、知らねえと、我を張るか、云う迄は痛い目に合わせるぞ。さあ云え。」

父は威嚇する様に、鞭を私の前で、ピュッと振って見せました。あゝ、その時の父の姿は何と威容に満ち、峻厳なものであったでしょう。短かい下半身を、内股に栗色の革を縫付けた紺色の乗馬ズボンを付けた姿は、何と残酷なものに見えた事でしょう。私はこれから行われようとする折檻に、逃れられないということを、知り乍らも、哀れな乞いを云い続けるのでした。私の心を埋め尽したのは、果しない恐怖だけで、日頃私の渴望した父に依って行われる責への期待の介入する余地は少しもなかったのです。実際の懲戒には、苛烈な行為があるのみで、空想化された陶醉は、砂上の楼閣の様に崩れ去って行きました。

遂に恐しい鞭は、風を切って打下されました。あの尖に付いた軟かい革は、私の腿にピストルの鳴る様な、激しい響きを立て、深く喰い込んだのです。始めて受けた鞭打、それは何と強烈なものであったでしょう。ぐわっと噴き出る痛みに、私はうめき声を上げ、

ひつつるように、からだをもたげました。「云え。」

父は、猛々しく怒鳴りました。

私は身をよじり、ふんばるように頭を押し下げました。低い視線には、父の脹脛に密着するズボンの、一列に並んだ黒ボタンと、編紐が見えるだけでした。

鞭はまた空気をつんざいて鳴り、私の反対の腿に斬りこんで来ました。鞭のひと打ち毎に、眼の前の世界はふっと消えて、真黒になりました。真黒な闇がその儘続くならばまだしも、そうならないように、鞭は間をおいてやって来ます。あつ、次の鞭がやって来るな、と気がつくのに間に合うように、その都度、私の感覚が這戻って来るのです。その鞭打の調子を整えた残酷さが、はじめは溢れる様な恐怖を、わめき叫ぶ絶望感に代らせました。わめき声は、実に嗚咽となりました。私は、ひっきりなく、ひい／＼泣く自分の声を聞き、鞭のびしっという衝撃の音を聞き、肉に突きさゝり肉を噛みきる鞭の、脳漿がいまにも、眼や鼻から流れ出るのではないかと思う程の、痛みを感じました。

鞭の打方には、一定の順序がありました。腿、尻、右、左。わけても堪え切れないのは、鞭が肉体の同じ個所に二度目にめりこんだときの、激しい痛さでした。もう眼には、薄い靄が立ちこめ、何も見えなくなりまし

た。父のズボンも、畳も、鞭も、みんなまざりあって、紺と、黄色と、黒との斑点となり、大きくなり小さくなり、うねり、踊ってはさかまき、拡がっては縮まり、一面に臉の裏に、泡だち騒ぎました。私は何か暖かいものが、下半身を流れて行くのを、僅かに意識しました。小便が洩れて、落ちたのでした。私は底なしの泥沼へ、沈んでゆくような気がしました。私の肉体はそれでも間歇的に、身もだえし、抗いました。いつか完全に意識を失い、私は真黒な闇の中に、漂って居りました。

何か鼻のつんとするようなものを感じて、私は眼を開きました。私の正面には父の顔がありました。私は父の膝を枕にして、横たわって居たのでした。ずうんと頭に響く様な、疼痛に私は身をよじりました。私の視線には腕貫に強固な拳を通した、あの黒い鯨芯入りの鞭が映りました。どっと恐ろしさが、甦りました。私は無意識に眼を閉じました。

「どうやら、気が付いたようだな。痛かったか。どうだ、大人しく云えるか。さあ云って見な。」

私は始めて甘い悲しみが、身に迫って来ました。

「お父さん。」

私の胸には、父への思慕の情が湧き、泣き始めました。泣いても泣いても涙が、とめどもなく流れました。父は優しく私の頭を、撫

で続けました。私は真実を語ろうにも、溢れる涙で声にならないのでした。

私は下半身に受けた、むごたらしい傷の為に約一週間、床に就きました。腿と尻とには、夥だしい鞭跡が、幾筋も連り、皮膚は破れて、赤い肉があらわに現れ、苦痛に身もたえ続けるのでした。父はその間、医者に見せることも出来ず、暇の許す限り私の枕元に居て、傷の手当をして呉れるのでした。私は総てを語りました。父はそれを信用するともしないとも、云いませんでした。怒りは去って優しく私を介抱するのでした。最も私は父に殴られたいなどという告白は、しませんでした。それは幸福な一週間でした。そしてそのとき、私はマゾヒストとしての洗礼を、父に依る鞭打ちに依って、始めて受けたということを、悟ったのでした。

マゾヒストと自認する多くの人々は、皆多かれ少かれ、激しい苦痛を越えて、その苦痛を愉悦に、すり換えるのでしようが、然しその鞭打ちは何と肉体にとつては、強烈なものなのでしよう。確かに私も空想的に、その行為を憧憬し続けました。そしてその最も理想的な状態で、それは行われたにも拘らず、私の心に去来したのは、大いなる恐怖であり、苦痛であって、悦楽の陶醉を感じ取る余裕は、少くとも存在し得ませんでした。然し乍ら、日を経るにつれて、その恐怖、苦痛、支

配者に対する感情、それ等は甘い、堪え難い思慕となつて、私の心を強く縛ったのです。あゝ、それは何と強烈な、魅力を有して居た事でしょう。被征服者の喜び、私は心の底から讚美しました。そして征服者の父は、私にとって最早完全なものとなつたのでした。私はかくてマゾヒストとしての烙印を、はつきりと刻まれたのです。

(未完)

〔読者通信〕 (投稿歓迎)

復刊第二号がやっと手許に届いた。もう嬉しきで一杯、待ちに待った第二号だ、表紙をあける手がふるえる。雪国の淋しい明けくれば毎日毎夜、吾身の哀れな夢を追う私にとつてはたつた一つの慰めである貴誌。朝路のぼる氏の或るソドミアの告白、いつも乍ら私を満足させて呉れる三根耕二氏の被虐少年期そして青葉楓一氏の密淫、楽しく読ませて頂きました。さて、京都の夜明けをお書きになった豊後忠さん、あの一日の生活は私も経験があっただけに胸にひびきました。又朝路氏の告白は私も軍隊生活を経験しただけに、我ながら同じ事もあるものだと思ひました。私もその為三十才迄結婚もせず同好の士を求めていましたが、遂に世間の力に押されて結婚はしては見えたものの、却って独りで自虐の娛しみまで奪われてしまい、どんな苦しい毎日であるか、誌者の同好の士よ、お察し下さい。

(新潟・Y・U生)

「私のイメージ」

鼻のプレリユード

北谷 英二

クレオパトラ――

☆お前の☆鼻☆は☆ ☆☆☆
俺の ☆☆☆ ☆☆☆☆☆☆
☆人生まで 吸い込んでしまった ☆☆

リズ・テラーに――

美です 絶対美です
あなたの お鼻です
ドレスです イヤリングです
牛の 鼻輪 です
輝やくあなたを牛にして
お臀を鞭で追うのです

鉤と刺のある風景

―― ままこのしりぬぐい

挿絵参照。「とげそば」「うなぎづかみ」「うなぎづる」などとも云う。路傍、草叢の少々湿地などに自生する蓼科の多年草。莖葉ともに、下向せる逆鉤を有す。

若くて美しく、その上、お上品なお嬢さんがくるりと剥かれた白玉子の四つ這いでモォー、の恰好をさせられている。
(何故か、理由は、私も知らない)



そのお嬢さんの丸いお臀がニユーツ私の鼻先にあるのです。
私の右手の一本の蔓草が
そのお月さまを撫でるのです
その美しさを讃えるのです



私の右手の一本の蔓草が
その小川のせせらぎを
やんわりと撫でるのです
やんわりと逆撫でにするのです

二 ハリブキ

挿絵参照。別名「くまだら」深山の谷間に（と言っても、一寸した谷間なら何処にでも）自生する木本で高さ四五尺。莖葉共に鋭い剛刺を密生する。観賞用として庭園にも栽植される。

僕たち三人は、去年の正月、初登りをしたのです。人っ子一人通らない、冬の幽谷を登

ったのです。散り積った落葉を踏みつけ登ったのです。名もなき草木が枯れ倒れた自然の道を往ったのです。縦横の茨のバリケードを突破していったのです。美智子の裸体を「賞翫」しながら行ったのです。そして、見つけたのです。

「まあ、物凄い刺、見ただけで、ゾーとするわ」と、妙子は言ったのです。そして、「わたし、素晴らしいこと、思いついたわ」

そして、そして

そうなんです。
妙子は、作ったのです。
針の棒で妙子は、
作ったのです。

そうなんです。

ハリブキ三本折取
って、

美智子のオッパイ
を保護したのです
美しいそのオッパイ
を保護して、山
を、下りたのです
家まで暖かく、保

護したのです。

世にも不思議な、そのブラジャーを着けられるとき、

美智子は、天にも飛び上りそうだ。とても、とても、たまらない。というのです。

世にも不思議な、そのブラジャーを着けるとき、

妙子も、とてもとても、たまらない。という僕も、たまらない、のです。

そして、そうなんです。

全く不思議なそのブラジャーは、
今も時々、保護するのです。

暖かく、大切に、

美智子のオッパイを保護してるのです。

ある実用新案

【名称】パス・ゴマ（未だ良き名称みあたらず、これは仮名である。諸賢、須らく適名を御教示されんことを）

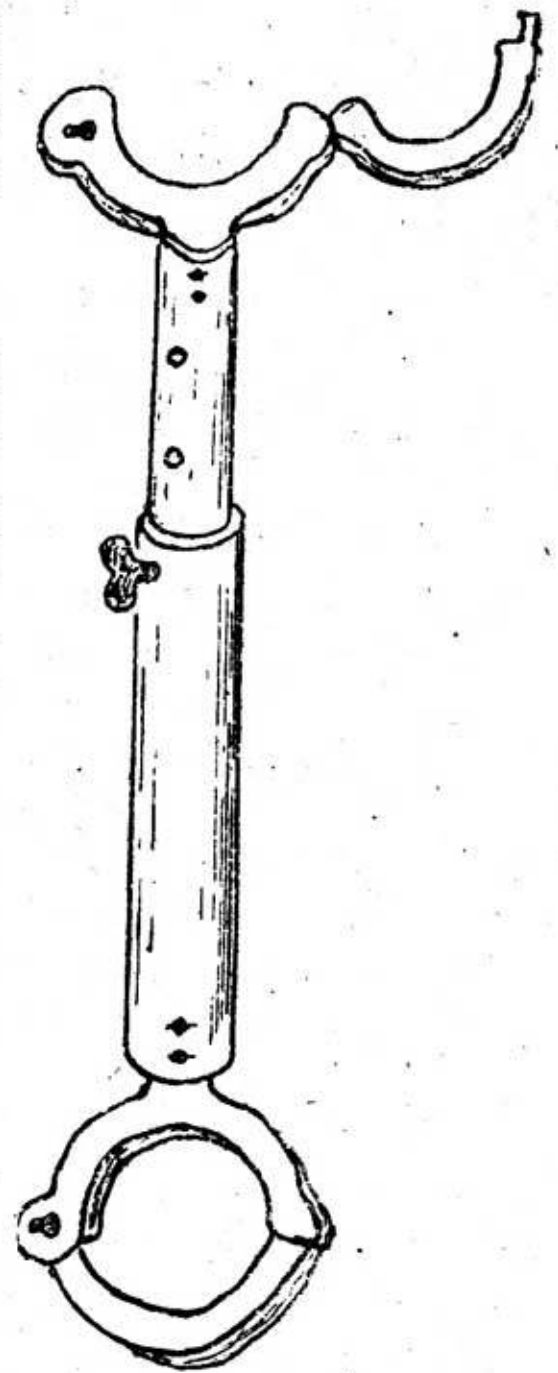
【材料】裸女。一尺余りの二重鋼管（大なる撮影用の三脚など、けだし最適のもの）足械（太股用のもので金属製の輪械など）蝶ねじ。その他少々ばかり。

【製法】先ず、図の如き離間器を製作する。穴はドリルで適度にあればよい。

次に裸女の両手は背で手錠を、両足首には五寸程の余裕をもたせて、足鎖をかける。最後に、先程製作した離間器を裸女の膝の上部に、とりつけて仕上る。極めて、簡単そのものである。

【使用法】(一) 膝間のパイプの長さを種々に変えて、歩かせる。両膝をひろげた裸女は、前かがみになって、よろけながら歩く筈である。裸女の臀部の画く軌跡を見よ。流麗至極な、幾何的曲線をなすであろう。即ち、これ、コンパスである。

(二) 裸女の乳房の上下をロープで巻き、梁から吊す。無理に吊し上げる必要はない。その膝の離間器のパイプを、いっばいに引延ばして、蝶ねじで止める。それで、足先は床から離れ、「パス・ゴマ」は緩かに廻り始める。後は、諸兄の手にした鞭が、水平に突出た裸女の太股を鳴らし、その回転を急速ならしめるだけである。これ、即ちブチゴマ（叩き独楽）である。



【特長】本新案の特長は、今さら言わずとも明らかである。が、念の為め言うならば

「本パス・ゴマ」は、製品になりたるその後は、時々ブチゴマで遊ぶ以外、そのまま大事に長年月保存し置くべきなのである。そして、猶も蛇足を附すならば、嵌口具をも併用し置くがよいのである。「製品」となりたる裸女からは、たとえ一刻と雖も、手錠や足鎖、それに離間器や嵌口具の一つをも取ってはならぬのである。

【附記】材料は総べて、新品を無理せずとも中古品で充分。裸女なども、強いて新品でなくとも、中古品で結構つくれる。尤もどんなものにして、その生産年月日の古い材料は、避ける方が賢明である。

又、嵌口具を併用する場合、食事は鼻孔からで、充分である。第一、手間が省けて

よいし、面白味も倍加する。この場合の食物は、ミキサーを使用してやれば、何でもよい。ミキサーの壊れている家庭では例えば「うどん」「そば」それに「ビール」や「ラムネ」など。ミルクやスープでは、余りに愛敬がなさすぎるし、維持費が人間様並みにかゝる。米の飯なども茶漬けにすれば、「パス・ゴマ」は巧みに一匹で食べてくれる。犬や猫並みで、宜ろしい。老婆心までに今一言、食事に関して言うならば、食器は洗面器かパットの大型でよく、箸は勿論不要。ストローなども、「パス・ゴマ」のためを思うならつけてやらぬ方がよいのである。

鼻の国

己は歩いた。黄昏の薄明を「牛」をつれて、己は、鼻の国の道を往った。（鼻の国は遠い）己は広い鼻の世界を、歩きつづけた。鼻の神霊に供える、犠牲の美智子を引連れて、己は、歩きつづけた。（おわり）

映画の緊縛断片

(主として逆吊り、吊下げに就いて)

緑

猛比古

私の書く時代小説では、殆んどいつてよい程緊縛の場面が出て来て、又かと思われる読者の方も多分にある事と察せられます。

特に私は好んで逆吊りや、吊り下げの緊縛シーンをよく書きますが、小説では想像の産物としてこれを描き得ましても、実際にこの眼で見、お目にかゝったと云う事は極く稀でしかありません。

戦争中召集で、太平洋の孤島ウエーキに駐屯していました折、既に食糧も乏しくなった、昭和十九年の十月頃だったと覚えていますが使役として海軍地区へ糧秣を受領に行った時糧秣廠倉庫の前の大樹の太い枝に、上半身を裸に剥がれた一兵卒が、舟艇用のロープで後手に、七八重にぐる／＼巻きにされ、地上から約二尺も高く吊り下げられて、ところ／＼、

打撲の跡も痛々しく、ぐったりと首を垂れてゐるのを見て、思わずドキリとして顔色を変えた事があります。

海軍の炊事軍曹に理由を訊ねた処、二日前の夜、糧秣庫に乾パンを盗みに入ったのが見つかつて、見せしめとして罰に吊り下げてあると云う話でしたが、全然あれから喰わしてゐないから、今日明日の命だろうと、平然として語っており、懲罰棒で相当こっぴどく殴ったから大分弱っているでしよう云々とおりました。この炎天下で絶食の私刑をうけている彼のこの体罰を見たのが、実際の現実の死を伴った吊り下げの緊縛の、後にも先にも唯一のものです。

懼らくは余命幾許もなく、吊り下げられた儘、彼の命は絶たれた事であろうと、今思い

出しても気の毒で、ウエーキ島の榊原司令以下、これを黙認して衆人に曝した。海軍の孤島に於ける私刑に対して、おそらくやこうしたりシンチは彼一人ではなかったであろうと、私自身緊縛を好むにかゝわらずその無慙なやり方には憤懣を禁じ得なかったのです。

冒頭から話が横に逸れましたが、映画に於ても時として、逆吊りや吊り下げの緊縛を見る機会があります。私自身映画の予告や梗概等から、吊り下げのシーンを予想して観に行くと場合もあります。時偶それを期待しない映画で、この種のシーンが現われた時、思わず拾いものをした様な悦びを感じ、反対にスチール等により、又脚本からそれを期待して見に行った映画に、それがカットされてあったり、暗示程度に止めたり、非道いになる

とスチール写真のみと云った映画に対しては内心やりどころのない不満を感じるのですがそれはあなたがち私独りではありませんまい。

縛られた女優や緊縛シーンに關しましては既に過去に於て、升岡、藤木、白石、長岡の諸氏が、蘊蓄を傾けられて、よくこれだけ念入りに緊縛シーンを取捨選択されて見られたものだと思ふの外ありませんが、その殆んどが女優に限られて言及されておられ、僅かに二十八年四月号で「責めの美的表現」を發表された小此木氏だけが一部男優の緊縛に觸れておられた程度です。

成程、女の緊縛シーンは妖美、落花の風情はありましたが、眞の緊縛（我々が希む緊縛）は映画女優からは仲々に掴みとれないのではないのでしょうか。それは映画全体の構成から見ても、緊縛シーンはどこまでも構成上の一過程であつて、緊縛シーン自身が主たるストーリーでないからだと思います。断片的には時折、ハッとさせられる様なものもありますが、殆んどは形式程度のもが多く、特殊な緊縛を主体とした映画でない限り、監督にその事を希む方が無理なのではないでしょうか。

先日知人と難波新地二番丁の「花車」と云うバーに行きましたが、これぞ往年の緊縛女優、凄艶原駒子と、楚々たる大倉千代子の共同経営のバーで、二人の芸名標札も判っきり

出ておりましたが、彼女達が活躍した若い時代のあのあでやかな姿は今影もなく、私のイメージは果敢なくも夢と消えて、娘役大倉さんは、元来背の余り高くないところへ、めつきり脂肪太りのいゝ年になつて、マダムが板についた感じでした。

「監督、カメラ、ライト、小道具その他数十人の衆人環視のもとで、本当に縛られるなんて恥かしいですよ。大抵は手を後ろに廻すだけで、私も二三回だけ後ろから撮ると云うので、両手を縛られたけれど、それ以外にあまり本当に縛られたことないわ。第一助監督の方が照れちゃつて、本当に縛つたりなんかしないで、これでいゝかい、痛くない？なんて御機嫌ばかり伺っているんですよ。縛ることの好きな助監督が日活にも一人居てね。皆さんから少しあの人変じやないかしらなんて陰口云われていたわよ——」

と、大倉さんの話でしたが、これが撮影の際の女優緊縛の大体の真相でしょう。だから女優の眞の緊縛なんてものは、監督がサド傾向の人でない限り、又女優の寛大な許容がない限り、そう／＼ざらにあるものではないと思います。

だから映画の場合、単なる縄をかけたものや縛つたものより、逆吊りや吊り下げの緊縛がより一層のリアリズムな緊縛感を現わしているとは私は考えます。一応視野を変えて、逆

吊りや吊り下げの緊縛と云つた角度よりこれと考えると、これは後に手を廻したただけのものや、ぐさ／＼にゆるく巻きつけたものだけでは到底誤間化せないからです。

既に掲載されたものと重複する様で恐縮ですが、戦後私の見た女優緊縛のサド性のあるものは、「縮図」に於ける乙羽信子と「江戸城炎上」の長谷川裕見子が、細川俊夫扮する簀井玄以風の悪医者に火箸か何かで責められるシーンが、その最たるものゝ様に思えました。最近では高千穂ひづるが「笛吹童子」や「若君逆襲す」で吊られるシーンがあり「死美人屋敷」で伏見和子がこれ又吊られる一カットがありましたが、精しくは掲載済みのものですから省略するとして、以前に升岡氏が一寸触れられた「我が恋は燃えぬ」について少し詳しく述べたいと思います。昭和二十四年十月頃の封切と覚えていますが、溝口健二監督のもので、日本の封建性家族制度を打破しようとした女優、平山英子（田中絹代扮す）の伝記映画でありましたが、私の今に残る強烈なサチスチックな印象は、有名な秩父騒動に於ける女工部屋の女工群に加えられたリンチの様相です。映画自身のストーリーよりも、僅か一分そこ／＼の女工部屋での私刑のさまがまざ／＼記憶に残っているのです。人買いは村田宏寿、女工の主人公は水戸光子でしたが、彼女が数人の女達と共に半裸で縛

と緊縛されて吊り下げられ（これははっきり吊り下げた全身をスクリーンに出していた）或いはふとん巻きにされ、他には手足を後手に緊縛された女達が、髪をふり乱して転がり、伊藤晴雨好みの残酷場面に加えて、鞭や割竹をもった、角刈り、刺青の男がピシ／＼女を殴っていました。これは女の責め場を写した過去のもののうち最優秀であったと思います。

宮城野由美子が「振袖狂女」で吊り下げられて責められるシーンは、残念乍ら最初上半身が撮り、次で両脚が浮いて吊り下ったシーンに変わりましたが、ゴシップ等を読むと、彼女は吊られた為数日筋々が痛んだと云った様に書かれていて、実際に吊られた様ですが、事実吊り下げたのであれば、何故に彼女の吊られた全ポーズを撮らなかったのかと遺憾に堪えません。あゝした形式によれば、何も実際に吊らなくても、別々に写して、さも吊り下げた様に見せる。常套手段と何ら変わらないからです。

「獄門島」のスチール写真では、朝雲照代が太い縄で肉に喰い込む程、七重八重に犇々と縛られ、吊り下げた事を現わそうと、ロープの一端が彼女の背から松の枝にかけ渡して根元で縛り止めている様に見せていますが、彼女の下腿辺りから下が写っていないのは、何かの台の上に乗っているに違いなく、それは

体の重味が縄にかゝっていないのでも分ります。しかもインチキと云おうか映画中にはこのシーンが全然なかったことで、私はこの一事で「獄門島」の映画が一ぺんに興醒めになつてしまいました。何でも映倫規定でカットされたと言う弁解でしたが、果してそうか、羊頭狗肉とはこんな映画を云うのでしょうか。

映画で見た本場の逆吊りは、吉村公三郎監督の、「我が生涯の輝ける日」が圧巻でした。宇野重吉が清水将夫の特高に拷問をうける場面で、逆吊りの頭が畳より一尺程も浮いていて、しかも逆吊りにしてあるのを画面一杯に判っきり見せ太い縄で足首までぐる／＼縛り、体全体に均等に重みのかゝる様配慮されて頭から足先までをすっきり写していましたが、逆吊りの緊縛感が犇々と出ていて秀逸なシーンでした。

本庄町事件で注目を浴びた暴力の街を描いた、山本薩夫監督の「ペンには偽らず」でも、街のボスの乾分（植村謙二郎）からリンチをうけて、逆吊りにされた青年（俳優名失念）が、足で顔を踏み躪られる場面がありました。が、逆吊りの全身が画面に入っていて、苦悶の表情がまぎ／＼と現われていた様に思います。

嵐寛寿郎主演の、やくざの世界を描いた、中川信夫監督の「私刑」は題名とストーリーにつられて見ましたが、嵐寛と池部良が、魔

手におちて私刑をうける場面が、余りにも飽気なく肩すかしをくってガツカリした事があります。題名につられて失敗したもつともよき例の一つです。

山村聰の第一回監督による「蟹工船」ではボスに反逆して私刑をうける船員の一人が、マストに高々と宙に吊り下げられました。両手の縛ったところから、吊り下げたのではなく、首から両腋下にかけて縄で吊り下げられて、両手は後手に別の縄で縛られて、体全体の重味が両腋下にかゝっていた様で、残酷そのものでした。最後にマストがギリ／＼と甲板から海面に廻転して突出し、吊り下げられた儘縄をきられて海中に水没しますが、これなど私刑場面の残酷性の最たるものでしょう。さらにきら光る波間と月光、暗い甲板上のマストに、海風にさらされて吊り下げられている構図は、思わずドキリとする私刑の緊縛シーンでした。

「七つの宝石」で月丘夢路が吊り下げられるシーンがありましたが、大したことはありません。

「私は狙われている」では、カーニバルでミスカマクラに当選したミス女優荒川さつきの第一回作品で、最後に屋上でアドバルンに縛りつけられて宙吊りになる個所がありました。が、遠景は人形がはっきりして大した事もなかった様です。

最近の天然色映画「宮本武蔵」で三船敏郎の武蔵が杉の大木にずる／＼と吊り下げられ相当長いシーン吊り下った儘で、沢庵和尚やお通とやりとりするところがありました。この吊り下げのシーンは、過去の片岡千恵蔵や黒川弥太郎、又大都映画の近衛十四郎扮する武蔵の、千年杉の吊り下げシーンより、遙かに迫力があり、実際に吊られている事をまざま／＼と見る者に納得させてくれました。所謂大スターが、替玉でなく実際に緊縛されて吊り下げられ、撮影の時は度々のカットでどれ程吊り下げられていたかと、俳優稼業も仲々楽でないと思つたのでした。

東映の子供向映画「里見八犬伝」の刑場の場で、白衣で松の木から吊り下げられていた一犬士（犬川莊助と思うが一篇のみを見たので間違っているかも知れません）が、体を前のめりに丸くなって、腕を縛った太縄で吊り下げられた為、腕縄が相当喰い込んでいて、いかにも痛そうに見えたのは映画自体は別として、吊り下げシーンとしては優秀でした。俳優は新人でしたので名前は知りません。

吊り下げの緊縛ではありませんが、「真空地帯」に於ける木村功が、反逆の罰で搾衣をはめられて、どしや降りの雨に打たれているシーンがありました。これなど獄収一氏好みで、あゝした責めも案外、見る人を見るサジスチックな場面ではないでしょうか。

不勉強で洋画は余り見ませんが、逆吊りでは「流刑の大陸」に於けるアラランラッドが、再三再四、雁字搦目に縛られて逆吊りにされて海中につけられ、又引揚げてはつけると云う、残酷極まるシーンがありました。これがアラランラッドの替玉にしろ、緊縛の上逆吊りにして海中につける場面は正しく本物の人間で、そこに何らのトリックは見出せませんでした。

「魔術の恋」では、先に誰方かゞ、ジャネットリーの後手錠について述べておられました。私は最後のシーンに於けるトニーカーティスが、両手を縛って両足に枷をはめられた上、逆吊りになって水槽につけられるシーンの方に反ってサジスチックな刺激を覚えました。

同じことは「スーダンの砦」についても云えることで、マリアモンテスが柱に立縛りされたものより、奴隷女が何十人となく手枷足枷をされて連縛で歩む姿や、最後に彼女を救おうとする男優が、両脚を鉄枷で固定され、縛られた両手が水車の様な車につれて、ギリ／＼引締められて行く車引きの拷問にあうところの方が反って残酷性を帯びていました。残酷と云えば、戦前封切られた「オクラホマキッド」で、ジェームスキャグニの父親が異端者として、ハンフリーボガード扮すボスの乾分共に、よってたかつてリンチに逢うシーンでは、縛られた儘二階から絞首にな

って、だらりと手すりから垂れ下るところがあり、首の絞輪が強く父親の首に喰い込んでいたのが歴々と写されていました。両脚も垂れ下った儘の姿であって、よくあれ程の凄惨なリンチのシーンを撮ったものだと思いたことがありません。戦後再輸入されたものを再びこの一シーン見たさに観ましたが、この残酷場面は綺麗にカットされてありました。恐らくは為政者の思惑でもあったのでしようか。

「征服される人々」でポーレットゴダードの吊られるところがあるそうですが、これは見落しております。

演劇では「真空地帯」が舞台でもかなり生々しかった様です。戦後流行の空気の「肉体の門」も先駆的価値はあっても、吊り下げられてリンチをうける場面の印象は余り深くありません。寧ろ露原千草の未亡人が、柱に縛られ乳もむき出しで鞭打たれる方がこの劇の場合優秀でした。

旅廻りの青空千鳥劇団の「お秋大明神」と云うのに吊り場面が挿入されていてサチ効果をねらっていました。反ってこうした旅廻りの芝居に、案外面白いのがあるのではないのでしょうか。

現在の大阪歌舞伎座が、未だ楽天地と云った大衆娯楽場であった頃、母に連れられて観た五月信子の「四ッ谷怪談」は今にして思え

ば物凄くサチスチックでした。幼な心に憶えているのは、高橋義信扮する民谷伊エ門に切られたお岩が、古井戸から井戸繩に吊られてせり上ってくる場面がありまして、戸板に縛りつけられたお岩が、川に流されるところなど、三昔近くも昔の事乍ら、昨日の事のようにまぎ／＼と憶えています。

【読者通信】

(投稿歓迎)

奇譚クラブ複刊の由、何よりも嬉しく拝見いたしました。悪書追放により廃刊された本誌が再び活動し出し多くのファンを喜ばす事が出来たのは一重に皆様方の御努力の賜と厚くお礼申し上げます。私は特大号になりました前年度十月号より愛読致しておりましたが、その内容は頗る学問的であり合理的であり、又真剣である点が非常に感心しておりましたのでずっと続けて居りましたが、六月号より休刊になったので心に大きなうづろが出来たような気が致しました。恐らくこの運動を起された方々は、その内容の現実的な問題を自己の中に見出し、その驚愕を悪書追放という形で現したのでしょう。今日のようなめまぐるしい社会では人間の心は常に騒音と混乱の渦が巻いております。そのような状態

伊藤晴雨氏の非小説「性液」に出てくる様な逆吊り、吊り下げの舞台は、今より反って昔の方が大胆で強烈だった様に思います。

昨今東京辺りで、サド的なストリップ剣劇がかゝっているようですが、関西では青空千鳥の外余りお目にかゝりません。

最後に奇クへのお願いとしまして、此種の時代

趣味の緊縛や逆吊りの半ヌードの構成を希望しますが、辻村隆氏らの御意見もお伺いして見たいと思います。

偏狭な映画観察で申し訳ありませんが、一応私の見た儘、感じた儘に述べて見ました。

(了)

発展し、一人でも多くの人を啓発されるよう、取るに足らぬ一ファンでありますがお祈り致します。

(H・A生)

一般の無理解のため貴誌の如き特殊な雑誌が廃刊の憂目を見た事は小生等同好の士の一人として残念至極な事と思っておりますが今般貴誌が再刊の運びになったことを友人より聞き誠に喜びに堪えません。小生は女腹切に人一倍の好みを有する者として斯界唯一の存在でありました貴誌が姿をかくしてしまつた事は実に淋しい事でした。外に女腹切などという特異なものも扱っている公刊誌はありませんで漸くにして女腹切も興に乗ってきた折でもあり今後共女腹切に関する記事及写真載せて頂きたく希望するものでありますさて小生永年此の特異な趣味の同好の士によるグループを作りたい

と思っておりましたが、その機なく只独りにて追求して来た次第です。最近小生の相手役の三十才の女性が小生の趣味に100%共鳴して信太さんと同じく一週間に四日位夜分泌かに鏡に向つて切腹遊戯を演ずるといふ告白をしています。その際、女性同志で集団切腹する色々の情景や女同志の同性愛に耽る空想をするそうです。そうして彼女は深山へ行つて小生の見てゐる前で或は一緒に切腹したいと熱望しています。彼女のそういう折の心理状態を中康弘通先生にお送りしたいと思ひます。尤も切腹以外の一般的マゾヒズムの傾向も相当あるようです。彼女を写した珍しい写真が沢山ありますが、これはブライベートなもの故遠慮致します。先般東京の撮影会で撮つた切腹写真を後日御送り致しますよう。

(東京、日相生)



マニア誕生

坂野上信彦

「人間万事塞翁の馬」人の運命ぐらいわからないものはない。小さいときには、誰れでも夢を持つ。大臣になりたいとか実業家になりたいとか思うまえに、もっと単純で素朴な希望がある。私は飛行機に憧れた。私が幼年学校に入ったのは、当時の時代の傾向が大きく影響したのは勿論だったが、操縦桿を握って大空を飛んでみたいという、幼時からの憧れが直接の動機であった。予科士官学校を経て航空士官学校へ進み、私の宿望は、一応達せられるところまで来た。併し私の場合、念願の叶った欣喜は、大きな人世の不幸への転機でもあった。操縦演習のために、満洲へ渡って五ヶ月目に終戦となり、挙句の果が夢にも想わなかった捕虜の逆境に置かれる悲劇に終ったのである。

私は丸四年シベリヤに抑留された後、昭和二十四年八月に復員した。私がいまからお伝えする奇妙な体験は、その異国の丘の收容所生活中に起ったものである。

バイカル湖の西方約七百軒、シベリヤ鉄道幹線に沿う小都会タイシエットを起点とするバイカル・アムール鉄道、通称バム鉄道と呼ばれる新路線の建設工事のために配置された收容所群が、タイシエット地区であった。各收容所は数百人からなり、鉄道敷設の予定線上に点々と設置され、順次夫々受持の工事が完成すると、更に未開の奥地へ進んで又新工事に着手するという方法で、着々と延長されていった。未開地は、有名なツンドラ地帯であり、密林や原野や湿地の錯綜した所謂悪疫瘴癘の地である。従って殆ど固有の地名もなく、各收容所は起点のタイシエットから数えた鉄道の軒数を冠して呼ばれていた。私は最初、第二百二十軒に收容され、一年半の後に、第二百二十七軒へ移動した。

奥地へ入って一年と十ヶ月を過ぎた昭和二十三年の十一月である。当時、收容所の運営は、階級やメンコの数か物をいう機構が崩壊して半年たち、その後を受続いだ民主グループ

の組織のもとに、至って整然と行われていた。それは全く、捕虜生活が板についたかのようであった。三重に張り囲まれた柵が、所々壊れていてもそのまゝ放置され、四隅の監視望楼は、その梯子が既に役に立たないままに荒れるに委せてあった。衛兵所詰の警戒兵が、その場所に居ることは珍らしい程であったし、朝夕の点呼も形式的に紙に記入されるだけで、捕虜である筈の私達の方が、その怠慢ぶりに驚く始末であった。

その年の八月の選挙で、民主グループ委員会の一員に選出された私は、生活部長という職にあった。收容所生活の維持のために、ソ連側から認められた内勤者グループの責任者として、言わば世話役の元締といった仕事で附帯するソ連側との交渉事務も多く、それは全く縁の下力持的な地味で忙しいものであった。私は入所した年の冬に、重い原木を担いで無理をしたのが原因で、ヘルニア的症狀が起り、それ以来激しい作業には耐えられな

かった。一方幼年学校時代に習った独逸語が又意外に役立ち、それを橋渡しにして手早くロシア語を覚え、その頃には結構、日用語が使えるようになっていた。(ソ連に於ける独逸語は、丁度日本の現在の英語のような立場にあり、加えて独ソ戦のときに独逸に捕虜となつて、現地で習得した連中が尠からずいたので、私の稚拙な独逸語が、入ソ当初から暫くの間は、随分彼等との交渉や連絡に便利であつた。)それらの理由から適役として推された私は、責任を感じて朝から晩まで飛び廻るように立働いた。

毎日の食糧受領は、一番大切な仕事の一つであつた。食糧伝票を書いてソ連人事務所に行き、何人ものサインを貰つてから、夕方倉庫で受取るのである。倉庫番は、サモイロフというシベリヤ生れの三十そこ／＼の男であつた。心もちつり上つた薄い眉、うつろのよ／＼な細目の碧眼、不相応に大きく拡がった小鼻、そのどれをとつてみても細工の悪い出来のうえに、やゝ猫背気味の五尺そこ／＼ときているので、その風采は目立って貧弱であつた。彼は又至つて不愛想であり、口数も少くぶつきら棒で、凡そ取付のよくない男であつた。ソ連人達の間でも殆ど相手にされず、彼の存在はいつも孤独であつた。私は最初からそれこそ腫物にさわるような気の遣いようをした。食糧は、穀物・パン・肉・魚・野菜・

砂糖・塩・油と夫々一日の定量があつた。楽しみのない生活にあつては、三度の食事に寄せられる期待が何より大きなものであつた。

毎日の献立に変化を持たせるために、炊事勤務者はいつも懸命であつた。私の交渉によつて、在庫品のなか／＼同じ定量の穀物であつても、出来るだけ巧い取合せを撰んで受領することが必要であつた。弱い立場の私は、倉庫の実権を握っているサモイロフの御機嫌を伺わなければならなかつた。

そんな私の態度が気に入つたのであろうか案ずるより生むは易しの譬、日がたつにつれて、彼はその偏屈さから抜け出したような心易さを示すようになっていった。この倉庫から配給を受ける二十人程の收容所の警戒兵や三ヶ所の鉄道信号所に勤務するソ連人達に対してよりも、私達に好意を示しだすようになっていたのである。

酷寒のシベリヤは、九月のなか頃から霜がり、その月末にははや雪がちらつき始め、十一月ともなれば一面の銀世界、朝晩の寒さは零下十五度を超えて、秋を忘れたような冬の到来であつた。

月始めの或日のこと、受出した食糧を炊事夫が担ぎ去つた後、いつものように錠前を下して、鍵を手渡そうとする私に、

「サカノウエ、一寸頼みごとがあるんだが」
いつにないサモイロフの言葉に、私は驚い

て彼を見た。

「なんですか? いったい」

「いや大したことじゃないんだが……」

彼はこう前置してから、その頼みごととなるものを、例のぼつたりぼつたり語る調子で説明した。最初のうちは、彼の欲しているものが、どんなものであるか、全然見当もつかなかつた。が、やがて地面に図示して身振り手振り宣しく話すのを聞いて、私はやっと理解出来た。彼の欲しているものは、何と浣腸器であつた。收容所の医務室から、ドクトルに内証で借りて来て貰いたいというのが、彼の頼みであつた。独り者の彼が、どうしてそんなものがいるのだろうかと、不思議に思つたが、突込んで訊けるような相手ではないので「若しあつたなら、こっそりあなたの家へ持つて行きましょう」

こういつて私は別れた。事実私は、浣腸器など医務室にあるかどうか知らなかつた。入ソするときに持つて来た医療器具が、少々あることは知っていたが、その後、薬品の補給だけで、ついぞ器具類の補充されたことはなかつたのである。とにかく私は、医務室へ飛んでいった。その年の六月までに、ほかの将校は一人残らず、イルクーツクの特別收容所へ移されていたのだが、医務室ばかりは例外で、軍医中尉が一人残されて、ほかに衛生兵であつた補助者が二人いた。初めは、「軍医

殿」と呼ばれていたその中尉も、民主グループの運営になってからは、単に「ドクトル」と呼ばれるだけで、収容所の誰もがすべて対等に話するように変わっていた。

サモイロの希望ではあったが、かけがえない貴重な器具の借用である以上、いかに私の立場であっても、ドクトルにだけは断って承諾を得なければならぬ。幸いに浣腸器は二つあった。ドクトルが氣を利かせて、小瓶に分けて呉れたリスリンを買った私は、その足ですぐに届けにいった。

サモイロフの住居は、衛門から右に折れ、収容所の外柵に沿った方向に二丁程斜面を上った小台地の一角にあった。収容所関係のソ連人の家が点々とあるなかで、彼の建物は一番はずれの端であった。

「オーチニ、スパシーボー（大変有難う）」彼はついぞ見せたことのない笑顔で、それにいとも大切そうに受取った。

「ドクトルに断ってありませんし、壊れたら代りがないのですから大事に使って下さい。」それからいつ頃返して貰えますか？」

「十日間位だ。勿論注意して使うよ。終わった

ら君に渡すから」彼の満悦そうな顔を見て、私は先程の疑問を思い出した。

「誰が病氣なのですか？」

彼は私の問いに、一寸妙な顔をした。私は

拙いことを云ってしまったと後悔した。

「私だよ」

彼はつぶやくような声をした。

「お大事に、薬が足りなかったら又持って来ます。綿（脱脂綿）も入用でしたら云って下さい」

云い終ると私は、部屋を辞した。作業隊の歌声が、山の方から聞えていた。六時を知らせる鐘の音が、あたりに舒して鳴り響いた。

十一月七日は、革命記念日である。七日、八日と二日続きの休みが与えられる。正月と五月一日のメーデーと、そしてこの革命記念日が、ソ連の最大の祝日である。郷に入ったら郷に従えの通り、私達日本人も、この日は毎年盛大な催物を展開した。彩りを添える特別料理の計画と準備は、早いときは一月も前から行われた。定量しか貰えない食糧であつてみれば、それは当然であつた。私は就任して初めてのことであったので、特に苦心を払つた。

前日の六日の食糧受領は、二日の休日分と更にその翌日の分と、合せて三日分を一度に受取った。そのときにサモイロフが示して呉れた心尽しは、全く意外であつた。倉庫の品物を全部検量して、残品の帳簿以上に余っているものを残らず追加して、きれいさっぱり配給して呉れたのである。冬季の食糧は、運搬途中に雪をかぶったり、倉庫に入り込む湿

氣のために、殆んど目方が増して居り、余るのは当然のことであつたが、それは倉庫係のなかば公然の役得として、着服されるものと聞いていたのであるから、彼の好意は誠に格別というに価するものであつた。おかげで予定のほかに二、三品を更に加えられることになり、収容所全体がサモイロフの好意を感謝したばかりか、当事者の私は大いに面目を施す結果になった。私はその原因ともいうべきものに就て、勿論十分な見当がついていた。然し浣腸器を貸したことに對する彼の謝意であらうことを、ドクトルにも勿論、ほかの誰にも打明けなかった。事実とは云え、浣腸器と料理などという余りにも奇妙な対照であつたからである。

二日間の休日も、来てしまえばあつてなく過ぎてしまった、私は却って平日より慌しい程であつた。二日目の午後、特別料理のなかから饅頭を選び、折箱につめてサモイロフのところへ持参した。見たことのない菓子を前にして、彼は目をまるくした。強いて云えばロシヤ料理にあるピロシキにでも相当する。「ヤポンスキー・ピロシキ（日本式ピロシキ）ですよ。皆がとても喜んでいます。日本式の菓子がどんなものか、まあ宜しかったら召上ってみて下さい」

饅頭と云つても、中味はえんどう豆のあんこであつた。彼はウオットカを御馳走して呉

れた。コップの底に二糧位の量であつたが、咽喉から胸にかけて、焼けつくように強烈だった。

休みが明けると、又作業に明け暮れる毎日である。二、三日して私は、金庫と私物品庫の鍵を失っていることに気がついた。作業の成績つまりノルマの遂行成果に応じて、捕虜ながら若干つのルーブル貨が支給される。

然し折角のその金も、奥地の收容所生活ではさして役に立たなかつた。物を買いたくても一軒しかないささやかな売店には、殆んど欲しい品物がなかつたのである。従つて、貰った金は夫々個人の小袋に入れて預けられた。その保管も私の仕事の一つであつた。心当りの場所という場所を、限なく探したが見つからなかつた。夜になつて、私はあの日のサモイロフの部屋を忘れていたことに気がついた。

八時を回っていたが、私は思い立っていつてみることにした。シューバーに身を包んで門を出た。笠を大きくかぶつた丸い月が、皓々と輝き、凍りついた真白な大地が、怪しい無気味な反射をかえして続いていた。発電所のモーターの音が、独りあたりの静寂に冴えて響いていた。

ワリンキ（フェルト製の防寒長靴）の雪を払って扉を開けた。建物の入口は全部二重に出来ている。第一の扉を入ると巾一間、長さ三間ばかりの板の間がある。ここは室内の物

置のような役もする。部屋の入口は、やや右の方にあつた。私はノックをする前に、壁にはめ込まれた横の窓から、なかを窺つた。何気なく白いレースのカーテンの隙間から覗き込んだ私は、アツと思わず小さな叫びをあげた。何と異様な光景の展開が映じたことである。八畳程の広さの部屋、その一隅にある寝台上に、正に一糸も纏わない女体が大の字形にうつ伏しているではないか。いや伏しているのではない——伏させられているのだ。両手と両足が、寝台の四隅に縛りつけられている。しかも枕が何か、下に入れてあるらしく、臀部が一段と隆起して見える。

私は素手の冷たさも忘れて、壁にぴたりとにじり寄つた。

サモイロフが居た。寝台の左隅に立っている。その右手に握られているものが、先日私がこの手でこの場所に届けた浣腸器であることに気付いた瞬間、えも云えぬ全身のすくみを覚えた。両膝がガタガタふるえていた。それは、彼サモイロフの重大な怪しげな秘密を盗み見てしまった恐怖と、現に目撃している余りにも生々しい状況からかき立てられた本能的な昂奮との二つからであつた。

突嗟に身を翻していたならば——恐らく私は、いまこうして奇クを通じてお伝えするような男には、なっていないに違いないと——そのときの私は、十の怖しさに勝る十二

の興味が、勃然と身うちに湧き出していたことを想い出す。

素晴らしい隆起を見せている二つの双丘、私の眼は焼きつくような凝視を伸じた。次に起されるべきサモイロフの必然の動作が、私をそこへ導いたのである。窓硝子の曇りがいだたしかった。僅か一、二分の間に過ぎなかつたのに、サモイロフの細目が、あのときばかりは大きく見開かれて、一点を見つめている時の刻みの何と長く感ぜられたことであつたか。

ペーチカの焰がゆらゆらと輝きを増した。サモイロフの影が、大きく石灰塗りの白壁に揺いだ。彼がひざまづいて片膝を立てた。胸をはだけた白シャツに包まれたまろしい肩が、グツと前方に傾いた。女体がそれを感じたかのように懸命にもがいた。僅かなゆらぎが、縛しめの厳しさをみせた。女の頭が擡げられたが、髪にかくれた顔は、到底わからない。私が我に返つたのは、発電所の小屋の横に來たときであつた。どうやって外へ飛び出したものか、全く夢中であつた。我ながら大胆な行動が、遽かに恐しくなった。勿論忘れものの鍵のことなど、念頭になかつた。追われるように、斜面を駆け下りた。衛門のくぐり戸にぶつかるように飛びこんで、始めて安堵の胸をなげ下した。建物の灯が、やけにぞらしく感じた。夢幻境から、現実へ引き戻

されたような思いがした。

その夜は、いっぴく寝苦しかった。夜警が知らせる拍子木の時の刻みを、いくつも耳にした。かたい藁布団の上で、寝返りを繰返した。白壁が、無心のペーチカのゆらぐ炎に照らしたされる。私の眼底には、焼付けられた映像が、反復して明滅した。

サモイロフが、なぜあのような行為をしたのか、その時の私には全くわからなかった。

女が誰であったのかも、知るによしなかった。事務所に勤める若いノルマ係の娘は、痩せぎすの身体だし、ほかの家庭の夫人が、あのようなことをされるとは、とても考えられない。浮浪者に近い女が、憐れな犠牲者になったに違いないと思われた。

シベリヤは古来有名な流刑地である。シベリヤ生れの連中には、その昔流刑にあつて、その儘土着してしまった者の子孫が、沢山いる。陸続きの流刑ではあつても、広大な大陸の一地方それも未開の酷寒な僻地に送られることは、大海の孤島に追われるよりも、遙かに厳しいことに違いない。国政が全く変わった現在も同様のことが行われている。重罪に処された者は、強制労働収容所に叩きこまれるが、罪の軽い者や、或る期間収容所労働に従事した者は、一定区域内の居住という形式で刑期中シベリヤ開拓を続けなければならないそれは正に「格子なき牢獄」といったもので

ある。連中は、直接の拘束を受けずにいられるというだけで、とてもその生活に保護保証を与えられるというのではない。私のいた奥地でも可成の数を見ることが出来た。女囚も数からずいた。寒さと飢えに苦しんでいるこの種の女を、甘言で釣って連れこむのは、容易なことであつたろう。よし後日彼女の口からその事実が暴露されたとしても、大した問題にはならないに違いない。

民度の低劣な奥地では、現行犯を抑えられない限り、明白な事実でさえも平気で白をきって済ませられる。

夢中であつた私は、確かめなかったが、女は完全に近い猿轡を、しっかりと嵌められていたに相違なかった。必死に抵抗する女を、押えつけて裸にむき、あのように理想的な形にしっかりと縛りつけるまでの経過が、様々な姿で想像された。見られなかったことが、口惜しかった。サモイロフが羨しかった。

翌日のサモイロフは、いつもの彼と、何の違ひも見られなかった。伝票の順序に、炊事夫が秤に載せる粟やキャベツを、黙々と見ている彼の眼は、いつものうつろな細目であつた。私もさり気なく彼に対した。

幾日かして、浣腸器が返された。私の手は震えていたかも知れない。胸の動悸を顔に表すまいと懸命であつた。お互いの秘密があるうとは、彼と私のほかに誰が窺い知れたであ

ろうか。

私という人間のうちに、マニアの生命が誕生した。それは全く一夜のうちに、いや数分の間に突如として生れ育つたのである。

私の身うちに、その種子のようなものがある。萌え出でるときを待っていたのだとはとても思えない。私の家は医者であつた。

浣腸器などは勿論のこと、数々の器具や、あの婦人科用の寝台まで、幼いときから見慣れていた。診察室を覗き見して、叱られたこともあつた。然しそれは、誰にでもあるような興味と、悪戯の域を出るものではなかった。

十五の年から、凡そ一般社会と隔絶された特殊な環境で、厳しい集団生活を続けた私である。それは、ソドミアの傾向を生む温床に在ったとこそいへ、サディスティックな浣腸マニアになるようなものではないだろう。私自身シベリヤの一夜を措いて、他に動機を求めすることは出来ない。

復員して五年になる現在の私から、日毎毎に、忘却の彼方へと遠ざかつて行く異国の丘の回想のなかに在って、独り歳月を超越して、常に生々しく烈しい記憶を止めてやまない。あの夜の不可思議な力に、いまさら驚く私なのである。

(完)

【体験告白手記】

お 臍 の 研 究 (一)

その美しさに就て

須 藤 律 夫



昭和廿九年六月号より三回に渉り、「臍窩への考察」と題して、奇ク誌上に拙文を掲げた処、同年七月五日、九州方面の読者某氏より貴重な研究資料が曙書房を通じて転送され、私は某氏や書房の御親切に感謝すると共に、実にこれある哉と思つた。又待望の複刊第一号には「お臍の型と種類」と題して土屋淑人氏が面白い発表をされているのに気がついた。文中氏は——人間一人——の顔が違つてゐるように臍も又各人各様、それ——の異つた型や種類のものがあり、一度この方面の研究をやったら面白からう——と述べられてい

るが、私も全く同感で、殊に臍紋（お臍の穴のしわ）が万人不同であり、生涯不変である以上、それはたとえ個人識別には役立たない迄も指紋と同じように、何等かの暗示を与えるのではないかとすら思つてゐる。純白に輝く女性の豊満な腹部に唯一のアクセントとしてその単調さを救うお臍の穴、その美しさを論ずる前に、先ず女性美の探究（小倉清太郎氏著）の中から、臍の美学を引用して見よう。腹部の美を引き立てる上に、重要な役目をするのに臍がある。臍と云えば、ただユーモラスな存在として、笑いの対象としてのみ認

められているが、腹部の美学で臍はなくてはならぬものである。一寸臍など無用のようにも考えられるが、これが無いと随分間の抜けたものになる。同じ単調さでも、背面には色々の線もあり、起伏もあつて面白いが、腹部となるとただなだらかな膨らみを見せた面で、無用のようでも一点の臍の陥没によって、その単調さが救われている。臍の美的価値は、やゝグロテスクではあるが、臍のない美人を想像する時に一層はつきりすると思う。どんなに優雅艶麗の佳人でも臍がなかったら、どんなものであるうか。臍ヘルニアの手術を受けた婦人が、後で臍の紛失に気付いて、医師に抗議を申込んだ（筆者註、正木不如丘著、臍の悲）と云うような挿話も珍らしくない。旧訳聖書の雅歌篇に、

「汝の臍は美き酒の欠くる事なき円き杯の如し」の有名な句がある。聖マリアを讃えた一節であるが、女の臍を美酒の絶え間なき杯と見たのは、なか——性的で面白い。乳房のところ、その形ではほほその人の容貌の美醜が推測されると云つたが、臍に於ても同じ事が云える。臍の形のよい婦人は、大抵顔の形もよく、又体全体の均齊もとれているのが多い。臍の形を見た上で、その婦人が美人かどうかの判断は、大抵誤りなくつくものである。第一に臍はその人の健康状態を示す。發育のいゝ、均齊のとれた肢体の人は、きまつて形

の良い、美事な臍も持っている。反対に、發育が不良であつたり、内臓器官に障礙のある人の臍は、形も醜く、一般に云つて貧弱なのが多い。では美人の臍はどんな形か、先ずその大ききから云うならば、臍は一般に大きい方が健康の相である。ヴィナスの臍なども随分大きい。大きい臍は明朗で、健康で、美的である。昔から支那人は大きい臍を形容して「李を容るゝに足る」と云つて、大きい臍を讚美している。(筆者註、支那珍籍全集四卷、恋愛占易)李を容るゝは多少誇張があるとしても、明朗で健康美を誇る臍は先ずそれ位の大ききが必要である。大きい臍と云つても、然し出臍は禁物である。これは生理的に云つても病弱の相で、審美的にも、折角の美人を台無しにしてしまう。次の臍の美学で見落せないのは、臍の向きである。臍はどうしても上向きでないといけない。上向きの臍は笑いの表情を示し、健康と明朗さを暗示する。支那人が理想の臍に李が入ると云うのも大ききばかりでなく、臍の上向きなのを上乗とした事が判る。第三に臍の位置である。均衡から云つて、臍は上位にあるのが美的で、これが下方にあると、勢い下向きの臍となり易い体の發育が旺んで、健康な人の臍は腹部の上位にあり、従つて上向きを取る事になるのである。臍の位置は、男女の性別によって非常に異っている。陰部からの距離は、男子より

婦人の方が一般に大である。即ち下腹部は婦人の方が一般に大である。これは腹腔内に重要な生殖器官が包蔵されている為めに外ならぬ。(後略)又西田正秋氏著「新女性美」の中より御紹介すると――。

人体の腹部で最も目立つ焦点は臍である。臍は通俗には、おかしな、滑稽な存在のように思われているが、人体美を認識しようとする者が、臍がおかしいなどと云うような不真面目な考えでは到底駄目である。臍は母親の胎内にあつた時、母体から栄養を受けていた直接の輸送管(臍の緒)の受け入れ口だが、生れて以後はその記念として遺る文で一向役にも立たず、又ヘルニア(脱腸)にでもならない限り、何の生命との交渉もない、単なる残痕のように思われるかも知れないが、臍は美的見地からすると、腹部の中央のアクセントとして、なかなか重要な美的価値をになっているものなのである。例えば、女性の脂肪のあるふくよかな腹部では、臍は漏斗状(上戸形)に段々に窪んでいる。恰度ミロのヴィナスの臍がそうになっている。それに引き換え筋肉質の男性の腹部では、粘土にいきなり指を突っ込んだように窪んでいる。ラオーコンの像がそうになっている。ところが幼児のおなか(腹部)では恰度ネイブル、オレンジのへその様に浅く平らになっている。ネイブルとは臍、ネイブル、オレンジとは臍蜜柑と云うこ

と。このように臍でも、老幼男女によつてその形態上の相違があるのである――云々。

(以上何れも原文のまゝ)

以上要約すると、美しいお臍とは大体次のように規範づけられるのではないだろうか。

(一)先ず大きくて深いこと。

(二)腹部の上下左右に偏らず、正中線上や、上向きに位すること。

(三)豊かな腹部の皮下脂肪に囲まれていること。

(四)紋上の結果として、人差指が充分に入る位の寛さと深さとがあること等々。

尤もお臍の美しさと云つても、各人によつて多少の好みがあり、或る人は楕円形に凹んでいる時が最も美しいと云い、或る人は座布団を指で突いた時のように、奥深い楕円形が美しいと云い、又人によつては例のお臍のゴマの黒々とあつた方が、却つて美的だとさえ云っている。又先日或る本で、南洋の一部種族間では、所謂「出臍」が最も美しいものとされている事を知り、私は一寸奇異な感に打たれたが以上果して何んなものであらう。

ところで茲に、このお臍に対する好き好みの問題で、面白い統計がある。それは今年の二月、ストリップのメッカ東京浅草のA店では、観客を年令、職業(会社員、学生、その他)嗜好の三種に分け、裸を対象としての調査を行ったがその結果、身体つき、顔、乳房

等は省略するとして、「お臍」に就いては次の様なデータが出されている。

大きなお臍 C 他の職業(医師)

中位のお臍 A 会社員、学生

小さなお臍 B 会社員、学生

即ちA、B、C、の順で、会社員、学生と

も中位のお臍を好むが、女体の神秘を知り尽しているお医者の場合は、何故か大きなお臍が票数も大量得点で一位であった。之で見ても大きなお臍は、矢張り健康を暗示しているのかも知れない。次に最近——(と云ってもこの一年間)私が美しいと感じたお臍に就いて意見を述べると、先ず第一に先般封切られた、イタリー映画「テオドラ」に於ける肉体女優、ジャンナ、マリア、カナールである。容貌も私の好みに合ったものだが、豊満な腹部にぽっかりと窪んだ美事なお臍、これは十月号「お臍の型と種類」の中、女性のお臍の二割一分から三割七分を占めると云う所謂「すり鉢型」である。又本年三月、日劇ミュージック・ホールを覗く機会にめぐまれたが、私は先ず漣ゆうこの、圧倒的なポリウムのある肢体と、そのお臍の美しさには少からず魅了されて仕舞った。之も分類は前掲と同型であるが、お臍の周囲をめぐる皮下脂肪が余りにも豊富な為か、宛ら棒でお臍を突き刺した様に窪んでいた。即ち朝倉文夫氏がその著「民族の美」の中で形容している。

——大きく引きしまってずっと奥深く、焼火箸で突いた栄螺の蓋の様な臍——とはこの事であろう。又今年の八月だったか、ハワイ土人の踊り子が遙々、本場フラダンスの披露に來日、東京丸ノ内の日劇にその公演が開かれたが、その中の一人が素晴らしいお臍を出して踊っていた。それ程お腹は豊満ではなかったが、然し楕円形の黒ボタンを押し込んだ様に、彼女のお臍はとても奥深く窪んでいた。昨年九月号「主婦の友」誌上に発表された、科学的なお臍占い、その中の分類によれば、最も理想的だと云われる美事な「ぽっちり型」である。女性に一番多いと云われている「すり鉢型」と比較し、その審美的価値は兎に角として、これこそ私が最も好ましいと感じた臍相である。

又或る日曜日の午後、素人のど自慢の時間であった。読書をし乍ら、聴くともなしにラジオを聴いていた私は、次の様な出演者とアナとの会話に、ふと我に返った事である。

先ず司会者の澄んだ声、

「美事合格、お目出度う御座いました。」

えゝ大変姿勢のいゝお娘さんで御座います

御仕事は何をおやりに……」

「あのう……お勤めです」

「今迄にも歌か何かで合格の御経験は？」

「えゝ今年の夏……」

「何をおやりになりましたか？」

「それが……あの……一寸恥かしいんです」「恥かしい？是非おきかせ下さい」「あのう……うふ……おへそのコンクールなんですの」

期せずして爆笑と共に、万雷の拍手が湧き起った。海浜に並ぶ美女のお臍のコンクールその審査員にでもなったら嘸素晴しい事だろう。然しそれはマニアとしての私の夢かも知れない。

未完

【読者通信】(投稿歓迎)

私は奇クの愛読者になつてから毎月二十日過になると次号が市販されるのを実に鶴首して待ちました。切腹写真、挿絵、記事、通信等をこよなく楽しんで、漸く老境に入ろうとするのを鼓舞して参りました、そうして気に入ったものをスクラップに収めて段々と増えるのを楽しみにしていたのです。所が四月の下旬当然書店の店頭に現れる筈の六月号特大号の姿が見えず、大体の情勢は察知していましたが、全く意気消沈してしまいました。殊に最も楽しみとした「読者座談会」が流産したのは返す返すも残念でした。私としては万難を排して出席し憧れの切腹ファンの方々と親しく面接出来る千載一遇の好機と勇んでいましたのに、「切腹面集」の企画が行き悩んだことですが、是も残念ですね。我々アブニストのオアシスと頼む貴房の存続を意義あらしめ、又相互のつながりを失わない為にも同人の方々の新しい構想による御活躍を期待するものです。

(兵頭庫一)

殘虐なる女性達

森本愛造・訳

才五章 「女性の支配慾」

これ迄述べてきた各章では、例外なく女性がその権力に対する欲望と殘虐性との対象を既に服従させ得た状態で發揮した生活環境を説明してきたわけであるが、今度は女性が同等の權利と地位とを持つ者に対しても、前記の場合と殆んど同様にその淫虐と支配とを發揮出来た事の実例について述べよう。これらの慾望は、明らかに女性の持っている母性的な本能と不可分なものであると考えられよう。総じて、眞正の母性として目覚めた女性は、対象が、絶対的な服従の下にあり、絶対的な支配が容易に実現し得る時に快い感覺をうけるのが常だからである。(訳者註)これは恐らくは母性本能の最も容易な表現としての同情と庇護慾望とを指すものと考えてよからう。幾多の実例や日常生活に徴して女性は男性よりも権力の排除による影響が甚だしく強いものである。男性は他の存在を自己と併立せしめる事が出来るが、(訳者註)男子同性

愛に於ては多く、ヘデラストとウルニングは交替し得るが、女性同性愛に於て、男性的地位に立つ者は決してその地位を相手方に瞬時も与えない傾向があるが、これは前記のビルリッゲル博士の説を裏付けるものである。女性是如何なる犠牲を払っても自己の地位を守ろうとする。肉体的条件に於いて、絶対的に男性より劣る能力しか持たない女性にはこれに代る武器が賦与されている。それは、狡智と、侮辱と輕蔑とに対する驚異的な忍耐、消極的に見えて、実は積極的な媚態等は、それらの代表的なものである。彼女は、男に媚び、女性的な外面上の魅力によって籠絡し、男の持っている騎士的な心理を巧みに利用して、自らの慾望の赴くまゝに男を追い込んでしまうのである。特に私達は、女性が、男性に於ては珠玉の如き高貴さと、烈しい最高級の昂奮に於てしか出現しない涙を、如何様にも、何時でも、思いのままに利用出来るという特質に注目せねばならない。

また、この涙は、不合理な自己流の理論を恰かも、合理的であるかの如く他に納得せしめ得る媚薬として、屢々利用される事も注意せねばなるまい。この様に、女性に権力を賦与し、それを持続せしめ得る方策は甚だしく多いのである。而も、彼女等が権力を握った場合、正しい効用は殆んど希み得ず、只単に権力の失われる事を恐れての権力の濫用が、極端に行われる場合が多いのである。女性はこの様な一般的な傾向を自分自身で認めている。例えば、カティンカ・フォン・ローゼン女史が「女性の吐く言葉の中如何に軽い悪口でもそれは深い憎惡の念に裏付けられている。女性は唇許に漂うほゝえみにも拘らず、ほんの一言二言の冗談が、最良の度に深い心理的な傷害を与える事をしており乍ら、平然とそうした事をやってのけるのである。」と。更に他の部分で、女史は「女性が隣人を傷つける事によって享樂し、その肉体的快樂に彼女達故意に耽る」と述べている。

古来、この様な女性の支配慾に悩ませられるのは常に配偶者である。ラウ(2)は次の様な実例をその著「殘忍性」(3)に於て示している。「私は、英國の一学者が老年に至って、その妻を殴打して死に至らしめたという事件を忘れる事が出来ない。この学者は殆んど一生涯を悪しき配偶者の卑劣な取り扱いによって傷つけられ、然も、世間の眼から、その不幸な事実を覆い隠していたのである。しかし、時

「至り彼の震え戦えていた神経は暴発し、我を忘れたのであった。英国の法は彼に死刑の宣告を与えたが、判決に際して判事の述べた印象的な言葉は感動を以て迎えられた」「世の何人と雖も、ふかい感慨なしにこの事件の経過を辿る事は出来ないであらう。」と。

この様に特殊な事件を招来した場合男性の置かれた家庭内での地位は悲劇的な感情で包まれるが、他の場合、女房の尻に敷かれた亭主の有様は、悲喜劇的な方向へ向い、一種グロテスクな雰囲気帯びて来る。併し、こうした男性の地位にある良人達をすべてマゾヒズム的性向の人達であると速断してはならない。多くの場合、所謂マゾヒスト達の希望的な推測にも拘らず彼等支配されたる良人達は人生の最大の希望を妻の支配からの離脱に求めている事が多いのである。彼等が前述の様な英国の実例に似た経過を辿る事なしに、平和な生涯を続けるのは、離脱への希望がないからというよりも、むしろ、社会的な制裁を恐れ、世間態に対する顧慮からなる場合が多い。従って、結論的に云って、尻に敷かれる亭主はそうした自己規制の爲めに自由を女神に捧げたカリカチュア的存在であるという事がいえるのである。この点についてアルフレド・キント博士(4)が次の如く述べている。

「世の偽善者と性交不能者達、即ちその全生活耐え難き家庭内の鬼の側で過し、全く消

極的な抵抗、ひそかな奸策と嘘偽以外の何物をも敢えて為し得ぬ者、自宅に入る前にポケットから「うさんくさい物」を取出して道に捨てる者、靴を脱いで階段を登り、時計をそつと後らせ、最も遠い地区の郵便局へ局留便を取りにゆく者、彼等はすでに愛の技巧も存在しないのである。」

こうした良人達は常に奸策と卑怯な嘘偽とによって行われる戦いを結婚の日に始め、通例夫婦の中の一人の死を以て終るのである併しこの様な亭主達の中にも傑作な方法で危機を脱した有名な喜劇的な事件の主人公がいる。

一七四五年の「ヴォツシュ(5)紙第十四号に記されている事件である。

「(ロンドン、一月十五日発)先週レイトンの近郊 ベドフォードシャイア(7)での珍事件。確聞する処によれば、或る男が最近結婚式を挙げたが、しばらくしてこの妻の撰択が誤っていた事に気付いたので或る日妻にこう誓言した。「私は二週間以内に近くの沼に身投げしてみせる。」十四日目の夜が明けても男の様子に何も変わった処がなかったので残忍な彼に先日奇抜な誓約を思い出させた、が男は云った。「よく考えてみたら、何も原因がないのに身投げするなんて、明らかに自殺だ、だが若しお前が後から私を水の中につき落とすとか何とか助けてくれるのならば又別だ

が」妻は喜んで助力を約し、水際に立った男の背後から両手を前に挙げて走ってきた。男はすかさず身をかわしたので、妻は力一杯の勢で水の中に飛込み、石の様に水底深く沈んでしまった。男はやがて妻の死体を引き上げて手厚く葬ったという。葬式に参列した近所の者一同は、墓穴を掘って墓穴に入るとはこの事かと驚いたという。」

但し、この奸智に富んだ卑怯者が殺人の罪に問われ、絞首台に上ったか否かについては一切の記述がない。人が若し、彼が一切の罪に問わず、十三の階段を上らしめなかったとすれば、彼は他の怯懦な亭主達に比べて、実に簡単且容易な離脱法の創始者であった訳である。他の良人達は生涯をかけての強制労働に従事せねばならないのである。子供を守りし、家庭経営の爲の買物をし、外にも内にも気を許す暇さえない。それは服従と奉仕の生涯である。これらの実体こそ強い光に照らし出された家長の姿である。この事については饒舌な「アラマ・サンタ・クラブ(8)が次の様に述べている。

「或る賢い女中が、誰にも喋舌って貰い度くないと前置きして語った事ではあるが、彼女の勤め先の主人は妻が便所にゆく時は必らずうしろから紙を持ってついてゆき、妻の労を省くというのである。彼女はこの事を確証するに、自分自身木の節穴から一切を覗いてい

たと証言したのである。〃

(訳者註)この実例は一見有り得る様に思えて、仲々特殊な例である。それは、節穴から一切を覗いたという点である。紙を持ってゆくだけならば、何も一々覗く必要はない。問題は、何を覗いたかである。私は沼氏流の推理を傾かずならば、恐らく紙は大した意味を持たないのではないかという事を思うのである。紙の代用が、何であるか、何故に覗かれる様な場所で、一切を行うのかは当然推測に難いとは思われない。ここにスカトロジストという一つのジャンル(9)が余りにも明白に浮んでくるのではないか。溢れるばかりのビビ

を最も上手に処理する為に西欧風のトイレットと風呂が共同で設置されている設備に勝る処はない。前途のビルリッゲル博士、ラウ氏及びキント博士の否定的な推論にも拘らず、この場合、特異性格であるマゾヒスティックな心理の基底が自動的に現われて来るのである。スカトロジイという極めて複雑難解な心理については別に機会を求めて詳述する心算であるが、この不治の病、尽きる処を知らない美德は、フェティシズムとマゾヒズムの高踏的な結合から招来せしめられる事是否定出来ない。甚だしく多くがこの雑誌によって語られ、反面その実例の甚だしく稀少なこのジ

ヤンルのよき典型が、期せずして提出されたので一言付記する訳である。)

註 (1) Katinka von Rosen.

(2) Hans Rau.

(3) Die Grausamkeit, 1925 H.

Barsdorf. Berlin.

(4) Alfred Kind.

(5) Vossisch.

(6) Leighton.

(7) Bedfordshire.

(8) Abrahamana Santa Clard

(9) Genre.

【告白】切腹願望と臍窩

沢 清 克

妻子が、やっと寝静まった夜更、そっと床を脱け出した私は寢室の窓を大きく開け放ち冷たい夜の空気を胸一ぱい吸い込みました。

初冬の夜空には雲一つ無く銀の砂を大空一面に、まき散らした様な美しい星のきらめき、少し離れた街角の小さな喫茶店から、私の大好きな甘くやるせない「ジャニーギター」の

メロデーが、まるで身悶える妖女のため息の様に静かに静かに流れてまいります。

このような夜、又しても、私の変った性癖がムクムクと頭を持上げ、奇怪な、しかし私にとりましては、此の上もなく甘美な切腹願望の幻想に夜の更けるのも忘れるのです。此の甘美なる楽しみを理解して下さる同好の友

を求め、再び悦虐の告白記を奇クに投書する決心を致しましたのも、誰にも話せぬ心の秘密を誰かに聞いてもらいたい露出慾とでも言うのでしょうか？ 実は先日一日千秋の思い(本当にこれは奇クを毎月待ち兼ねる愛読者の為に出来た言葉だと思えます)で待ちこがれて居た、我等の心のオアシス奇ク新年号を書店で求め、まだインクの香も強い頁をサッとめくった途端、しばらく目はくらみ、止め様もない胴ぶるいがおこり、顔はカッと熱し息詰る様な興奮をおぼえました。意外にも、数ヶ月前投書した私の告白記が晴れがましく活字となつて発表されて居たのです。

二十八年四月号、奇ク誌上に発表されて居た信太容子さんの「開花の契機」以来次々と発表される切腹マニヤの告白記は、其のまゝ私の告白記と言うべく、それまであまりに変質的な自分の性癖に激しい自己嫌悪と孤独感を味って居た私は、百万の友を得た様な力強い喜びに宇頂天になり悪筆もかえり見ず長々と書き綴った告白記「切腹願望と臍窩じめ」が他の諸先生方の力作、傑作の間に、はさまって掲載されて居たのでした。覚悟して居たとは言ふものゝ、余りの恥かしさに、瞬間私は広大な丘の頂上に、中年男の貧弱な全裸体を、まぶしく輝く白熱の太陽の下にさらけ出し、数千の群衆の好奇な目でシロシロなめ廻されて居る様な居たゝまれない恥しさよせば良かったと言う後悔、流れる冷汗、そして生れて始めて書いた拙稿が、私の大好きな奇ク誌上に堂々発表された歓喜に、其の夜は興奮のためまるで眠られませんでした。

其の告白記にも書きました通り私は、此の変った性癖が、どんな動機によって私の心の中に芽生えたものやら、自分乍らはっきりいいたしません。しかし既に少年の頃より、小説や映画等に現われる昔の武士の悲壮な割腹自殺シーンに、異常な興味を感じ始め、白虎隊の壮烈な美少年の集団自決、里見八犬伝の伏姫の妖艶な割腹シーンには、特に激しい興奮と憧れを感じ、不思議な快美感を覚える様に

変っていきました。そして何時頃ともなく幻想を頭に浮べ、ナイフの冷たい刃先を下腹にヒヤリと感じ、素晴らしいスリルと陶酔を楽しむ様になりました。年が長するに従い、切腹願望はいよいよ激しくなるばかり、しかし切腹、イコール死では、いくら激しい誘惑を感じていても、本当に自分の腹を傷つける勇氣も無く、又共に楽しむ友も無く、どんなに歯がゆく思っていた事でしよう。

戦後、奇クにより、求めても得難い貴重な切腹研究資料を豊富に得、夢にも想像し得なかつた可弱い女性の凄艶な切腹願望の告白記をむさぼる様に熱読した私は、筆舌に尽し難い甘美な夢の如き陶酔を感じたのでした。勿論奇クの熱烈なファンになった事は申すまでもありません。特に強い感銘を受けた作品は何と言っても、前記、信太容子さんの「開花の契機」でした。「ドキドキする出刃包丁をグサリと腹に突き立てられたら、どんなに痛くそれにもましてどんなに心地良いだろう」これが若く美しい女性の切実な告白文の一部とは、切腹マニヤ以外には、とても信じられない事と思います。でも同趣味の私には、其の氣持が、とっても良くわかるのです。「両手でなめらかなお腹を撫で廻し、腹切刀を静かにお臍に向け、冷たい切先のシーンと痺れる様な素敵な感触を楽しみつゝ、ゆるやかに突込む」此の方法は、しかし流石の私にも最初

は意外に思われました。好奇心に駆られつゝ早速試した私は、お臍への加虐が、意外に強い刺激と快美感が有る事に気がつき、以来、切腹遊戯における加虐の中心箇所はお臍と変り、他の部分に切先を向けても、まるで興味が持てなくなったのは、自分乍ら不思議で仕方がありません。そして今更ながらにお臍の魅力を強く感じ始め、特に女性のむっちり膨らんだお腹の、深々としたお臍に、言いしれない情感と、加虐感を感じるようになってしまいました。

其の後、相変わらず凄い人気のストリップ劇場に、熱心に通う様になった私は、舞台の最前列の席に陣取り、ストリップの美しいお臍を穴のあく程眺めて、灼くような狂わしい陶酔の瞬間を楽しむのでした。

信太容子さんは、自由奔放な空想の一時を楽しむと、告白されました。恐しい殺人鬼のため人肉料理される幻想、磔柱に括りつけられ、豊かな白い乳房を長身の槍で抉られる幻想、それが苦痛が激しい程快美感の度合が強いとの事、とても、か弱い乙女の楽しむ幻想とは信じられぬ凄惨な血みどろの地獄風景、しかし、私も其の地獄風景を頭に画く事がとても楽しいのです。次の機会には、私の最も得意とする夜毎の悦虐の幻想を御紹介するここにしましょう。

その後の緊縛女優列伝

縛られた女優達

吉 金 岡 升

田代百合子

「謎の百万両」仇とねらう男達に細綱で四巻五巻も後手に縛られた上に鼻口をおろう猿ぐつわ姿でもがくミス平凡。

「里見八犬伝」白衣の後手を柱に固く縛られて苦悶する姿は可憐。

「闇太郎変化」東千代之助を尋ねて来た山寺の門、いきなり現れた悪人共にあっと叫ぶ間もなく細引で後手に縛り上げられた上に猿ぐつわをされて一室へ閉じ込められる。慣れたもので、なよなよともだえながら捕えられる姿は美しい。

美雪節子

「悲恋まむろ川」山道で雲助二人に襲われて後手に縛られ、猿ぐつわをかまされ、あわせ落下狼ぜきともがく所へ恋人が飛び込んで来て助けられる中々美しいサジシーンだ。

長谷川裕見子

「覆面どくろ隊」奇ク三月号の白石氏がリアルに書かれたけれども見落しの方はぜひ一見の緊縛シーンあり、完全なる彼女の縛りを背面から見せてくれる。

「風雲将棋谷」サソリ道人というゲロ男につけねらわれ、家来たる美男？のセムシ男と共に二度三度後手に縛られ猿ぐつわをされて捕えられ最後には柱へ縛られてサソリ責めにされる。膝から胸へ、そして首すじへと迫る吸血鬼に自由を奪われた身をもみ恋しい男の

名を呼び仰向いて苦悶する顔の大写し。美しい小鼻が嵐の花びらともだえる。

「椿説弓張月」唐の姫姿で後手に縛られて悪臣共の前に唇を噛む姿はいつもながらにあでやかで美しい限り。

香川京子

「近松物語」引廻しになって馬の背に荒縄の本縛り、手だけは自由だが、演技とはいえ恥かしかったろう。

「青銅の基督」山田五十鈴共々十字架にかけられての火あぶりシーンは余りにも可憐な美女故に痛々しく、私は本当に彼女が焼き殺される様な思いだった。名演に感ず。

天路桂子

「流れ星三度笠」横恋慕の悪親分に捕われて後手の猿ぐつわ、横背面から写して細引が手首を背に縛りつけた姿を見せてくれた。

宮城千賀子

「七変化狸御殿」いつもながらの美男若殿姿でチャンバラをやるが疲れて縄をかけられる「どうして縛るの」とひばりの恋人が云うと悪者の親分有島一郎が「どうしてってこうして……なに云ってんの」とかるいギャグで後手の説明をやる所は面白い。

橘 公子

「怪猫逢魔ヶ辻」一昔前の縛られ女優たる彼女も、オールドミス故に可憐さはないがしかしひしひしと後手に縛られて終いは殺される

役に、責められ役者の美味を見せてくれる。

雪代敬子

「酔いどればやし」川べりの土手づたいに逃れんとするのを悪人共の挟みうちに哀れ下町娘の乙女は後手にくゝり上げられて手拭の猿ぐつわに自由を奪われて夜の大江戸をいずこへか……。

R・テムブル

「めくら狼」奇クで前々から告知されたので早速見ました。これこそアクロバット縛りであり、緊縛である。テムブル嬢仲々の美人、人形佐七の小泉博が覗き見ると、棒しばり、それも中綱でひしひしと縛られている彼女を写生する石黒達也の責絵師。次にはグイと両手首を取って鎖で縛っての宙づり、石黒の表情は美事だ。彼女もかなり痛いであろう最後に佐七の手下がうまくだまして逆立ち縛りしてしまう所まで実にリアルな責場を見せてくれた。あの平凡なマキノ正博の演出にしては実に驚くべき責場をやったものである。

浦里はるみ

「百面童子」豊満な肉体の彼女が役人に捕えられてチラリではあるが後手首に縄を見せて引立てられる場面は仲々味がありけり。

北見礼子

「マゲナの瞳」これも昔の縛られ女優NO1であったが、年増の後手縛りは娘の美形には及ばず悲惨なる姿。

南風洋子

「春色大盗伝」中村扇雀と共に役人に縄をかけられて引かれてゆく姿を見せたが、あっさりすぎる縛りであった。

草笛光子

「伝七捕物帳」月丘夢路の後を受けての第一緊縛役、猿ぐつわ姿で助けを呼びたくもいかにせんもがく大きな眼、やはり初の役故に弱すぎてぎこちなさが目立った軽い後手姿。

山根寿子

「つばくろ笠」余りしつこくまといつく彼女の恋慕にいきなり長谷川「夫の手が辻堂の鈴を振る紐を引きちぎってグルグル巻、「何をするんだよ」ともがく口へも猿ぐつわ、さすが大スター同志、イキが合った芝居を見せてくれる。しかしほんのワンカット。

千原しのぶ

「火牛坂の悪鬼」月形、松島トモ子と共に火あぶりにされるシーン、三巻四巻されて煙にむせぶ姿は美しいサジスチックな場面。

「荒獅子判官」悪人の人質として後手の猿ぐつわ、美人だから軽い縛りでも美はある。

鳳八千代、大和七見路

「旗本やくざ」多勢に無勢、悪人共に捕われて猿ぐつわ、ほんの形だけの縛り。

山本富士子

「踊り子行状記」ミス日本遂に縛らる。帯で二巻、只後へ手を廻したのみだが美形たるや

ミス日本。

喜多川千鶴

「風雲将棋谷」女目明しとして山口勇に襲われるが仲々強くて男はたじたじ。木の上から今一人の暴漢が躍りつく、不意を食ってひるむ所を二人がくぐり後手に縛り上げて猿ぐつわ。そこへ右太衛門が現れて「かどわかしは芝居小屋だけと思った」と名セリフで忽ち助けられる。両手は縛ってあったのが見えた。

筑紫あけみ

「美女決闘」家康を仇とねらう女性だけの「風魔一族」の間者として自ら名乗って牢へ入り悪代官の好色を柳に風と受けながらいきなり「仇の片割れ」と斬りつけるが捕えられ、怒った代官は彼女を一晚木へ宙吊りにしてさらす。まさかと思ったが救いに来た男が名を呼ぶと静かに顔を上げたのは明らかに彼女だったからさすがに驚いた。それも水平に写った背に両腕はヒシヒシと縛られて悶える如く動く五指の美しさには近頃の名緊縛シーンよと心で拍手した程だ。

島崎雪子、池内淳子

「赤城の血祭」国定忠治の女房に扮して忠治共々役人に召捕られて引立てられる。彼女の縛りは初見だが仲々美しい姿である。この映画の中で女郎奉公に出された池内淳子が仲居の云う事を聞かぬ為に縛られて一間に閉じ込められていたが可愛い娘だった。

矢島ひろこ

「花の二十八人衆」悪親分一家に襲われ、姉の入江たか子と背中合せにグルグル巻に帯で縛られる。只縛られたというのみ。尚、「東京暴力団」で後手に縛られ、髪をグイと掴まれたスチールがあったが全然映画にはなし。

利根はる恵

「江戸怪盗伝」悪党に捕われて後手に柱を抱いて縛られ蛇責にされる。恐怖の表情と喰入った縄目の乳房の上下が良かった。

桂 典子

「江戸怪盗伝」長襦袢姿で両手は頭上へ宙吊りにされて責められるシーンがワンカットあり。

七浦 弘子

「風雲日月双紙」人質として捕われ、後手の猿ぐつわ。カゴに乗せられ物置に入れられ、色に迷った盗ッ人にさらわれていどまれる。縛られた姿を、裾の乱れからシリシリとカメラを当て、仲々美しく映っていた。

浅茅しのぶ

「顔のない男」ルパンの岡田英治と一緒に捕われ、男は柱に、彼女は椅子に、「女の体に聞いてやる」と鞭の雨、露わな胸に跡をつけて、打たれて苦悶する表情は慣れたものだ。仰向いてゆがむ顔の美しさ、悪共の眠った間に立上って男の背後へ廻って後手に縛られたまゝ男の縄を解く手首の映しも仲々にリアル

に見せる。

美空ひばり、三笠博子

「謎の決闘状」間者として入っていたひばりが正に眼ざめて主人の妹を悪から守らんとするが縛られて猿ぐつわまでされてしまう。三笠の方は縛られて引立てられて悪人の前へ座らされ「生命はもらいます」と恐い事を云われる。

洋画は又後程書く事にします。映画も余り背後からの縛りを見せてくれなくなったのは残念な事です。然しサシズムの一表現として女優を縛った映画は必ず多かれ少なかれ今後もある事でしよう。人間心理の一つの慰撫としても消す事は出来ないでしょう。

(一)

【映画】「近松物語」より

悲 恋 栗 田 口



十 字 好 介

竹矢来の先に京の町のいらかゞ、黒々と連り重なっている。落ち易い秋の日は、西山の真上から、柔い光で二人を包み矢来の外には、此の哀れな処刑者の最後を見届けんものと黒山の人がどよめいていた。おさんと茂兵衛が白木の柱に架けられて、西へ向け立てられた時、ドーンとどよめきが、腹の底からこたえる程二人に響いた。秋の日に、キラリ／＼と光った槍を、四人の非人が立て、柱の脇に、検死役人の命を待って坐っていた。時折聞える啼り泣の声は元の大経師の雇人が此の哀れ



なお家さんと朋輩へ捧げる嘆きの声でもあろうか。

が、二人は顔を見合せた儘、何も語らず、ニッコリと微笑んだ儘、その眸で、心で話し合っていた。

且て、不義密通で此の所も同じ栗田口で処刑された武家の妻と奉公人が、背中合せに縛られて、裸馬に揺られて、大経師の前を引廻されて通った時、アラ浅間しや。旦那様に討たれて死んだがましな程にと、顔をそ向けたおさんが、罪の名も同じ不義密通で手代の茂兵衛と、余儀ない運命の歯車の廻り合せか、因果も哀れや、且ての我が住む家の前を、非人のないし荒縄を身にまとい、裸馬の背にゆられ、顔をそむけさせた人と同じに、此の刑場に磔に架けられているのである。主に討たれしがましな、と云ったおさんが、主に討たれず自ら恋の炎に燃え尽きんとしているのである。身に纏う荒縄の気味悪さも、柱に架られてからの、身体の重みで痛む両手首も、西

陽で眩い眼も、此の燃えつきんとする恋の炎の前には何も判らぬのかも知れぬ。

「茂兵衛、例え地獄へ落ちようと、妾とお前とは未来の未来までの夫婦やなあ。旦那様と云うて仕える事も今までは成らずとも、あの世では——」とおさんが語れば、茂兵衛は、「おさん様、茂兵衛は幸福で御座ります。死出の旅路の道案内、あの世での夫婦の語らいを楽しみにしております。それ御覧なさりませ。京の人達は此のめおとの死の婚礼を、ホレあれ程祝っておりますぞえ」

「ほんに、ほんに。」おさんの頬にニッコリと微笑が浮んで眼が輝くのであった。

知恩院、青蓮院、東の山の麓の寺の、時を告げる鐘の音が鳴り終る時、此の世での二人の生身は露の如く消えるのである。非人の持つ、数々の血を吸って黒づんだ槍が、二人の身体の血を吸って、苦痛と衝撃が去った時、魂は此の世をこの身を離れるのである。秋風は松の梢を鳴らし松籟となつて東山の峯をゆるがせている。京の町が二人へ送る挽歌でもあろうか。

(二)

京は四条烏丸、大経師門匠の以春の妻、おさんが、奉公人の茂兵衛と不義密通の科で栗田口の露と消えたのは明和八年秋の事であった。運命の悪戯が、二人を栗田口へ送ったの

である。死の恋、それはその時代に於ては最も輕蔑され、人の道を外れた行為として極端な程忌まれ、そして惨酷な死を与えられたのである。浅間しき獣のように思われた時代だったのである。男尊女卑と、主人絶対の封建徳川時代の生んだ数々の悲劇の中の、最も哀れな恋の悲劇は、ホンに些細な、何でもない事から、たった一日の事で昨日に変わる今日の運命、悲劇の幕が落されたのである。

女好きの主、以春が幾夜か下女の寝間を襲うのを、下女の訴えで知った妻のおさんが、夫を戒める為と、冒険を楽しもうとした許りに、そして茂兵衛は、その日、下女が与えて呉れた自分の過ちに主への披護の礼心から、下女の寝間へ忍んで礼を云いに来たばかりに然も夫々が何とも知らぬ内に悲劇は一枚一枚展げられたのである。

「アッお家さま」

「そなたは茂兵衛」

驚き合う二人の、あとの声も続かず、目を瞠る許り、その時忍んで来た主の以春が障子を開けたのだ。罪も過ちもない二人が、潔白を明らかにせん為、声を大にして弁解しても以春は許さなかった。自分の卑しきは棚に上げ、下女の慕う茂兵衛を憎む余りに、遂には我が妻おさんに自決を迫るに至った。

女性に恥を思えば死んで詫する習しかも知れぬが、罪も過ちもないおさんには、死ぬ事

は吾と吾が過ちを承認するようなものであった。死ぬ事は到底出来ない事であった。

大経師の家を思うなれば生きていて良いものか、此の刀に聞け、冷たい夫の非情さに、おさんは、夫を怨み運命をのろわずにはいらなかった。

「何で死ななければならぬのだろうか。妾は潔白です。」と彼女の涙を以てしても夫の心を解けぬ、と知った時、始めておさんは、夫から背いて行く自分の心が、急速に離れ去って行くのをどうし様もなかったのである。

主の眼を離れた時、おさんは、夜の巷にさ迷い出たのである。行く宛もない夜の静まり返った町を一人とぼくと歩むおさんの、その足音だけが道連れのようにだった。大経師の家を放り出された茂兵衛が夜道を丹波路にとったのを、思いを返して浪花へ赴こうと、道を変え戻る京の町外れで、気の抜けたようにさ迷っていたおさんと廻り会ったのが、それが運命と云うものなのだろうか。二人が、落ち延びる日数を、両手で数える程もあらばこそ、役人の手配りは明の日には二人の身の廻りを、冷たい鋭い悪魔の鉤のような恐ろしさを持って迫って来ていた。

二人の心の中に過ぎ来し方の思慕が、忠実さが思い起されたのは、そしてそれが恋の花となって咲いたのは、二人が伏見の検問で追われて近江路にふみ迷ってからであった。身

と身が、心と心が相交った時、例え捕われる日までも、死を与えられる時までも、生きていよう。生き続けよう。生きたい、と二人は誓ったのであった。がそれも永くは続かなかった。一人では死ねないが、二人一緒でなら、健気にも恋に殉じようとするおさんの心は、せめておさんだけでも救いたい、と心に誓って一身に罪を背負おうと、一旦は決心した茂兵衛の気持を揺って、所司代の牢獄で、男牢と女牢とに離されても心は、通い続けるのであった。

不義密通、の恐ろしい烙印が冷たい白洲で裁かれる二人に下された時、二人は久方振で相会い、そして二人共に一緒に死ねる事を確めた喜びに、思わず体を寄せ合ったものであった。

(三)

浅間しや、昨日に変わる此の身の浅間しさ。フクよかな美しい肌を、更に押さえんとして盛り上る乳房を灰色地の囚衣に包むだに恥しいものを、非人のないし不浄の荒縄で、首から背へ、首から胸へ、そして息づく乳房を緊めて小手を緊縛し、愛する人に抱かれし時より他に触れさせぬ胴腰を纏縛られる悲しさ。そして非人の立てし制札、幟は、〃あれ見よ人でなしよ、浅間しき人がそれ、今よりお仕置に会うよ〃と後指さるゝは未だまし

〃オオあの顔にて、女の業の深さよ〃と罵られ乍ら、病み上りのような痩せ馬の背に二人背中合せに乗せられ、生れ生い育ち、暮せし京の町大通りを引廻されるのである。あの道は宮参りに、あゝ此の道は春の花見に此の世ほど良きものをと喜び歩いた道だった。と過ぎし来し懐しき町の見納めなのに、おさんも、茂兵衛も、死出の旅路を二人の新しい出発と見立て、懐しがりながら引立てられて行ったのである。

我が家は關所、青竹に押え閉ざされていた。

我が夫は他国へ放たれた、それも此も主の非情の故よ、それ故に例え此の様に浅ましき姿なりともめおとの誓を交して死んで行ける我の身の幸福さは、と思えば、背後にて握り合した掌と掌を、幸福の想いが、熱い血潮に流れて通じ合うのであった。

東山の麓、栗田口の刑場には、青竹を以て矢来が囲らせてあり、二人が此から架けられる磔柱が、東山の緑の肌にクッキリと浮んで立っていた。一步一步馬の歩みは、死の座へと近附いて行く。馬から下され二人は、型通り宣告を受けるのであった。馬から下りる時生きていて最後の手を握り合った。それは強い強い固い握りであった。非情の役人すら顔をそむけた程であった。

茂兵衛は向って左の柱の前で、おさんは右の柱の前で、宣告を受けたが、二人とも眼隠

は拒んだ。死ぬ間隙まで見詰め合おうとする二人には必要なものである。

十字の柱が倒され、おさんは縄付の儘、非人に手を執られ足を執られて柱の上に横えられ、左右の手を一ぱいに拡げて手首をグツと柱に縛られた。はだしのまゝ歩かされたので土のついた白い素足は荒々しく非人の手で持ち上げられて足首を柱にギッチリと縛り付けられた。茂兵衛は十字の柱に横木を付けた柱で、大の字に架けられ、二つの柱はそれ／＼に立てられて行った。空を真上に見ていたのがぐ／＼と前へ傾く為、西山がそして京の町屋根が、一杯に眼の中に飛びこんで来た。矢来の外の黒山の人々がドーッと動いたのは此の時である。

(四)

鐘が一つ、そして又一つ。松籟に乗って流れ沈んだ。

柱の下で下知を待っていた非人が、検死の役人の、鐘の一つ鳴る度に下される下知に従い、夫々の柱の元に両側に分れて槍をかゝげた。又槍の穂が光る。あゝ又光る。二人は、もう一度、いやもう一度と先よりも強く眸を輝かせて見詰めあう。処刑は必ず女の方から先に行われるしきたりである。

「旦那様！」

今までは、茂兵衛／＼と云いなれていたに

も拘らず、スラ／＼とおさんの口から声が出た。

「旦那さま。おさんはお先に——」

「心静かになあ、苦しかろう、痛かろう、辛抱してや、もうほんの一寸のことやでなあ」

「旦那さま、おゝきに」

涙がポロ／＼と頬を伝わる。涙で眸が曇って茂兵衛の顔が見えぬ。あゝ此れは、と身を顔を振る時、

アリヤ、リヤ

と非人の声と共に両側から槍が交錯し、チヤリンと音を立て、秋日にキラめかせた穂がぐ／＼と引かれた。そして再び延びて来た穂先は、左の脇腹へグサリと突きさゝった。一瞬迸るような血が槍の周りにとび散っておさんの華やかな身体へ吸い込まれるように穂先がかくれ、胸から右肩へ突き抜けたと見る間に引き抜かれた。と右の槍が伸びる。互に一本一本と交又する度に、アーッと刑場の外がどよめき、南無阿弥陀仏と念仏が沸いて来るのであった。

おさんは、自分の肉体の中に非情の槍が貫いてゆくのを、まるで放心したように、うつとりと感じていた。只、自分の意志とは反対に、口からは、声にならぬ声で、アーアッ、と大きく長い息をはくのであった。

沢山の人々に見物されながら、非人の槍に突かれて死んでゆく自分の生身のいとしさ。

涙で曇った眸のまゝ、茂兵衛の顔をもう一度見たい、なあとと思う間もあらばこそ、一槍一槍に、右が左が、身体が大きく揺すられて、早や次第に意識が遠くなつて行くのだった。あゝ、此が死ぬと云う事か、と消えようとする頭の中で思い、そしてもう一度「旦那様」と言いつつた時、眼の前の明るさは、かき失せてしまった。ガックリ首が垂れ身体は重みでずった。

茂兵衛は、眼を閉じ、「おさんさま／＼」と呟きつゝ泣いた。涙が滂沱と流れた。

その夜、夜鳥が気味悪く松の梢の間を啼きながら飛んで行った。秋の夜は沈々と冷えて只聞えるは松風の音と夜鳥の声。

二人の骸は、無惨な姿で、脇腹から肩からそして喉から、胸から赤黒く血を流したまゝ、磔られていた。身体から柱を伝った血は土に沁んで行った。

〔附記〕

昭和二十九年末、封切られた映画「近松物語」に表れない引廻しから後、処刑のシーンを、想像しながら描いて見ました。映画の筋と中で違う所は、川口先生の原作と敢て違えて先生の麗筆を損ねぬように、と、注意して書きました。

(終)



あゝこの恍惚境

小村二郎

浦里の長襦袢姿に憑かれた私

私はひどい昏迷のうちに精神も肉体も、たゞ疲れはてゝいた。何をする元氣もなく、限らない虚無と懷疑の泥沼にはまりこんでいる感じだった。もちろん一種の神経衰弱の症状だったのだろう。

その原因は考えられないこともない。私はそれまで一年ばかり、ある女と同棲していたが、日を重ねるに従って性格の相違に根ざす破綻が二人の生活の上に表われてきた。つかみ合いの喧嘩のはげしい昂奮と、そのあとの砂を噛むような味気ない倦怠。毎日のこの繰返しに私はすっかり参ってしまった。

私は思い切って女と別れることにした。そして女は去った。おたがい何の感慨もなく、路傍の立ち話が離れるように。

私は生活の一新を期待したが、女がいなくなっても心身の疲労は少しも回復しない。依然、怠惰な生活が続き、ぐったりして一日じゆうごろ寝てばかりいた。

そんな晩春のある日、私はふと思ひ立って歌舞伎の立見をした。そして、その芝居から、いまゝで味ったことのない、いゝ知れぬ強

烈な衝動を受けた。それは「明烏夢泡雪」的一幕で、中村勘三郎の時次郎、中村歌右衛門の浦里という配役だったが、山名屋庭先雪責めの場は、私の脳裡に痛いほどの新鮮な刺激をもみこんだのである。何という、なまなましい、そして甘美な舞台面であつたことか。

降り積つた雪のなかで、やり手のおかやに折檻される浦里は、緋の長襦袢姿をぎりぎりと、うしろ手に縛り上げられ、松の古木につながれていた。背景の黒い板塀の書割り。白雪。赤い衣裳。この三つの色彩がかもし出す調和は、たしかにすばらしかったが、私はそれよりも竹箒で打ちすえられて、ひいッ、ひいッと悲鳴を振り絞り身体をくねらせて悶える浦里の濃艶な姿態に、いゝようなない魅力を感じないではいられなかった。

床の新内の哀切きわまる男女の悲恋物語よりも、折檻される遊女の美しさが、直接胸にぴいんときた。同時に疑いもなく男性の肉体を持つてゐるはずの役者が、紅、白粉で厚化粧し、髪をかぶり、衣裳をまとつて、女の姿になり、それを見物の衆目にさらす気持は、いったい、どのようなものであるうか、とも考えてみた。浦里や中

将姫の雪責の芝居を見たのは、何もこれが最初ではなかったが、いままゝで、そうした芝居の、女主人公の哀れさを思ったことはあつても、このときほど被虐の美しさを感じたことはなく、まして、それを演ずる役者の気持にまで立ち入って考えたことは、それまで一度もなかった。

私はこの日から歌舞伎の賣場の女に憑かれてしまった。夜、独り寝の蒲団のなかで、眠られぬまゝに浦里の姿が脳裡によみがえってきた。そして折檻される女と、それに扮する男——この二つは、どうしても別々のものとは思われず、あの緋の長襦袢の下に、実は男の肉体がひそんでいるということは、いよいよ解きがたい謎となつて行つた。

私は場末の街の古本屋で、古い演芸雑誌を探し出してきて読みふけた。それには数々の女形の舞台写真が載っていた。吹輪の髪に赤地金糸の繡いのある衣裳をつけた時、姫や初菊などが、風にも堪えやらぬ風情が大振袖を持ち扱っている。なよなよした姿を見るとその幅広の帯と厚ぼつたい衣裳の下には、さぞ「男性」が苦悶していることだろうと思ひ、私は、そのたびに身体がぎゅつと締めつけられるような快い興奮を味わないではいられなかった。

櫛こうがいをは花と飾つた立兵庫の髪、大きな廻帯を前で結んで、豪華な襦袢を着た花魁の写真もあった。この髪は重さが二貫匁近くもあり、衣裳は八貫匁もあるというが、これだけの重量を身につけしかもあの高い三つ歯の下駄をはいて道中を演ずる女形。こゝにもまた男性の肉体が衣裳の下で苦悶している。図書館へ通つて賣場や濡場の文献をあさつてもみた。幕末の名優だった三世沢村田之助が黙阿弥の「紅血缺血」という芝居で、缺血という美女に扮し、馬つなぎに吊り下げられて継母に折檻される場面で、ある日、縄が切れて舞台へ落ち、足の指に怪我し、それが原因で脱疽にかゝり、とうとう手足を切断したことも読んだ。

化政年間、江戸文明頽廢の絶頂期に、岩井条三郎が好んで、賣場の女を演じ、内股にまで白粉を塗つて、舞台で半裸体となつてのた打ちまわつたこと、また「小猿七之助」では、御殿女中滝川に扮した女形が帯しろ裸となつて七之助役者と抱き合い、唇を吸い合い、さらに二人が上になり下になる。大胆きわまるエロチックな場面を見せたことなどにも、尽きぬ興味をそゝられた。古名優の逸話もむさぼり読んで、完全に性を倒錯させた女形役者の怪美な日常生活にも、はげしい魅力を感じた。

べにおしるいに魅せられる私

そうこうしているうちに、私はいつの間にか、女形の濡場や賣場を写真で見たり、文章で読んだりするだけでは我慢ができず、それを自分自身の上に再現してみたい気持になつて行つた。

紅、白粉をつけて女の髪をかむり、女の衣裳を着て、女の姿になり、男に思い切り強く抱きすくめられたり、縛られたり、打たれたりしてみたい。これは一つの執念となつて、私の心のうちに大きくふくれ上つて行つた。

これをすぐ実行に移したいと思うと、矢も楯もたまらなくなり、演芸雑誌の記事や写真を手がかりにして、女形のしぐさや恰好を独りで鏡に向つて練習してみた。女らしく肩を落すこと、二の腕を常に胴につけていることなどは、まだ容易だったが、両足の脛を開いて、そのあいだに尻を落して座る座り方はむずかしかった。最初は膝の骨がみしみし鳴るように痛かったが、毎日練習しているうちにできるようになった。

歩くのが一番大変で、ある女形の芸談を読んで、それにある通りに、内股に紙をはさんで、これを落さないようにして歩いてみたが足を踏み出すと、たちまち紙が落ちてしまう。一策を案じて両腿を白布でぐるぐる巻にしてみた。その恰好で、さて立とうとすると、

何かにつかまらなければ立てない。しかし、これでは嫌でも膝から下だけで歩くことになり、毎日こんなことを続けているうちに、我ながら女らしい、しなやかな素振りが次第に自分の肉体の上につくられて行くように思われた。三つ指をついて、おじぎをしたり、尻を落した姿勢で長い間座っていたりすると、ときどきふっと女の気持に似たものを自分自身に感ずることがあった。

しかし、この妄執の実現は、そう簡単に行かなかった。化粧や着付は誰かにしてもらわなければならぬ。賣場を演ずるとなれば、なおのことである。ところが、ちやうどそのころ運よく路上で小山という知合いの婦人に会った。瞬間私はこの人こそ、例のことを依頼するのに、最も適当な人だと思い定めた。この婦人は一年ばかり前に知り、それ以来かなり親しくつき合っているのだが、私より十いくつも年上で、四十に近く、小唄の師匠をしているという大柄の骨太の女だった。

「しばらく」

「おや。お元気？」

私はその場で、よっぽど話を切り出そうかと思ったが、さすがにいゝ出しかねた。

「小山さん、あなたにぜひ頼みたいことがあるんだけど、二三日たったら僕の家へきてくれませんか」

「何？ そりや、どうせ暇なんだから伺ってもいゝわ」

「じゃ、待ってます」

二三日後、約束通り小山さんがやってきた。私はお茶とお菓子でもてなしてから、やがてさり気なく話を持ち出した。

「頼みというのはねえ、ちよっと、芝居の真似がしてみたいんですよ。この家で扮装してみるんだが、化粧と着付を引き受けてくれませんか」

「芝居の真似とは面白いわねえ。あたしも、そんなことは好きです

よ。手伝ってあげましょう。それで、いったい、どんな役になろうっていうの？」

「女形がやりたいんです」

「そう。あんたは男にしてはきやしやで、身体なんか、あたしより小さいくらいだから女形はいゝでしょう。それに目もとがちよっと可愛いから」

「そうでもないけど」

私は恥しかったが嬉しかった。

「花魁？ 芸妓？ それとも八百屋お七のような下町娘か知ら？」

「僕は赤姫がいゝと思うんですがねえ」

「八重垣姫のようなね。いゝじゃないの。それに決めましょう」

「姫に扮した僕が責め折檻される。そこをせひやってみたいんです」

「女になって責められる。あんたはよっぽど変ってるわねえ」

一瞬、小山さんは私の顔を見詰めたのち、あっぱはっはと男のように高笑いした。

「じゃ、あたしが責めてあげる。責めの趣向はあたしに任せなさいね」

実行は四日後と決め、私が髪と衣裳いっさいを借りてくる。小山さんは化粧品、化粧道具、その他こまごましたものを整えてきてくれることになった。

小山さんが帰ったあと、私は自分が昔の大名の娘に扮するときのことを想像して、胸がわくわくするのを、おさえることはできなかった。

どろりとした練白粉の感触は。衣裳の肌ざわりは。髪の重さは。厚板の帯で胸を締め上げられた感じは。そのうえ、ひしひしと、うしろ手にいましめられて折檻にあうときの気持は。そう考えてくると、総身を一種の快い戦慄が走り過ぎた。そうだ、昔の岩井籙三郎

のように肌もあらわにのた打ちまわってやろうという思いが、そのまま、うずくような快感となつて行つた。

身も心も女になつてしまつた私

その日の朝、私は浅草馬道の専門店から髪と衣裳を、大きなふろしきに包んで借りてきた。それから床屋へ行つてきて、楽屋を二階の六畳にしつらえた。別れた女が残して行つた大型の鏡を小机の上に立て、その前に座蒲団をおき、傍に腰屏風を引きまわすと、多少楽屋らしい感じになつた。鏡のわきには、前髪に花かんざしを飾つた吹輪の髪が、ひと筋のおくれ毛もなく艶かに結び上げられ、髪かけにかゝり、畳の上には赤地に刺繍した目も彩な、ひとかさねの衣裳が、どっしりと流れ、殺風景な部屋をなまめかしく色どつた。間もなく小山さんがやつてきた。

「今日は」

「きようは、わざわざ、すみみせんね」

「化粧品、化粧道具、それから下着、紐の類から白足袋、みんなそろえてきましたよ」

「ありがとう。扮装したら、僕はもう男でなくなる。気持ち女になり切るつもりだから、あなたの方でも、女として取扱つてくれませんか。あすまでは女の姿でいたいんだから、きようは泊つて行つて下さい」

「別に用はないから泊つたつていいけれど……。それで私が、あなたを、うんといじめればいゝのね」

「そうです。僕は女になつてしまつたら、もう、あなたの思うまゝに取り扱つて下さい。責めも本式にやつて下さいね」

「ようござんす。こりや、あたしも、なんだか面白くなつてきたわ。そういうことなら、そのつもりでやりましょう。さしづめ、あたしは中将姫雪責めの岩根御前つてとこね。お化粧品にかゝりましょう」

「えゝ」

準備ができると、私は鏡の前に座つた。まず足の脛の毛をきれいに剃り落しもらうと、それから、身体をすっかり小山さんに任せ

た。髪下を頭にかけて、浴衣の肌を脱いで、頸筋から肩、胸、背中、二の腕までびんつけ油をしておいて、その上へ、どろりと濃く溶かした練白粉を刷毛でたっぷりなすりつけられる。ひんやりした冷たさが毛穴にしみこみ、なまなましい白粉の香が鼻を衝いた。刷毛は万遍なく肌を這つて私の上半身は真白に塗りつぶされてしまつた。顔もびんつけで下地をつくり、その上に白粉を刷き、眉をとの粉でつぶしたところは、鏡をのぞくと、まるでのっぺらぼうのお化けだつたが、三回四回と白粉をかさねて、牡丹刷毛でおさえたのち、眼の下から頬へかけて紅をぼかし、つぶした眉毛の上部に、墨で細く三日月形の眉を入れ、眼尻に紅をさし、唇は両端を白粉で白く塗りこんだまんなかへ、小さく濃く紅を点ずると、そこに厚化粧の女の顔が、あざやかに浮び上つてきた。

そこで小山さんは、白いお碗のような半球形のものを二つ取出した。

「これを胸につけるのよ。おっぱいの形——。羽二重にゴムを引いてつくつてある」

それを絹絆創膏で胸に並べてはりつけられ、皮膚との境いめを白粉で塗りつぶされると、それはもはや本物の乳房のように見えた。

「さあ、裸になつて——」

小山さんの声で、私は猿股をとつた。恥しくもなんともしなかつた。白粉を腹、腰、腿から下つて膝、脛、くるぶしと、足の爪先まで塗り、足袋をはいて腰に燃え立ような緋縮緬の腰巻を裾長に巻き、白い肌襦袢を着る。いよいよ女への変貌だ。頭が髪下の羽二重でなかったら、私はもうどこから見ても濃艶に化粧つた若い娘であ

る。それから緋の長繻絆をうしろから着せかけられる。私は男の氣持を次第に失いはじめた。

衣紋をぐつと抜いて白い襟足を充分に見せ、紅のしごきで襟を整え、その上に伊達巻を固く締める。胸が苦しい。

だが、まだまだそんなことでは終わらない。下着が淡紅色地に雪輪の裾模様、中着が白羽二重、上着が緋綸子地に枝垂桜の金糸銀糸総刺繍の三枚襲ねの重味が両肩へかゝってきた。胸から腹へかけて、いく筋の紐が締められたことか。黒羽二重、梅と鶯を繻った帯を胸に巻いて、うしろでぐつと絞り上げられると、私の呼吸は瞬間、詰りそうになり、私の肉体は、衣裳の内側で声なき苦悶の叫びを上げてきた。

帯の下に淡紅色の扱帯を結び、懷紙を胸にはさみ、衣裳と同じ模様の襦襦を羽織ると、最後に髪をすっぽり頭へはめてまれた。それは重い鉄の帽子をかぶせられた感じであった。手の先から腕へ白粉を塗り、爪に薄く紅をさしてもらうと、

「これで、すっかりでき上りましたよ」

という小山さんの声に、私は自分の立ち姿を、改めて鏡に写してみた。

そこには疑いもなく美しい姫の姿があった。濡羽色の黒髪、花かんざし、あでやかな顔。頸から肩へかけてのなだらかな曲線。胸高に締め上げた厚帯の下には乳房のふくらみがある。いったい男の私はどこへ行ってしまったのだろう。しかし、やっぱりこの女は私なのだ。

小山さんに片手を支えられ、教えてもらって長く引く厚い裾をさばき、やっとの思いで坐ってみた。その坐り方は知らずのうちに、練習した女の坐り方になっている。

飽かず鏡のなかの自分に眺め入っていると、いつの間にか私の体内から「男」がいったい消え失せて、女の血が脈打ちはじめたら

い。私はもう男の動作をすることもできなければ、ふだんの声でものをいうこともできなかった。私はいまや身も心も一箇の女だった。深窓の姫君だった。風にも堪えやらぬ処女だった。

縄と鞭の責め折檻を受ける私

「さあ、立って、こっちへ歩いて——」

やがて小山さんの指図で、私は隣の八畳へ移った。舞台の女形がするように首を振り振り足を内輪に踏んで……

「稽古ができていますので上手だわね」

小山さんは、しばらくのあいだ、私を立たせたり、坐らせたり、おじぎをさせたりした。その言葉はいつの間にか命令口調だったが私は心からそれに服従する氣持になっていた。階下から茶を運ぶように命ぜられたが、重い衣裳を着て茶碗を片手に捧げ階段を上るのはむづかしかった。腰巻や長襦袢、それに衣裳の長い裾が足にまつわりつく。思わず上りあぐねていると、頭の上から

「なにをぐずぐずしているのじゃ」

と小山さんの芝居がかりのせりふが落ちてきた。

やっとな茶を運んで一礼すると、小山さんは、それをひとくちふくんで、

「なかなかの味じやの。姫」

といったが、私はそれへ、きわめて自然に、

「あい——」

と細い作り声で答えて、低く低く頭を垂れた。

昼飯は小山さんの給仕をしながら、食べたが、この姿では食べ物もほとんど咽喉へはいらなかった。食後、便所へ行っただが、これも大変だった。重い厚い裾を持ち上げて、しやがむのが一苦勞だった。

二階へ上ると、

「そなた、わらわの肩を揉んでたもれ」

と命ぜられ、私は小山さんのうしろへまわって手をその肩に乗せた。しばらく揉んだところで、突然、小山さんは怒鳴りつけた。

「なんという下手な揉みようだえ。も、そっと上手に揉めぬかえ」

「あい——」

私は懸命になって指を動したが、

「女にうまれて、そのようなことでは——肩ひとつ満足に揉めいどうするのだ」

と罵られた。

「えゝ、もう要らぬ、要らぬ」

小山さんはいきなり肩をはずして、私の手をつかんで強く引いた。

私は虚をつかれて前へのめり、両手を畳についてしまった。

「そのようなことで親に孝行できるかえ。母を嘲るその心底はようわかった。きようは、そのねじけた性根をたたきなおしてくれるわ。きりきり覚悟しや」

それが小山さんの考え出した折檻のきっかけであったのだ。私は

「お許しなされて下さりませ。お許し——」

と前髪を畳にすりつけて哀願したが、

「えゝ、うるさい。聴く耳持たぬ」

怒声とともに、父のような平手打ちを右頬にわされた。

「あッ！」

とひるむ隙に、襦袢を脱がされ、両手首をうしろへねじ上げられると、たちまち麻縄でひし／＼と高手小手に縛り上げられてしまった。二の腕から胸へ喰いこむ縄目が強かった。縄尻を柱につながれると、

「姫、わらわの折檻受けてみるがいゝ」

「あゝ、もう、どうぞ、お許しなされて——」

「えゝ、やかましいわい」

いきなり嫌というほど口の端をつねり上げられ、思わず痛さに、

「うん——」

とうめいた。

小山さんが竹鞭を手にしてうしろに立つ、と思う間もなく、私はぴしーりという音とともに肩口に鋭い疼痛を感じた。

続いて二度、三度、竹鞭は容赦なく落ちてくる。

「むーん」

齒を喰い縛ってこらえようとするが、それがこらえ切れず、魂切るような悲鳴に変わる。

「ひいッ。あッ、痛い。痛う——ござりますわるいなあ。ああ、ひいッ」

鞭の乱打の下で私はもたえながら、われを忘れてのた打ちまわった。衣裳の裾が乱れて、前が割れ、紅の長襦袢が、腰巻が露われ、白い脛まで見えるが、それをなおすこともできない。

「ひいッ。つうーッ。あッ。苦しい。あッ、あッ。痛い。ひいーッひいッ」

「どうじゃ。少しは骨身にこたえたかの。これも、みんな、そなたが可愛うてすることゆえ、かならず悪うは思うまいぞや」

小山さんは竹鞭ふるう手を、いつとき休めると、うしろ手に縛り上げた私の手首の縄目へ、座敷簀の柄をさしこんで

「どうか」

と思ひ切りねじ上げた。私は手が折れそうな苦痛に身を海老のようにならして、きりきり齒を噛んだ。

「うーッ、む——」

気の遠くなるような痛さだった。

「まだまだ、そのようなことでは折檻はやめぬぞよ」

ひとしきり箠責めが続くと、次はつねり責めとくすぐり責めだった。ところ嫌わずつねられ、くすぐられるのである。わきの下へ手を入れられると、それはまるで死ぬような苦しみとなり、私は泣く

ような悲鳴を上げて、呼吸も絶えるばかりに、のた打ちまわり、ころげまわった。前へ倒れれば、縄尻をとられて力任せにうしろへ引かれ、仰向けに引っくり返り、そのとたん、緋の腰巻がぱつとまくれ上った。すると小山さんは

「おお、白い股じや」

と内腿をぐいといつねり上げるのであった。

「苦しいか。さぞ苦しがるの」

一責め終ったところで、私は肩で、はあはあと呼吸したまま、身動きもできず、ぐったりと横倒しになっていた。

腰巻一枚で折檻される私

ここで縄を解かれたが、私が三首ごなでさする暇もなく、小山さんは帯に手をかけ、

「さあ、着物を脱ぐのじや。裸になるのじや」

「ええ、女子の身にとって裸になるなぞと、そのような恥しいことを。こればかりはお許しを。どうぞ堪忍なされて下さりませ」

その哀願も聴き入れられず、

「恥しい？ 遠慮は要らぬぞよ。だれも見て居りはせぬ。なんの恥しいことがあるのか」

小山さんの強い力の前には、驚にとらえられた小雀も同然で、私は帯を解かれ三枚襲ねを剥ぎ取られ、足袋を脱がせられた。長襦袢一枚にされると、伊達巻の上から淡紅色の幅広の扱帯を結んで、両端を前へ垂れ、またもやうしろ手に縛り上げられた。

「折檻はいよいよ、ひどくなる。吠え声立てられぬようにしてやる」

小山さんは私の口のなかへ布切れを押しこみ、その上から手拭いで、しっかり猿ぐつわをはめてしまった。

鞭の折檻がふたたびはじまった、私は悲鳴を上げたが、それは不

透明な押しつぶされたような声となって猿ぐつわのあいだから、かすかに洩れるだけである。肩を胸を、背を打たれ小突かれ、これが一丁場終ると、小山さんは、

「しばらく休んで、もう一責めも二責めもするのじや。きようは夜通し、そなたをゆっくり責めさいなんでやるわ。ほッほッほ——」

といいすて、しばらく階下へ降りて行った。

打たれた箇所が全身にうずく。私は苦痛に身体をねじ曲げたとなん、向うの鏡に崩折れた自分がうつっているのを見出した。

ああ！それは我ながら、なんという無残、なんという艶美、そして落花狼藉な姿なのだろう。頭の飾り物も、いつの間にか、どこかへ飛んでしまった。吹輪の髷はがっくり崩れて、おくれが白い頸筋にまつわっている。乱れた衣紋から、すっかり露われた両肩。円く白い双の乳房も緋の長襦袢のあいだから露出して、はげしく呼吸づいている。その乳房のふくらみに麻縄が痛々しく食いこみ、裾も乱れに乱れて、真紅の腰巻から真白な両脚が腿のあいだまで見える。私は我を忘れて、その妖しいばかりの濃艶な姿態に見入った。

私は最早、この折檻の筋書の作者が自分であることを、すっかり忘れ去っていた。やがて、また新しい別の折檻が始まることだろう。私は全身をずきんずきんとはいまわる疼痛を猿ぐつわの奥で噛みしめながら、その快感に総身のふるえるのを禁ずることはできなかった。私はただ無慈悲な責苦に泣く、かわい女だった。

私はマゾヒストであったのだ。この被虐の精神は長いあいだ私の内側で眠っていた。それが、いま、はつきりと呼びさまされたのである。私はもっとももっと手ひどく虐待されて、その苦痛のうちに限らない愉悅を味いたかった。

小山さんが階下から上ってきた。私は胸倉とって引き起されると、縄を解かれて、ここで長襦袢も肌襦袢も剥ぎとられ、腰巻一枚

きりにされてしまった。もう抵抗する力もなかったし、叫ぼうにも声も立てられなかった。そして素肌の胸に縄がぎりぎり巻きつけられ、ふたたび縛られて、直立させられた。

「根限り責め抜いてやる」

私を見詰める小山さんの眼がぎらぎらと野獣のように光った。それはいい知れぬ喜悅の興奮に輝いている。小山さんはサジストだったのだ。私は、その眼に、顔の表情に「男」を感じた。女の私が男の小山さんに責められている。

縄尻が鴨居へかかったかと思うと、うしろ手に縛られた手首が、ぐっと上へ持ち上って嫌というほど引っ張り上げられた。腕の関節が折れそうに痛くなり、身体がずるずると伸び、足の爪先がわずかに畳につくくらい姿勢になった。

「姫、だんだん痛うなるぞ」

事実、全身の重味が双の手首にかかってきて、それは堪えがたい痛さだった。しかし、その痛さを防ぐため身体を締めれば、足が床

〔読者通信〕 (投稿歓迎)

奇ク復刊真に御同慶の限りでし。復刊後は内容刷新も仕方のない事だし、そうなれば或は今迄の奇クとは全く違ったつまらないものになるのではないかと心配もし半ば諦めてもいたのですが、今度復刊号を手にとってみてそれは皆杞憂であったことが分りました。スペースが減少した為むしろ充実した内容、表紙の二色刷りも却って清新な感じです。頁数の減ったも

のも今迄の一冊分を分けて読んでいると思えばいいし、一層次号が待たれるわけです。それにつけても再刊迄に至った諸先生方はじめ編集部の皆様方の御努力御苦労には深い敬意を払おうと共に心からの感謝を捧げないではいられませんか。奇ク以外の刊行物にも時々アプに關した小説その他を見かけることがありますが、それらの大部分はみな職業意識によって書かれたもので絵空ことと白々しさを感

から離れて瞬間、手首と腕に余計はげしい痛さがかかる。

小山さんの鞭が私の腰にぴりぴりとしあたった。私は身動きもできず、その鞭を正面から受け、痛さと苦しさで気が遠くなりかかっていた。

「これがすんだら、次は針責めにする。全身をところ嫌わず針の束ねたので刺すのじゃ。その白い肌に赤い血が網の目のように流れ出よう。それから、その半死半生の身体を蒲団の上で、ゆっくりなくさむとしようか？」

と小山さんは鞭を振った。私はもう夢うつつになつていたが、それは、うまれてはじめて味う恍惚境であり、その恍惚境のなかで今夜、男性の小山さんに、処女の私が思う存分もてあそばれることを想像して、ぞくぞくとしていた。

—終—

じさせるだけです、そこへゆくと奇クに掲載されるものは一行一行が真実の叫びであり記録であるのです。仮令それが創作の場合でも止むに止まれぬ心情が小説の形をかりて吐露されているというべきでしょう。奇クのような内容にとつては挿絵の持つ役割は殊に大きいと云えましょう。時によつては本文以上の力を持つ場合すらあります、挿絵は映画でいえば俳優のようものです。従つて下手をすれば却つてイメージを毀して了う危険もあるわけです、その為にも挿絵は絶対に写実を必要とします。どんなに絵画的に秀れた作品でも真実感のないものは少しもアツピールしません。戦後の挿絵の傾向としていわゆる純粹絵画の画家が進出してきましたが、挿絵の使命というべき説明や客観性が薄れかけ寒心に堪えませんが、その点奇クの挿絵は立派だと思ひます。

(青葉楨一)

責のアイデア

シーソー責め

永井昇次郎

最近流行のボディ・ビルの風潮に乗ったわけではないが、私は毎日の無聊を癒やす意味でこの種の運動を始めた。と言って用具を購入したわけではない。昔から家に在った鉄亜鈴を振り廻し、或はこれを棒の両端に縛って上下に上げ下げする外、足を鍛える意味での縄跳び等を行っているのであるが、この運動の最後にやるのが一寸変って居る。それは二箇の鉄亜鈴を縛り、これを真直ぐ揃えて伸した両足首に緊縛して仰向けに転ぶ。両手を頭の下で組み両足を伸した儘ゆっくりと目の高さ迄持つて来る。そして又これをゆっくりと下す。結局これは腹筋を鍛える運動であるが、この運動を十回続けると腹の皮は痛み、云い様のない苦しみと共に全身に冷や汗が湧いて来る。勿論今はやり始めて間がないので一回一回足を下した際、畳に着けるが、着け

て一息入れても六回七回と続ければ鉄亜鈴の重みが足に加わり、その苦しい事は一寸とやってみた人で無ければ想像出来ない。

私はこれを行って居る最中、ふと思いついたのがこの「シーソー責め」である。答打ち、石抱き、海老責め、吊り等、肉体を苦しめる責め方は昔から色々あるが近代的なセンスに欠けて居る。その点、この「シーソー責め」は一寸と準備が大変であるが、もし出来るとすれば近代的であり、征服者（責める方）は自らも楽しみつゝ半恒久的に被征服者（責められる人）を充分に責める事が出来るわけ、私は純情可憐な女奴隷を二人、責める事を念頭に置いてこの文を記して見た。では先ずこの「シーソー責め」に必要な道具類から書いてみよう。

（道具）

一、シーソー板（図A・B）

人間の身長約二倍の長さ（約二間）と一尺から一尺五寸の中、一寸から一寸五分の厚みを有する一枚板が理想的、両端に人の乗る囲い函（図Z、Z'）をおき中央には回転の軸となる太い心棒を付ける。このシーソー板の代りに梯子を使用してもよい。この場合梯子の長さに等しく縦に板を打ち着けて置く必要がある。勿論梯子の全巾を覆わなくてもよく、中心線から左右へ三・四寸程度の板でよい。これは後述するが被征服者が足を支え又持ち上げる為に必要な板である。

二、軸受台（図X、X'）

シーソー板の軸受けて左右に分けて並べ立てる。（側面図参照）高さ三尺程度

三、緊縛板（図P、P'）

被征服者を縛りつける板二枚、長さは頭から尻の迄迄、従って二尺五寸から三尺程度巾一尺、厚さ一寸程度の物、首の来る辺りに孔を開けて置く（図P、P'板、首の下、点線の所）

四、同右台（図Q、Q'）全部で四台

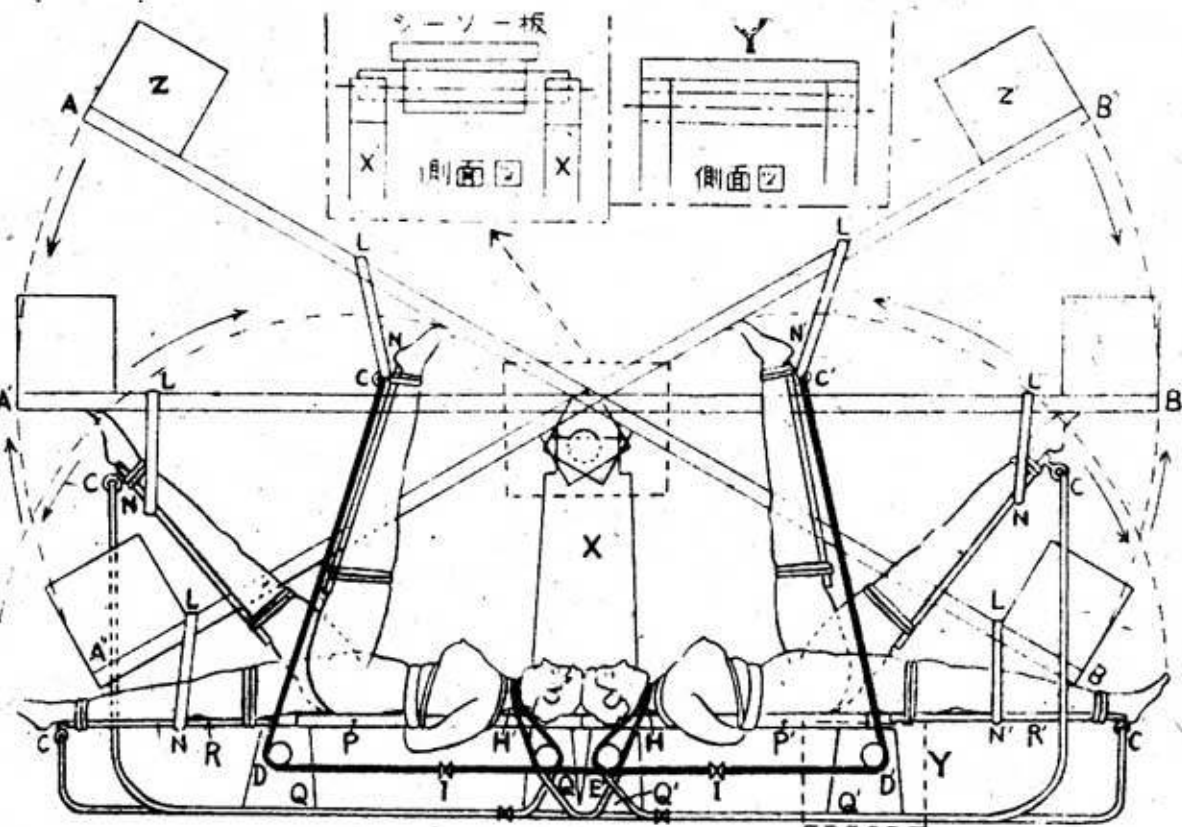
持ち運び任意で高さ一尺迄、上は板で此めその下に円柱の丸材を付ける（Y側面図参照）

五、足縛り板（図R、R'）

足首、踵の付根から太股、尻の少し下迄の

六、革バンド (図 L N L N)

長さで、これは人により異なろうが大体二尺から二尺五寸見当か巾七寸、厚さ六、七分程度先にフック状の鉤 (図 C) を取りつけて置く、これは伸ばした足が曲らぬ様にすゐる為の板である。二枚は必要。



シーソー板と足縛り板を常に連結する為のバンドで丈夫な物二本が必要。

七、犬の首環 (図 F F 及び H H)

一人に二箇宛嵌めるので全部で四個必要、その他

革バンド (繩類)……これは被征服者の体を縛ったり首環に連結する為に必要な品足受け台……緊縛台と同じ高さの物。

次に責め方について簡単に記してみよう (責めの方法)

(一) 責めを受ける被征服者 (女奴隷) 二名を先ずブリーフ若しくはパンツ一枚として夫々仰向けに緊縛板の上に寝かせ、先ず腹と両肩から脇腹へかけて十文字に革バンドか縄で板に緊縛する。これは体が足の方へ滑らない様にすゐる為で、両手は板を背負う様に後に廻して緊縛する。尚この板に縛る前各々の首へ二個宛犬の首環を嵌め、それに縄を連結して板の孔から通し夫々足の方 (図 I I の位置) 迄延して置く。

(二) 二人共に足を真直ぐ伸ばさせ踵の下に台を置いて後、足縛り板を足首から太股にかけて足の下側に革バンド若しくは縄で緊縛する。この場合板の端の鉤に縄を連結して置く。

(三) 一方のシーソー板を下し革バンドでシーソー

板と足縛り板を連結させ足を上方に上げさせる。この場合一杯迄上げさせず中途 (図の A 又は B 迄行かぬ所) で止めさせ、他方の足も少し上げさせて革バンドを掛けると共に各々の首環の縄と足首の縄を連結する。この場合足を高く上げた方は上の首環 (図に於て左側の女が足を上げたとするれば F) 低い方は下の首環 (図 H) のみを連結する。(連結場所は図で I 及び I' である)

(四) 足を一杯上げさせて縄による首の締めり工合と足を下げて居る側の足バンドの締めり工合を確かめ、もし首の締めり方が緩ければ足を下げさせて短く連結し直して再度確かめる (図に於て板が A B の位置に来る時、C D 及び D E、D G が一直線となりこの為 E F G H が一直線となれば F と H では充分首が締まっている)

(五) 次に他方の足を中途迄上げさせ、さっきと同様に各々の首環の縄と今上げた足板の縄とを連結し、一杯上げさせて締めり工合を調整する。

(六) 縄の調整が終ると此処で初めて下って居る側の函に人が乗り、最初はこの函を持ち上げて女が或る程度迄足で支えられる所へ行くと踵の下に置いて居た台を取り除く。

(七) 次に下って来た方へ廻り、己もその側の函に乗る。シーソー板が一杯下ると各々の首が締まるので一方は足を下げようとし一方

は上げようとするから自然と下った側の函は上に上る。この時体を乗り出して踵の下の台を取り除く、或は他人に取って貰ってもよい。

以上でシーソーは自然と上下する。被征服者は夫々己が足を上げてても下けても首が締るので休む事なく足を上下させねばならない。踵の下に台が無いので下った場合、シーソー板と人の重みで足は自然下に下ろうとするが腰の関節は逆で、余り下方に曲らない上今迄ちんで居た腹の筋肉が今度は急に伸びるのでその苦しみは耐え難く、更に首が締るのでどうしても足首は常に宙に浮いた儘上下させねばならない。一方が苦しくなつて、足

を下げる場合、急に下そうとすれば革バンドが夫々足の板とシーソー板を連結して居るので他方も早く上る様になり、勢いついて上げば首が急に強く締るので共に窒息する惧れがある。この為、お互ひに上げ下げは緩慢に行わねばならなくなる。こうすれば腹の皮の痛みは言語に絶し全身脂汗を生ずる上、上下する度にシーソー板が各々の脛を強く摩擦するので更に苦しみは倍加される。

以上で「シーソー責め」は終りであるが、これを止めるには他人の手を貸りるか或はシーソー板が地面と略水平になった時(図に於てA Bの位置に來た時)に同時に飛び下りるかのどちらかである。

最後にもしこの「シーソー責め」を實際に行つた場合、(女)性ならば如何なる勇者と雖も六、七回、精々十回の上げ下げで音を上げるであらうし男性でも十五回も続けば大したもののでその苦しさは一寸と類例がないであらう。

自分の経験では足を上げる時よりも下げる時の方が苦しいが、この「シーソー責め」では上げる場合に自分の足へシーソー板と乗る人の重みが加わるので矢張り相当苦しいものと想像される。足を一杯上げた時の姿勢が一番楽ではあるが、この時は相手も自分も首が締るのでどうしても早く下そうとする様になり、お互ひに息を抜いて休む暇は無い事になるのである。

(風俗の歴史第四卷二三六頁)そしてこの浣腸の図に対して次の説明がある。

十八世紀の七、八十年代に、浣腸器がいろいろに描かれたが、こういう絵画もまた女の腰の美しさをいちばんピカントなポーズで見せ、それを描写し、それを賛美する目的しか狙っていないかった。と云うのは、男も浣腸という処置を受けたが、それは絵にされず、けつきよく、女だけがこのポーズで描かれたからである。云々。

以上のフックスの説明は興味がある。浣腸はこゝでは、女の美の表現の一手段としてだけしか取扱われていない。ほう大な風俗史を

浣 腸 雜 記

狩 井 麗 作

・昭和三十年十月号に「私の浣腸論」として数正男氏が小論を出されているのを読んで、色々考えさせられる事がありましたので少し書いてみました。

一、浣腸愛好は変態か

安田徳太郎訳、フックスの風俗の歴史の中

著したフックスが、浣腸について詳細に研究して見る暇がなかったからであると云う理由だけであろうか、それとも、その時代には、浣腸は、医療的効用としてごく普通に何の特殊意義もなく行われたのだろうか。私はこの事について詳しい資料が欲しいし、詳細に調べてみたいと思っているので、今はどちらであるとも断定はしない。たゞ、この時代の絵から考えられる事を二三述べてみよう。

ブージェ(一七〇二—一七七〇)の絵に「洗滌ごっこ」と云う油絵がある。丸々と太った四人の少女が大人の真似事をして遊んでいる絵であるが、この中の一人が持っているのが現在の、ガラス製浣腸器にそっくりである。前述した、フランス銅版画の方は、更に大きい浣腸器で、シリンドラーの大きさから、やはり二〇〇CCから三〇〇CC液用位のものと考えられる。これらの器具が、その当時の普通のものだとなれば、浣腸については、相当大げさな器具としての関心が持たれた筈だと思ふのである。当時の医学書を調べて見たら多分、医療としての浣腸器の位置づけが、はつきりするだろうと考えられる。前述の銅版画を見てみると、どちらも、優美な貴婦人が取り扱われているのだが、一枚の絵では、その貴婦人は、半ば、上半身を起し、侍女の持っている浣腸器を振り返って見つめている。その横顔の雰囲気から察するに、別に病気を

して、是非浣腸の助けをからなければ、と云う程の切ばつまったものは感じられない。何となく楽しんでる様子でもある。とすればフックスの云った、尻の美しさを示すためのポーズであるかも知れない。しかし医療として描かれていないとなれば、更に論を進めてその貴婦人は、自分の楽しみのために、或いは、自分のひそかな快楽の為に、毎日浣腸していたと考えてみても差支えない筈である。たゞ、この場合云えることは、例え、その浣腸が、一人居の孤独をいやし、ひそかな快楽の行いだとしても、それは貴婦人にとって、何ら変態的行為でなく、ごくおふらかな普通の事だったのでないかと云う事である。もし変態性を求めるならば、この絵を描いた画家の方にこそ考えられるべきであろう。と云うのは、それ程、この絵は、私の浣腸癖を満足させるような雰囲気を描いてあるからである。

本論に戻ろう。フランス十八世紀、好色とロマン性が極度に洗練されていた時代に、浣腸は、果して、単なる女体美の道具立てだけのものだったのだろうか。多分それも大きなウエイトを持つ。しかし、一方、この浣腸が、貴婦人達の間に、何らかの刺激をもたらし遊びとして流行していたと考えてもごく自然であろう。たゞこの遊びが、マニヤ的なものとして、どこ迄傾斜して行ったかは、資料がな

いので明らかでない。後日出来たら調べて報告したいと思っている。この場合、男性の浣腸図が現われなかった事についても、何らかの説明が、あり得る筈だと思ふのである。(但し云えることは、美的観賞だけに主きをおけば、男の浣腸図は確かに絵にはならないと思うが、どうであろうか)

二、浣腸の社会性

江戸時代の絵には、決して浣腸の図はなかっただろうと思う。例え、それに類したこと、は、当時の医療として考えられていたかも知れないが、之が一般化して普及する迄に至らなかった事は事実である。しかも浣腸は、日本に於いても、ごく最近になって、特に社会性をもって、表面に大きく出て来た事は、明治、大正の風俗資料からも明らかである。何故に浣腸には、社会性を考えるのか。

私は、こう思うのである。浣腸を若し愛好するとすれば、それは第一に個人主義的生活の場が確立された時に初まると考えたい(特に女性の場合)。ロココ風俗史の中での浣腸の絵は、一人の貴婦人のほしきまゝな行いとして、強い雰囲気を示している。美しいベッドの上での独立行為である。貴婦人は当時既に一個人の人格として、男性群に伍して、堂々と自分達の享樂を主張していた。反対に、日本では、大正は勿論昭和も終戦の時までは個人主義の考え方は、全体主義の下に抹殺さ

れ、個人の生活の場は確立されていなかった
 のである。しかも女性に於いては特にひどく
 何らの意志をも持つことは出来ず、個人の楽
 しみや意見は、全く社会性を持ち得ず、たゞ
 ひかげの花として、つましく暮すことを要
 求されていた。このような時代に、個人の性
 癖を強く自省させる浣腸遊び等が流行する事
 は出来なかったのである。浣腸をその本来の
 目的から分離させ、快楽のためと云う一つの
 独立性（機能としての）を持たせると云うこ
 とは、新しい個人主義の精神からしか、生れ
 て来ないのである。だからして、終戦後、新
 しい教育を受け独立者として、世に出て来た
 多くの人々が、奇く前年号にも見られるよう
 に浣腸愛好者として、はばかりことなく手記
 を発表し得るようになって来たのである。こ
 れは、非常にいゝ事だと思ふ。勿論、浣腸の
 倒錯性を完成させるためには、社会の動きや
 世相も併せて考察すべきであるが、女性浣腸
 マニヤに関しては、特に個人主義的生活と云
 う社会性を問題にしたいと思つたのである。
 この論には飛躍があるので、大方の諸兄の高
 見をお聞かせ願いたい。

三、浣腸の場

浣腸は、西洋の風俗習慣の中で発明された
 事は、多分真実であらう。性行為に伴う洗条
 が既に古くヨーロッパにあった事と考へ併せ
 ても自然な事である。そして浣腸は、ベッド

と切り離すことは出来ない。前述の図でも、
 ベッドに横わった婦人に、立った人物が行わ
 んとしている。ベッドの持つ、立体性と、浣
 腸器の理知性が良くマッチする。江戸時代か
 ら昭和初期迄の畳とフツンの場では、どうも
 浣腸器はうつらないようである。浣腸が行わ
 れるとすれば、それは、やはり鍵のかゝる洋
 室。冷たいベッド。白い壁と明るい光線と云
 う事を考える。最近のマニヤの手記を読んで
 も分ることは、とにかく婦人科の椅子が用い
 られることであり、何か清潔な感じの部屋を
 希望している事が分る。之は昭和三十年十月
 号数正男氏の「浣腸と文化」の中でもふれて
 ある。近代的な感覚。これが浣腸の持つスタ
 イルであらう。しかも、浣腸はあくまでプレ
 イである。あくまでも個人の極限を守って行
 われることを本体としたい。これを行う時は
 紳士と淑女であつた方がより効果的なのだか
 ら。勿論この場合は単純なマニヤの場合に限
 った話であり、サドマソの複合体の場合は
 別にゆずる。

四、浣腸と性欲

数氏の論で、浣腸のみにて生理的な欲求が
 満たされるかどうか疑わしい。述べられ意見
 を読者に説いているが、私は次のように考え
 てみた。

浣腸マニヤの純粋な気持としては、浣腸の
 みで、生理的欲求は満たされると思うのであ

る。浣腸が前戯であるとすれば、浣腸は、な
 ま臭いものに随し、浣腸の純粋な快楽性は消
 え去るであらう。浣腸マニヤが求めているの
 は、その器具感の刺激と、その対象が、メカ
 ニックな無人性にあると思うのである。たと
 え、それが他人の手で施されるにしろ、直接
 触れるのは非情な冷たいガラス器具である。
 自分の欲望の清潔さを自覚するからこそ、浣
 腸マニヤになったと云う逆説も可能なのであ
 る。とにかく注入感が一種の倒錯欲の変型で
 あれ浣腸愛好者は、浣腸によって完全に、浣
 腸に関する生理的欲求を満足させ得ると私は
 思っている。但しその人が、別個に性欲を持
 つか持たないかは、その人個人差による事で
 あり之は又論を別にしないでいいけない。が
 たとえ別個に性欲を持ったにしても、厳密な
 浣腸マニヤの場合は、浣腸と性交とは連続し
 ないだろうと思ふのである。浣腸は、あくま
 で、その事だけを独立させ、その行為をけが
 してはならないのである。浣腸の中に見出さ
 れる近代性と、非情性は、肉体的交情とは別
 個のものである。しかしこの論も、私の性癖
 から出ているとすれば独断と云われても仕方
 がない。他の諸兄姉の御意見を聞かせて頂け
 れば幸である。

私は、浣腸マニヤであるが、これはあくま
 でも学習的偏愛性と考へている。この学習的
 と云う言葉については、又次回にでも述べさ
 せて頂く事にして一応筆をおきます。

洋画に於ける緊縛場面

佐 卷 跋 策

「縛られ映画」の中で、洋画の中、しかも戦前封切られたものから御紹介しましょう。

精力絶倫の持主として、映画に歌に大暴れのベティ・ハットンが『アニー・ヤ銃をとれ』に次いで日本のスクリーンに登場した作品、『ポーリンの冒険』の中で、映画がまだ活動大写真といていた頃、連続映画の主演女優となり、数回縛られる場面が出てくる。そのいずれもが、危機一発というスリルをもたす場面なのだが、場面に比較して全然迫力がないうのは、映画そのものが喜劇である故だと思ふ。

パール（ハットン）は鉄道線路上に前手に縛られ、足も同様に強く縛しめられて寝かされていく。遙か彼方から汽車が全速力で暴進してくる。なんとか轢殺から逃れようと懸命になってもがくが、縄は一向に解けず、その間に汽車は刻一刻と近づいてくる。大声を挙げて救いを求める彼女、但し無声映画時代なので声は聞えない。縛られたまゝの彼女、もがきながら、あわや列車の鉄輪に蹂躪されよ

うとする一瞬、ぱっとフィルムが切れて「後は来週のお楽しみ」というタイトルが出てきて、一巻の終りとなってくる。

地下室の柱に胸の上から一巻きされて、縛られているハットンの正面写しがスクリーンに大写しになる。口には白布で猿ぐつわを噛まされている。ハットンの傍にあるダイナマイトの箱には、導火線に火がつけられて盛んに燃えている。恐怖の眼差しでもがくハットン、その間にも容赦なく導火線は火を放ちながら短くなってゆく。今や、パールの命や風前の灯。彼女の運命や如何に、再び、「来週のお楽しみ」というわけだが、昔、はやった連続映画の面白さを短い時間で見せるためには十分な場面、反対に彼女の縛られた姿だけを見るとしたら失望させるシトン。

この他に、まだ二、三違った縛られ方を演ずるが、それだけでは観客に失礼と思ったのか、御丁寧に縛るところ迄挿入している。正月映画なりしたため、見るお年玉といった意味か。気球の中に捕われたハットンと、その恋

人らしい男が、仲よく背中合せに坐っているのが、画面に映る。此のシーンは、映画の中に現れる映画の撮影場面といった趣好、側で見ている監督は盛んに何事か口にして演技をつける。それに応えてハットン動く。ようやく二人の仕草が監督のお氣に召したのか、ハットンに「両手をうしろへ廻せ」と物凄く大きくメガホンで叫ぶ、ハットン両手をグイとうしろへ廻す。監督の口から「もっと後へ廻して」と云われて、更にうしろへ廻す。

すると一人の助監督が後手に組まれている手首を一本の縄で縛ってしまふ。縛られるとき、ハットン、ニヤリと笑う。恋人たる男も縛られることは云うまでもない。只、これだけの場であるが、珍しく映画に現れた縛るまでの場面として珍重すべきシーンであった縛るまでの場面といえ、『ポーリンの冒険』の他に、今一つ『盗賊王子』の中に出てくるので、次に述べてみよう。主演者は、ヴァレンチノ以来として、現在、米で最大の人気を保つトニー・カーチスと、これも同じく

可憐な容貌で人気のあるパイバ・ローリーの兩人。

我が国へは初登場の作品で、筋は、タンジエールの宮殿へ、アルジェの大公が訪ねてきて姫に結婚を申込み、そして結納の印として真珠を贈る。だが、その桃色の真珠が一人の盗賊によって奪いとられてしまう。そこで、タンジエール一の盗賊王コセフは、この事件を宮殿から頼まれる。一方、怒ったアルジェ大公は一カ月以内に真珠が戻らぬときは、タンジエールの町を焼き払ってしまうと捨台詞して故郷へ帰ってしまう。

不図したことから自分の伴として可愛がつている王子（カーティス）とコセフは、一計を案じて自宅に偽のルビーを飾り、このことを町の人に宣伝した。ここから画面は始まるのである。二人が隠れているとは知らず、ルビーを盗もうとローリーが窓から忍び込んでくる。あわやローリーの手がルビーにかかる。うとした時、隠れていた二人が飛び出してきた捕えようとする。驚いた彼女は逃げようとするのでトニーは強引に組みつき、その場に捻じ倒す。そして残酷にもローリーの腕をうしろへ捻じ上げ、手首を合せて縛り上げてしまう。この時の模様を、更に詳細にかいてみると、ボロ衣裳をまとった彼女は、観客の方へ顔を向けて捻じ伏せられながら、足をバタつかせて抵抗する。カーティスは、そんなこ

とにはお構いなしに、コセフから紐を貰い、二の腕もあらわなローリーの両手を、無理矢理に背後へ捻じ上げる。彼女は腕の痛みに、尚も、もがくが、その時、豊かな腰部の曲線が、薄衣裳の下からクッキリと描かれて、あたかも素肌を思わせる見事な肉体の線が、すこぶる煽情的。捻じ上げ終るや、カーティスは持っている紐で、手首だけを縛る。そして何やら詰問するが、疑いが晴れ、間もなく縛から開放してもらう。

ただ、これだけの場面だが、前記の『ポールの冒険』よりは、遙かに実感がこもって見て見応えがある。

又『ポーション』でハットンが前手に縛られていたが、同じ縛られ方をした女優に、イタリーの肉体女優、ジーナ・ロブリジダがいる。映画はフランス映画では珍しい剣戟もので、先程日本へ来朝したジェラルド・フィリップ主演の『花咲ける騎士道』一国の王に見染められたが、ジーナは王の自由にならないので、部下の兵たちに捕われ、寺院へ幽閉されてしまう。恋人ジーナの危難を知ったフィリップは、馬を飛ばして助けに行くが、乱闘の隙に再びジーナは馬にて連れ去られてしまう。これを見たフィリップは、再び馬を飛ばして追跡する。

画面は、ここで変り、次に写ったのが馬車の中、布で前手縛りにされたジーナは、口に

は嚴重に猿ぐつわを噛まされている。隣には憎々しげな王の側臣が、猥らな眼でジーナの衣裳の乱れからはみでている立派な乳房を盗み見ている。彼女は前手縛りなので、なんとか手首を抜こうと盛んに腕を動かすが、緊く縛ってあるのでほどくことが出来ない。その時のジーナの真剣な演技は好感がもてる。ジーナのクローズアップ、真剣な眼差しと、えぐるように頬に喰い込んでいる猿ぐつわが印象的。更に全身、完全縛りにX型に組まれた両手首には、白布が蛇のように巻きついている。

こうした場面が数回繰り返してスクリーンに写っていたが、前手縛りもちよっと興味ある縛り方だと思った。それにこの場の猿ぐつわは洋画では類を見ないほどの実感があり一段と光彩を放っていた。

この他には、二十世紀フォックス社の『荒野の襲撃』にて、ラスト近く、若干のインディアンのために人質の女、エメラルド（ベニー・エドワード扮す）が焚殺されようとするところがある。ファーストシーンでは、馬上に後手に縛られたエドワードがインディアンに抱かれて運び去られる遠景が写る。次に変って焚殺の場面。

大小様々の枯枝が燃え続けている傍らに、エドワードが後手に縛られ、恐怖に脅えている。二、三のインディアンは、尚も枯枝をく

べて火力を強くする。見る見る火は大きく燃え上り、その炎は天を焦すようである。クローズショットでエドワード、胸部を二巻き巻かれて後手に縛られている。ところが不思議なこと、前のカットでは、はっきりと後手に縛られていたのに、この場面では縄は巻いてあるが、両手が自由なのである。ちよつと注意してみないとわからないが、私には、はっきりと両手の自由が確認された。でも、再び次の場面では完全に縛られているので、やや溜飲を下げたが、それにしても後味が悪かった。後は危機一発というところを、主演者のタイロン・パワーに救いだされるが、ちよつとした監督のミスから折角の場面をぶちこわすようなことは、二度として貰いたくないものだ。

次は、さしずめ日本映画なら、S・P映画とでもいいたい『秘密指令』にて美貌の持主アーリン・ダールが拷問にあう場面がある。新聞等にてでいたこの映画の宣伝広告には、アーリン・ダールが万才型に両手を挙げて縛られ吊り下げられている大胆な写真だったが実際の映画には、万才拷問型の縛られ方はなかった。

悪政の王に捕われた彼女は、パン屋の地下室に連れ込まれて、吊り責め拷問を受ける。先ず半裸体の姿で両手を頭上で縛られ、吊し上げられている全身が写る。そして、カメラ

はそのままダールに接近する。頭上でX型に組まれている彼女の手首には、使い古された荒縄が縦に幾条も巻きついている。更にダールの全体重を支えている一本の吊り縄。

このときの吊り責めは、トリックではなく実際に行われているのには驚いた。さだめしアーリン・ダールにとっては苦しかったことであろうと想像される。側では悪人がダールの苦しむさまを、さも満足げに眺めている。全身の重みに、ちぎれんばかりに張りきった手首の苦痛に、がっくり首が前に垂れて遂に気絶してしまう。そこで一先ずカットされ、次にカメラは吊り責めになっているダールの上方に位置する。従ってスクリーンには、吊り責めの彼女を上から眺めた形となって写っている。縛られた手首から足先まで、一本の線のようになって吊り上げられている彼女の姿。アメリカ映画にしては大胆な拷問描写。

試みに監督を調べてみると、名優ジエーム・スチュワートと組んで、次々と話題作を生んでいるアンソニー・マンなのだから驚く再び画面は変わり、アーリンの正面に位置を変え、悪人たちは気絶したアーリンの縄を解いて降しにかかる。静かにずり下りてくる彼女。足が床につくと、彼女はくずれるように床の上に倒れ伏す。

ここに一先ず彼女の縛られ姿は画面から消え、ラスト近く、一兵卒に犯されようとす

る際どい場にて姿を見せる。先程の拷問によって気絶したままらしく、今度は後手に縛られている。その縛り方が又変っていて、襟首より胸部に廻った二本の縄が乳房の谷間にX字型に交叉して、そのまま二の腕あたりに巻きついている。ちよつと胸のところへ、十字に縄を掛けた恰好である。この珍しい縛られかたでダールは壁にもたれて坐らされている。一兵卒が、ほくそ笑んで無抵抗の彼女の上に毒牙をのぼそうとした時、愛人が救けにきて格闘の末、兵卒を倒してダールの縄を解く。気を取り戻したダールは、愛人の胸に抱かれて、ハッピー・エンドとなっている。

以上の場面は、ダールの悩ましき半裸の姿態もさることながら、レディ・ファーストを唱える米映画にしては、思いきった女性拷問シーンを撮ったものだ、鮮かに記憶に残っている。

その他、ヒットラーの最後を描いた『独裁者の最後』にて、芸人の妻（パトリシア・ナイト）が独軍より縛られて拷問を受ける場面がある。

これからも映画は益々発展してゆくことだろう。そうすれば女優の縛られ場面も様々な変化場面となって登場してくると思う。又、そのことあるを私は期待していると共に切に願う次第だ。尚、引続いて戦後のスクリーンから処刑（勿論縛られての）の場面を記したいと思う。

接客婦

加 治 信 一

一

社用で外出し、その帰りであった。谷田は天王寺行の電車に乗り、背をびったりと座席にもたせて座り、目をつむって、何を考えるともなしに慢然としていた。時刻は九時半頃であった。

「今池——」と車掌の叫ぶ声に、ふと谷田は目をあけた。背をのぼすようにして、彼は前方の窓を見た。その駅から何丁も行かない所に、飛田の遊廓があるのである。谷田は、ふとあの頹廢的な雰囲気を感じ出した。窓をのぞいてみても、明るい商店の灯ばかりで、どうして廓は見えない事は百も承知であったが、その立ち並んだ商店の灯を見るだけで、「飛田」という一種の雰囲気が、そこはかとなく漂っているように思えた。その商店街の通りを、肩をぶっつけ合うようにして歩いている

無数の人々の大半は、廓への往復の人であると云つても過言ではなかった。

谷田は、つぼみに十日程逢つてない事を始めて意識したように日にくつてみた。

馴染という特権で、他の客が、すっかり帰つてしまつて小一時間もたった頃に目をさました谷田は、「もう起きようか」と、かたわらに、まだ深い眠りの中にいるつぼみに声をかけた。二、三度軽く肩をゆさぶると、まだ眠むそうに、片目だけをあけて彼を見、谷田が眼をさましているのに気づき、

「なーんね」と、一種独特のアクセントの福岡訛りで云つて、「ねむい……」と、彼の胸に顔をうずめてきた。

「もう起きようか」と谷田が云うのに、「ウウ……」と、身をもがくようにして軀をおしつけてきて、

「何時でもかまわない……」と、彼の軀に両

手をまわした。隣の部屋では、女が掃除をしているのか、ばたばたとしたきを使う音がやに大きくきこえてきた。

「目がさめちまつたよ」と、谷田が云いながら、手をのぼして枕許のタバコを取ろうとするのに、つぼみは「ネエ」と、甘えるような声を出して、彼のその手をぐつととつて自分の胸の上に置いた。

それから三十分程して、やおら身を起して洗面に行こうとする谷田に、「やだな、朝から、こんなにとり乱しちまつて。はずかしい！」と、つぼみは、谷田が床からぬけ出しているのに、夜具をかむってしまった。

「顔洗うぜ」と、タオルを手にとって部屋を出ようとする谷田に、「意地悪！」と云いながら、彼女はしぶしぶと起き出したのであった。

洗面を終つて帰り仕度をしている谷田に、

「私、今日休もうかな……」と、彼女はつぶやきながら、ぬぎすてた寝間着をたゝんでいた。

「何故？」姫鏡台をのぞきながら、頭に櫛をあてゝいた谷田が、ふと振り返った。

「だってエ」チラリ、と彼の顔を見たつぼみは、すつ、と立ってきて、彼の後ろからぐつと両手をまわして抱きついてきた。

「朝から、あんなにいいじめたりするから……」と、ふふと笑った。

電車は動き出した。谷田は、舌なめずりをするように、十日前につぼみと別れた朝の生々しい場面を想い浮べていた。

（あれから十日。その間、彼女は、自分としてきたようなことを、夜毎続けているのだ。）

そして今夜も……。今頃は、どんな男の腕に抱かれているだろうか？谷田は、そんな事を考えると、たまらない自己嫌悪におちいつていった。あの朝の、如何にもうまいしい言葉も、一種の手管に過ぎないのだ。と、谷田は、ともすれば浮わづいてくる心を、ぐつとおしつけるように心の中でつぶやいた。

電車は速度を増して行った。黒々とした家の屋根が動き出し、時折、屋根の上にある色とりどりのネオンの光が、美しく虹の流れを思わせるようになり出した。と、ガーン、と電車が何かぶっかる音がした。ガクン、と彼の軀も横にのめった。ギギ……と、何かをひ

きずるような音を立て、電車は急速に停った。

（事故！）今迄の、甘い感傷や、もろもろの想いは素飛び、他の数人の乗客と共に、谷田は、ハッと身がまえた。

「どうした？」と、誰かど叫ぶ前に、運転手が非常扉を開けて、さつと外に飛び降りた。乗客は、一齊に窓によって外に目を集中させた。オート三輪車が電車にぶつかったのだ。へし曲ったオート三輪が、電車にひきずられたまゝの醜い恰好で、横転していた。乗客はそれを見て、一瞬の恐怖からほっと開放されたように、

「運ちゃん、どうなったかな」と、急に他人事のように好奇心を呼び起した。谷田は、数人の乗客と共に、軌道上に飛び降りた。オート三輪は、前輪を電車の下に突込んでいた。あたり一面に、ガラスの破片がちらばっていた。流れ出しているオイルの匂いと、気持のせいから血生ぐさい匂いがするようであった。運転手は数米飛ばされ、電車の運転手と踏切番がおゝいかぶさるようになりして応急手当をしているらしかった。

「頭をやられているな」乗客の一人が、のぞきみるようにして云った。谷田は、ゆっくりと電車から遠ざかって行った。みるみるうちに野次馬が集ってきた。谷田は、オート三輪の運転手が、死んだかどんな負傷の程度か、

そんな事は知りたいとは思わなかった。何れ頭をやられているらしいから、脳底骨折か何かで、瀕死の重傷であろうと思った。人の惨事を、此の目で見て、自分の心にいやな印象を残したくなかった。谷田は、奔流の如き勢いで駆けてくる無数の野次馬をかきわけて歩いていった。遠くからサイレンがきこえてきた。その音は、徐々に近づいてくる。パトロールカーか、救急車であろう。そのサイレンの音が、余韻をかすかに残して事故現場にいた時、谷田の足は、飛田遊廓の大門の通りに入っていた。

谷田が、つぼみの居る家の前にやってくる時、彼の姿をいち早く認めた客引きの女が、「何処へ浮気に行くんです。此処ですよ」と彼の前に立ちをはだかるようにして云った。「いや、今日は一寸ぶらつくだけだ」と、谷田は云いながら、チラッと家の中に視線を投げた。つぼみの姿は見当らなかった。そのことを気づいたのか、

「いまあがってますの。ね、泊ってあげて。そ、そんなに急がなくとも、ね、一寸待って下さいよ。今呼んできますから。あんたの噂してましたのよ。逢いたいって云ってましたわ」と、目に見えたようなうれしがらせを云って、谷田を家の中に引き入れ、隅の椅子に腰を降ろさして、ばたばたと二階に駆け上っていった。谷田は苦笑しながら、所在なく煙

草に火をつけた。

「すぐ来ますよ」と、件の女が降りてくるとすぐ後から、寝間着の胸許を合せながら、つぼみが降りてきた。谷田の姿を見ると、彼女は、ニコリと笑って近づいてきた。

「泊る？」つぼみは、谷田の表情をうかがうようにして、壁にかゝっている時計を見上げた。

「どうしよう……」彼は、あいまいな言葉をはいた。

「承知しないわよ、浮気すると」つぼみは、艶然たる瞳でにらんだ。

「実の処、今日は持っていないのだ。この時計で泊らすか」谷田はつと腕の時計を見せた。

「いゝわ、十一時に今のお客帰るから……」つぼみは、何の躊躇する事なく即座に承知した。

「じゃ、それ迄その辺をぶらついてくる」と云って谷田は外に出た。

「泊るんでしょう？」さきの客引きの女が、念を押すようにしてたずねてきた。

「あゝ、あとでくるから……」谷田は、あちこちから声の飛びかゝってくる通りへ歩を運んで行った。

彼は、無意識に足を運んでいたが、心の中は、何か割りきれないものがあつた。遊廓遊びをする人で、その道の通と云われるような人は、自分の馴染の女が、他の客にあがつて

いて、その間、じつと下で待っている雰囲気

も又面白いと云うそうである。焦燥と嫉妬心に心がいらいらする雰囲気、あがつてからの首尾に延長しての事を云うのである。谷田には、そんな気持ちを理解する事が出来なかった。何時かつぼみが、(私の忙しかった頃は、毎夜、寝間着から床だったのよ。客がついたと思うと、もう下に、次の馴染客が待ってるの)と云ったのに、谷田は、そんなに迄して、一人の女に馴染もうとは思わなかった。何処の馬の骨か牛の骨かわからぬような男に、さんざん玩具にされ、まださきの男の体温が、その肌に残っているような女に、すぐ登る気には、彼はとうていなれなかった。そのような感情を、嫉妬、或いは男の独占慾とでもいうのであろうが。谷田は、その事を商売としている女に、そんな感情を起らす事はナンセンスだ、と思うのであるが、何か割りきれない心があつた。不潔と考えるより、やはり、浅い馴染であつても、そこは一度きりの女と違つた感情からくる一種の嫉妬心であらう。

谷田は(このまゝ帰ってしまおうか……)とさえ思ったが、先程、階段の下で、(承知しないわよ、浮気すると……)と云つたつぼみの、あの艶然たる瞳が彼の眼底に大きくクローズアップされてきて、谷田の感情を、ぐらぐらと熱くゆさぶつた。

二

「つい今しがた、その踏切で衝突があつたのですってね」つぼみは、谷田がぬぎすてた上衣を、ハンガーにおしながら云つた。

谷田は軽く「そう」と云つただけだった。その電車に、自分が乗っていたのだ、と云えば、何かとその時の状況をきかれるのがうるさかつたからである。

「あら、ボタンとれてるわ」つぼみは、カッターをとりながら云つた。

「二つも、どうしたのよ一体。何時とれたの？」

「さあ」

「こんなボタンあるかしら？ お湯から上つてからつけておくわ」彼女は、そう云つて、それを上衣と並べて壁にかけた。

「私、着替えて行くわね」とつぼみは云つて湯桶を畳の上に置き、着物を肩からずらして寝間着に着替え出した。谷田は、煙草をくゆらしながら、つぼみの着替える姿をじつと見ていた。外見は、細っそりとしていたが、着物をぬいだ彼女は、わりに肉づきのある軀をしていた。

「あ、そうそうハンカチ？」つぼみは、寝間着に着替え終ると、片手に湯桶を持って谷田にそう云つた。彼女は、何時も、風呂の中で彼のハンカチを洗うのであつた。左程よこれ

てなくても必ず洗った。そして、翌朝、そのハンカチに柔かいちり紙をそえて彼の手に渡すのであった。何でもないことではあるが、谷田は、今迄にそんな経験がなかったので、初めて彼女にあがった時、（なかなかよく気がつく女だ）と、彼女の何でもない小さなサ―ヴィスに感心したものだ。た。

上衣からハンカチをとったつぼみは、それを湯桶の中に入れて、

「さあ、行きましょう」と、谷田をうながした。薄暗い階段を降りた突き当りに風呂場があった。中に入ると、白いタイルが湯気にぼんやりしていた。谷田がすぐに裸になろうとすると、

「一寸待って。湯加減をみるから……」と云って、彼女は寝間着を素早くぬぎ出した。彼女の足許に、何枚かの布きれが花びらのように乱れた。湯殿に入った彼女は、蓋をとり、湯をかきまぜだした。湯気にかすんだ鏡に、彼女の後ろ向きの姿が写っていた。谷田は静かな目で見ていた。

「丁度いゝわ」彼女は、さあ、と湯を肩からかぶった。心地よい湯加減であった。つぼみが肩を並べて湯舟に入ってきた。羞恥が、かえって不自然であるような、自然に隠さない恰好だった。皮膚と柔かな初毛が薄く湯の表面を弾いて乳房が浸って揺れた。（割にきれいな軀だな……。しかし、乳房は、その軀

の割に小さい。そして、乳首は、いやに大きいように思うが……）と、始めて彼女の軀を見た折に感じた印象を思い出した。谷田は、湯の表面に視線をおとすようにして、湯の中に透き通って見えている彼女の軀を見つめていた。そして、彼女と始めて一緒に湯に入った時の事を思い浮べた。

洗場で、彼がタオルに石鹸をつけていると「私流してあげるわ」と云って、つぼみはそのタオルをとって、彼の後ろにまわって谷口の背中を洗い出した。

「すまないね。僕は、こうして自分の背中を流してもらうのは始めてだ」と云うと、

「小さい時、お母さんかお父さんにしてもらった事あるでしょう？」と云いながら、彼の腕をとって、指の先き迄ごしごしと洗った。

「うん。しかし、そんな記憶が不思議と思いつんでこないね。あることはあったのだろうが……」谷田は、目をそっと細めて、その心地よい感触によった。

「ついでに前も……」と、彼女は、彼の軀をぐっと抱えるようにして向きをかえさせようとした。

「いや、いゝよ」谷田は、何か照れくさくてあわてゝ辞退した。

「いゝじゃないの」

「いや、僕が洗うよ。それより君の背中を流して上げよう」

「えゝ、あとで、さあこちらを向きなさい」

「いや、本当に……」

「そんなにはずかしがらなくても……。二人きりよ」つぼみは、腕に力を入れて彼の軀を向きかえてしまった。谷田は、ひざにタオルをひろげて、彼女のなすがまゝになった。片足を立てゝ、彼女は、彼の胸、のど、腰を洗い出した。谷田の目は、彼女の腕の動きと共にゆらゆらと揺れている彼女の乳房をじっと見つめていた。身をのぼすようにして、彼の腰の辺りを洗いきた時、彼女の暖い肌が、彼の肌にあふれた。ぶるっ、と身ぶるいをするような気持になった。

「あんた、はずかしがりね、タオルなんかひろげて……」と、彼女は、ぱっとひざの上のタオルをとってしまった。

「かくす必要ないじゃないの。私だってかくしてないわ」彼女はそう云って、遠慮会釈もなく、ごしごしと洗い出した。

「何をニヤニヤ笑ってるの？」つぼみが、つと手を延ばして谷田の肩にふれてきた。谷田は、ハッ、と現実に戻った。

「洗いましうか」と彼女は云って、ざっと立ち上った。静かだった湯が、急にざわめいた。つぼみは、軀から湯のしずくをたらしながら湯舟から出た。

軀を洗い終ると、つぼみは、コップに水を一杯に入れて、歯楊子に練歯磨をのせて谷田

にさし出す。何時もの事であったが、谷田にさし出す歯ブラシは、一度使ってしまったら捨ててしまふ品物ではなかった。谷田の経験によれば、こういう所で歯を磨く時、女は、セロハンで包んだ木の柄の一本五円そこそこの品物を出すのが例であった。しかし、つぼみが彼に何時も差し出すのは、彼女の使用するブラシと一緒に入れているケースから出してくる。彼女の物よりは、少し小さかったが、赤いセルロイドの柄も同じであった。谷田が泊る時、彼は、何時も湯の中と翌朝の洗面にはそれを使わされた。彼女に始めて泊った時は安物のブラシで一度使うと捨ててしまふものであったが、何時のころからそのブラシに変わってしまった。彼女の特定の人物なるが為か……。谷田は、こうとっていた。そのブラシは、自分専用の物ではなく、彼女の馴染客の何人かの共同の品物であると……。朝、見も知らぬ人物が使用したのを今、自分が使うのだと。谷田は不潔、非衛生的だと考えるより、一本のブラシにも彼女のビジネス上のテクニックがあるのに感心するのであった。谷田の性質としては、たとえ、不潔、と思つても、本人の手前、決していやな顔色も見せず、たゞ、もくもくとそれを口に喰わえ、白い泡をふき出すのであった。

風呂から上った谷田は、汗ばんでいる肌にしばらく風をいれていた。つぼみは、姫鏡台の前に座つて、髪の手入れをしていた。「サイダーたのんでおいたわ」つぼみは、頭に手をやりながら鏡の中で谷田に云つた。「すまん」

「返してね。こんど何時くるの？」

「わからない」

「長い間こなかったら、私、請求しに行つてやる……」と、彼女は云つて鏡の中で、ペロリと舌を出して笑つた。

「あゝ、やつとすんだわ」とつぼみは、頭から両手をはなして、じつと鏡の中の自分の顔を確かめるようにしてしばらく見つめていた。

「あ、そうそう忘れていた」彼女は、思い出したように、つと姫鏡台の前から立ち上つたその時、ノックをして顔見知りの女が、サイダーを持ってきた。二言三言、声を交わして女はすぐに去つた。つぼみは、そのサイダーを、谷田のそばに置くと、壁に寄つて彼の上衣のポケットに手を入れて、何かさぐり出した。谷田がけゝんな顔をして見ると、「ふゝゝ……」と、つぼみは笑いながら、一枚の便箋をつまみ出し、つと、彼に見せびらかすように自分の目の上にあげた。

「あ！」谷田は、とたん、がばつと起き上りそれを取りに行こうとした。つぼみは、きやあゝ、と悲鳴のような声を上げて、その便箋を驅の後ろにかくして彼から逃げた。

「それは駄目だ！」と、谷田が彼女の肩をつ

かんで、その便箋を取り返そうとするのに、

「なーによ。さっき、ハンカチをとる時見たのよ。ラブレター？ いゝじやないの、見ても……」と彼女は身を左右にふつて彼の手をよけた。

三

その一枚の便箋には、タイプで、

——この頃の谷田さんの品行はゼロに等しいよく、あやしげな場所に入入りしているそうです。御忠告申し上げます——。と打たれてあった。谷田は、出勤後机の抽出しからそれを発見した。タイピストの米川八重子が打つたに違いないと直感した。米川八重子が、彼に好意を抱いているらしい事は、谷田は前から意識していたが、彼は、彼女を余り好ましく思つてなかった。彼女は、とかくスキヤンダルをくりひろげるからであつた。以前には課長と、ついこの間迄は、谷田の同僚の一人と……。均整のとれたそのスタイルと、冷たい程迄の美貌は、社内の他のどの女性よりも男を惹きつける魅力はあつたが、谷田はそういう彼女を軽蔑な目で見ていたのである。

谷田は、その便箋を、彼女の目の前で破り捨てようと思つた。そうする事によつて、無言で彼女に、自分の意志を表示出来ると思つたその機会を待つ為に、その便箋を不注意にもポケットに入れておいたのであつた。

その数行の活字が並んである便箋を、つぼみが手に取ってひろげた時、何故、あわてふためいて彼女から取り返そうとしたのか、谷田は、その件から一年を過ぎた現在、未だにその時の自分の心理がわからなかった。つぼみが、それを見ても「ふふ……この人、恋人？」と云うに過ぎなかったであろう。それなのに、やっきとなつて、彼女の手からもぎとろうとしたその時の自分の行動が、今考えてみても不思議に思えて仕方がなかった。

つぼみが、容易にその便箋を渡そうとしたのに、谷田はやっきとなつた。彼女は、軀をふりくく、手を後ろに、左右に、上にとふりかざして、谷田の手がとどかないようにした。谷田は、そうしてつぼみと争っているうちに、もう便箋等どうでもよい。と始めの動機を忘れてしまつて、たゞ、二人でそうしてたわむれている面白さに酔つていた。つぼみを押し倒し、彼女の軀をくすぐるようにして調べた。

「ばか／＼。そんな所にかくしてないわよ」と、つぼみは、谷田をぶつた。彼は、ぶたれても少しも痛みを覚えなかった。むしろ、心地よい感じであつた。つぼみは、何処にかくしてしまつたのか、彼女の軀の何処にも見当らなかった。谷田が、つと手の力をゆるめた時、彼女は、そのすきに脱兎の勢いで身を越して走り出した。谷田が、ハッ、として追いか

けようとするのと、つぼみがドアの角で額をした／＼か打つたのと同様だった。つぼみはその場に額をおさえてすくんでしまった。

「自業自得だよ」谷田は、笑いながらそう云つて、起しかけた軀を、ゆっくりと畳の上に降ろした。つぼみは、一瞬、声を出せなかったようだが、しばらくすると、バターン、と大きな音をさしてドアをしめ、ものも云わずに額にタオルをひろげて夜具の上にひっくり返つた。

「僕のせいじゃないぜ」と、煙草に火をつけながら云う谷田に、「追いかけるからよ」と非難をこめた声で云つた。

「なによ！ たつた紙切れ一枚に……」と、荒々しい言葉をタオルの下で云つた。谷田は、そんな彼女に、相当痛かつたのであろうと想像した。余りの痛さに、今迄の感情が素飛んでしまつて、鬱憤となつてこちらに向けてきたのだと思つた。

「男らしく、かくしたりしないで見せればいいのよ。かくせば見たくなるのはあたりまえよ」つぼみは、ふふ……と笑っている谷田に腹の虫が、とてもおさまらん、とばかりにそんな言葉を投げつけてきた。谷田は、苦笑するより仕方なかった。（どれ／＼。痛かつたろう。すまん）等と云つて、優しく彼女を慰め介抱してやれば、彼女の機嫌もそんなに荒れる事なく、（痛いわー）と、彼に甘えてく

るだろう事は、彼もよく承知していた。しかし、彼の性質は、そんな事を知っておりながら、あえて実行に移す気になれないのであつた。見栄坊というより、一種の彼の含毒な性質によるのであろう。谷田が、一本の煙草を吸い終つた時、つぼみは、額の上のタオルをパツ、と取りはらい、

「返えしてやるわ。ハイ！」と云つて、夜具の下から、先程迄なかった便箋を彼の前に投げ捨てるようにして、後も向かずに部屋を出て行つた。谷田は、ごろりと横になった。気まずい空気であつた。

つぼみが、再び部屋に戻ってきた頃、谷田は、うと／＼としていた。彼女は、電気を消して、無言で夜具の中に入ってきた。

「そう、ぶん／＼するなよ」谷田は、むくりと身をもたげ、煙草に手を延ばして云つた。

「何にもぶん／＼してないわ」

「さ、そう云うのがふくれている証拠だよ」「じゃ、どう云えばいいの？」谷田は、苦笑しながら煙草に火をつけた。灰皿の中で、マッチがしばらく燃えていた。ぼうと明るくなつた部屋の中は、やがてまた真暗になった。つぼみは、くると寝返りを打って、彼に背を向けた。谷田は、火をもみ消し、やおら身を沈めるようにして、彼女の肩に手をやった。しかし、つぼみは、その姿勢を崩そうともしなかつた。とりつくまもないような冷たい彼

女の背中であつた。

「そういつ迄もおこるなよ」

「ほって置いて！」つぼみは、向こうをむいたまゝ冷たく云つた。

「客に悪い氣を抱かすのは君の損だぜ。僕も客の一人だろう？それとも、今夜の僕は、金を出してないから特別あつかいか」谷田は、ふと、そんな言葉が出てしまった。と、つぼみは、くると上半身を起して、谷田の方をむくなり、ピシヤ！と彼の頬を打った。谷田は、あつ、と頬をおさえた。彼は、しばらくの間、何の為に彼女が頬をぶつたのか理解する事が出来なかつた。

「時計返すから帰って頂だい！」彼女の目は憎惡に光っていたようであつた。谷田は、自分の不用意な言葉が、彼女からぶたれた原因になつた事に氣がつくと、

「僕は、生れてこのかた、女になぐられたのは今が始めてだ……」と云つて、ニヤリと笑つた。

「私は、毎日いろんなお客がくるけど、自分の氣のすまないお客はとらない事にしていいの」谷田を、まだぎよう視しながら云うつぼみに、

「すると、この僕は、君の意にむかないというのか」と、谷田は、枕を顎の下に入れて云つた。

「私は、この頃、とてもひどいヒスなの」

「もっと爆発する前に、僕に帰れと云うのか？」

つぼみは黙ってしまった。谷田は、（このまゝ帰る、と云つて帰りかければ、つぼみはどんな態度に出るだろうか……）と、ふと好奇心にかられた。

「僕は、君にぶたれたからと云つて、別に腹もたないが、今日は、おとなしく帰るとしようか」と谷田は云つて、ゆっくり身を起した。

「電車はなくても、自動車位はあるだろう」谷田は、洋服を着ながら、つぶやくように云つて、彼女の出ようを待った。つぼみは、谷田が、床から出て洋服を着かけるのを見ると無言で起き出して、さつ、さつと部屋を出て行ってしまった。谷田は、何か期待外れのよくな氣持だつた。

そんな事があつて一年。谷田は、その間、一度もつぼみにあがらなかつた。二、三度その家によつた事もあつた。しかし、谷田が顔を見せた時には、彼女が休んでいた、

「悪いけど、つぼみさん、今日はもう宵からしまっているのよ。一寸呼びましようか」と云うのに、

「いや、いゝんだ」と云うと、

「この前、あんたがこられた時は、あのこ、お客さんと一週間も温泉に行っていたのよ。

この頃、つぼみさん豪勢なものよ」顔見知り

の客引きの女が、そんな事を谷田に云つたりしていた。そんな状態で、谷田は、自然と彼女から遠のいていった事になった。

表戸も、もうしめてある夜中に帰る時、階段の下で、つぼみは、無言で時計を谷田に差し出した。谷田は、

「たとえ、わずかな時間でも遊んでいたのだから、時計はあずかっておいてくれ。後日来るから……」と、氣前のよい所を見せたわけではなかつたが、行きがかり上そう云つた。

つぼみは、意地になつたように返えそうとしたが、谷田は、表へ飛び出してしまった。

その時計が、その後、どうなつたか彼は知らない。その時計が、彼の腕から消えて、未だに、彼は時計をはめた事はない。しかし、別に惜しいと思つた事はない。長年していた時計ではあつたが、さした愛着も湧いてこなかつた。別になくとも、左程の不自由な感じた事もなかつた。なければならぬ、結構それですます事が出来た。

谷田は、その映画館を出ると、人の波と反対の方向に歩いて行つた。行きつけの喫茶店に行つて、コーヒーでも飲もうと思つた。電

車道を右に折れるとにぎやかな通りに出た。その通りの始めての辻を左に折れた所に、彼の行きつけの店があつた。角の煙草屋で、光を買い、一本抜いて火をつけ、ふっと大き

く煙をはいて辻を曲った。と、彼の足は、ギクリ、と停ってしまった。すぐ前を、映画館で見かけたつぼみと背の高い男が、腕を組んで歩いて行くのに目がとまった。映画館を出た谷田は、正直の所、つぼみの事はすっかりと忘れてしまっていたのだ。つぼみと連れの男は、谷田の行きつけの店のドアを押して

【読者通信】 (投稿歓迎)

奇ク十一月号を拝見しました、

印刷効果を考慮して口絵を画のみのとしたのは賢策でした。たゞ比較的印刷効果のよいペン画を何故載せないのか諒解に苦しむものです

特に畔亭さんの様なペン画のうまい人は是非そうしてもらいたいものです、都築さんのは画そのものの技術はすぐれているのですが、内容は毎回少しも変化がなく、たまには目先の変わったものがほしいと思います。一つのアイデアを出してみましよう。たまには立役者の縄に休んでもらって金属製拘束具といつても、まあ手錠足枷の類ですが、手錠は責具としてなかなか特異な存在です。それも後より前にかけたものに興味を持ちますしかもポーズとしては手を下へ垂

中に入って行った。谷田は、指にはさんだ煙草を宙に浮かしたまゝ、啞然たる面持ちで立っていた。

やがて谷田は、くるりと踵を返して、今来た道を戻り出した。彼の心の中は、何か、云うにいいないような感傷的な気持で一杯であった。つぼみの連れが、たゞのお客か、彼女

のামীか、それとも、彼女は、現在もはやあゝいう場所におらないで、家庭生活に入っているのか、谷田はそんな事に無関心で、あたかも、自分がコキユにでもなったように、寂寞たる孤独感におゝわれて、ふと、夜空を仰ぎみた。

しているものが良いです。画の具体的なアイデアを二、三述べてみましょう。一、平凡ながら奴隷も、競売台に並べられている所。一、サーカス曲芸もの、手錠で手の自由を失って綱渡りをやる等、この場合、コスチュームは水着。

一、いさゝか奇想天外ですが、女子プロレスからヒントを得たもので、格闘して相手に手錠をかけた方が勝つというプレイ。これを連続三枚位にすると面白い新趣向のものが出来ます。更にこれに浣腸を加味すれば一段と面白いと思います。一寸公開不能でしょうね。一、各種のコスチュームの女性に手錠をかけたもの(これはペン画がよい)一、マゾ好みとして婦人警官にひきたてられる男というのもよいかもしれない。等々、とにかく新しい趣味はどんどん実現に移し

てもらいたいと思います。尙、手錠を扱う際に必要な点は機械的に正確に描かれてないといけないという事です。十一月号に宮崎昭平氏の浣腸のお仕置というのが出ていましたがなかなか良かったですね。こういうアイデアは久しく要望されていたのに何故今まで実現しなかったのか諒解に苦しむものです。恐らくマニアには大好評であったことでしょう。この外看護婦が浣腸の準備をしている画など間接表現として味があると思うのです。画の方はその位にして、

単行本の発行を提案したいのです。が如何でしょう。大体の読者数のわかつている現在、限定部数で発行されてはどうかと思います。アリスの人生学校程度でいゝと思います。が、値段はずつと高くてもよいと思います。(群馬、I・J生)

○ 復刊のお慶び申し上げます、本日復刊第二号確かに入手致しましたからお休心下さい。お別れしてから約半歳、空白の永い永い月日でした。復刊第一号を落手するまで私の胸中は日夜悶々の情、止み難いものがありました。来る日来る日が苦悶の連続でその激しい真剣な憤りのやり場に、それは一つのヒステリックな心境でした。それでもまあいゝ、こうして再び奇クを通じて同慶の士と手をつないでゆけるのですから。発行の方編集の方、お努力と頑張りを合掌申し上げ終りに一人から二人、二人から四人とマニア参加を確約して本日はこれにて。(渡辺乃介)

『蜂の胸四十五センチ』にこたえて



十一月号の川上明氏へ――

蜷 間 洋 子

「蜂の胸」何と魅力的な言葉でしょう。私達女性の熱望するものです。特に私は細い胸に強い関心を抱かずにはいられません。洋子は今年十九才です。今日まで奇譚クラブを知りませんでした。だから川上さんというお方も知りませんでした。

それは十一月の或る日、大学の同級生の愛子さんのお家へ遊びに行った時の事です。愛子さんのお部屋で遊んでいた私はふと愛子さんのお兄さんの本箱を開けました。お兄さんはよく知り合っていますから心易く思っている仕事でした。しかし、これがあの電気にうたれた様な事がすぐ起るとは露知りませんでした。出て来たのです。白い表紙の本が、そして、奇譚クラブと書いてあったのです。中で

も私をとらえたのは「蜂の胸四十五センチ」という文章でした。あゝ現実に私と同じ女性は居るのだ、くびれた胸と熱望する女性が。川上さんという方の書かれたもので、一柳さんという女の方に宛て書かれたものでした。何ということでしょう、この文章はまるで私の事を書いている様でもありました。しかし私には男性のパートナーはありません。あの様に二人で楽しむのとは違いました。自分独りでやるものです。コルセットマニアという言葉も始めてでした。文中にありました胸についた紫色のバンドのあと、ぐっとくびれている胸、そして一年中否何年でも締めつけるバンド。強く締める時は血さえにじんでいるのです。それこそ胸まわりは四十センチ以下で

しよう。こう考えるだけでも何という恍惚感でしょう。

私は愛子さんに解らぬ様、編集所の所在地を書取りました。愛子さんのお兄さんに今度から見せてもらう様にたのもうと思いますけどどうですか、しかし私は書かすにはいられないのです。私は高校時代から手製のウエストニッパをきつく締めていました。中学時代は御存知のビニールの中広いバンドでした。夜休む時は少しゆるめていました。ビニールはよく肌につきますので、まるで皮膚の一部のように感じます。四インチ巾ですからウエスト一ぱいに締めています。乳房の一寸下から腰のつき出た骨までぎゅっと大きくくびれて、ヴァイオリンの形とでもいえるでしょう。痛いのは脇腹で今は慣れましたが、始めはそのところへガーゼをはさみました。これなら可成り締めても痛みはありません。いつも四十六センチぐらいでした。ただ前かがみの動作の時、前の金具がつかえて痛いのです。その点今用いているウエストニッパの方が痛みはありません。思いついてする時など、じつとり汗がにじみ、よく紐が結ばなくて困ります。こんな時、川上さんの様な方がいらっしやたらどんなに幸せでしょう。もっとくく力一ぱい締めていただけたと思います。コルセットは大きすぎて何かの時、困ると思

って用いませぬ。平常、私はこの細いウエストは誰にも見せませぬ。服は皆と同じようにゆるやかに着て、上の布ベルトを締めていましてから誰も気付きませぬ。でも家が留守の時や夜の外出の時は上衣まで細くしてみますが何だか恥しくて明るい所へ出る気がしません。一度東京へ行く時、駅で外の女の方に「あの人のウエスト細いわねえ」とさゝやかれた覚えがあります。そんな時、全身がひきしまる様な気が致します。

私は幼い時からこのくせがあつて、何時も革ベルトをスカートの上からきつくしてました。穴は自分でこっそり開けて何食わぬ顔できつくしてました。家人も誰も何とも云いません。でも時々母が「お前、あまりバンドをきつくするのはよくないよ」と注意して下さいましたが、中学時代になり肌ベルトと服のベルトはわけてわからぬ様にしたので、全然気付かぬ様子でした。それから一つ私には自分で考えた素晴らしいしぼり方があります。よく独り床の中で試みたものです。細い麻縄を二本用意して首へ後から一本を中央から両前へ下げ股下から後腰へまわします。あまりは丁度、あみの目の様に下腹から上へからげていきます。あと一本は前首から分けて、背へ下し股下から前面へ出し首のところのなわへかけ又下へたらしめて胸へからげます。そし

ておいて胴を革バンドでぐつと締めます。指がまわるまでしめつけます。すると胸から腹部まで丁度長いコルセットをつけたように締ります。力一ぱい締めきった全身の感じは筆舌につくせませぬ。

最近、よくスタイルブックにファッションモデルの身体の寸法が出ていますが、私にとつてはウエスト寸法はどれも気に入りません。皆五十センチ台ですもの、松田○子さんが一ばん細くて五十一センチですけど、誰か四十五センチぐらいで服をつけないかしら。洋子がお相手の方は、どんな方かしら、きつと素晴らしいウエストの方でしょうね。洋子も頑張りますから川上さんも頑張つて見て下さい。

映画にはよく締めたウエストを見る事があります。高校二年の時でした。立体映画「肉のろう人形」をお友達と見にいきました。男の方の方が少し多いくらい入場してました。その中で殺される役の女がその人の姉に外出前、コルセットをつけている所がありました。「私、今夜はモデル女の様になりたいわ」と台詞が入つてその姿が正面から大写真になりました。その時のウエストは大変細く館内から嘆息がもれたほどでした。お友達は「素晴らしいわ」なんて小声でささやいていました。私も感激しちやつてその翌日学校へいく時

手製のウエイトニッパをあらんかぎりの力で締め上げて出かけました。朝のうちはそうでもなかったのですが、昼食後息も出来ぬくらいでとうとうたまらず、トイレへ入りゆるめますと肌が真赤でした。しかし一寸はずすとすぐ苦しさが出たので又締めることにして今度は胃の部分をつつと下におさえつけ腹を下にふくらまし、又以前よりきつくしめ夜までゆるめぬ様決心し上衣を直して外に出ました。きつければきついほど自分の気持にびつたりするのですからとうとう我慢出来ませんでした。その日以来、ウエストニッパは一段ときつく締めました。入浴の時外して肌を眺めると、赤いあとと共に外しても、もとにもどらないウエストがあります。洋子の夢はこうして実現してきたのです。もうウエストニッパなしでは全くいられません。その上健康も全然害しません。寸法は何もつけずで四十九センチでニッパをつけて四十四センチです。

今洋子は机に向いペンを走らせています。もう十一時の秋の夜です。勿論胴には、かたくニッパが締まっています。私は何時も鏡を二つ用意して眺めます。こゝは洋子の部屋です。誰にもさとられませぬ。パンティ一つになり鏡に立てば、ちぎれるばかりに胴をくびられてにぶい螢光灯の下にうき上ります。明日は川上さんのお説の様に革バンドを求め棒につり下り胴を締めてみようかと思ひます。こんな事考えると胸が高鳴ります。

倒錯の英雄・織田信長を完膚なきまでに掀抉した新研究

倒錯の英雄、織田信長

笠 置 俊 郎・作

第六章

殉死の武士道

ある史家は、信長の残忍は一向一揆と戦ったのちに顕著となったと書いている。それは独裁者として権力化した彼の性格の変貌である——とこう言うのだ。それまでの信長は、秀吉を温く育てたように、政秀を弔ったように、心の優雅な武将であったと述べている。それもたしかに一つの見方ではあるが、私は前章で書いたように、新しい建軍精神との結びつきにおいて信長のサディズムを探り当てようと試みた。そして、それは決して間違いでないと思う。それで、私の信長論の基点を明らかにするために、ここで、信長のもっていた武士道的精神について章を加えておきたい。

信長の武士道は、非常に新鮮なニュアンスをもっていた。少くと

も、当時の戦国乱離の世に処するところの、狡猾で利己的な武士道とは全然対立的なものである。

これについて、どうしても信長と家康の結びつきに言及せねばならない。家康と信長が固く結合した理由は戦略的に、武田、上杉、北条という豪族を共同の敵としたので、二者の同盟を以て、一連の攻勢を反揆したのと、徳川が上杉、武田を抑えて信長の西進に後顧の憂いをなくしたと云うこと、いろいろそうした軍事上の理由が挙げられるが、その他に、信長が三河武士の武士道にぞっこん惚れこんだことにもよるのだ。

信長は、すでに書いたように、幼少の時から反信長派の同族や家臣の陰謀の中で、いやと言うほど、頼みにならぬ人心を見せつけられて生長したが家康は違う。家康自身はなるほど幼少から、織田家に或は今川家に、人質として日陰に育ってきたが、彼の家臣は、二十年と言う歳月を、幼主の生長を待って、隠忍自重、誠忠一途に城

を護り、領土を保ったのである。

家康を中心とする、三河武士の尽忠美談は史上に稀なところであつて、このひたむきな忠義の武士道には、信長の父の信秀も舌を捲いたこと屢々であるし、信長も惚れ抜いていたから、家康だけは深く信頼した。家康もまた信長を頼り、信長の天下布武の、封建統一政権の大目標には身を捧げて貢献しようとした。這般の事情は、かの本能寺の変を、折柄堺見物を終つて京に帰る途上に聞いた家康がそのまゝ京都に行き、信長の死んだ本能寺の焼跡で追腹を切ろうと言つて、本多忠勝に止められたのにみても分る。

その点では、秀吉は「時こそ来れり」と言つた態度であつたのと較べて、狸親爺はどちらだったか、詳しくは史伝によつて考うべき点があるろう、余談に互つたが、私の言いたいのは、この家康の追腹を切ろうとした武士道こそ、信長の武士道でもあつたと言ふことだ。

信長は、主従一体、殉死、追腹などの日本武士道の真髓を讀えたまことに切腹は日本武士道の象徴ではあるまいか。信長は自身、本能寺で首を刎う明智勢を尻目に見事にやつてのけている。

こう言ふと、切腹や殉死、追腹は、別に信長の特許的精神じやない。はじめから武士道とは、そうしたものだと思はれる方があるに違ひない。

ところが、それが違ふのだ、試みに甲陽武鑑を引例しよう。甲陽武鑑は武田信玄や勝頼の事蹟を書いた本である。その中に

「士武略仕る時は、虚云を専と用る者也、それを偽と云は、不知案内 武士にて、女人に相似たる人ならん」

と、臆する色なく喝破している。この戦国武士の風潮は、

「兵は功を立つるが本義であるから、もろこしの魏の曹操の如く、日本の足利尊氏の如く、仁義にそむくとも国を奪いとれば武將の本義である。もろこしの諸葛孔明や、日本の楠正成のような人は武將の本義と言えない。いつわりて表裏を行い、人の功を奪い、国を乱

し、逆にしてとるも兵術において害なし、是れ日本の武道也」

とあるから、啞然たらざるを得ない。信長はこの風潮に、一個人の思想をもつて対決したのである。かくの如き風潮のままなれば、争乱の終熄はいつの日であろう。それを悲しみ憤つた信長の悲歎が私にはよく分るのである。私が、純正な日本的武士道の祖を信長だとする主張は、決して牽強でないと思ふ。

殺戮サデイズムの真理

信長が長篠で武田軍を撃破して、事実上これを潰滅したあと、残敵を追わずに、主力を越前に向けた。

当時、越前は一揆もちの国になっていた。それまでに信長が任命した守護職は、次々と一向一揆の土民軍に殺されて、主権は、彼らの手中にあつた。

時は八月——炎暑をついて、信長の精兵は武田を滅した新鋭の火器をもつて土民軍に迫つた。この戦いで装備と訓練ある軍隊と、土民軍の優劣がハッキリしたのである。

最早や、武士の卒いる職業軍人の集団に、烏合の土民軍は敵わないことを、惨敗を以て立証したのだが、その時の惨状は言語に絶しづらい。

信長は、この有様を留守の者に、こう書き送っている。

「府中町は死骸ばかりにて一間あき所なく候、見せたく候、今日は山々谷々を尋ね搜して打ち果すべく候………信長」

見せたく候とは、いかにも信長の得意満面たる面目と真骨頂がむき出しに窺える言葉ではないか。

るにいたる土民軍の屍を眺めた、信長は欣喜雀躍の態である。まだその上、山々谷々をしらみ潰しに捜査して打ち果す——と云うのだから、随分な徹底ぶりであるが、この殺戮者のサデイズムはどこから匂ってくるのであろうか。

思想と云うものは、一朝一夕に洗脳さるべきものではない。それは大脳皮質に灼きついたしみのようなものである。

武家よりも一向坊主を頭領と仰ぐ宗教的感情と思想や——功利一辺倒の甲陽軍鑑式の武道的思想は、恐らく、終生的な思想であらう、それを信長は知っていた。いや、信長ならずとも、武將はみな知っていたのだ。

思想の根絶は、その思想をもつ人間をきれいに抹殺する以外に術はない。しかし、そんな大量の殺戮に良心の耐えられる者は、稀と云うよりは絶無と云った方がよい。

ところが、信長はやったのだ。妥協を排した信長は、殺戮サディズムの権化となって、遂に一向一揆を完全に日本から葬り去ったのである。それは、加担した土民を悉く殺戮したことを意味するのだ。

見せたく候と、信長は後世の人々にまで、一向宗徒の惨死したその醜骸を可々大笑して指呼しているのである。

あゝ、信長の血にひそむ、この性格は、これ以上、私の筆に乗るものではない。私たちも、憎悪すれば、その人間を八ツ裂きにしたい兇暴は覚える。だが、恐らく、その現実を正視するに耐える神経をもたないのだ。私たちの



兇暴性は、妄覚を激発によってのみ発現するが、信長のように水の如く冷静に、しかも、喜び勇んで殺戮することはできない。

ひつきよう、凡人に天下を動かす力のないことを自認するばかりである。英雄、英雄とはそも何者ぞ、と反問しつつ倒錯感情の神秘さにくたれる外はない。

話を武士道に戻そう。信長が武田遺臣を大量に屠殺したのも、武士道の更新を狙ってやったことである。

武士に二君無し。と云う思想は信長のもつ倫理であって、それは単なる觀念では把握できない思想だ。この思想の白熱的醗酵は、むろん君臣一如の端的な表現としての、殉死を指している政秀の切腹に、政秀寺を建てて永く供養した信長である。もって彼の思想の一端が分るであらう。

殉死とか、追腹は戦国時代には稀なことであって、永正五年に島津忠昌公薨去の砌、奈良原助八が追腹している。薩藩旧伝来。降って慶長十二年、名古屋城主松平忠吉の薨去に際して家臣三人が追腹を切った。その後に殉死が流行したとある。

信長が本能寺に自決した時は、少くとも、五、六十名の小姓が、信長の遺骸に重って切腹して果てている。その

ために信長の焼死体は遂に明智方で発見することができなかった。信長の思想はかくの如く生きていたのである。そして殉死の美風と武士の節操を後世に示したと云えよう。

因に、信長の死生観を今一度確めてみよう、ヤソ会士ルイス・フロイスは本国に信長と云う支配者をこう書き送った。

「信長は神仏その他偶像はもとより異教一切のトを信ぜず、宇宙の造主なく靈魂不滅なるなく、死後に何ものも非ずと明らかに説いた」と言っている。

まことに明らかに説いたものである。あらゆる迷信に超然たる信長の明晰なる思想をそこに見ることが出来る。

こう云う御大将にかかつては、坊主たちの仏罰顔面の脅しも、来世は地獄のいやがらせも、寸効なしである。

それに信長は、非常に坊主の墮落と破戒を憎んだ。ある日フロイスに会ったとき、寺の坊主の墮落ぶりを慷慨して長々と語ったということである。

これを裏付けるのに、高野山の高野聖を殺した話がある。高野聖というのは布教に従事する傍ら、参詣人の宿房の世話をする者のことを言うのだが、これらの高野聖が墮落して参詣人の懷を掠めたり殺人強盗を働いたり、近郷の女を襲うたり、破戒無慚を極めたので信長は、その悪風を根絶する肚を固め、高野山へ検問使を遣った。表面の名目は、佐久間玄蕃の遺品を渡せということ、かくまった荒木村重の残党の身柄引渡を要求させた。

玄蕃も村重も信長の旧臣で、玄蕃は追放、村重は叛旗を翻した者であるから、信長の要求は決して不当なものではない。

高野山では、信長が討伐する真意だろうと思つたから、不法にもその場で使者を殺してしまった。宣戦布告は高野山側からであった。信長記に「寺中の悪僧共山上の郷中（郷士）と相抱え承引これなし」と書いてあるから、郷士と謀って戦備を固めたのであろう。

信長は直ちに兵を派し、まず、宿房を襲つて高野聖千数百人を数珠つなぎに逮捕して、これを自ら令して一人余さず首を刎ねた。しかる後、神戸信孝をして数万の軍をもつて高野山を攻め、焼討ちの寸前、信長は兇変に会つた。

いずれにしても、僧侶の政治的支配力や、その墮落は、完全に信長のサディズムの為に打倒されたのである。

もし、信長非ずんば、仏教徒の専横はどれだけ蔓つたであろう、そのために、世の進運の妨げられたことは、推し量れぬものがあつただろう。サディズムは時代を救う要素であつたと私は信じる。

討首と鋸刑と信長

信長が討首のコレクト・マニアであつたと云うと、少し資料に不足を感じるのだが、この想像は必ずしも架空ではない。

信長記に

「正月朔日、京都隣国面々等在岐阜にて御出仕有、各三献にて召出しの御酒有、他国衆退出の己後御馬廻計にて古今不_レ及_レ承珍寄の御肴出候て、又御酒有、去年北国にて討とらせられ候、一朝倉左京太夫義景首、一浅井下野首、二浅井備前首、己上三つ薄濃にして公郷に居置、御肴出され候て御酒宴、各御謡御遊興千々万々、目出度御存分に任せられ、御悦也」

とある。

外国では、或はこうした例はあるかも知れないが、日本では信長一人がやった。浅井、朝倉は反信長の巨大な勢力で多年に互つて信長を悩ませたが、天正元年に信長のために潰滅した。

その翌年、天正二年正月に、信長はこれらの討首を酒宴の肴に供したのだから、その間、どこかに保存してあつたのだ。

この「古今不_レ及_レ承珍寄の肴」を出されて、信長の勇卒共も、さぞ寒気を覚えたことだろうが、信長記に特筆したところを見ると、

勇卒共も、討首の保管庫は知らなかったに違いない。

或は信長は、討首のコレクト・マニアになって名札を眼孔に通して、棚の上にも並べていたのではなからうか。

何しろ討首で酒を飲んで御悦也というのだから、いささか、我々の神経装置とは相異していたのである。

信長の神経装置の違ふところを今一つ引例しよう。

佐々木義弼が鯉江城で反抗したとき、柴田勝家がこれを陥した。

その時、磯野秀昌が杉谷善住を虜にした。

この善住という男は、杉谷円道寺の住僧で、信長が千種山嶺を騎馬で通った時に、鉄砲で狙撃した坊主である。善住はお経よりも、人殺しの鉄砲の名手として名高い男であった。

弾はわずかに外れて危うく信長は難を免れたが、善住が我が手に入った以上、信長が、ただおく筈もない。

早速、眼の前で鋸刑にしたものだ。信長記に拠ると竹鋸でやったとあるから、恐らく、竹を切る鋸のことであろう。

生きながら、鋸で切断される善住坊も、いかにも無漸で哀れだが信長は例によって例の如く、見せたく候と笑ったことである。

首を切断されたか、胴を切断されたか、伝記にも、あまり例のない残酷な処刑なので、詳細は載せていない、さもあるうと思う。

ここで私は信長の偉大さに突き当るのである。こうした片鱗は、信長の奥にあるものを暗示しているのだが、その信長が、天下兵馬の権を掌握し、我意の通らぬことこれなしと云う地位にあって、戦場においても、占領地においても、整然と軍規を維持し、民衆の信望を集めたことである。

前章でも書いたが、信長は、所以なくして一人の人間をも殺戮していないのである。こうした反面に庶民の人命と財産を尊重したのである。

旧日本軍の南京での暴虐を想起するがよい。聖戦も大東亜建設の

理想も、すべてを汚辱に塗り潰したではないか。

比較して見よ。信長は倒錯者でありながら、国家を愛するため自制したのではなからうか。自己の理想に、自己の倒錯性を抑制し得る者は、これ師表である。

倒錯に淫する気質のない者が、平常に生きたとしても、それは当然なことである。倒錯者であって、一世の指導者として生き抜くところに追従できぬ人物の偉大さを見ることができるのである。

巻頭に述べた通り、かくの如き信長を知らぬ通俗史家が、信長を短慮だとか、変質者だとか、狭量だとか評するのが片腹痛いと云ったのは、こゝの事である。

当時であっても、信長のこの心情を解する者は、わずかに森蘭丸ぐらいであったろう。信長は、超人的に、彼一人の境地を、孤高的に歩んだことだと思う。

將軍義昭と信長

信長の回天の大業は着々と成就して行つた。尾張、美濃、飛彈、近江、伊勢、越前、若狭、和泉、大和、河内、摂津、かくて幾内一円を手中に、天下統一の寸前まで功をなした。

それは実に素晴らしい速度で、彼の大理想を最短距離で疾駆した趣がある。安土こそ、信長の政治力の中心であった。信長は、ここに豪華絢爛たる黄金の安土城を築いた。

足利義政以来の、あのサビた銀閣から、華麗豪壮の安土城への文化的移行は、近代文明の輝しい開幕を意味するのである。

新世紀のエポックはかくして成った。信長は、さっそうと、文化の尖端を独走したのである。

型破りは幼童からの信長の気質であつたが、それが見事に開花したのである。秀吉は、たゞ彼の後塵を拝したに過ぎない。信長を本格的英雄とすれば、秀吉は模倣英雄か。

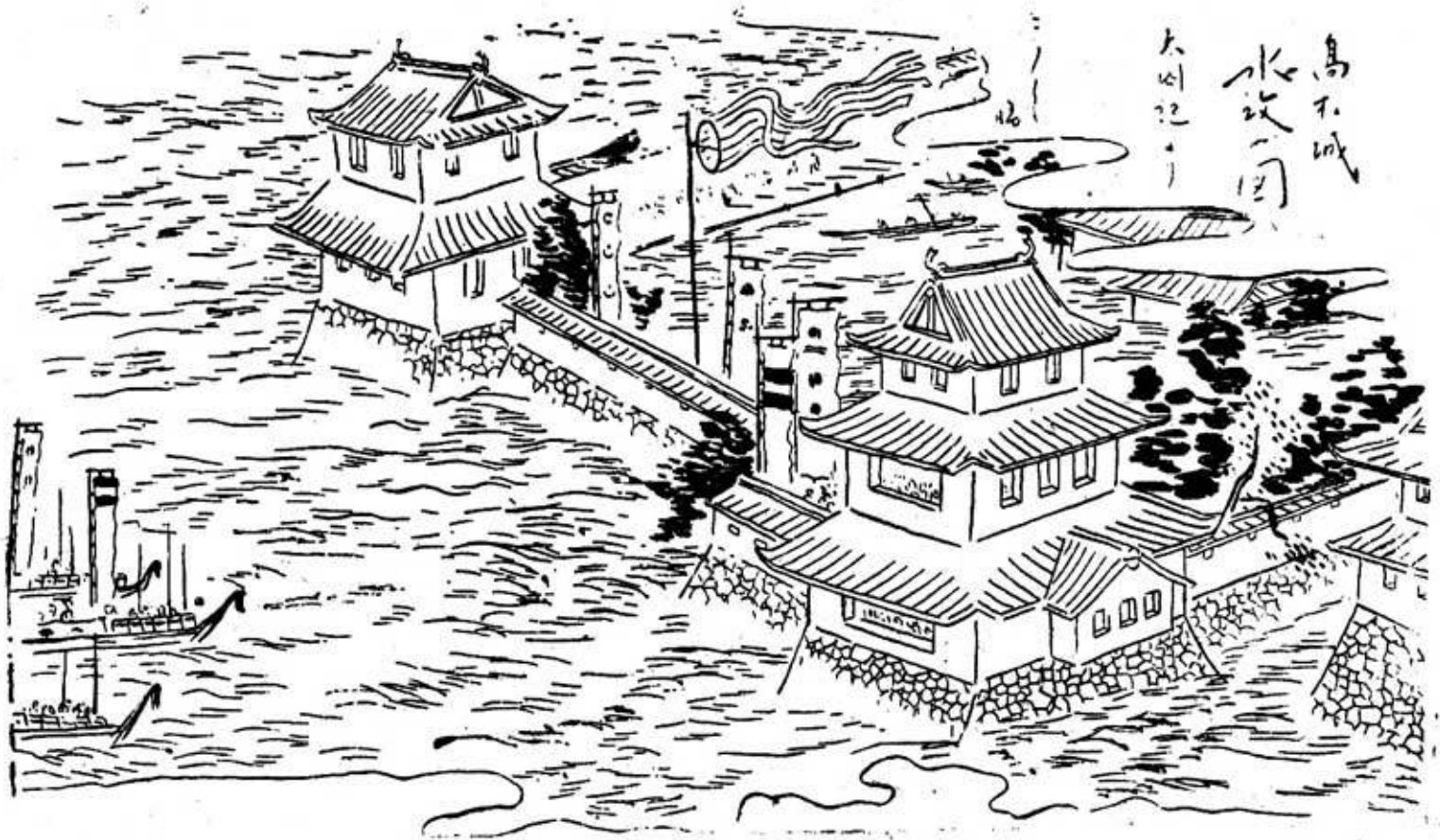
しかし、こうした信長の大成功も、実は、將軍義昭との結びつきあつてのことである。

義昭は將軍義輝の弟で、南都一乗院の覺慶である、義輝が松永久松や三好の一党に襲われて自殺してから、追われて諸国を転々とした末に信長を頼った。

信長、すでに西進の準備が出来ていたので京に入つて義昭を呼んで、征夷大將軍に堆した。その上、輪奐の美、泉石の麗を尽して二条城を築き、諸侯の邸宅をその周囲に配して義昭に献じ、幕府の尊嚴面目を一新したのである。

その功績絶大、義昭はうれしくてたまらず、信長に天下の副將軍になつて呉れと云つたが、信長は忿着なしと断つた。と言うのは、「天下布武」の大目的がある。副將軍で喜ぶような小器ではない。彼こそ、將軍以上の実権者であることを愚鈍な義昭は知らなかつたのである。

人間の器量を見る明を欠いていた義昭だが、感情では何か触れるものがあつたのか、信長に与えた感状には「御父織田弾正忠殿」と認めたのである。この感状の中で義昭は、信長に国家の治安を依頼している。むろん、実力のない將軍だから、それは当然のことであるが、そこで私の注目をひくのは、御父と呼んだ義昭



と信長の間柄である。

御父と言う表現は、可成りの妙なもので、もちろん臣下に対して云うことではない。さりとて將軍ともあろう者が、感状に使う言葉としては不適當過ぎよう。

この御父と言う肉親的感情の中に、義昭が信長に甘えかかっている慕情と言つたものがちらりと感じとれるのではなからうか。

たしかに信長は、義昭を心では愛していたらしい。でなければ二条城まで築かない。その、信長の愛情は、義昭の場合同性愛までは距離があつた。

相手は將軍である、信長も御父ぐらいの愛情で温く抱いて行くつもりであつた。義昭も甘えていたのだから……信長は、この名門の血を断とうなどとは考えていない。

にもかかわらず、信長によって將軍となつたことを忘れ、信長によって幕府の再興されたことを思わず、將軍だかという、この一片の空名に自ら酔うて、支配権力の独占を妄想したところに義昭の悲運が口を開けていた。

ついに御父とまで呼んだ信長に対し、反信長の武田信玄、浅井、朝倉、本願寺派、遠く毛利とまで同盟して信長を打倒せんとしたので、信長も一挙、その野望

を粉碎して、義昭を河内の若江に追放して室町幕府は亡び去った。だが、信長は、義昭を殺さずにおいたのである。躍らされた將軍に対する哀憫からか、それとも、やはり信長は義昭を愛していたためなのか、明らかではない。

虎視：中国を狙う

一度毛利の水軍に敗れた信長は、毛利を制圧するためには、水軍の拡充が緊要であると悟って、日本最初の鉄張り軍艦を造って、それに大鉄砲を備えた。

これも信長らしい着想で、見事に毛利の水軍に一泡吹かせたのである。多聞日記には、この戦艦には人数五千人のる、と書いてあるがむろん誇張だ。横七間、縦十三間の鉄張りとおあるから想像しただけでも仲々大したものである。

水軍が組織できると信長は、いよいよ中国征伐に本腰を入れた。

信長はその大役を、秀吉に一任したのである。

秀吉は高松城の水攻めにかかった、毛利の方では、輝元自ら大軍を率いて、いよいよ織田—毛利の一大決戦の様相を帯び来って、時局は正に急迫を告げた。

秀吉とて、これほどの大会戦は、初めての経験である。当然、御大将信長直々の出馬を要請した。

その時の信長は、安土城にあって、秀吉から報じてくる戦況を聞いていたが、彼は、すでに毛利を呑んでいた。

その証拠に、子の信孝は丹羽長秀らと四国征伐に向っていたし、森可成、滝川一益、柴田勝家などの宿将は、北陸道に上杉景勝と相対していた。

宿将は殆んど外征して、安土には明智光秀がいた位のものである。この状況からみれば、信長は決して全軍の勢力を一丸として毛利に対決したのではなかったことが分る。

しかも——親藩とも言うべき雄藩徳川家康には、助力応援を求めていないのである。それどころか、勁敵武田勝頼を滅すに勲功のあった家康に、駿河一円を恩賞として与え、家康が御礼言上に安土に赴くとの知らせを受けて、直ちに沿道の諸侯に、道路の修繕、宿舎の設備などを命じ、明智光秀に接待役を仰付けて、歓待に遺漏のないように計り、奈良からは能役者などの芸人を安土に呼んだ。

まったく到れり尽せりの歓待で、信長は、この時の家康の安土伺候が無性に嬉しかったらしい。いかに信長が家康との同盟の功を多としていたかが分るのであるが、それにしても家康の人物を、ちゃんと見抜いているところは、英雄は英雄を知るといふべきだろう。

こんな調子だから、また、毛利の如きの征伐は、すでに必勝の作戦計画は秀吉と十分に打合せてあって、秀吉の才幹を待てば、これまた、そう難事でないとの見通しもあって、余裕綽々たるものがあった。

天正十年五月十一日、遠江浜松を立った家康は、早くも十五日に安土城に着いた。それと同時に、中国にある秀吉から、急使を以て援を求めて来たのである。

信長は、家康を饗応しつつ——折柄、接待役をしていた明智光秀や長岡藤孝、中川清秀らに、各々領地に帰る兵を備えて中国に赴援せよと遽に軍令を下した。

この軍令を発したのが五月十七日であるから家康が着いて二日目のことである。

それから四日目、信長は家康に

「この度は是非、京、大阪、奈良、堺を見物してこられよ」

とすすめ、家康もその気になり、信長は案内役に、子の信忠をつけてやった。

こうして信長は、わずかな手兵だけで、その数は数十人に過ぎなかったが、安土を立てて入京することになった。

むろん、蘭丸は側近にいた、その蘭丸が、不図このとき不吉な予感にうたれて、入京の前夜、信長の床に伽をしながら

「上様——私は何このう明智殿のことが気にかかります」と言上した。

「何故にじや」信長さも面白そうに、蘭丸の愁い顔をみて訊ねた。

「明智殿は、近頃お食事どきに、幾度か箸を取り落されました、何か心に憂悶がおりのためと思ひます——ひよっとすると」

「ハハハ、光秀の木椎頭に、謀反なんかできるかよ、あれはな、もともと、武人の性でない奴よ、俺は叱ってはいるが、中国征伐がすめば光秀のことを朝廷にお願いして官を賜らして朝臣の列に加えてやろうと思っている」

「でも……明智殿は上様のお叱りに遺恨を抱いているかも知れませぬ」

「それよりも——お蘭、汝はいつまで独身でいる気じや、もう娶らねばなるまいが」

「上様ある限り、お蘭は娶りませぬ……では上様は、お蘭が妻を娶って、お側を離れてもよいと思召しですか」

柔かく睨んだ美童の傍には濃厚な情炎が燃えた。

昨夜の、痴語喋々も忘れたように、翌朝早く信長は近臣を供にし、安土から京に入った。外国の宣教師が、京から安土までは足を濡らさず行けます、と本国に書き送ったように、信長は道路を近代的に改修していた。自ら作った広々とした、信長式の軍用道路を、悠然として信長は騎馬で進んでいる。

時に天正十年五月二十九日、かくて信長は、京の六角油小路なる本能寺に館したのである。信長は豁達として、昨夜の蘭丸の心痛などをケロリと忘れていたが、蘭丸は、不吉な予感の影がだんだん、雲のように、心の中にひろがりはじめていた。

一方、中国出陣を命ぜられた光秀は、命を承けた十七日に安土を

出て、いったん居城近江坂本に帰り、二十六日には領邑丹波亀山に赴き、二十七日亀山より愛宕山に参詣し、二十八日西坊において、連歌師里村紹巴と百韻の連歌を興業して神納して

光秀は

時は今あめか下しる五月かな

と歌み、いったん亀山に帰った。この時の光秀の一句が、彼の野心の決定を謳っているというが、意味は仲々深いものがあるようだ。なぜ、光秀が信長を殺す気になったのか。史家の説は区々として定まらないが、漠然とではあるが、信長の光秀に対する冷酷さのためであろうと言う。

では単なる怨恨からか。光秀の西坊における一句は、彼の深く蔵している、天下を狙う不逞の野心が顔を出しているともいえる。

然らば、光秀は主君信長の築いたものを、この一挙に盗まんとした痴れ者であって、許すべからざる天下の罪人である。

またもし、信長に恨怨があつてしたというのなら、その浅慮、その小器、まことにお話にならぬものがある。

私は光秀が信長に、骨髓に徹するほどの仕打ちを受けたとは思えない、そんな覚えがあれば、信長ともあろう者が、無防備で本能寺にのほほんとしている筈がない。

信長は、決して光秀を冷酷に扱ったのではない、だから、蘭丸の進言にも笑ってしまったのだし、単身無防備に近い有様で本能寺に出てきたものでもある。

統武者物語に、或時日頃酒嫌いの光秀に、七盃入の盃に満々と酒を注がせて、信長が飲めと強要して光秀が断ると、その場に打ち伏せ、脇差を抜いて、これを呑むか、酒を飲むかといって、とうとう酒を飲ませてしまった。

というのだが、仮りにそんなことがあつたとしても、信長の人為りからすれば、座興の少し度を過した程度の事柄である。

また、光秀が丹波八上城に波多野兄弟を攻めた時に、波多野よく戦い形勢は光秀に不利であった。そこで光秀は自分の母（実は母代りの叔母である）を人質に八上城に送り、波多野兄弟を誘きて和を講ずるからといって安土に送った。

信長は、波多野に帰順の意志のないことを見てとり、これを殺したので、八上城でも、報復的に光秀の母を殺した。

それで光秀が信長を怨んだというのだが、ではもし、波多野と講和ができず、人質を交換して戦端を再開したとすれば、光秀は、或は一敗地に塗れたかもしれない。また、敗北して這々の態で逃げ戻ったのでは部将の面目が潰れよう、信長が、すでに決心して波多野を斬ったのは——実は光秀の苦境を救う英断であったのだ、それが分らぬ光秀ではない。

その外に、明智軍記に、中国出征に際して、信長は青山与三を使

として、丹波、近江を召し上げ、雲石二州を賜う旨を伝えさせたところである。

これは信長が、むしろ光秀の出征を鼓舞せんとして恩賞の約束をしたも同然のことで、これがために光秀が失地して妻子眷属はもとより部下の扶養を如何にせんと悩む問題ではもとよりない。

こう見てくると、怨恨説は理由薄弱で、或は信長と光秀の間に男色関係でもあったのかと——曲筆した人もある。

これは根も葉もないことであって、どこから見ても、木椎頭？ハゲ上った、風采の上らぬ光秀は、どうも信長の好むタイプではなさそうだ。

帰するところ、光秀の不逞な天下を狙う野望にあったものと私は断じる。

（完）

X の 尻

川瀬一美

トイレットの中から、よろよろと出て来た美貌の女がある。出口まで行って、そこで踏み込むようにして座って、やがて倒れた。鋭利な刃物で尻を切られていた。日曜日で賑合っているデパートの中である。一時大騒ぎになった。

警察病院に收容して、裸にすると、女の尻は薄くXの形に切られていた。乱暴に切っているのではない。加害者は、慎重に刃先を尻の上部にあてがって、下部に向けて斜めにじりじりと薄く刃を引いていったのだ。加害者は一度姿勢を変えて、更に片側から片側に斜

めに白い皮膚にXの形に血の糸を惨み出させていた。相当に長い時間がかかった筈だ。その長い間、女は声も挙げず、抵抗もしなかったのだろうか……。

警察では不審に思った。

——一時間前、そのデパートの屋上で、金網に胸を凭せて、眼下の景色にぼんやり眼を放っている長身の美貌の女がいた。水色のツウピースが、肉附のよい長身の体を、びったりと包んでいる。

「―新見さん」不意に後ろから呼ばれて女は振返った。

「――」

「……新見さんでしよう―」

「――」

「陽子さんでしよう?」

「……はい……」

「お忘れになったの……あなた……」

「……」

「――とぼけていらっしやる」

「――」

「南田よ、南田順子よ。」

「――南田さん?」

「どうしたの?、もうお忘れになったの」

「……びっくりして、余り突然なので私、すっかりどうかしてしまつて……」

「がっかりした。三年振りに会つて、ひとつもよろこんで呉れないんだもの――」

「――南田さん、嬉しいわ私。会いたかつたのよ、会いたくて会いたくて、嬉しいわ、南田さん――南田さん――」

女は、南田と云う女の手を握って狂喜したように左右に振つた。

「――ごめんなさい、ね、ねえ、機嫌直してえいきなりだったからびっくりしちやつたのよ、ねえ、ねえつたらあ」

「いいわ、許して上げる。食堂行かない?」

「行くわ、何処にでも行くわ。私のリーベさ

ん――」

「あんなこと云つて――あんだ、もう結婚してるんじゃないの?――」

「まあ、信じてないの――。卒業するとき云つたでしょう。陽子は一生結婚しないって――陽子は南田さんだけよ。」

「本当かな?、私は絶対あなたただけなんだけど――」

「――知らない、陽子の気持も知らないで。憎いつたら……」

「それでは一応ほんとの事にしていてあげるわ、食堂よ、何喰べる」

「あなたは?……」

「ランチにしよう」

「じゃ私も」

隅のテーブルに座ると

「――陽子――このお写真憶えてて、二人で琵琶湖へ行つたときのよ」と南田はテーブルの上に小さな写真を置いた。写真には、ボートの中で後向きに立っている女学生の姿が映っていた。セーラ服の短い上衣だけを着て、形のよい可愛い裸の尻が、大写に映っている。前方にヨットの帆が小さく見えている。

「――陽子――一緒に来て呉れる?」

「行くわ、どこ? お旅館――」

「旅館じゃないわ、トイレットよ――」

「トイレ?」

「嫌なの?」

「行くわ――お姉様」

南田の体に、陽子はくっつくように寄添つて食堂を出た。

すらりと伸びた姿態と、ひととき目立つ美貌の持主の陽子に比べて、南田は、ずんぐりした小柄な身体で、男のように太い荒い眉をもっているひどい醜貌の女であつた。その二人が、一緒にトイレットの中にはいった。トイレットの中は綺麗に掃除が行届いていた。そして、そこは小さな別世界であつた。白い便器を間にはさんで、二人の女は向い合つて立った。

「――三年越の思いをやつと遂げるわ。」

女学生時代のあの甘酸っぱい感情が、体をしびれさせて来た。

「辛らかつたわ、本当に」南田が囁やいた。

トイレットの中から、よろよろと出て来た美貌の女がある。出口まで行つて、そこで踏み込むようにして座つて、やがて倒れた。鋭利な刃物で尻を切られていた。

警察病院に収容して、裸にすると、女の尻は薄くXの型に切られていた。Xの形に……

――おわり――

「女」の随筆

『女のお腹談義』

緒台あふみ 文画

よく一口に女の胎は借りものと申します、あれは割合自由な独立の生活が営まれる現代と違って、私達女性が社会的な人権を奪われ男性の方に隷属を強いられていた封建時代の言葉であって屁理窟を申し上げれば胤だけは頂くわ、その代り出産や育児と云う方面では断然隷属致しません。反対に男性の方を適当にこちらから操縦してあげますわーと云う反抗心を表わしたもののなのです。その女性の大切なお腹は最近新聞広告を見ますと、美人コンテストで世界第三位を獲得した伊東絹子さんの例の有名な八頭身では、頭から勘定して第四番目の部分に当ります。昔の浮世絵に画かれた女のお腹は何番目になりますか、あんですよが太くてその上ヒップ（腰）がずんでんどうと乗っかっていたんですから、およそ肉体美、裸体美からほど遠いものでしょうが、浮世絵師の歌川、鳥井や西川裕信あたりが好ん

で裸体に対する羞恥の感情をかなぐり棄てて画いたり、また美女の三十二相など定めたりした大昔から、最近では美人の標準表などと%をきめてあちらさんの女を参考にしてよく新聞広告に出していますね、それで見ますとお腹の部分はどうも度外視されているようです。きつとドレスを着てウエストの処で締めると、お腹がポコンと出るのを嫌らうためかも知れませんが。嫌らう序でだから云えば芸者衆もそうですね、私共の経験から申せば皮下脂肪が貯ってお客さんが寧ろ喜ぶんじゃないかと思うんですが――。奇妙に皆さん嫌やがるようですね。



「姐さん、ここんどこ、いい？ 出張っちゃいないか知ら？」なんて若い妓はひどく気にするようですが、大丈夫お曳ずりで判りやしない、若し隅に置けんぞ、知らぬ間にーなんて冷かされたら、ビフチキと豚カツとうなぎ井三杯食べたのよと云っておやり、若い妓が



(第二 図)

ペッチャンコだったらお里が知れるってねーと。それでは私がノートの端っこに略描きした拙い画から説明、いやお喋りさせて頂きますよう。

第一図は中年位な奥様風の女の人をその前で膝まずいてレフかなんかで撮ったようですが、左の腿を後ろに曳いて右脚を心持ち前へ出すと、こんな恰好でふっくらと脂肪分の乗った見るからに豊満なお腹がなだらかな球を描いて眼前に現出します。有名なカメラマンである福田勝治という方は御自身はきつとこんな写真がお好きじゃないかと、或る殿方の方が云っておられますが、解説書ではこれは

拙い、こんな場合は眼の高さで写しさない、するときつと喜ばれますって逃げておられます。もつとも、私がちよいとお相手する紳士の方で三重の鳥羽港ですか、真珠取りの海女を例の猿又一枚で下から勇敢に写してカメラ雑誌に出したら、こっぴどくたたかれてグロも甚しいなんて——、その方、それ以来腐って未だに神社の鳥居の下をくぐらない、否何んでも下から見上げて開いてる物が恐しくなる、などと冗談話を聞いたことがあります。

でも満員電車やバスの中で男の方が坐っていらつしやる前に洋装ならかまわないんですが、和服でぶらさがって、それも五、六月頃か九月の羽織のな季節は何んだか下半身を検査されるようで嫌やですわね。無防備だからと云うよりは何んとなく面恥ゆいと云う気持ちでしょうね。

「腹部と云うは胸部と骨盤部の間にある部分にして皮膚は皮下脂肪に富み、正中線には心窩から恥阜に涉って浅溝を示しその中央に膝を見る。また腹壁と恥阜との境には恥溝があり、大腿前面との境には鼠蹊溝がある腹壁諸筋のうち直腹筋及び外斜

腹筋は腹部を緊張させる時よくその全形を窺うことが出来、古代の彫刻等を好んで表現される場所である」とまあ—ですから裸でなくてよかつた位のところでいつも降りるんですけど。

お腹と云えばよく痩せぎすの花嫁さんは見っともないから綿を入れたり、さらしを巻いたりして着付を胡魔化しますね、どうせ貰うんなら背のすらつとした方が外を連れて歩くのにも見ばがい、などとひどく御自慢で、さる美しい方を貰われた殿方がしよんぼりされておるので、さぞ御精が出たんでしようと冗談口申上げたら、結婚写真に骨がかくされてあろうとは気がつかなかったと口惜がっておられました。一つぺんでも海水浴に同行されればよかったにと—後の祭ですわね。ですからいい娘を世話しろよと仰言れ、ば暇々に町の写真屋さんのウィンドウに飾ってある盛装姿の写真をそれこそ一つ一つメモして歩くんですよ。もつともこの場合、写真屋さんの癖で正面向きだの、横向きだの或は振袖をたらしと垂れて立ったり、腰かけたりしたのと各種色々でしょうが丹念に見れば、第二図のような——そうですわね、一寸田舎じみてますけど歳の頃なら十八、九位なとこでしょう。ピチ／＼してて、肩のところから円みが出てお話のお腹は御覧の通り。こんなお嬢さん貰いなさいよ、きつと福德円満、幸福



(第三 図)

が訪れますわよっておすゝめしたら盲腸の跡があつたよ——っていつか捻じ込まれた事がありましたたっけ。お腹がポックリ出てるから盲腸は患わらないと云う理窟は成り立たないかも知れませんが。こんな娘さんを素直に立たせたら腹部の妊娠的膨脹が背部つまりお尻の部分に転移して何んとかと云う女優さん見たいにおかしくなる——ことはないと思います。

或る方で男の方ですよ、その方が会社の宴会でやって見るよつとすゝめられてさる人、女の膝枕を借りたんですって——そして御自分の鼻のほん先きでお腹のそこを突つていゝうちに神経衰弱が立ち処に癒った。と云うので、それからと云うものは片時も女のお腹が忘れられず、まだ酒に酔わない、いや一滴も召上らない前から枕代をはずむんですって——さる物好きな男の方から聞いたんですが

く駅のホームや待合所で珍らしい着物姿を見かけることがあります。お婆さんやカツギ屋さんではこちらで遠慮しますけど、若い娘さんや三十前後の女の人さがさりげなく立読みしてる姿なんぞ、よくぞ日本に生れたるなんぞとお思ひになりますか？ そうですわね、東京ではよくアメさんの兵隊が「美しいムスメさん、そのまゝで動かないで下サイ」とか云ってカメラに収めていきます。

第三図は新橋の駅で私が見かけた恰好なんです、きつと古風なバアー、東京では田舎屋そっくりのお店があつてランブの下で飲ませると申しますから、わざと時代遅れの髪を束ねて帯を締めている、のかも知れませんが。あいにく夜ですし、フラッシュもなかったものですから、構図が最もよく似たと思われる某氏のカメ

矢張り弁天様の近くで犬見たいに嗅いでれば何か御利やくがありますわって大笑い致しましたっけ。

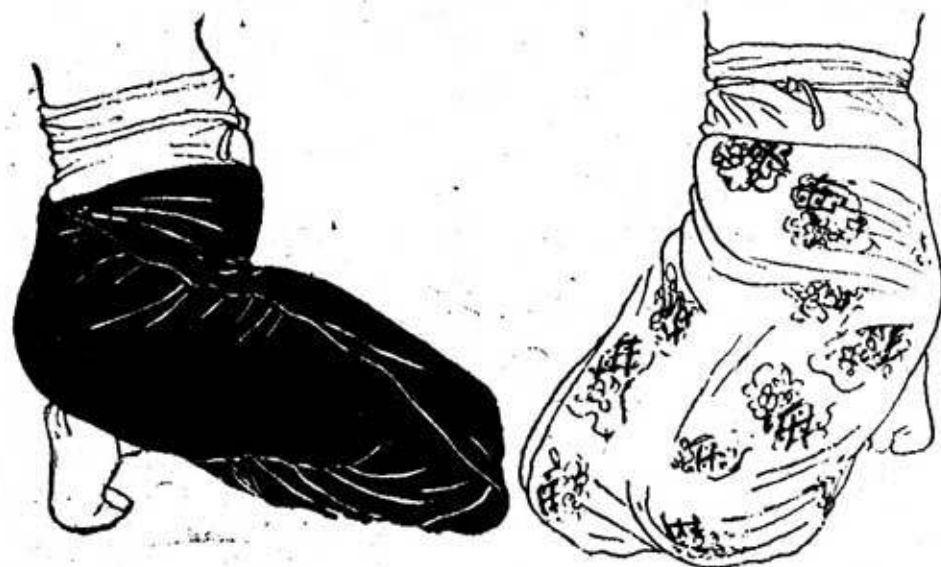
ラスナップを拝借致しましたもの。若しこんな女性がこのまゝ歩き出すとすれば、ピーンと張つたお腹の部分は微動だにせず、下腹部から腿にかけて着物が前後左右に揺れるでしょう。お正月の神社の境内で続々鳥居をくぐつてお詣りに来る若い女性の群れを下宿屋の二階から望遠鏡でのぞくと遠近感がなくなつてお腹から下だけが面白いように動く、壮観なるかな女性軍の進軍！ と、茶目っ気の大学生が私に云ってましたけど。こうした朝早くからお詣りしようなどと殊勝な女性達は健康的で、都会の一隅に在って荒淫と酒に明け暮れして脂肪分の蓄積する暇のな



(第四 図)

いもう一群の女性達と違ってお腹の部分がピチ／＼しなけやどうかと思ひますけど。そのピチ／＼したお腹から腰の部分にかけて今の女の人達は、冬はまあ幾らかいゝんでしようけど、薄着の夏の間はどうかすると見て嫌やだなあと感じたりすることは御存知ブロー、パンティ、コルセット——まさか月経帯は判りますまいが、着衣を透して留め金あたりが盛上って見えることです。勿論これは洋装に多いんですけど。

昔はほんの二三枚の動物繊維を透して柔らかい正中線が伺えましたかねえ、ですから若い妓には、(いゝ易いから例をひっぱり出すんですけど犬家の令嬢でも一般の若い娘さんでもかまいませんが)遠出には色々の事から必らず穿いておいてお座敷じや十人が十人殿方が失望するからねえと教えてやるんです。随分悪い婆さんでしよ、これは何んと云っても安全性と容姿美を考えるからです。踊りだつて西洋風の



(第五圖)

精

劇しい動作では心配ですが、和風のものは特別のもの——男舞を除いては精々見えても、つま先から少し上ったとこ位ですから、下穿は出来るだけ省略しなければお色気はこぼれませんもの。お腹を誇張してこれにコスチュムを配し、若さとお色気をたっぷり現した漫画——よく婦人雑誌で見られるでしよ、故人になった小野佐世男さんもそうですが今一人の田中比左良画伯さんなんか本当にほゝ笑ましい絵をお描きになります少し古いんですが摸写して御覧に入れました。(第四圖)

この方は今はそうでもないかも知れませんが、昔は着物礼賛主義者で浅草の鼻にもひっかけないような小さな小屋で、幕間に踊る娘手踊りを毎週のように観られたそうです。そして持前の若い女のお腹や腰からあんな最近ではお乳の膨らみなどに神秘性を感じて上手に戯文を綴って発表されておられます。この春も東京ではデパートや劇場

で流行のキモノショウなんて、百万円もの衣裳を舞台一杯展ろげて、多くの私達女性はおろか一部の殿方の垂涎を誘ったのは結構でしたが日頃洋装で鍛えたモデルさんに見えてどうもふっくらしたところが乏しかったようです。

それでは、お腹談義の最後としてコスチュムのぎり／＼のところ、お腰マニアの男の人もお案外おられるようですから、若い娘さんのお腰一枚の処を一寸御紹介して置きましょう。これは私の知った或る方のお嬢さんで背もすらっとした方なんです、肉体の平均が取れて私が特にメモするからって真紅のお腰と花模様のお腰の二枚を交互に締めて頂いてスケッチしたものです。精々写實的に描いたつもりですけど、程よく張ったお腹の部分から太腿にかけて女性特有の味が出ているように思われませんが如何なものでしょう？

長々と下らないことを申し上げてさぞ退屈されたことと思いますが、女のお腹部についてはまだ／＼面白いお話、いな私のメモがあるのです。明治年間に出版された滑稽新聞を見ますと、或る子供の欲しい旦那のお妾さんがお腹に竹の箆をくゝりつけて知らぬ半兵衛で旦那を騙す処が描いてありますし、西瓜畑から西瓜を見事に盗んだのは妊婦らしく装った奥さんだったなど——随分罪なお腹の例ですけど、重宝な女のお腹部にまつわる伝説や因縁話はいづれ稿を改めてお話し申し上げます(この項終り)



アブノーマル雑談

『話の屑籠』

辻村 隆

名の売れた、一応大家と云われる小説家にはその出世作なり、初期の小説は多かれ、少なかれアブノーマルな要素を含んだ小説が多い。文壇の大御所、谷崎潤一郎の小説にしても、「富美子の足」「刺身」「痴人の愛」とその殆んどがアブノーマルな要素を主材に使っている。

盲目の坊主が、お市の方の廁での、笹か草かを敷いた上へ、ポトリ／＼と排泄するかすかな音を、耳をすまして聞いていた——。と云った一節が、彼の何かの小説にあったのを覚えているが、我々が書けば、さぞかしひどいものになるうに、それが文学的表現のうまい為、いとも流麗に、かぐわしく感じるのは矢張り大家の大家たる所以か——。

○ ○ ○ ○ ○

その谷崎潤一郎の世話で、大映の助監督になったS君が、某日、監督界の第一人者K・M氏の宅に御機嫌伺いに罷り出た時のこと。応接間に通されて、KM先生の来られる迄の間、蔵書の辺りに眼をやると、「奇譚クラブ」を始めとして、その外類誌のF誌。R誌がところ狭ましく置いてあったのに、奇クの読者たるS君は、大いに気をよくしたと云う。

KM先生はサジストだと断言はしない。併し、彼の撮影での凝り性は、特に責場や、刑罰の面では且念且つ念入りを極めると云う話だが、これは彼にサジストの傾向がある証左とはならないだろうか——。

この話は又聞きであるが真実性がある、K

○ ○ ○ ○ ○

M先生が「近松物語」の碟の一シーンをとるのに四時間かゝった。このシーンは本筋から云えばなくもがなの一シーンであるが、彼はこの場面の為、わざ／＼伊藤晴雨氏を煩わして時代考証し、碟になった男女が、まる四時間、縛られたまゝであゝでもない、こうでもない、と、漸く、縛られた二人が冷たくなつて、真に苦痛を訴えた時、OKとなった。

映画で見ると僅か一分たらずのこのシーンに、これだけの辛苦が払われている事は余り知られていないだろう。

○ ○ ○ ○ ○

大体、「近松物語」の伴奏は早坂文雄が、特殊の柝を主眼にした、音楽で、大いに斬新なところを見せた。にもかゝらずKM巨匠はこのはりつけの一シーンで、早坂文雄の音楽が気に入らず、横で鞭を打振りヒュウ／＼と云う鞭の音を柝の音楽に融和させて、始めてニコリと満足したと云う——。

○ ○ ○ ○ ○

KM先生の撮るものには、時々谷崎大御所の感化が入るのか、「富美子の足」にも似て茂兵衛が激情の余り、おさんの足に唇をあてゝ強く吸うところがある。

この吸う場面で数回のとり直しがあつて、流石の長谷川一夫を面喰らわせ、香川京子を羞恥に追いやって、あの一シーンが出来た。事実、私共この道のものが観て、実に実感を

かしい事を考え乍ら夜汽車にゆられていた。

○ ○ ○ ○ ○

夜汽車で思い出したが、所用で広島まで行った。三等で眠れぬ雑誌を読み耽っていたら、加古川辺りから女囚が一人の巡査に護送されて乗り込んで来た。編傘で顔は分らないが、体つきから見ても未だ若そうだ。

丁度私の斜め前の席が片側空いていて、そこへ二人は並んで座った。腰繩の先が前へ廻って、冷めたい手錠が両手を噛んでいる。

人々の視線をうけて、若い巡査は半分上り気味だった。森永キヤラメルを出してじかに

口へ入れてやったりしていた。

女囚はフト巡査に顔をよせて何か囁いた。

巡査はすっかり困惑した顔で、辺りの視線を避ける様にして立上ると、女囚を前にして通路をゆられ乍ら出ていった。

真赤になり乍ら、巡査は職責柄、女囚を押す様にして便所の中へ二人して這入った。

私の前に座っていた中年の女が、やはり振り向いてそれを見ていたが、「まあ」と云って、フト私と顔を合うと、奇妙に赤くなってシヨールに顎を埋めた。私はあれこれ幻想をたくましくする中を、汽車はその室の異常な

空気も知らぬ如く、走りつづけているのだった。

○ ○ ○ ○ ○

女囚と云えば、再び話は元に戻るが「近松物語」の香川京子と長谷川一夫の二人が、裸馬にのせられて、街中を引廻しになる最後のシーンは圧倒的だった。時代考証は云うも愚か、非人一人／＼に到る迄気を配った、溝口健二の演出は心憎い許りである。

荒縄で十字に縛られ、手と手をつなぎ合せたおさん茂兵衛の姿は脳裡から消えない。話が元に戻ったところで今月の肩籠を捨てよう

玉稿落穂集

—誌上に載らなかつた
原稿のことども—

編集部



復刊第一号並に第二号をごらんになった読者の方々から、いろ／＼な通信が沢山参っておりますが、サディズム的な小説或は読物を

渴望しておられる声が相当ありました。その中から一文を御紹介しますと、

『復刊を心から祝し、今後の御精進を祈念い

たします。さて、小生も貴誌の古くからの愛読者であります。書店よりの購読者であるためか復刊を全然知らず、遂に奇クも再起不能かと非常に落胆致しておりましたところ、今回約三カ月程の予定で大阪出張となり、先日はからずも阿倍野交叉点近くの古本屋で復刊号に接し欣喜いたしました。

早速宿に持ち帰り入手した十月号及び十一月号をひもときましたが、正直なところ期待を裏切られたという感を深くしました。それは貴誌の体裁とかでは勿論なく、本格的なサディズムの読物が全くないということです。

十一月号の読者通信にある根津生氏の意見と小生も全く同感です。貴誌の創刊以来からの発展過程を顧りみてもサディズムの読物がい

かに読者をかく得してきたことか。『豊麗な美処女の羞恥責め』の一篇は必ず入れて下さい。サディズム小説のない貴誌は小生にとってなんの魅力もありません。折角万難を克服して復刊されても、いまのような編集方針ではおそらく永く多数の読者をひきつけることは不可能なのではないかと懸念されます。次に小生の切なる希望を一つ。

それは貴誌に連載された飛田良二氏の「蜘蛛と蝶々」を口絵や挿絵をふんだんに盛って上質紙使用の上単行本（アリスの人生学校のように）にして刊行願えませんでしょうか。企画を貴誌の誌上に発表し予約募集をし採算のメドをつけてから刊行されてもよいと思いますが、希望者の少ない場合は中止されてもよいわけですから、一度企画だけでも試みていただませんか。

以上一人勝手のことを申し上げましたが、貴誌の愛読者には必ず共通した点があると推測してお願ひなり苦言を呈した次第です。何卒御賢察の上、奇クの充実に益々御努力下さいますよう衷心よりお願いして擲筆致します。

一月十八日

（M・M生）

（以上原文のまゝ）とあります。M・M生氏の御手紙では『小生のいうような編集になれば勿論一年読者になるのだが、今は一月分だけの予約にしておく』というのだそうです。中にはもう今後絶対に買ってやらないから、

とか、或は潰れてしまうぞ、と脅迫してくる読者の方も時々あります。

全く、この方の云われる通りで、出来るだけ安価に、自分の性癖に合った内容の本が容易に手に入るのは、その人達にとっては非常に好ましいことです。しかし、これも限度がありまして敢て婦人団体の役員諸女史やPTAの役員諸氏を煩わさなくとも、余り露骨なものやドギツイものゝ印刷刊行ということは当然自粛しなければなりません。お金持の好事家が、お抱えの画家に描かしたり、囲っている二号嬢や馴染の芸妓連中を相手に実演したりするということは、個人の趣味であって他人の容喙する範囲ではありませんが、より多くの大衆の手に安価な方法で提供するということとは公然性の上からいっても、妥当ではありません。

それで、編集部の手元にある資料の中で掲載が困難なサディズム小説或は読物、絵画といったものを、この欄で御紹介することにしたと思います。それも、勿論、そのものズバリというわけには参りませんが、アウトラインだけでも御承知願えるかもしれないと思うのです。

それから、一寸おことわりしておきますが玉稿落穂集の第一回、第二回で没原稿の一部を発表しましたところ、或る読者の方から、編集部員だけで楽しまないで、俺たちにも見

せてくれ、といつて来られたことがありました。殊に「体操倉庫」を原稿のままでいゝから見せてくれと云ってくる人たちが案外多くありました。これは第三者から見ると決して楽しみといったような生やさしいものではありません。例えば、掲載予定をして挿絵も描き字数計算もして、すぐ印刷に廻せるようにしてある。白川美智子作、北原純子画の「転落の姉妹」辻佳子作、栗原伸画「蛇精」等は、共に五十枚近い作品ですが、サド愛好家にとっては垂涎の内容だけに、従来、原稿用紙が真赤になるまで数十回の検討を加え、なんとか活字にしたいという懸命の努力は、そのストーリーを夢に見る位で、その辛苦たるや、楽しみというようなものでは到底ありません。月日にしてその間、約一カ年半経過しておりますが、結局、どう手を加えても掲載は穏当ではないと決定したときは、よくノイローゼにかゝらなかつたアと自分ながら感心した位です。挿絵も何回となく書き直しまゝしくして今では、焚火に投げ込んでしまいたい位の気持ですが、焼いてしまう前にいささか内容を御紹介してみましよう。（十一月号、一二七頁参照）

転落の姉妹

（白川美智子）

「私の身上話を聞かせてくれとおっしゃって、普通この社会に転落した哀れな娘さん方

と同じような順序を経て来ただけなんです」という書き出しで、以前は神戸の株式会社丸橋商店のお嬢さんであった美智子という今は私娼窟に肉をひさぐ女の人のお客に対す身上話が続くのです。

今から三年前、妹の千枝子と一緒に阪急百貨店へ買物に行った帰りに学校友達の春子と偶然会ったので、妹を一人で帰して、美智子は春子と一緒にハイヤーを拾ったのであるが途中で買物をするといつて千日前で下車した春子がまだ帰らないすきに、ハイヤーの運転手は美智子一人を乗せたまま南へさして疾走する。

話は美智子がまだ高校生だった頃に遡る。美智子が高校生の頃、云い寄ってきた道雄という同窓の青年を満座の中で恥をかかして肘鉄砲をくらわしたことがあったが、それを恨みに思つて復讐の機を狙つていた道雄は不良友達の運転手を使って、何も知らない春子のだまして美智子を自動車に乗せることに成功したのであった。自動車は一時間ばかり走つて海岸通りの松並木にさしかかったとき、道雄とその情婦の赤縁の眼鏡に支那服の女が乗り込む。

美智子は自動車の中で支那服の女に、さんざん毒づかれながら、とある洋館の地下室へ連れ込まれる。その女は、この怪しげなキヤバレーのマダムらしく、美智子は下品な女た

ちから侮辱される。そのところを少し——「まあ、どうしたの、この娘っ子」

周囲に女達の集つて来るのを感じながらも私は、目隠しや猿轡を自分で取りはずすことも出来ず、そのまま恐怖におののきながら直立不動をしていなければなりません。両手は自由にされませんが、勝手に私が目隠し等に手を触れたり動いたりすると、みどりが忽ちお尻を蹴り上げるのです。

「目隠しだけお取り」

みどりの声がしましたので、私は恐る／＼目隠しをはずしました。私の周りにはどぎつい口紅をつけた、あくどいアイシヤードをした、一目でそれと分る五人の女達が卑しい笑を含んで、シロシロと冷かな目つきで私を見つめていました。部屋の中央にストープが置いてあり、隅には古びたダブルベッドが一つ、あとは椅子が二、三脚あるだけの、いやに埃っぽい十坪ばかりの部屋でした。

道雄は隅のベッドに腰を下しニヤ／＼笑つて私の逃げ場を塞がれた小鳥のようにキョロ／＼するのを楽しむように眺めております。

この女達は、道雄やみどりをマスター、マダムと呼ぶところを見ると、道雄とみどりの二人はこの辺一帯を縄張りとする、所謂、ポン引の親分なのでしよう。そこへ、車を片付けて来たらしい先程の運転手の立花がドアを開けて入って来ました。

「お前達、何をぼんやり見てるんだよ、早く」

「御気分はどうです？ 哀れなお嬢さん」
今迄黙っていた道雄が、何かを思い出すような口調で、
「憶えてるか、学校の卒業式のかえり喫茶店でした君の行為を！ 君は、僕という男の顔によくも大きな泥を塗ってくれたね、今日は、長年待ちに待ったその恩返しをさして貰うよ」と云いました。

私は気が狂つたように猿轡を引きむしりとると、

「違います、違います、私はあんな事までしようとは思ってなかったのです、私はただ、ただ……」

と絶叫し続けましたが、興奮のあまり咽喉に声が引っかゝつて、云おうとする事がすぐ口に出て来ないのです。

「まあ、誰が猿轡をはずせと云った？」

みどりは私のお尻をパンプスの先で蹴り上げました。私は道雄の方へ二、三步よろめくとぶつ倒れましたが、すぐ道雄の腰かけているベッドににじり寄ると、その膝によじのぼるようにして、

「ね、ね、聞いて、私の云う事を聞いて」

私は目にいっぱい涙をためて、必死に哀願しようとしていました。けれど、みどりに髪の毛を引っばられ道雄の膝から引き離されてしまいました。

「お前達、何をぼんやり見てるんだよ、早く

手伝わないか！」

みどりの叱声に、ただ茫然とこの有様を眺めて立ちすくんでいた女達も、慌てゝ泣き叫ぶ私の手や足を持って部屋の一隅の柱のところにへ引き摺って行き、身動きのならぬように五人がかりで押えつけてしまいました。みどりは、蛙のように土間に手足を押えつけられ、呻めいている私を冷かに見下して、何かヒソヒソと道雄、立花の三人で相談しているようにでしたが、やがてツカ／＼と私のところへ歩み寄ると、私を押えつけている女達に向つて、「この娘の着てるものを全部脱がして、お前達皆んなで分けた」と云いました。

私はくらくらと目まいがし、気が遠くなつて行くようでした。この言葉を聞いて喜んだ女達は、「ほんとかい、マダム」と云うなり猛然と、我れ先にと私の服をはぎとろうと襲いかゝって来るのです。私が余り暴れるので思う様に脱がせられず、その上、もし服を破りでもしたら結局自分達の損と思つたのか、その中の一人が立ち上ると、

「自分の欲しいもんばっかり目がけんと、みんな一枚々々剥ぎ取ってから、後でくじ引きで自分のほしいもん取つたらどないや」と、一つの掠奪方法を提案しました。

それ／＼自分のめがけるストッキングや上着等を思い／＼に脱がそうとすると、どうしても奪いあいになり、キズ物にもなるし、衣

服を脱がす能率も上らぬので、みんな「そやそや、そないしよう」と賛成し、二人は私の両腕を拡げて押えつけ、他の二人は両足を押えつけると、残りの一人が私のスカートのボタンやバンドをはずし始めました。

幾ら私がもがこうが暴れようが、五人の力には勝てる筈がなく、私はただガク／＼と恐怖のため歯を鳴らすだけで、スカートの裾がずり下げられ、ストッキングがむしり取るように脱がされると、恐怖よりも羞恥のため顔が真っ赤になつてゆくのを感じました。着ているものを次々と脱がされ、ブラジャーとズロース一枚にされた私は、やっと押えつけられていた手足を解放されましたが、毛をむしり取られた小鳥のような私は、羞しさの為、顔を上げることも出来ず、両手で乳房のあたりを覆い、ただ立膝をして蹲っているのみで、口惜し涙がとめどなく流れました。

女達はその様な哀れな私には一向平気なもので、私から掠奪した衣服を床の上に一列にずらつと並べると、キヤッキヤッはしやぎながら、ジャンケンをして勝った者はその中から最も自分の気に入ったものを一つずつ取るのです。一番最初に勝った女はスカートを取り、次に勝った者が上着、その次がシュミーズと、無残にも私の衣服はこれら下品な女達の持物となつて行くのです。首飾りと時計はみどりが取り上げてしまいました。

この様な姿にされ、そして衣服をすっかり剥ぎ取られた私は、一体どうしてここから帰れるのでしょうか。たとえ私を道雄達が解放してくれたとしても、この様な姿では外に出る事も出来ません。低級な女達は女学生のように騒ぎながら自分の背高に私のシュミーズが合うかどうか合わしてみたり、スカートをはいたりしていましたが、その一人が、

「ねえマダム、留守の悦子と早苗の分がないんですが、どないしよう」と云いました。「そうだねえ」とみどりは少し考えるようにして一隅で恐怖と羞恥にふるえている私をじろりと見つめました。私は瞬間、恐ろしい予感がして、ハッと顔を上げたのですが、道雄をはじめ女達の残忍な目が一せいに私の方に集中しているのです。私は慌てて視線をそらしましたが、突然みどりはゲラ／＼笑い出すと、

「なんだ、まだこのお嬢さん、ズロースとブラジャーをしてるじやないか、それと悦子と早苗に分けてやろうよ、構わないから早く剥ぎ取ってしまい」――

と命令したので女達が再び揃って襲ってくるという始末。ここで落花狼藉の乱斗の末、一本の麻縄で柱に立縛りにされる。この間の描写は、男たち女たちの見物を混えて刻明に描写される。ここらあたりは、サド好みの人たちにきつと受けるに違いないが、君子危う

きに近寄らずで、桑原桑原！としておこう。とにかく、男性の考える責め手よりも、女性の考える責め手の方が数等上であるということ、ここでもよく証明される。支那服の女は、立派な立役者として、可憐な乙女、美智子に対する恥知らずな、言語同断な責めを繰り返して、この日は終る。

さて、その次の日は？ 悪魔のような道雄たちは、美智子の妹千枝子をも、登校の途中を姉の持物を見せてうまく欺して、この地下室へ連れ込む。その場面――。

「今度は昨日のような甘い責めじやないから覚悟しときな、お前の妹の千枝子も可哀そうだがお前と一緒に荒療治してやるよ」

「えっ、千枝子！」

私はびっくりしてみどりの顔を見ました。

千枝子とは私のたった一人の妹で、後数週間で高校を卒業する事になっているのです。

「ははは、驚いたかい、千枝子は、もうちゃんと私達の罠にかかってこの家に来てるんだよ。さすがは姉さん思いでね、今朝、登校の途中を立花がお前さんが待っているからと、昨日頂戴した首飾を証拠に見せて信用させ、うまくここへ連れ込んだってわけさ」

私は失神しそうになりました。その時ドアが外から開いて、昨日の女達の中の一人が首を出し、

「マダム、やっと千枝子を言われる通りにし

ました。そやけど、あの娘は学校で何かスポーツやってんのか知らんけど、ものすごい力で暴れよって、シユミーズもズロースもずた／＼になつてしもて、もう使いもんにならん、うちかてエツ子かてひっかかれてこんなんや」

その女は千枝子からひっかかれたという自分の手の甲をみどりに見せ、不服そうな顔をしました。

「ああ、後から治療代は、うんとはずんでやるよ、じゃ、例の十字架へ千枝子を縛りつけといておくれ、このお嬢さんも今そちらへ連れて行くからな」

OKと答えて、その女は顔を引っ込めて、小走りに駆けて行きました。

「どう、これでわかったらう、お嬢さん」

というわけで、それから愈々、彼等のいう十字架の責めというのを、姉妹二人に対して行おうというのだ。二人を連れ込んだのは拷問室と呼ばれる板敷の部屋。彼等は二組に分れて、美智子の十字架と千枝子の十字架に集まる。そして、先ず攻撃の手は、妹の千枝子から加えられる。この場面がこの文章のクライマックス・シーンになっている。そして最も刻明にしかも詳細に、これでもか、これでもかと描写される。その初めの文――。

遂に、最後の恐ろしい責めが開始されました。絹を裂く様な悲鳴を千枝子はあげて、縛

しめを引きちぎろうと必死に悶え始めた。「あつ、千枝ちゃん、千枝ちゃん」

私は大声で狂った様に妹の名を呼び続けました。しかし、私は妹を助けたりかばったりするどころか、雁字搦目に縛りつけられて何ら抵抗を為し得ない私に、悪魔の恐ろしい攻撃の手が千枝子と同様に加え始められてきたのです。――

というわけで、姉として、肉親の何にも知らない妹が自分のために、苛酷な責めを加えられて、泣き叫ぶのを隣りで聞いていなければならぬ美智子の苦衷、そして、妹に加えられる彼等のあくなき悪魔の触手はやむことがないのである。更にその上、自分自身に加えられる攻撃の手。

第一日は、この十字架責めという奇抜なアイデアで彼等を十分満足させて終りを告げるが、次の日からは、ヒステリー性のみどりとという支那服の女のために、姉妹は毎日々々ありとあらゆる言語に絶する責苦を行われる。これは第一日目の詳細さはないが、それでも各種の嗜虐的な場面を繰りひろげて変化をつけている。

一週間に亘る檻禁の末、悪辣なボン引団に売られて、私娼窟に仕くようになる。妹は家を出したまゝ、行方不明。そして、最後は彼女のお客に対する次のような述懐で終る。

「人間転落すれば、どこまで落ちるかかわから

ないものですね、おや、もう夜も明けそうですわ、ずい分長い間おしやべりしましたね、さあ、一寝りしましょうよ、ね、え？ 私を縛ってみたいって？ まあいゝわ、本当は三年前の悪夢を思い出すので嫌なんだけど……

……。今日は特別に縛らせてあげる。その横の抽出に麻縄が入ってるでしよう。そう、あ一寸待って、今着物を脱ぐから……」

と、これで、ざっと五十枚である。

挿絵は北原純子さんの絵で、五枚ついていゝる。一枚は責めの場面ではなく、高校生時代卒業式の日、同級生の中で美智子が道雄に恥をかかせるところ。第二はハイヤーの中で支那服の女に美智子が手錠をかけられ、猿ぐつわをされるところ。三枚目から五枚目までの三枚は、全部責めの場面で、五枚目は姉妹二人一緒に責められている場面である。

蛇 精

(辻 佳月子)

作者、辻佳月子さんは、三十五才になる奥さん。今迄度々、長文の体験談や告白を送って来られ、嘗ての本誌にも掲載されたことがあるので御存知の方もありでしよう。この「蛇精」というのは、体験された部分もあるかもしれないが、多分創作だと思ふ。又、それだけ刺戟の強いアブノーマル臭味の高い作品である。なにしろ、蛇屋敷に住む半男半女の蛇使いの妖女が出てきて、花恥しいうら若

い奥さんとアブプレイに耽るというのだからおだやかでない。

話は、同じ職場で恋が芽生え、一年近く想思想愛であった二人が念願かなって、やっと結婚したのはいいが、困るのは住宅の問題。女はバラックに親兄弟姉妹合せて八人目白押しに住んでいるし、彼はアパートの六帖一間に友人三人と同居しているという始末。夫婦といつても、土曜日の夕方から温泉マークの一室で乏しい財布を気にかけて、はかない一夜を過ごす二人だったが、そんなところへ福音がきた。

ある金持の老婦人が離室を只同様で貸してやるというのだ。渡りに舟とその部屋を借りたのだが。——その本文。

翌日、私達は早速越して行つた。ろくな荷生もない私達のせい、婦人は「どうせ蔵の中で遊んでいるものですから、お使いになつて——」と遠慮する夫を指図して私達の経済には思いもつかぬ豪華な調度や道具を運ばせてくれた。

高級な旅館の一室のような部屋で私達はじめて今日から天下晴れて一緒に暮せると思ふと、感激で眠られぬくらいだった——。

というわけで、最初は大変調子よく見えたのだが、その翌日の日曜日に、邸の門前で見た床屋へ行った夫は、妙なことを聞いてきたのである。しかし、女はまだその噂の内容に

ついては聞かされていない。然し、先ず第一に老婦人の窃視癖が頭を拾ってきた。しかもそれは、次のような親切気からという表面であつた。時子とは老婦人の名。

浴室は時子が最近こしらえさせた自慢のもので純日本式の家屋に似合ふ洋風のタイル張りであつた。シャワーもあるし、姿見大の三面鏡も整えてあつた。白磁の浴槽に身をひたらせ薄桃色に上気した全身が鏡に写し出されると私は自分乍ら美しいと思つて見とれることがあつた。

「いいですよ、御夫婦じやないの。御一緒にお這入りなさいよ。」時子がひつこい位にすゝめるので、はじらい乍ら二人で入浴した二人であつたが、いつか、それが習性になつてしまつた——。

この次に浴室での場面情景が描かれているが割愛するとして、実は、この姿見大の三面鏡が曲者であつた。ということも、二人にはずっと後になつて分るのであるが、このあたり迄は、まだ／＼序の口である。愈々の本論は次号に再び引続いて御紹介することにしよ

(未完)

◎ 本欄にて紹介の作品についての御照会はお断り致します。

連載第二回

赤い花は泣いている

松 井 籟 子

北 原 純 子・画



鏡の中の自分の顔が、だんだんに自分ではなくなっていく。

「まあ、おきれい……」

と、誰かが横から言ったが、振向くことも出来なかった。

自分を取りまいて何人かの手が動いている。美沙子はただされるままになっているだけだ。

「本当にお人形さんみたい……」

と、又誰かの声。それは人形の様に美しいというつもりだったのだろうが、美沙子と思う。

そうなのだ、人形なのだ、人形になりに行くのだ。自分の意志とか、心とかのない人形に……。

けれど無くしたつもりの心が疼く。ともすれば厚化粧の顔を涙が汚しそうになる。

髪を長くしていたのは今日の日の為ではなかった。長い髪を美しいと云ってくれた人がたったひとりあったからだ。その長い髪で島田に結いあげているが、びんつけ油

をぬられる時は、目がつりあがって、生えぎわの毛が抜けそうに痛かった。かもじを入れてかたく結ばれた島田の根が、頭を重く圧している。美沙子は高島田という髪形は、何か刑具をかぶせられているようにさえ思われるのだった。

「お着付にうつりますから……」

と促がされ、肌着一枚で立つ美沙子に、後から赤い足田の長襦袢がかけられた。胸をしめつける紐……。そして伊達巻……。手がく

くられていないだけで、縄をかけられたように苦しかった。その上から目もあざやかな豪華な振袖が着せかけられる。そして、又しても紐と伊達巻……。厚い帯は木の締具に似ていた。

出来上った花嫁姿を、まわりの人は美しいと溜息する。美沙子にとったら囚衣も同じなのだ。小突かれて刑場へ引かれるかわりに、仲人に手をとられ、親戚縁者が取まいていく。どっちみち、自由のない囚人に変りはない。

「では一寸行ってきます。あいにく降っているようですけど、乳母やさんが待ちかねているでしょうね」

仲人が義兄に言った。

美沙子を母がわりに育ててくれた乳母が、中風で寝ている。一目美沙子の花嫁姿を見せてくれと、泣かんばかりに頼まれて、義兄はしぶしぶ、仕度が出来たら自動車で、乳母の家へ美沙子の花嫁姿を見せに行く約束になっていた。

「御面倒かけますね。まあ式の時間にはまだ間があります。自動車で一往復してくればいいでしょう。何しろ年寄はがんこな手で手こずりました」

「でも本当に美しくおなりになったのですもの、乳母やさんにしたらそう仰云るのも無理ありませんわ」

両親に早く死に別れた美沙子だった。二十も年の違う義兄は美沙子とは血のつながりはない。その義兄の商売上の金の都合で、今度の縁談がとりきめられたのだ。

玄関へくると重り合うように自動車が並んでいた。

此の会館では花嫁さんの仕度も、神前結婚の式も、写真も、披露もすべて一ヶ所でことが済むようになっていた。その簡易さが喜ば

れて、春秋の結婚シーズンには、一日に何十組もの新夫婦を作り出すのだった。

仲人の森田夫人が付添って行ってくれることとなっていた。

森田夫人は美沙子の着物を汚さないように、襟をとって帯どめの間へはさむと、上からすっぽりとビニールの長いマントを羽織らせた。約束してある自動車が扉をひらいて二人を迎えた。

一つ傘で美沙子をさきにのせて、その傍へ傘を置いたまゝ、

「この降りでは一本の傘では無理ね、私、一寸もう一本とってきますわ」

と、森田夫人はあたふたと玄関の方へ戻って行ってしまった。

美沙子はひとりで車の中に腰をおろしていた。朝からの煙っているような春雨が、いつか音のするような雨になっている。自動車の窓硝子に雨のしずくが小さな魚のように走っていた。

美沙子の胸の動悸がどうしたとか、だんだんに高くなってきた。頂度学校の学芸会で詩の朗読をする順番を待っている時に似ている。

いや、それよりも、何か悪いことをしようとする前の、胸の高なりに似ているという方がいかもしれない。たとえば子供の頃のことたずらに、落とし穴を掘って、そこに近づく人を物影から見ている時の、痛いような動悸の打ち方だ。

森田夫人はまだ来ない。混雑している預り所で、傘一本とってくるのに手間どっているのだろう。運転手はだまって背中をみせている。しめてある硝子窓からすきま風が吹きこむのか、ハンドルの上で小さなピエロの人形が体をふるわせていた。

クリーナーがカタッカタッと、物憂げに硝子の曇りをぬぐっている。

る。その音よりも、自分の動悸の方が大きいような気がした。

とうとうその鼓動に押し出されるように声が出た。

「運転手さん、わかっていきますから行って下さい」

「おひとりでするしいますか？」

運転手が聞く。

「ええ、病気で寝ている乳母やの家へ、この姿を見せに行くだけなんです。早く行ってこないと、お式の時間までに又此方へ来なければいけないので……」

美沙子は自分の声が平静なのに我ながら驚くくらいだった。

自動車は雨の中を動き出した。

会館の前庭の玉砂利をきしませて、スピードを出しはじめた頃、後で何か呼ぶ声が聞えたようだったが、雨の音に消されてしまった。

二

美沙子はやっとひとりきりになった。刑場へ引いて行く人の手から逃げられたのだ。

「厭だ！」という声は心の中で渦を巻いていたのだが、「義理」という一字で古風にも押さえてきた。

しかし、車の中で思いがけなくひとりにされると、「厭だ！」という声が「義理」の二字を押しつけて、のどまで上ってきてしまったのだ。

今、美沙子は自分の本当に望む人に、花嫁姿の自分を見せたいと思っている。それにしても、まだひとりきりではない。運転手がいるではないか。運転手は美沙子の乳母の家を知らない。ただ命じられた所へ車をつけ、再び結婚式場へ戻る為にその家の前で待っている。

るだろう。

美沙子は乳母の家とは全然方角の違う方向へ車を走らせているのだ。乳母がさぞ待ちかねているだろうと思うと、心が痛む。

(乳母や、かんにんしてね)

そう心の中で手を合わせた。

車は旧市内を出て甲州街道にかかった。

美沙子は表通りから少し入って、新道の角で自動車をとめると、「此処で待っていて頂だい」

と、運転手に命じた。

運転手は傘をさしかけて行ってあげると云ったが、美沙子は強引にこたわった。

「この頃は自動車みたいな大きなものでも盗んでいく人があるから物騒よ、お目度たい結婚式にケチがついたら困るわよ」

そんな冗談さえ、笑いながら口に浮かんだ。

運転手は随分はすっぱなお嫁さんと思っただろう。

美沙子は新道を拾うように歩いて行った。真白い足袋にはねが上って黒くなるのもかわらず、出来るだけ急いでもう一つの小さい路地へ曲ると、もう自動車の止った位置から彼女の姿は見えなくなる。

幸、激しい雨に通る人もなかった。

美沙子は傘を深くさすと、路地を通って、裏通りから別の広い通りへぬけて行った。

流しのタクシーはなかなか通らなかった。美沙子は泣きたいような切なさで、流しの空車の通りかかるのを待った。随分長い時間だったように思う。やっと、小型が一台来た。

タクシーの運転手は美沙子の高島田に、けげんそうな顔をしながら

花嫁姿の客はのせないと断る理由もない。だまって扉をあけた。

(ああ、やっと逃げられた)

美沙子はクッションに浅くかけながら、一瞬目をとじた。

逃げてきたのは結婚式場からばかりではない。自分の義理に縛られる弱い心からも逃げられたのだ。

運転手が何か聞きたいような気配に美沙子は言った。

「フフフ、この降るのに商売はつらいわね。花嫁姿のモデルになりに行くのよ、先方に美容院の設備がないんですもの、こんななりして表を歩いてくるの、恥かしかったわ」

すら／＼と嘘が口をついて出た。

「そうですか、本当の花嫁さんにしちや変だと思いましたよ」

運転手は笑って答えた。それ以上、あやしもうとはしなかった。都会という所はこういうことには便利な場所だ。二座をかけもちする俳優が扮装を着かえる暇がなくて、巡査の扮装のままタクシーにのったら、運転手が料金を辞退したという話もあるし、女のつもりでのせた客が、おりるまでに自動車の中でメーキャップをおとして男にかわっていたということだってある。都会は百鬼夜行が真昼間行われる場所なのだ。花嫁姿の若い女がひとりでタクシーを走らせても不思議はない。

美沙子は胸のはこせをとると、かんざしのような銀の止めをはずして、中をあけた。千円札が重ねて入れてあった。はこせこは懐紙を入れるものなのだが、昨夜その中へ、紙のかわりに千円札を入れておいたのだ。その時から逃げたいという気持は心の奥の奥に巣くっていた。花嫁は財布もハンドバッグも持たないのが普通だ。そっとお金を用意したのは、逃げ出す時の用意にというよりは、むしろ

る逃げ出せたらいいだろうという夢を、千円札の中にたたみこんで胸に持っていれば心が安まると思ったからだ。

しかし、とうとう、それを本当に役立てて、この逃亡の自動車賃を払うことになったのだ。

美沙子はもう一度深い溜息をした。

二

ドアをあけた夏雄は美沙子の姿にはっとして声もなかった。

美沙子も何にもいわない。

せまい靴ぬぎが、美沙子が立てかけた傘のしずくで、黒く地図をえがいて濡れた。着ていたマントをぬぐと、夏雄はだまって受取ってくれたが、美沙子が期待したような喜びの色はなかった。

美沙子は此処へ来るまでの自動車の中では、夏雄が外国映画のように、大きな感動をあらわしてくれる姿を空想していた。

「とうとう来ちゃったわ」

そういう美沙子をしっかりと胸の中でうけとめてくれるだろうと思っていた。喜びで声が出ないかもしれないが、言葉はなくとも彼の体全体が喜びを表現し、そして何にも言わず熱い唇をよせてくれるだろうと思っていたのだ。

しかし夏雄は何となく迷惑そうな顔をしている。

「来てはいけなかったの？」

美沙子は聞いた。

汚れた足袋をぬいであがろうとするのに、いつもなら、すぐにも招き入れてくれる玄関わきの彼の居間の扉さえ、かたくとざしたままで、あけてくれようともしないのだ。

「美沙子さん、どうしてこんな所へ来たの？」

美沙子の問いには答えず、夏雄は反対に聞いた。

「逃げて来たの、私、どうしても結婚するの厭なの」

「だって、それより仕方がなかったんじゃないか。皆が心配しているだろう。どうするんだい？」

「どうするって……」

あんまりだと美沙子は言いそうになった。どんなにはらはらしながら、結婚式場から逃げ出すなどという冒険をしてきたことか！

それなのに、夏雄は彼女を玄関に立たしたまま追いつきそうとするのだろうか——。

「とに角休ませて、私、倒れそう」

美沙子は言いながら、終いに涙声になった。「休ませて」などと自分の口から言わなければならぬなんて、あまりに自分がみじめに思えた。自分が夏雄を愛している心と、同じ心で夏雄も自分を愛してくれていると、今まで思っていた美沙子だった。

今日が美沙子の結婚式なのを夏雄は知っている筈だ。落付かない思いのまま、お酒でも飲んで、あてもなく街を歩き廻っていやしいかと思つた程だ。夏雄の家をたずねても留守かもしれない。もし留守だったら、彼がいつも鍵をしまっておく犬のいない犬小屋の釘から鍵をはずして、入口をあけ、勝手に中へ入って待ってあればいいと思つて来た。それが家にいてくれた。直ぐに会えた



いうことは、彼女にとって、どんなにか嬉しいことだったか——。

それなのに、夏雄の冷たい態度はいったいどうしたことなのだろう。

「私、少し休ませてもらっていいでしょう、疲れたの」

美沙子は言った。本当に倒れそうだった。

夏雄が濡れているマントを、帽子掛にかけている僅かの間に、美沙子は自分で部屋のドアをあけていた。

「あっ！」

彼女をとめようとして夏雄が声をかけるのと、美沙子が小さく叫ぶのと一緒だった。

美沙子は部屋の中に、夏雄以外の人がいることにはじめて気がついたのだ。

夏雄の家は玄関を入るとすぐに居間に使っているアトリエのような部屋があり、その奥に三畳程度の敷の部屋がある小さな家だった。彼の友人の画家夫妻の持家なのだが、夏雄に留守を頼んで夫婦そろってフランスへ行ってしまったのだ。夏雄はひとりで此処に住んでいる。アトリエは彼の居間でもある。客間でもあるわけだ。

今、美沙子はそこにひとりの女性の姿を見たのだ。それも普通の姿ではない。痛々しく縄をかけられ猿ぐつわまではめられている。女

はシユミーズ一枚の裸体に近い姿だった。その上、両方の足首を一つにして括り、縄の余りを首へかけて締めつけられている為に美沙子の目に、ぐっとこらえて力を入れた足の拇指がまるで生き物のように反りかえって見えた。そして外は雨足が繁くて夕方のように薄暗いのに、女の体はまぶしい程の電燈に照らし出されていた。

美沙子は思わず目をそむけた。しかし、玄関へ戻るわけにもいかない。自分の方が恥しさに真赤になって、茫然と立っていた。

四

女は美沙子を見ると、急に身もだえして、自分で自分のいましめをほどこうとした。しかしかたく縛った結び目はほんの僅かに体を動かせる位で、後手に縛った縄は、首にも足首にもかけてあるからどうもがきようもなかった。猿ぐつわを通して、言葉にならない声がふりしぼるように発せられた。

夏雄は自分の体で女をかくすようにして、縄をとぎ、猿ぐつわをはずした。

「随分だわ！」

女はかみつくように夏雄に言った。



「ごめん、ごめん。この人が来るとは思わなかったんだ」

「厭よ、私……」

女はぷり／＼怒りながら、手早く洋服に着かえた。

「だって、他の人なら帰ってもらうか、玄関で待っていてもらうけど……」

「この人なら私のおんな恰好を見せてもいいって云うの？」

「だからごめんって云っているじゃないか」

「私、厭よ」

「何が厭なんだ？」

「何がって……あたりまえじゃないの、普通の裸だって人には見せないものよ、それが……」

女はくやしそうに唇をかんだ。

「済みません。私が悪かったんです」

美沙子は横から言った。

「あんた、ナツオの何なの？」

女はきいた。ナツオという呼び方をするこの女こそ何なのだろうと、美沙子は思ったが、それを察したように夏雄が言葉を入れた。

「僕はね、この人モデルに写真をとっていた所なんだ。僕の悲しきアルバイトさ。テリー、怒るなよ。これは僕の幼なじみの美沙子さ。んっていうんだ」

テリーと呼ばれた女は敵意をこめて美沙子を見たが

「幼なじみが何故この雨の中を花嫁姿でやってくるの？ おかしな話だわ」

というと、夏雄は

「それはこれから話合えばわかることだよ。そんなわけなんだからかんべんしてくれ」

と言う。

女はなおも威たけ高に

「厭よ、絶対厭よ」

というので

「そんならどうしたらいいのだ？」

夏雄がきいた。

「縛られている姿なんて、人にみせるものじゃないわ。ナツオひとりに見せるんだと思ったから、無理なポーズもとったんだわ」

「しかし、君、そう言ったって、僕がわざと君をはずかしめたわけでもないし、しようがないじゃないか。それに写真はどうせ人にみられるんだし……」

「だって、それは私の目の前で見られるわけじゃないわ。私の知らない所で誰が見たって、写真は写真だからかまわないけど、ああ厭だ、厭だ、厭だ！ 不愉快よ」

「まあ、そう怒るなよ」

「本当にごめんなさい。私が悪いんです」

美沙子はそう云うと涙が出て来た。

ああ、誰がこんな成行を想像してきたらう。誰が胸ふくらまして雨の中を此処まで逃げてきたたらう。

「いいわ、じゃ、私にその花嫁さんを縛らせてよ」

テリーは言った。

テリーと云っても、目の色が違っているわけではない。照子という名を自分からわざとそう呼ばしている。テリーという名はどっちかといえば男名前なのだが、その名にふさわしく、きびきびした動作で、トックリセーターの似合うような女だった。

「その花嫁姿のまんま縛ったら、ナツオのいいモデルになるじゃないの」

「この人にそんなことは……」

「出来ないというの？ させられないというの？」

「だってこの人はお嬢さんだし、こんな姿で来たからには、お家の人が探しているに違いないんだ。このまゝ此処へおいておける人でもないし、ましてこの人を縛るなんて……」

「いいわ、そんなら……。私のはずかしい姿はこの人に見せても平気で、私の不愉快なんて考えてもくれないのね」

「そりや、君に悪かったと云っているじゃないか」

「じゃあ、ナツオ裸になりなさい」

「僕が？」

「そうよ、この人のかわりにあんたを差しめてやる。そうでもしなかったら、私、どうしても不愉快よ」

「そうか、そんなにいうなら君が思うようにしたらいいだろう」

夏雄は着ていたセーターをぬぎ、シャツもぬいだ。

「ズボンはかんにんしてあげるから、手を後にまわしなさい。」

夏雄はおとなしく云うとおりにした。

照子は彼の手に、今しがた自分を縛っていた縄をかけた。二た巻

三巻、平な男の胸へまわし、二の腕へも通してしっかりしめた。

美沙子とはめようとしたが、それよりもつきあげてくるような悲しみに、思わず三畳の部屋へかけこんで、畳に突っ伏した。

(こんな筈じゃなかった。こんな筈じゃなかった)

心の中でつぶやきながら、ただ悲しかった。振袖が涙で汚れるのもかまわず、顔をおおい、肩をふるわせて泣きじやくった。

思えば結婚がきまってからも何度かそうして泣いてきたのだ。そして今日も、朝からこらえていた涙だ。それが夏雄の所へくれば明るく心が晴れるだろうと思ったのに、思いがけないことになった。いったいテリーという女は夏雄の何なのだろう。自分はどうしたらいいのだろ。そう思うと、此処へ来さえすれば幸福が待っているように思いこんでいた自分がみじめで、涙があとからあとから出てくるのだった。

不意に肩をつかまれて顔をあげると、照子が美沙子の手を後手にねじった。

「あっ！」

と、とられた手を片手ではずそうとすると、その手も一緒にとられ、縄をかけられた。厚い帯が形よくふくら雀のように結ばれているので、手は不自然に体からはなれて縛り合わされ、二の腕の筋がつれるように痛かった。

「夏雄さん」



美沙子は思わず助けをよんだ。

「何しているんだ？」

夏雄が異常な気配を感じて声をかけたが、三畳に背を向けて、椅子に縛りつけられていたから、振向くことは出来なかった。

後から縄尻をとってぐっと上げられると、手がつり上ったように痛くて、美沙子は思わず腰を浮かした。

「さあ、立ちなさい、立ってこっちへくるのよ」

照子は邪慳に縄尻を引張る。

「痛い、あっ！」

と叫ぶと

「おとなしく歩けばいいのよ」

照子は後からこづくようにした。

よろよと引かれながら、美沙子は夏雄の目の前へつれてこられた。

「あっ、美沙子さん」

と夏雄は言つて、体をよじらせた。

「テリ、卑怯じやないか。縄をとけ、その人を縛るなんて……」

「フフ、。おばかさんね。私はしたいことをするだけよ。助けられるなら助けてごらんなさい。私はいつもあんたに縛られるけれども人を縛るといふことも面白いものなのね。ナツオはどう？ 縛られるって気持、悪くないでしょう？」

「ばか！ ええ、くそ！」

夏雄は椅子がこわれそうにもがいて、縄をとこうとしたが、照子はそのつもりでがんにがらめにかけた縄は急にはとけそうもなかった。

「花嫁さんを裸にするなんて、面白いじやないの」

照子は夏雄の目の前で、美沙子の帯あげをはずし、帯じめをとい

た。美沙子はさせまいとしたが、手を後手に縛られていては、抵抗しても無駄だった。

黄色いしごきをとくと照子は美沙子の厚い帯をときにかかった。

形よく結ぶ為に、方々が細い紐でとめてある。美沙子が出来るだけとらせまいとすると、照子はいきなり美沙子の頬を打った。

「おとなしくしなさいよ、じたばたしたって駄目よ。助けを呼びたかったら呼びなさい。そのかわり、あんたは再びナツオには会えなくなるわよ。すぐにも警察かどっかへ知らされたら、あんたは此処にはいられなくなるわ。それよりあんたの好きな夏雄さんの前で裸にされる方がいいわよ。どうせ、その裸をみせに来たんじやないの衣裳なんて昼間だけのものよ、お嬢さん面して、憎らしい！」

照子は美沙子のかんざしをぬくと、かんざしの足で美沙子の二の腕を突いた。着物を通して突かれても、激しい痛みを感じる。美沙子が顔をしかめるのを面白そうに照子は見ながら、夏雄の顔もうかがっている。夏雄が何とかして縄をほどいて、美沙子を救おうとする様子を見ると、よけいに嫉妬に心が燃えるのか、そうした夏雄の前で美沙子を苛めることがたのしいように、突いたり、抓ったりしながら、帯もとき、伊達巻もといってしまった。

赤い長襦袢がまるで血でも流れたように、殺風景な部屋に、錦絵のような美しい刺戟を一点に集めた。無理やり脱がされた着物は、後手に縛られているので、手首からはぬけず、くじやくの尾羽のようになく長く垂れた。それをそのままに、黄色いしごきを胸へまわされ、足は腰紐でしっかり縛られて、美沙子は夏雄の目の前の床に長襦袢姿で横たわらせられてしまったのだ。

文金の高島田のびんはほつれて、幾条かの黒髪が顔にかかっている。

「どう？ ナツオ、写真とりたいたでしょう？ 私がかわりにとっておいてあげるわね。もう少しナツオのお好みの恰好にさせてね」

「やめろ！」

夏雄がどなった。

「怒ることないわ。あんたの好きなことをかわりしてあげるんだから……」

照子は美沙子の胸を押しひろげて、しごきの間から乳房を引っ張り出した。

「いい形のおっぱいね、憎らしい！」

言いながら、乳首をぎゅうと引きちぎるように抓る。

「ああっ、痛い！」

美沙子は声をふりしぼった。

「ほら、こっちも」

照子のかまわず、もう片方の乳房も出し、又乳首を抓った。

美沙子は声を立てるのが口惜しくて、唇をかねでぐっとこらえたが、美沙子がこらえればこらえるだけ、照子の指に力はいって、今にも乳首がひねりとられるかと思う痛さに、思わずうめき声が口から洩れる。

その声に満足したように、照子はやっと微笑んで指を離すと、今度は何をしようかとしばらく考えていた。

夏雄の目の前で、美沙子をなぶっているということが照子には気持が良いらなかった。

足の紐をいったんといて、片足だけにかけて引張りあげた。長襦袢の裾がぱらっと開いて、形のよい脚が宙におどった。

「やめて！ 許して！」

美沙子は泣くように頼んだが、そんな声は照子を刺戟するだけだ。激しい雨に包まれている家の中で、恋人の夏雄にされるなら我慢

も出来る。えたいの知れない女に、はずかしめられ、見せたこともない姿を、夏雄に見せ、ヒーヒーと悲鳴をあげる悲しさ――。

「やめろ！ やめてくれ。僕がおとなしく縛らせたんだから、もういいじゃないか。君に悪かったと思うから、素直に君のしたい通りにされたんだ。さあ、もうやめよう。縄をといてくれ。自由になつたからといって、君にひどいことはしない。帳消しにして、三人で仲よくお茶でももう。美沙子さんの家だって心配しているだろう。頼む。なあ、テリ―。頼むから、もうやめてくれ」

「厭よ、私は。私の恥かしい姿を見せちやったんですもの。この人のも見なければ……。私は私のしたい通りにするのよ。とに角、私と同じ恰好にさせてやる」

美沙子はどうとう、夏雄の目にみじめな姿をさらさなければならなかった。

いっそ全裸の方が救われるかもしれない。なまじ長襦袢をまといその赤い長襦袢のまま縛られているという事は、反って恥かしさが倍加する。

美沙子を動けなく縛りあげると、照子はそれだけでやめようとはしなかった。

厭だと思う気持と、無理やりにそうされるということに、何かしら一抹の期待があつて、美沙子はジーンと血が腰に集ってくるような気がして、

(ああ！)

と、心の中で溜息をすると、目をとじた。

(以下次号)



失 恋 の 告 白

城 秀 人

失恋の告白という月並に聞えるが、私は少し毛並が変っている。というのは、それが私の一寸としたサジ的行動から招かれた悲劇——少くとも私自身に取ってはこれ以上の悲劇はない——だからなのだ。

私は、当時——といっても現在でもそうだが——ある官庁に勤めていた。

朝九時に正門をくぐり、出勤簿に印を押しがり盤を切り、五時十五分になるとラッシュユアワ—の電車にもまれて帰る。毎日々々が何の変化も味も素気もない退屈とあくびの連続なのだ。

月一度の、ほんの僅かなお義理的なサラリ—をおしただくために毎日満員電車でもみくちやにされ、上役の小言を有難く拝聴して

いる自分の姿が、時として哀れでもあり、亦馬鹿々々しくさえなってくる。

「何か血沸き、肉躍ることはないか。」

それがいつも精力をもて余した若い身体の中を駆けめぐる私の独白なのだ。

戦前の青年には、満州の曠野があり、支那大陸あり、南洋の諸群島あり、椰子の樹茂る南の島々あり、若い精力の吐口はどこにでもあった。それは結果としては悪い行為でありはかない夢であったかも知れないが、夢があり、青春の血の沸き所があった。それだけでも幸福だった。戦後に育った吾々には、何の夢も、楽しみもない。恋愛もやってみた、女の体も知った、しかし、何も自分を夢中にしてくれるものはない。

或る日、例の如く何事かあるのを期待しながら歩いていた私の目に、ふと本屋の店頭にある一見他の書籍と異なる一冊の本が飛び込んだ。何の気なしに取り上げ、第一頁のグラビヤを見て思わず、「ドキッ」とした。女を責める。

これだ！

これこそ、自分の求めていた夢であり姿ではないだろうか。靈感のようなものが、さつと頭の中をかすめた。その本を買ったのも、無我夢中であつた。

家に着くや否や、早速部屋の鍵をかけ、最後五頁まで、一息もつかず読んでしまった。

そして初めて、こゝに夢あるのを知った私は、それから毎月、店頭に現われるのを心待ちにするようになり、ただ読むだけではあき足らず、グラビヤの責めの部分だけを家の者達に知れないよう、こっそりスクラップし出した。

当時は恋人もあり、一度、彼女を責めてみたいという心切なるものがあつた。夜、奇譚クラブを読んでいるうちに、小説の中の女主人公と恋人とが同一に思えることも度々であつた。だが、いざとなると、やはり気が引けて、冗談のような口調で笑いながらしか云えなかつた。勿論、彼女は本気にしなかつたしそのような自分にもどかしい、歯ぎしりしたい思いにかり立てられるばかりだった。彼女

と向きあって話していても、この健康そのものゝような、若さの為、はち切れんばかりの体を縛って、バンドで思い切り打つてみたら等……と思うと氣もそぞろで、話がとんちんかんになり、よく彼女からすねられた。

どこか温泉マークにでもつれて行って、強引に縛ってみようかとも思うが、それが破滅を導くかも知れないという氣持とごっちゃになつて、益々神経を焦立たせるのだ。

彼女ののびくと成熟した体、きゅつとくびれた腰、白い大きな脂肪光りのした円い二つのヒップ。それにがっとからみつく革のバンド、さっと走る朱色のあざ、絹をさくような鋭い悲鳴、苦痛にゆがむ美しい顔、ツンとすましたような可愛い鼻が助けを求めるようにびく／＼と痙攣する——と空想するだけでも呼吸が苦しくなるような氣持に襲われる。

或る月のよい秋の夕暮れだった。例の如く公園での散歩の帰りに、彼女が

「ねえ、私、貴方のためだったらどんなになつてもかまわないわ。」

と云つた。月の光にさそわれて、ロマンチックな氣持になつたのかも知れない。

しかし、この一言半句が二人を永遠に別れさせてしまったのだ。という虫がよ過ぎるかも知れない、この言葉を利用しようとしたのは私だったから——。

私の胸は喜びと、次に起るべき期待のため

激しく高鳴つた。それから暫く歩いた末、なんとか、かんとかむずがる彼女をなだめすかして近くの旅館につれて行つた。彼女は恥しそうに下を向いてばかりいて、階段を上る時あやふく転びそうになるほどだった。勿論、既に彼女との逢瀬は何回かあったのだけど、それは郊外の誰もいない草原か、林の中だったので、こういう所へ来たのは初めての経験なのだ。

そのような彼女を見てみると、今から責めるといふことが、少し残酷な氣がしないでもなかつた。部屋に鍵をかけると二人とも急に無口になつた。

「早くしないと時間ばかり経つ」

と思うばかりで、いら／＼しながらも何とも切出しにくく、むつ／＼おしだまっていた。その様子を彼女も察したのだろう後を向くと蚊のなくような小さな声で、

「ねえ、どうしてもいゝのよ。」

とつぶやくように云つた。

その言葉で勇氣づけられた私は、やっと自分の思っている言葉を吐いた。

「ねえ、お願いだから縛らせて……」

上ずつた私の言葉に、今まで期待にふるえていたであろう彼女の胸は、はっと呼吸を止め、潤んでいた瞳は恐怖の光と変つた。

「いや！」

やにわに突き飛ばされた私はしばし啞然となつた。彼女は逃げようとして襖に手をかけ一生懸命引張っている。余りあわてているの

で、前に鍵をかけてあるのを忘れてしまったらしい。

必死に間さぐる彼女の手が呼ベルにふれるとピーピーという音が家中に響いた。さながら彼女の悲鳴にも似て……。

旅館のベルなんて余り大きな音ではないのかも知れないが、その時の私には少くとも、そう聞えたのだ。「一寸、待ってくれ」やさしく止めようとする私の手を力一杯ふり切つて彼女は階段を転がるように飛び降りた。

「お勘定をいただきます。」というマダムの手には三百円渡すのもどかしく、後を追つて飛び出した私の目には、彼女が人通りの多い電車道に向つて走って行く後姿が写つた。

「万事窮す。」

かくて吾が初恋も、一寸とした氣まぐれな興味のためあつてなく崩れていった。

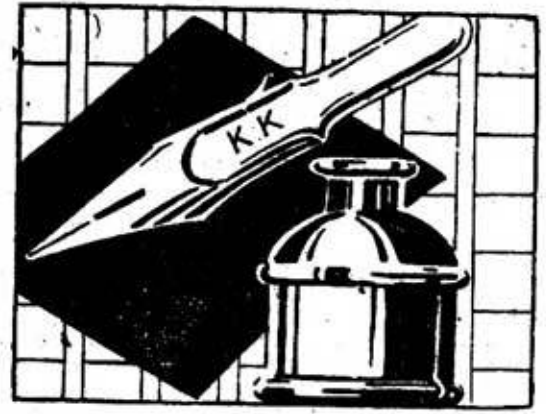
夜の冷氣につつまれて、段々と正常に復した私の頭は、唾棄したいような激しい自己嫌悪と悔いのため破れるようだった。

彼女は俺を軽蔑し、恐れ、極度に憎むだろう。そして、俺の公務員としての椅子も、彼女の言葉によつて覆されるかも知れない。

同僚は皆、笑うだろう、軽視するだろう、呆れ果ててしまうだろう。

ともかく、一度彼女に逢つて釈明したいと思ひ、私は重い頭をかかえて役所へ出勤した。だが、彼女のいる課に行くと、彼女は顔をそむけて取りつく島もない有様だった。

こうして私は、恋と、夢との二つを同時に失つたのだ。



【読者通信】

つてしめます。昼間はの上からズロースをはき、夜は下帯だけで寝ます。田谷先生の女腹切実見記を読んだ時は胸がドキドキしました。原桐咲代様、どうぞあなたの切腹写真を田谷先生に借してあげて下さいませ。そうすればまた切腹マニア全部が先生の記事に接することもできるかもしれません。

(神奈川 B子)

います。(中略)更に林氏なる人物は他の類似誌をも購読していたらしく記事の写真の中に不明なもの、確か一、二号で廃刊になった其類似誌のものらしく思われるのですが、KKにこのようなものがあつたでしようか。尚、このローカル・レポートの見出しは戯言ですから、悪しからず。

(東京 近藤生)

私は昨年ある女子高校を卒業して会社勤めをしています。奇く二年以上奇クの愛読者です。奇クの記事では切腹のものが何より楽しみですけれど、私も大部前から下帯をしていますので私の下帯の仕方を御紹介致します。私は始め男の水泳褌をして居ましたけれどずり落ちて圧迫感がないので六尺褌に変えてみました。よく御年寄がしているように普通の晒木綿で六尺褌をすると横帯が厚ぼったくなつて格好がわるいので、ガーゼを幅三寸位(金尺で)——ほとんど縫帯位の狭さ——に切り六尺褌と同じ様に固くしめ、横帯を廻す時縄をなう様にねじって細くしめ股下をきつく横帯をなるべく下に引張

昨夜、上野駅へ行つての帰途、車中で隣りの人が読んでいた新聞記事に思わず目を惹かれました。それはKKの愛読者の一人がアプレイに耽溺した挙句、誤つて生命を落したとの記事です。早速一部を購入しいろいろ調べてみました。念のため毎日新聞を見ました。が、睡眠薬自殺としてありました。プロレスごっこで子供の死傷事件があるのは、自分の意に反した不祥事であると力道山が云つていました。が、小生も愛読者の一人として、この過失死に迷惑を感じます。文中、縛られた男が女に棒で叩かれるというのは、春日嬢と湖田氏のフオートにありました。木に縛りつけられた女が垂れ下つてきた蛇の戯れに恍惚としているというのは、KKになかったと記憶して

貴誌も六月号以降、情勢の圧力に押されて休刊されて以来、熱心なる読者として失望して居りました。御努力の結果、再び刊行出来るようになり本当に有難く思つております。復刊は出来ないものと半ばあきらめて居たので、その喜びは大きくあります。特にその後の情況が変わつたとは思われませんので、あまり行き過ぎて再び刊行不能にならない様充分な御懸念が肝要かと思ひます。内容が充実する事は勿論大いに望ましいものではあります。が安全なる限界を超さないで免れ、角継続出来る事こそ重要なのであります。この意味では多少内容の低下は止むを得ないとする編集方針を支持致します。次に折角お便りする機会でありますので編集其他につき愚見を述べ

させて頂きたく存じます。①従来と違つて限定部数の出版となれば経費の面で制約されますから頁数の減少其他で或程度貧弱になる事は当然であります。しかし収支及び取締限界以外の点では許される範囲に於て充実が望ましいのであります。時には価格の大巾引上げも結構だと思ひますが、これについては異論もありましよう。従つて価格の問題も含めてなるべく読者に満足せしむるため全読者からアンケートを取られたら如何でしょうか、頁数は少くとも内容が最多数の読者の希望する様に編集されれば却つて充実を意味すると思ひます。②次に記事の内容の面白味と取締方針とは特に反比例するものでありましようが、この点では創作、論評等が最も危険でこの面の低下する事は必然と思ひますので、これに代るものとして、外国同類誌の翻訳とか或は外国のフオートグラフ乃至至面等に案外安全な然も新味が発見出来る様に思ひます。③モデルを使つての写実は大変充実して居りますが、これは案外費用が嵩むと思ひますので、この面を縮小して面を多くしたら良いと思ひます。勿論優れた画家の動員も大変ではありましようが

変化を求める意味からも又経費を減らす意味でも一応考慮すべき点だと思ひます。④読者の好みの層がいろいろに岐れて居りましようから、思う様には行きませんでしょうが、結局大部分の読者はサジズム、マゾヒズムを好む様な気がします。若しそうだとしたら止むを得ませんから、男色物、切腹物、浣腸物等は割愛するか大きく削減すべきかと思ひます。(勿論本当はどんな傾向か判りませんので前述のアンケートものになります)

⑤、次に個人的な好みを申し上げます。一、縛り写真はモデル嬢には気の毒に思ひますが、縄オンリーを一つ飛躍させて皮革、ゴム、金属等を使って銼口具、首輪、手錠足枷鎖等を以て拘束したり或は特殊な刑具、刑衣を装着せしめたり、奴隷囚人、人間馬を作り上げたら相当人気が出ると思ひます。それからモデル嬢の表情は恐怖感凌辱感絶望感等が出す必要があると思ひます。(この点持に感じた事は写真とは違ひますが、以前にあつたポニー物など折角の傑作が彼女等の楽しい表情でブチコワシになつています。四馬孝氏の画は表情を上手に出して現実感がよく現れていて好きです。)二、安全なところ

るとして映画の優秀場面をグラビヤで集めたらどんなものでしょうか。特に外国物で美しいヒロインとか群女の奴隷物とかクサリを使つた暴行物など、例えばクレオパトラ、シーザー等に多いセシルデミールの作品を初め砂漠の鷹などに良い場面が沢山あります。三、読者が殆ど継続者ばかりですから今迄の傑作、囚衣、半公刑、蜘蛛と蝶々等の中、クライマックス場面を写真や面で大きく再現してみたら面白くありませんか。

(KK愛好生)

浣腸に絶対の趣味をもたれる女性との文通を求めます。又浣腸に就いての趣味作品や色々のスクラップの交換も致したいのです。誌上で御一報下さい。

(北海道 T生)

私は御社を購つてまだ一年に過ぎないのですが、何故もつと早く御誌の存在を知らなかつたかと後悔されます。さて、一年生マニアとしての注文を大先輩に向つてしてみたいと思ひます。先ず外国文獻を広く紹介してほしい、出来れば写真版にして解説を附して別途に出版するのが理想的、(絵によ

るアイデア集も一案)。分譲フォトも欲しいのが多いが自然経済的に入手困難になるので全部をコロタイプ版に納めてほしい。この場合、出来るだけ合理的に分類すべきである。例えばモデルに依る分類(村田那美子集、伊吹真佐子集、萩千恵子集、とかいった具合に)或は責の種類による分類(エビ責集とか、鼻いじめ集とか)本の頁を増す事、これは関係者各位にて御熟考のこと

○読者通信をお寄せ下さい

読者通信欄は孤独に悩む方々のこよなき慰めの場として、広く同好の士のため誌面を開放しております。本名其の他の秘密は固く守りますから、御安心の上、御遠慮なく、ドシドシとお寄せ下さい。

と思ひます。

(福岡、T・Y生)

奇譚クラブ十月、十一月号及び修学旅行の出来事二枚入手いたしました。暫くぶりの再会で何より嬉しく読みました。色々と大変な事と存じますが何卒満天下のファンのため奮励下さるよう願ひます。新人モデル嬢も次々と加わり益々多彩となり嬉しい事です。

それに皆中々の美貌でこれからの充実が期待されます又待望の女学生の子嬢服の縛りも出て喜んでおります。分譲

顔は差支えない限り詳しくて長い方が面白い。萩千恵子さんの巻は次号にでも是非登場願ひたい。服装利用、或はコルセット利用といった写真がないのが残念。(註、私の不勉強のせいかもしれないが)下着類の使用は平凡な馴染深い様なものばかりでなく、よく一般に知られていない様な物も色々紹介の意味で使用願ひたい。優美さ、露出症的、緊縛感のある物等面白

願つた修学旅行の出来事、これまでになつた企画のもので感謝しておりますが、希望をいえばセーラー服の胸あてはない方がよいと思ひます。私の希望としては、なるべく夏の白いセーラーで襟許の胸あてがなく白い肌の胸許ふかく切れ込んで半襟、上着の裾がくびれてすなりとした形のセーラー姿を後手にふくよかな乳房の上下を各々二巻位、首縄はかけない事で、

この姿で正座させるか、少し両脚を揃えて斜めに坐る。つまり正坐した所をぐつと肩を蹴られて倒れんとして辛うじて身体を支えている姿、又は蹴倒されて横倒しにされてくずれおれている姿、この時は足首を括り出来れば足にはストッキングを穿かし、スカートをまくつて白い太腿も太い縄でくくる更にこれに革鞭や青竹、バンドなどを添えて責められる雰囲気をもし出し（地下室を思わせるような土間か板の間で）更に、以前の御誌の口絵写真の「手袋」のように、みもだえする美少女の乳房のふくらみを縛る縄の間へ棒をさし込み、又、きやしやな肩、股を土足でふみつけるような場面、（要するに美少女が縛られて責め苛まれつゝある場面）を願いたいと思います。又、セーラー服の外、白い開襟シャツ姿、少女らしい可憐なワンピース姿、軽快なボロシャツ姿、シース飾のついた令嬢風のシユミーズやスリッパ姿、ブラジャーとパンティ姿（一方の肩ヒモがはず乳房が一寸とぼれ、ふくよかな乳房の上下を太い荒縄か麻縄で二三重にしめつける。）などお願いしたい。猿ぐつわはなるべく余り上までかぶせない、顔はやゝ

うつむき加減か、加虐者を恐怖の眼差しでみあげるポーズ。この点萩嬢のポーズは中々よろしい。又これも皆の希望のようですが、映画中の縛られた女優の場面の解説速報及びその場面（スチール写真などもよくあるようですが）を写真でのせて下さい。又絵物語風のものも続けて下さい。女がマゾで縛られるのを喜ぶようなものもよいですが、サジストとしては恐怖におのゝく美少女や新妻を容赦なく縛り上げ責め苛み、もだえ苦しむ無惨な姿がよいので遊戯のようなものは余り有難くありません。といつて妊婦の腹をさいて腸をひきずり出すとか、血みどろになるまで鞭うつなどというのは真平です男のマゾや縛り姿など、文はともかく絵は極力へらしてほしいものです。美女緊縛の絵や写真をもつともつとふやして下さい。

（名古屋、M・M生）

○ 美少年愛の青年として奇クこそ唯一の慰めでありますが、なぜもつと美少年の責め絵や写真、物語などを掲載して頂けないでしょうか。特別なことは望みません。現在の口絵と写真の中の女性を、ほんの一部だけでも美少年に代えて

頂ければよいのです。男性が女性に對して愛や興味を抱くのは、それがたとえサドやマゾにしても常識的な平凡な事柄で、本誌がそう

した世の中の常識平凡に對して孤独な私達の代弁者となつてレジスタンスして下さるのでしたら、どうか純粹ソドミニストの欲求をも

KKグループの

ユートピア建設案

本誌の休刊中は勿論、復刊後も引続いて、愛読者有志の方々から、鞭撻お叱りの便りや激励の通信を頂いたものです。中には、わざわざ御足労下さつて、自分が資本を出すからキャバレーを経営してみないか、バーをやってみないかと勤められたり又、新しい雑誌の編集長として迎えるからと高給で誘われたりその熱心さと御厚意には誠に有難く思つたことでした。

遊覧地の豪華なホテルを提供しようとして出られた方、或は一名の入会金拾萬円位の会員組織の名プランを持つてこられたプランメーカーの方。その間、鳴かず飛ばずで、毎日魚釣りにばかり耽つていた編集者としては全くその腑甲斐なさがお恥しい

次第だったのですが、それに応える意味で、こゝに一つ誇大妄想狂の絢爛たるプランを御紹介したいと思ひます。これは断つておきますが、愛読者の方々の御希望を多分に盛り上げたものですから、若しも我が意を得たりという個所がありましたら、何卒喝采の程をお願い致します。

一、機関雑誌の刊行
毎月特集号を発行します。題して、KK、サド特集号、マゾ特集号、フェチ特集号、切腹特集号、ソドミア特集号、浣腸特集号。

各特集号の編集長はじめ、編集部員はその道のエキスパートを選び、編集者がその六つの特集号の毎月の発行につき、一切

う少し満して下さい。特に私は中学生位の美少年を好みます。彼等を肉体的に心理的に責めてその初々しい羞恥と困惑とを楽しみたい十一月号の通信欄に無名生と名乗る方が「曲馬団で十四五才の少年達が衆人環視の中で裸体のまゝで曲芸をさせられる」という幻想をされていましたが、私もこのことは常に夢見ていました。同号の「泉都の夜明け」という告白記事で豊後氏がやはり十五六才の少年を求めておられました。十四五六才といえば中学の二三年と高校一年生位です。この年輩の少年達は既に性の神秘を理解し始めておりその肉体も少年の清純さを止めながら、しかも立派に成人の機能を保持しているのです。観客の頭上を綱渡りし或は舞台のアクロバットに身体をくねらす美少年達。私はその他に「子供屋に売られた少年が以前の同級生達の手で玩弄される」様子や、「主人の淫虐な責めに泣く奴隷少年」の様子を幻想して楽しんでおられます。挿絵も竹久夢二風の美少年であつたらどんなによいでしょう。映画に出演する少年達では、小畑やすし、往年の加賀美一郎、林成年、クロード・ジャーマン、ジュニア等が好きで

す。小説では、トーマス・マンの『ヴェニスに死す』の美少年や今東光の『稚児』などが好きです。こうした美少年を今後の貴誌にどしどし登場させてください。

(神奈川 白井生)

奇ク復刊第一号を手にして大いに失望しました。休刊以前と少しも変らない内容の上、写真も挿絵も落ちてくる古い愛情がなかったら二百円は高いと憤慨したことでしょう。店頭販売をしない苦しさはよく分りますから、決して金のこととはカレコレ云いませんが、もう少し思い切った内容にできないのでしようか。小生は最近号の奇クより、それ以前の「蜘蛛と蝶々」や「クリスチーナの受難」の載っていた頃の御誌が迫力もあり、よかったです。縛り写真も全裸のモデルを思い切つて写していただきました。絵もそうです。それが次第にマゾを主体にした傾向になつてゆくにつれて、面白くなくなつて来しました。私は徹底したサドを好みます。読者通信欄を見ても貴誌の編集方針はマゾと同性愛に移つたのかと錯覚を起す程、それ等の人の投稿で埋まっているではあり

の統括指揮を行います。発行部数は各号につき約二十万部位として合計百万部以上に達します。定価は本文四百八十頁、口絵四十八頁建として一部百円程度とします。用紙はアート、グラビヤ、上質紙を用います。これで各マニアは自分の好む趣向のものだけを全国津々浦々どこの書店からでも自由に購入出来ることになります。

二、宣伝機関の活躍

全国で約十台の最新式の宣伝カーを備えつけ専属の宣伝員が雑誌の発売日前後一週間位は、全国の主要都市で雑誌の宣伝を行い、それ以外の日は、中小都市から田舎へ巡回の上、啓発、宣伝を行います。連絡用のヘリコプターは二台位準備し、随時宣伝ビラを撒布したり、本部、支部間の連絡業務に従事します。東京と大阪には、駅前にKKビルを新しく建て、読者の専用部に供します。六大都市には各支部を設け支部会館を既設建物買取の上、当てます。月に一回は読者の座談会、連絡会展示会映画鑑賞会、撮影会等を支部中心に開催します。

三、政治運動への努力

KK代表として、衆議院議員五名位、全国区から参議院議員三名位選出しておきます。そして「KK発行援助に関する法律案」の通過をはかります。出来れば、一、二名の大臣を代表から送ります。総理大臣の椅子がとれれば、これに越したことはありません。

四、連絡機関の充実

読者名簿の発行、文通交際の無料幹旋、KK会館並に各支部会館の無料使用、等々読者には最大級のサービスを提供します。どうですか、皆さん。こんなプランは実現出来ないものでしょうか。僅かな人数の特権階級が多額の金を持ち寄つて楽しむナイトクラブより、こういった形の大衆的な方がいゝと思うのですが、やはり徳川時代の昔から大衆に慰安や娯楽を与えることは、依政者として面白くないんでしようかね。『抛らしむべし知らしむべからず』というのは民主主義の現代でも大手を振つて歩いているのと違いますか。では、この迷プランも「夢」だけにしておきましょう。その方が無難らしいです。(編集子)

ませんか。私はサド一辺倒を主張するものではありませんが、一度読者の輿論調査をやってみるといふと思います。七、八十％はサド愛好者ではないでしょうか、読者の傾向を重んじて編集すべきです。他に類誌がないからこそ、僕かなサディストチックな記事を読みたいが為、マゾや腹切りのバカらしさを我慢して貴誌を買っているのです。少くとも平等な記事の配分ならいふけれど、こゝの所、サドが甚しく虐遇されているように感じられてなりません。直接販売なら読者も固定しているでしょうからもつと思ひ切った内容にして下さいよ。それでも危険ならば、限定版で秘密出版して下さいよ、私家版の「腕くらべ」でも堂々と全集中に取り入れられているのですよ。店頭販売から受けた制約がなくなつたのだから、もつとスゴイのが見たいですね。その為には万金を惜しみません。もう少し編集者も肚を据えてもらいたいですね。たとえ定価が五〇〇円になつたとしても内容が巷間で手に入らぬ記事や写真であれば、私は喜んで年極の読者になるでしょう。妙な所で良識ある編集なんて云わないで下さいよ。絵も写真も小さくてもい

ゝから、ハツとする程鮮烈なものにして下さい。ワイセツなんか気にすることはありませんよ。アクロバットの全裸のモデルを使って真のエビ責めを見たいですね、絵でもいいから思い切つたポーズがほしいですね。どうも毒舌ばかりで恐縮ですが、あまりに讃辞ばかりが多いので安易な人気に酔うよりはと思つて苦言を呈する次第です。新しい企画等ありましたら、どうかお知らせ下さい。小生は限定秘密出版を切望するものです。

(サド狂生)

〔編集部より、許容される範囲内で御希望にそつうに努力したいと思ひますが、私たちの目ざしているのは、少数の方々を目標にした秘密出版ではなくて、真面目な公刊のアブ研究誌であります。地下に潜つていた共産党の幹部連も地上へ姿を現す時代ですから、現在の日本では継続的な秘密出版なんかは、空想としては描き得ても現実には、実行不可能なことだと思ひます。確実なる継続的発行を期待していただける、より多くの読者の方々に失望させない為にも、私たちは貴方の云われるような方向にはついてゆけません。他にどのような同類誌がどのような内容

最新版アブフオト

(実費分譲)

【女体緊縛写真】

○高瀬忍嬢

悦虐ポーズ代表選
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○美少女緊縛

(中富綾子嬢)
キヤビネ版 二枚一組 二百円

○藤田節子嬢

「落花狼藉」キヤビネ版
第一集 三枚一組 三百円
第二集 三枚一組 三百円

○古川裕子好み縛り

(萩千恵子嬢)
第一集 第二集
キヤビネ版 三枚一組 各三百円

○加賀利江子嬢

第一回縛り集
第二回縛り集
キヤビネ版 三枚一組 各三百円

○加賀利江子嬢

悦虐ポーズ集
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○厚狭春江嬢

股間しばり三態
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○デニムのズボン縛り

(加賀利江子嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○須川令子嬢

股間しばり三態
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○萩千恵子嬢

新版腰巻しばり
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○灸点地獄

(施術者 春日ルミ嬢)
被術者 伊吹真佐子嬢
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○悦虐モデル

緊縛六人集
キヤビネ版 六枚一組 五百円

○ジャジャ馬馴し

(中富綾子、村田那美子)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○逆さ吊り

(伊吹真佐子嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○萩千恵子嬢

新版股間しばり
キヤビネ版 三枚一組 三百円

で発行されているというのでしょ
うか、非合法的なやり方は、いつ
の時代でも氷結きしないというこ
とをよくよくお考え下さい。」

○ 従来の奇クには、数多くの絵物
語の傑作が掲載されていましたが
私は左記のような題名の「責めの
絵物語」を毎月、一篇ずつでも御
紹介御掲載下さるよう御企画実現
を切望いたします。先ず時代物と
して、☆芸者菊次の雪責め ☆遊
女薄雲の雪責め ☆お三輪の雪責
め ☆松の操、美人の雪責め（芸
者小兼） ☆二見浦の仇討、お杉
お玉の雪責め ☆小松嵐馬子のお
時の水責め ☆小松嵐滋子の雪責
め ☆中将姫の雪責め ☆築山御
前お万の雪責め ☆小堀騷動お杉
の雪責め ☆茨木屋幸斎の遊女折
檻（傾城鬼ヶ城） ☆照手姫の松
葉いぶし ☆大宅太郎光国の妻、
唐衣の生地獄 ☆景清の娘、人丸
の吊責め ☆照手の前 ☆松前騷
動お袖の吊責め ☆吉田御殿の腰
元竹尾 ☆皿々郷談の欠皿の責め
☆お玉のいぶし責め ☆加賀騷動
お梅の方 ☆遊女敷島の責め ☆
腰元浪江（女河内山） ☆月田一
郎村角日記 ☆本町綱五郎の小糸
の責め ☆安政三組盃の小さな

☆風俗浅間獄の時鳥殺し ☆豊川
利生記のおりつ ☆皿屋敷お菊
☆桜姫曙草紙の笹蟹御前と玉琴
☆月氷奇談の漣 ☆庄司館の清姫
☆利根川の血煙り ☆白木屋お熊
☆大うなぎのお袖 ☆蟹燈籠のお
新 ☆安寿姫の責め ☆斬られお
富 ☆神通小百合の責め ☆孕常
盤の彫責め ☆錦木と千代龍の蚊
責め ☆南京屋敷の榎の責め ☆
河内十人斬り、次に明治物として
☆絵地獄 ☆娘巡礼 ☆観音岩
☆美人府 ☆唐捨子 ☆棲折笠
☆十萬円 ☆百萬円 ☆横恋慕
☆鬼の病 ☆白無垢鉄火 ☆初の
日の出 ☆子故の闇 ☆電気世界
☆錨 ☆官員小僧 ☆悪魔払 ☆
八重霞 ☆鹿島灘 ☆五月鯉 ☆
神田豊島町怪行者の娘の責め ☆
雪中梅 ☆主思い（吉野朝夫）

○ 拝啓、長らく御無沙汰申し上げ
ました。同封の絵二枚、御誌の挿
絵にして頂ければ望外の幸に存じ
ます。絵は、二人の若い美しい女
性が二人の少年を密室につれ込み
あられもなく凌辱を加えている光
景。和服の女性は素早く一人の少
年を組み敷き、首の上に跨って顔
を太ももの間にはさみ込み股で首
を締め乍ら口の中にハンカチを押

○坂口利子嬢

悦虐全裸緊縛集
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○萩千恵子嬢曲芸縛り

キヤビネ版 三枚一組 三百円
手札 型 三枚一組 二百円

○強烈縛り五人選集

キヤビネ版 五枚一組 五百円

○須川令子嬢

立木縛り野外晒し
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○女体いじめ四態

春日、伊吹、二嬢コンピ
キヤビネ版 四枚一組 四百円

○猥らな縛り

キヤビネ版 四枚一組 四百円

○肉体美緊縛三態

（伊吹真佐子嬢）
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○女体品定め

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○ローソク責め

（春日、伊吹、二嬢）
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○女学生凌辱連続写真

キヤビネ版 六枚一組 五百円

○須川令子嬢

高手小手五態
キヤビネ版 五枚一組 四百円

○川辺砂登子嬢

メンズバンド着用
キヤビネ版 二枚一組 三百円

○衆人環視の緊縛

（萩千恵子嬢）
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○修学旅行の出来事

（須川令子嬢）
キヤビネ版 二枚一組 二百円

○お寝み前の五分間

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○晒責め三態（伊吹嬢）

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○佐賀美智子嬢

女事務員の縛り
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○凌辱魔侵入（シリーズ）

キヤビネ版 十二枚一組 千円

○旦那の二号責め

キヤビネ版 十枚一組 八百円

○落したスロース

（佐賀美智子嬢）
キヤビネ版 五枚一組 五百円

し込んでいます。すぐ傍ではワンピースの女性がもう一人の少年を馬乗りには押し付けはしたものの、烈しく抵抗されてすさまじく相争っている真最中。「あら、何してんの、早くやつつけてしまわなくちゃだめよ」「うッ、だって此の人しぶといわ、ちくしょうッ!」「な、なにをするッ!」でも非力な少年等は、成熟し切った女性の体力にはとてもかないません。結局はされるがまゝに辱しめを受けるのです。(山田百合枝)

〔編集部より、美女のあられもなところが大変よく描けていて、迫力のある絵になっています。発表についてよく考えましたがどうも誤解されそうところが一部分ありましたので、残念ながら割愛しました。〕

○長崎のK子さん、五月号に掲載されたあなたのお便り拝見しました。私は縛られた女と女性の下着に人並以上の興味を持つ男性です。くわしいことは本誌二十九年十二月号と三十年二月号の読者通信に書いてありますので省略致しますが、白金紅次氏のきものシリーズが最も私の好みに合致していると言えば大体おわかりになりますよ

う。こんな私にとってあなたのあの御一文は正に暗闇の中に一筋の光明を見出したような喜びでありました。自分から誰かに思い切りいじめられ、はずかしめられて見たいと云われるあなた、そして又自分の下着も提供したいとおっしゃるあなたこそは私の求める理想の女性です。私は歓喜に胸を跳らせながらあなたのお便りを読んだのでした。あなたのお住いが私の住所からさほど遠くない長崎県であることも喜びを倍加致しました。お互の事情が許せばさして旅費も要らずお会いできるのです。私は五月号を手に入れたとすぐあなたに手紙を書きまして編集部に転送をお頼みしたのですがちようど休刊騒ぎの頃なのでおそらくあなたのお手許に届いていないのではないかと思われますのでこゝに改めて誌上をお借りしまして拙文を差上げる次第です。御都合よければぜひお手紙下さい。できますならばお会いしたいのですが、いろいろ事情もあることでしょうから文通だけでもぜひお願い致します。(福岡 SY生)

読者交歓室

○昨年七月号及び復刊第一号に手記を寄せられております一柳真砂子様並にそのお母様と御交際を是非致したいのです。(文通でも結構です)私も大のコレットマニアです。どうか御返事お待ちしております。宛名は神奈川郵便局私書函第十三号です。(S生)

○待ちに待った復刊一号と二号を手に入れてうれしくてたまりません。読者通信を見てフェチシストの多いのは大きな喜びです。小生もフェチシストです。大阪のT.I.さん、千葉の山村さん、草津さん、大阪のAUさん、ぜひ文通をお願い致します。貴方達の希望に合う様に小生も努力致します。左記に御連絡下さい。(岩手県摺沢局区内小原一高)

○私は金歯に魅力を感じます。特に前歯上部十本位のものが最適、若し読者の中で上部六本より十本迄伊達金歯を入れ度き同好の方と文通し又本誌を只一つの高度芸術図書としても立てゝ行き度いと存じます。金歯、腕輪、指輪、その他装身具趣味として製作中です。お便り下さい。返事心ず致します。(東京都内板橋区上板橋三ノ六三)

六三、島影方、中富敬) ○東京都の皆様、ドレイの市場を開きたいと思いますが、以下男女を問わず、1、ドレイになりたい人。2、ドレイを使いたい人。3、場所の有る方、の集りを持ちたいと思いますが、皆様の誌上に於ける御意見を待ち致します。(東京都、K生)

○別府の魔女荒井貞子さんへ、貴女を崇拜する一男性です。復刊一号を購入しました所、又読者通信にて貴女のサジスチンを發揮する頁を読み夢幻の境になりました。私の為に殺されたつてと言う文があります、小生は貴女のポリウムのある両股に首を挟まれ殺されても本望です。私も別府に住んでいる者です。貞子さん、是非一度お会い下さるチャンスをお与え下さい。どうしてもお会い出来ない場合は読者通信にてお返事下さい(別府市旭通り五丁目、岩尾良夫) 「読者交歓室について」 この他にも読者交歓室としての投稿が大分ありました、連絡先を明記していない匿名の方は全部割愛しました。目下手紙転送の係がありま

せんので、この欄御利用の方は、どうか、住所氏名或は連絡先の御記入をお願いします。

○ 地方新聞の片隅ではありましたが「奇ク」の復刊を告げる広告を見つけた時には暗中に小灯を見いだしたより明るい気持ちになりました。早速予約し、数日して入手した「奇ク」十月号は頁数こそ減っては居りましたが旧号に倍した内容の充実が苦難のあとの事ゆえ、関係者の御努力には本当に頭が下ります。私も同性を愛する者として

て「奇ク」の今後の発展を心から祈り、今後も愛読してゆくつもりです。同性に魅力を感じ異性に対する魅力を持たない私は、成程人間本能の原則からはずれているかも知れませんが、現在の私としてはどうする事も出来ません。若々しい少年像、完成期にある青年像に対して感ずる魅力はひと倍強いのですが、私自身積極的態度もとれず親しい友人もなく半ばあき

らめて居ります。多勢の読者を擁する「奇ク」のことゆえ、文通の友になつてくれる人でもあればと思ひ切つて筆をとつてみました。扱て私は去る十月二十三日附の東京新聞から面白い記事を見つけたので同志の方に御紹介致します。今年の日展に出品するA氏の「友」(彫刻)の紹介記事ですがタイトルは「成長期の男性美」で全裸の若人が肩を組んで立っている

る全身像前面の写真が添えてありました。A氏曰く(紙面のまゝ)「今年は素敵な体格の男性美、健康美を現わそうと思つてあらゆる学校の体育課を回つてモデルをさがしたが、どうも良いものがなくてね。ところが教育大学の体育部の学生にいいのがいて二人をコムボジションしてみたら非常にいいんです。二人ともちやうど二十才ですがね。そこで体育部の生徒で

奇譚クラブ

復刊第一号
十月号

目次

定価二百円 (千16円)

口絵

美しいドア……

(四馬 孝画)

頭立二馬車……

(昨事数久画)

水中の女……

(都築峰子画)

緊縛フォト・オンパレード

黒のシユミーズ

(川辺砂登子)

縋帯

(伊吹真佐子)

どういうポーズをとるの?

(萩 千恵子)

ポリウム

(加賀利江子)

ながし目

(須川 令子)

朝日を浴びて

(須川 令子)

うつぶせ

(加賀利江子)

着物

(藤田 節子)

旅の縛られ女優

(藤木 仙治)

きものシリーズ 迎春花
從軍日記

悪癖

ボクの責め方

女性の下着について

鼻いじめの写真

奈落の欲情

浣腸器と共に

お臍の型と種類

自殺娘の死体損壊

二個のイチジク浣腸

女性緊縛寸考

完全なる隷属

サディズム雑感

再度の鞭を期待しつゝ

(二俣志津子さんに)

女工哀史以前

乗馬ズボンの女腹切

(白金 紅次)

(榎本 利子)

(宝塚二三夫)

(水上流太郎)

(北谷 英二)

(沢井 和雄)

(久利須照雄)

(土屋 淑人)

(近藤 一)

(花村恵美子)

(宝塚二三夫)

(坂田 信治)

(村岡 助浩)

(沼 正三)

(南洋 一郎)

(藤山 秀緒)

女性の禪愛用
切腹通信

少年刑務所体験記

男性自虐の方法

玉稿落穂集

アブ追求三〇年の回顧

幽囚十ヶ月

女性切腹面に憑かれた男

素足礼讃

新しいコルセット

あるマゾヒストの手帖から

私の浣腸論

映画に見た淡いマゾ

アクロバット通信

明治年間の新聞覚え書

残酷なる女性達

「七化け小僧出現」

東京 (田辺 愛子)
(津島比呂史)

(三根 耕二)

(岡村 文雄)

(編集 部)

(山田 正実)

(春田 一郎)

(伊藤 和彦)

(高原 正夫)

(一柳真砂子)

(沼 正三)

(数 正男)

(春木 俊野)

(九州 傾城)

(吾妻 新)

(森本 愛造)

(緑 猛比古)

天星社代理部特選写真集 (実費分譲)

□高級光沢印画紙使用 大きさ

(タテ 九
ヨコ 十三
横)

緊縛女体 フオトの

二枚一組	一五〇円	五枚一組	三〇〇円
三枚一組	二〇〇円	六枚一組	三三〇円
四枚一組	二五〇円	(以上送料共)	

◎腕によりをかけた 二十集◎

AS1 タンス責め

(伊吹嬢) 三枚一組

タンスの環に両足を縛られて、逆か立ちになったところを頭を足で踏みつけられる。

AS2 浴室の緊縛プレイ

(須川嬢) 二枚一組

AS3 柔肌の弄戯

(村田嬢) 二枚一組

全裸の柔肌にまといつく蛇のような縄。村田フアンに捧げる。

AS4 アクロ緊縛

(萩嬢) 六枚一組

柔軟な萩さんの華やかな身体が縄の束縛にあつてエビのように曲ったり、シヤチホコのように逆立ちしたりする。

AS5 トイレ五態

(須川嬢) 五枚一組

初めて試みたトイレの中に於ける緊縛。

AS6 強烈股間緊縛

(中塚嬢) 六枚一組

新人中塚文子嬢を観念させた新考案の強烈股間縛りは豊満な全裸の肌を容赦なくさいなみつつける

AS7 セーラー服哀歓

(須川嬢) 三枚一組

清潔な可憐さを制服に包んで受ける縄目の悲しさと歓び。

AS8 奇抜な縛り

(伊吹嬢) 二枚一組

文字通り奇抜な、そして大胆なポーズ。

AS9 蒲団責め

(須川嬢) 五枚一組

丸めた蒲団の上で、どんな責めが演じられることだろう。新しいアイデアによって試みた卓越したポーズ揃い。

AS10 新股間縛り

(伊吹嬢) 三枚一組

絶版となった以前の分と同じ逸品。むしろそれ以上の品。

AS11 女体嗜虐譜

(春日伊吹) 五枚一組

春日嬢のあくなき惨虐の手は従順な伊吹嬢の上に加えられてゆく

AS12 裸に縛るまで

(菅嬢) 四枚一組

新人菅登紀子嬢を初めて裸にして縛り上げるまでの連続四枚のフオト。コレクト・マニアは是非。

AS13 胴絞めしぼり

(伊吹嬢) 二枚一組

一入豊満さを増した伊吹嬢の胴もくびれよとばかり手首と共に正面しぼり。

AS14 後手縛三態

(佐賀嬢) 三枚一組

新人佐賀美智子嬢の後手の裸しぼり。

AS15 股間しぼり五態

(須川嬢) 五枚一組

優美な五つのポーズが、どれもこれもマニアのお気に召す逸品揃い。

AS16 馬乗り姫シリーズ

六枚一組

春日ルミ嬢と伊吹真佐子嬢のコンビ作品、伊吹嬢が山肌の上へ裸で押えつけられ春日嬢に馬乗りになられるまで六枚のシリーズ。

AS17 禪美女体

(須川嬢) 二枚一組

正面と背面の二枚の禪姿の女体

AS18 股間緊縛四態

(萩嬢) 四枚一組

どれもみんないゝものを選びました。きつとお気に召すでしょう

AS19 羞恥責め

(中富嬢) 二枚一組

花恥しき乙女の全裸の姿を何ら覆うことを許さず前と後からつくづく鑑賞出来るという幸福なフオト。

AS20 見ちや嫌

(伊吹嬢) 三枚一組

三枚共、みんな正面タテしぼりどうかそんなに見つめないで頂戴見ちや嫌よ。

◎この二十集は、マニア諸氏からの要望を百%取入れて作成したもので、各集とも十分に変化をつけ好みのものを手軽に、しかも安価に入手してコレクション出来るように心掛けて配置しました。どうか皆様のアルバムを一層多彩絢爛たるものにして下さい。

◎得難い稀少な

二十五集◎

各組一枚八〇円
 十組十枚七五〇円
 二十五組二十五枚一八〇〇円
 (以上全部送料共)

- BS1 覗かれたスロース (加賀嬢)
 BS2 股間しばり特選 (坂口嬢)
 BS3 クリツプ責め (川辺嬢)
 BS4 擦り責め (中富嬢)
 BS5 狙上の魚 (須川嬢)
 BS6 大の字縛り (浅野嬢)
 BS7 みづずばれ (杉嬢)
 BS8 くさり責め (高瀬嬢)
 BS9 折檻 (雲井嬢)
 BS10 梯子責め (伊吹嬢)
 BS11 ハリツケ (萩嬢)

BS12 月経帯縛り (村田嬢)

BS13 手錠くさり (伊吹嬢)

BS14 人身御供 (高瀬嬢)

BS15 落した下着 (萩嬢)

BS16 下半身裸出 (村田嬢)

BS17 鼻責め縛り (川辺嬢)

BS18 高手小手 (加賀嬢)

BS19 乳房責め (川辺嬢)

BS20 首縄 (川端嬢)

BS21 後手しばり (藤田嬢)

BS22 竹棒責め (伊吹嬢)

BS23 蛙潰し責め (雲井嬢)

BS24 改った表情 (佐賀嬢)

BS25 森の中の凌辱 (村田嬢)

◎この二十五集は、皆様の各々お好みのモデル嬢、お好みの趣向或はポーズを選んでお求め願えるよう一枚分売となっております。各集共各モデル嬢の特徴を最もよく發揮した好場面ばかりを選んでありますから、きっとマニアの方にお気に召すものと信じます。

新マゾ風景十態

一組一枚一〇〇円
 十組十枚九〇〇円

春日ルミ嬢熱演のとおておきのマゾフォト。

- M1 ワン公水をやろうか
 M2 ながりもの
 M3 ベッドの上で可愛がる
 M4 押え込み
 M5 足舐め大写真
 M6 お化粧台
 M7 ハイヒールの下にて
 M8 足の裏に屈服する
 M9 頭を殴ぐる
 M10 お小言頂戴

男性緊縛フォト

M11 晒し者三態

M12 男性股間しばり
 一枚一〇〇円
 三枚三〇〇円

女体切腹フォト

H1 女体割腹譜
 二枚一組
 二〇〇円

女体浣腸フォト

K1 エネマシリンジ
 四枚一組
 三〇〇円

◎御注文の栞◎

◎御注文は符号だけで品物を御指定下さっても結構です。
 ◎総べて通信にてお申込み下さるようお願いいたします。直接の御訪問はお断りいたします。
 ◎御送金は綴込の振替用紙を御利用下されば無料で最も安全に到着します。但し普通便より二、三日遅れますから、受取証を注文書と同封の上お送り下されば、早速品物をお送り致します。

次号(五月号)予告

次号は三月中旬配本の予定で
す。予約中の方々は、製本出
来次第発送申し上げます。

売切品につきお願い。

「被虐の家」及び旧号の中、売
切になった分等は補充がつかま
せないので、御送金下さらないよ
うにお願い致します。

すからアトリエの中いづばいに皆
んなはだか逆立ちをしたり、宙
返りをしたりしたので、フリ
チンがちつとも邪魔にならない。
美しいものだなあ、見ているとモ
デルに使っているひと月の間に体
が成長して行くんですよ。二十才
だから子供のところと大人の部分
があつてそれが実に美しい。いま
ムで彫刻で扱っていた男性像を筋
肉隆々としたものばかりなんです
が、美しいのは女ばかりではない
のです。処女は美しいと云うけど
成長期の男は実にいゝものです」
A氏は何気なく芸術的見地から云
っている言葉でしょうが、私は押
さえ切れない気持を感じずには居
られません。何度も読み返
しては写真の若人の全裸の姿の胸
から腹、そして下腹から大腿に落

ちてゆく未完成の曲線美にひたる
のでした。反面、あまりにも仲良
く組まれた裸像の若者の肩に嫉妬
を感じ、現在の私には肩を組み合
う親友のないのを淋しく思つて居
ります。A氏の「友」の像が日展
に出品される日を楽しみに、又同
志諸兄の文通を唯一の希望として
今後共「奇ク」の愛読者で居たい
のです。(静岡、加山生)

始めてお手紙を差上げ、失礼の
段おゆるし下さい。私も創刊号以
来の貴誌の愛読者の一人です。今
迄何度か感想やお願ひ、或は告白
記の筆をとろうと致しましたが、
何故か勇気がなく、今日まで単に
ひそかな陰の愛読者として過ご
して来ました。思うことを自由に
のび／＼と投書される方々を見て
居て、心から羨ましく思いました
が、どうしても決心が付きません
でした。それは、その理由は、私
が相当の年配者であるためです。
貴誌の愛読者はおそらく年若い方
が殆んどその全部であるうと思
うと、いい年をした自分がその仲間
になることが、何故か気恥かしく
てならなかったからです。つまら
ぬ遠慮を、とお思いでしょうが、
三十九才、妻子あり、小さいなが

『切腹画集』 予約募集

一部予約価 五百円

熱心なるフアンの要望があり
ますので、「切腹画集」の刊行
を企画致しました。御希望の方
は、予約金五百円御送金の上、
御申込み下さい。予約数により
左記の要領によつて発行する予
定です。

記

- 一、予約申込数 五十名以内の
時は、刊行不能のため返金、又
は「切腹画」、三枚乃至五枚を
キヤビネ版印画紙に複写の上頒
布します。
 - 二、予約申込数 百名以上百五
十名未満の時は「切腹画」八枚
をコロタイプ印刷にて完成の上
頒布します。
 - 三、予約申込数 二百名前後の
時は、右のコロタイプ印刷の「
切腹画」を製本の上、画帖とし
て頒布します。
 - 四、予約申込数 三百名前後の
時は、十六枚の「切腹画」をコ
ロタイプ印刷の上、画帖とする
か、或は、八枚の色彩画を、オ
フセット色刷として製本の上頒
布します。
 - 五、予約申込数 四百名前後の
時は、十六枚の「切腹画」をコ
ロタイプ印刷の上、各葉に解説
を附し豪華な画帖とするか、或
は、十六枚の色彩画をオフセッ
ト色刷印刷として頒布します。
 - 六、予約申込数 五百名以上の
時は、二十四枚の極彩色「女体
切腹絵巻」を鳥の子紙に印刷の
上、絵巻物として頒布します。
- ◎御申込者には、予約金預り証
をお送りします。発行予定日、
並に画家は未定ですが、経過は
今後の本誌上にて報告致します
◎御申込みの節、御希望の趣向
ポーズ等について御申出があれ
ば、出来るだけ御希望にそうよ
う構図をきめます。
- ◎御送金にならないでの御申込
は、勝手ながら受付致しかねま
す。
- ◎御申込みが極めて少数の時は
企画を中止の上、御返金いたし
ます。

(切腹画集予約係)

奇譚クラブ

復刊第二号
十一月号 目次

定価二百円(十6円)

口絵

みのむし

畔亭 数久

小さな運動会

四馬 孝

漂う女二題

都築 峰子

賭場の獲物

滝 れい子

小人島の捕われ人

北原 純子

女調教師

杉原 虹児

上げてくる潮

依田 精二

掃除日の出来事

宮崎 昭平

告白

古川 裕子

変態小説論

佐東 増夫

幽囚十ヶ月

春田 一郎

ボクの責め方

宝塚二三夫

切腹通信

羽村 京助

レスボスと浣腸

藤山 秀緒

稽古着姿の女腹切

藤山 秀緒

ら自分で一つの工場を経営し、或程度の社会的身分を持つて居る現在、何かためらってばかり居りました。しかし三月号の『女性願望の青年の手紙——中津直氏』を一読し、遂にその躊躇を破つて失礼な手紙の筆をとった次第です。一言で言えば、私が永い間空想の世界で求めていた人が、現実に現わ

れた、とても申しましようか、年甲斐もなく何度も読み返してしまいました。無論編集部で手を入れられた文章とは存じますが、明快な文章と、自分を偽らぬ素直さに打たれました。こんな方と文通が出来たらどんなにうれしいかと泌み、思いました。私は少年時代から妹が欲しいと言つて両親を泣

いて困らせた位で、大変女性のもつニユアンス、衣類とか日本髪、芸ごととは異様な執着を感じて来ました。しかし不思議なことに、それが本当の女性だと、何故かピンと来ないので。歌舞伎や新派の男優が美しく女装しているものに、は激しいあこがれを感じるくせに、本当の芸者や女優の扮するそれに

は、何故か興味が感ぜられないのです。といつて、私はソドミの経験は全く絶無です。素質はあつたが機会がなかったのか、本質的にソドミストではないのか、自分ではまだわかりません。ソドミストの記事を読んだりしますと、好奇心と憧れは強く感ずるのですが、勇気がないためか、チャンスが無

命がけの遊び

二俣志津子

あるマゾヒストの手帖から

沼 正三

拷問に笑う女

辻村 隆

敵前上陸"責め

三根 耕二

賭けられた娘

宮崎昭平面

お灸と腰巻

永 長治

錯乱

山下 真一

私にも貴女の下穿きを

芳野 眉美

稲美礼賛

伊勢 進

炉辺談話

伊志田 治

接客婦

加治 信一

大和撫子の散華

宮崎昭平面

残虐なる女性達

森本愛造訳

被虐より嗜虐へ

沖野恵美子

明治年間の新聞覚え書(四)

吾妻 新

泉都の夜明け

豊後 忠

完全なる隷属

坂田 信治

浣腸器と共に

久利須照雄

或るソドミアの告白

朝路のぼる

浣腸のお仕置

宮崎昭平面

サイゾムへの憧れ

京町柳一郎

掲載候補作品寸評

編集部

玉稿落穂集(二)

編集部

女優の素足

高田 正夫

百合子の記録

渡辺 陽

長瀬昭子さんへ

畑 晃一

映画、雑誌、芝居の緊縛場面

波羅田譲一

吹き溜り

近東規矩也

アクロバットと曲馬団

鍛冶 真三

続・岩瀬祥一のお灸院

岩瀬 祥一

続・映画に観た淡いマゾ

春木 俊野

アルバム第三集のアイデア

鳴海 文雄

セーラー服姿の切腹写真

編集 集部

女子プロレスリング雑感

鬼山 絢策

密淫

青葉 慎一

同憂の土に告ぐ

天泥 盛英

読者通信(並に読者交歓室)

川上 明

最新版アフオト(前月と今月の分譲品)

吉住 信吉

蜂の胸四十五センチ

吉住 信吉

先祖の女腹切

吉住 信吉

◎お願い◎

雑誌の購入や分譲品の御申込
みのため、或はその他の用件で
直接発行所を御訪問下さる方が
ありますが、理由の如何を問わ
ず右は固くお断り申し上げます。
必ず郵便にて御申込下さるよう
お願い致します。

いためか、まだそれらしい経験を持
ったことがありません。ただ中
津直氏のこの文章を再読三読して
大変残念に思いましたことは、氏
は青年を対象に求めて居られるこ
とです。三十九才の妻子ある男が
果たして青年の部類に入れて頂け
るかどうかと、臆病にならざるを
得ません。氏は一般のソドミスト
と同様、青春期の紅顔の学生など
を求めて居られるらしいことです

新連載小説『赤い花は泣いている』について

松井籟子・作

北原純子・画

本誌五月特大号に予告しまし
た通り、六月号より連載の予定
でしたが、同号以来思わぬ休刊
のため掲載が延々になっていま
した悦庵作家松井籟子女史の快
心作『赤い花は泣いている』は

愈々本月号より連載のスタート
を切りました。挿絵は若き閨秀
画家、北原純子さんの麗筆を煩
すことにしました。どうか御期
待下さい。

もう一つは氏が田舎町と書いて居
られる所からみて、東京在住の私
とは、文通だけが、望み得る最高
の恩恵と思われる点です。
(東京 T・K 生)

奇ク拝見、一気に読了してしま
いました。然し旧号に較べますと
矢張り靴を隔てゝ足をかくの感な
きにしもあらずですが、世を挙げ
て逆コース時代ですから仕方がな
いと諦めなければならぬとは少し
情ないです。何時になつたら自由
になることやら、こんな有様の中
での皆様Kクラブの奮闘、ほんと
に同情申し上げます。復刊第二号
の庄巻は何んと申しても辻村隆先
生のアクロバット女性との悦庵の
交渉の作品です。次号の発展を大
いに期待しております。(Y 生)

【編集後記】

目極の予約読者の方々には、遅刊
の御挨拶にて申し上げますが、復
刊第一号から第二号と発行して以来
滑り出しが大変悪くて折角御期待下
さつていたにも拘らず御迷惑をおか
けて誠に申し訳ありませんでした。
ここに重ねてお詫び申し上げます。
今後は遅刊することなく毎月確実な
定日発売を致したく思っております
が、何にしろ色々な制約が余りにも
多くて自信を以て確約は致しかねる
のが残念です。いずれ軌道に乗れば
内容も定まつてきますし、発行日も
確定して参ります。本月号も許され
る範囲で変化もつけ新しい原稿も投
入して清新さを加えたつもりです。
まだく取つておきの原稿も沢山あ
りますが、漸次検討の上、御紹
介したく思います。その月々により
各マニアの方々から見られて出来不
出来があつたり、或はまた、これか
ら永続して発行してゆこうと思えば
慎重し過ぎて或は面白くない号があ
るかもしれませんが、それは永い目
で見えて御辛抱願いたいと思います。
その中、厳しい制約下に於ける一つ
のスタイルが出来上つて参りますれ
ば、楽しい雑誌として皆さまに喜ん

で頂ける日が来ると思います。どん
なに内容が低下しても、又どんなに
頁数が薄くなつても、続いて発行さ
れているということが大切だと思い
ます。第一号、第二号と赤字の連続
でしたが本号では、思いきつて目次
四頁を増頁しました。発行部数が増
えて、早く増頁出来るような日がく
ればいいのですが、今の情勢では中
々望めそうにもありません。休刊の
ため第二種郵便物の認可が取消され
ましたので、第五種で送つていま
すため、今の頁数で送料十六円がぎ
りなんです。だから増頁するとす
れば一挙に三百頁以上にしたいもの
です。一般書店に販売出来るよう
になれば発行部数もうんと増大しま
すので、或は以前のような頁数を誇
ることも夢ではないかもしれせん。
真摯で熱心な愛読者の強固な支持が
ありますので、とにもかくにも雑誌
の体裁を具えたものが発行出来るの
は有難いことだと思ひます。
いろいろ申し述べたいことも沢山
ありますがそれもまづならず、い
れ今後の号に於いて、順次お話し
上げることとして、御判断に任して
編集後記を終わります。
(K・M 生)